

穏やかなるかなカルネ村

ドロップ&キック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ナザリック抜きのもモンガ様単独転移（多分）＋原作100年前の漂着って感じの差気品です。

一時的に投稿を休止してましたが、令和に入り復活しました。

*04話にはエンリ、18話にはダークウオリアー、22話にはネム、39話にはラナー、45話にはクレマンティーン、77話（の後書き）にLVアップネムの暫定スペックシート付。いつか設定集としてまとめてみたいです（＾＾）

80話にてささやかながらキーノの新コス、82～83話でもモンガ様の設定追加。

2019／6、話数がいい加減増えてきましたので章に振り分けてみました。

目次

チュートリアル・ステージ：カルネ村

第01話：〃 異端異教の村〃 | 1

第02話：〃 理知的な骸骨と甘えん坊の吸血姫〃 | 4

第03話：〃 OVER KILL〃 | 7

第04話：〃 イチャイチャ+エンリはこんな娘？〃 | 10

第05話：〃 とりあえず現状の戦力を確認してみよっか？〃

14

第06話：〃 ある意味、カルネ村観光案内〃 | 17

第07話：〃 ジェネラルのお仕事〃 | 21

第08話：〃 ロンデス・デイ・クランプの憂鬱〃 | 26

第09話：〃 汚ねエ花火〃 | 30

第10話：〃 カルネ村防衛戦・前哨戦イベント終了〃 | 33

第11話：〃 プリエステス・エンリ〃 | 37

第12話：〃 一人と一匹〃 | 41

第13話：〃 追撃部隊〃 | 46

第14話：〃 戸惑いのガゼフ〃 | 50

第15話：〃 漆黒の剣士〃 | 54

第16話：〃 ビースト・スレイヤーズ〃 | 57

第17話：〃 カルネ村の七星剣〃 | 61

第18話：〃 幕間・ビーストハントの舞台裏、あるいはダークウオ

リアー誕生秘話〃 | 65

第19話：〃 中間管理職の悲哀をニグンさんに感じるのは間違っ

るだろうか？〃 | 70

第20話：〃 舌戦 あるいは『口は災いの元』〃 | 74

第21話：	着火!!	78
第22話：	一騎当千	82
第23話：	我が右手にキーノ、左手にネム	87
第24話：	考察 状況把握は大事です	91
第25話：	妥当な落とし所	94
第26話：	前半↓骨墮とし&後半↓友よ	98
過去I：	お骨が空から落ちてきたってさ	
第27話：	過去篇I・終末の過ごし方	102
第28話：	過去篇I・スケルトン&ドラゴン	106
第29話：	過去篇I・賢しき竜の言霊は、過去を押し流し明日への道標となる	110
第30話：	過去篇I・そそのかし 竜言飛語	115
第31話：	過去篇I・黒騎士のようで黒歴史 ベオウルフにランツクネヒトを添えて。デザートにマール様はいかがです?	119
第32話：	過去篇I・魔法使いのお婆さん? いやいや、ワシはただの死霊使いじゃよ	124
第33話：	過去篇I・裁きたいんじゃない、育てたいんだ	128
第34話：	過去篇I・オカンドラゴン	132
第35話：	過去篇I・異世界講義、お金と仕事の話	135
第36話：	過去篇I・暗黒戦士の産声	140
第37話：	モモンガ様は非常に凝り性です	145
まじかる☆ぷりんせす	ラナーちゃん	
第38話：	前半↓暗部との対峙、後半↓黄金という二つ名の真なる由来?	150

	第39話：「ラナー無双篇・マジカルプリンセスがホーリーアップ ですわ♪」	155
162	第40話：「ラナー無双篇・先生仕込みの講義開始ですわ♪」	
	第41話：「ラナー無双篇・先生は叡智の源泉ですわ♪」	167
	第42話：「ラナー無双篇・わたくし、異能バトル系より日常系ラ ブコメが好みですの♪」	172
	第43話：「ラナー無双篇・わたくしに仕えなさい♪」	177
	エ・ランテルでアンデッド・ナイトが開催されるようですよ？	
	第44話：「アインズ・ウール・ゴウン」	181
	第45話：「ナチュラル・ボーン・キラ」	188
194	第46話：「久しぶりだよカルネ村（番台席娘、追加版）」	
	第47話：「カルネ村防衛力強化計画……の草案」	199
	第48話：「カルネ村○○○○祭りとか？」	205
	第49話：「叡者の額冠」は呪いのアイテム？」	210
	第50話：「刀剣志士」	215
	第51話：「傾いて候」	221
225	第52話：「秘剣《鳶斬り》が生まれるまでのエトセトラ」	
230	第53話：「クレマンさんよりエンリの方が怖いという風潮」	
235	第54話：「エンリさんを機軸にお骨様を考察してみる」	
	第55話：「わからないというのは存外強い武器になる？」	

第75話：「ぶぎ!!」	334
第76話：「戦闘力5のスカウター」	340
第77話：「ふへんもの」	346
第78話：「クレマンさん待遇改善計画」	351
第79話：「うくん……リスペクトの差？」	356
第80話：「性遺物と書いてビキニアーマーと読む!」	362
第81話：「その名は、《ユグドラシル・ヒーローズ・ビキニ》!!」	367
第82話：「時を統べる王たる死の支配者」	372
第83話：「Time is not irreversible」	377
ativity	377
current but observer, s subject	377

チユートリアル・ステージ：カルネ村 第01話：“異端異教の村”

生まれてきて最初に感じた感動……それが最高だった。
だから、その人のそばに居たいと願うのは当然だよ？
だから私は今日も一所懸命に足掻くんだ。

アゼルリシア山脈を西から南へ包み込むように広がる人跡未踏の樹海、“トブの大森林”。

その南端のほど近くにある辺境の開拓村の一つ“C a r n e D o o r fカルネ村”……ここには他の開拓村にはない、ある意味において不穏な噂が付きまとう。

曰く“異端異教の村”。

とある世界線の6倍以上、“純粋種の人間”だけで200世帯785名の住民を誇る、開拓村としてはかなり例外的な規模を誇るこの村の住人達は皆、とある神を熱狂的に信仰しているという。

四大神を信仰するリ・エステイーズ王国に属しながら、“死の神”を信仰しているというのだ。

死の神とは、カルネ村から見て南の彼方にあるスレイン王国で信奉されている“六大神信仰”に登場する神であり、スルシャーナという名でも知られている。

だが、このカルネ村では不思議とスルシャーナと言う名は広まっておらず、ただ死の神を意味する“O V E R L O R Dオーバード”という名称が広がっていた。

とはいえ研究家によれば、いつの間にか村に入り込んでいた法国を

追放された死の神信徒が教えを隠れ広め、それがローカライズしたものだだろうと判断されていた。

とはいえ、四大神信仰と六大神信仰の関係は良好とは言い難く、宗教対立が続いている現状である。

しかし、この村が異端として処断されていないのは元々国王直轄領に位置する開拓村だったことに加え、今や民衆よりの改革を成功させ“黄金姫”と名高い“ラナー・テイエール・シャルドルン・ライル・ヴァイセルフ”王女が幼い頃に誕生日のプレゼントに欲しいと父親であるランポツサーIII世にねだり、与えられた所領というのが大きい……とされている。

もつとも当時は20世帯ほどしかなかった寒村をなぜラナーが欲しがったのか誰にもわからなかったが、そうであるがゆえに誰も深く考えず、王室と反目してる貴族たちも特に反発はしなかったようだ。

しかし、カルネ村はそのあと“異常な発展”を続け税率が他の王国地域よりも低いくせに税収が多く、王女はその領地経営の手腕においても名声を高め、貴族派達を歯噛みさせているという。

物語はそんな色々と変哲てんこもりな特異な開拓村から始まる

……

☆☆☆

その日、ただならぬ雰囲気を漂わせながら広義な意味では村娘の“エンリ・エモット”が、村の特産品の一つである焼きレンガでしっかり舗装された村の中央道を走っていた。

とはいえ彼女をただの村娘と談じるのは早計と言うものだ。

身に纏うのはやや露出多目の白を基調とした神官服“動く修道院”と呼ばれる防御と回復に定評のあるそれであり、手に握るのは七色に輝く不思議な金属で作られた見事な細工が施されたワンド“蓮の杖”と呼ばれる逸品であった。

まさに神に仕える女神官の見本のような格好だ。

彼女は村の広場に面した一際大きなログハウス、くみ上げられた丸太がどことなく神社のような趣を感じる家の扉を叩き、

「モモンガ様！ 不躰ながら緊急事態ですのでお許しください！ エンリです！」

『構わないよ。入りなさい』

重厚な櫺のドアの向こう側ではなく、不思議と耳のそばで甘く優しい声が聞こえた。

それはエンリが幼い頃から大好きな声だった……

第02話：『理知的な骸骨と甘えん坊の吸血姫』

カルネ村に住む神官服の少女、“エンリ・エモット”が駆け込んだのは村で一番大きな家だった。

一見するとただ大きなログハウスだが、その構成される丸太の一本が魔化されており、その防御力はこの世の大抵の城砦を凌ぐといわれている。

そして見るからに頑丈そうな櫺のドアを潜り、応接間に思しき部屋に入ると……

(お香の匂い……今日はお骨様モードだったんだ)

最初を感じたのは上品な香り……そしてエンリの想像通り、ゆつたりとしたロッキングチェアには大柄な動骸骨スケルトン・メイジの賢者と思われる人物がゆつたりと座っていた。

そう、この村で最も尊敬され、神に等しい崇拜を集めている“彼”は、生者を憎むはずの不死人アンデッドだった。

だが、その印象はこの世界で世間一般に知られるそれとは大きくかけ離れていた。

カルネ村特産の一つである羊毛織物ブロード(ポプリン)をチャコールブラウンに丹念に染めて魔化した落ち着いた色合いのローブに身を包み、色々な機能がついているらしいマジックアイテムのメガネをかけ、そして口にはパイプをくわえ、書に視線を落としていた。ただしパイプはどうやら口寂しくくわえているだけで、匂いの発生源その物は机に置かれた香炉だろう。

“彼”に言わせると受肉した状態より骸骨でいたほうが音と匂いには鋭敏になるらしく、香を楽しむときは決まってスケルトンになっていた。

だが、そのひどく落ち着いた知的な雰囲気はいいが、彼の膝の上で眠りこけている“小柄な吸血姫”のせいで女として少しばかり感じることがある。

具体的には女として妬けるし羨ましい……幼い頃は同じように膝を占領して眠りこけた経験が豊富なエンリは、膝に座るには少しばかり成長しすぎてしまった自分を少々恨めしく思う。

もつともストレートに口に出すほど彼女は子供ではなく、「すみません、モモンガ様。キーン様がお休み中だつて知らなくて……」

「よい。もう起きた」

膝の上でキーン……250年の時を生き、かつては“国墮とし”吸血鬼“キーン・ファスリス・インベルン”はもぞもぞとどかしそうに小柄な肢体を動かし、牙がはつきり見えるほど大きなあくびをする。

「キーン、おはよう」

「おはよう。モモンガ」

“Chu”

二人は自然に唇を合わせた。もつとも片方は骨であるので唇は無いが……それでもエンリ的にはジェラシーを感じてしまう。

こういうシーンを目撃したら、躊躇い無く「わたしも」と飛び込める妹が心底羨ましい。

「エンリ、何があつた？」

「定期巡回に出ていたネムから連絡が入つたんですけど」

定期巡回とかっこつけた言い方をしているが、要するにネムは元“森の賢王”である魔獣(カルネ村では聖獣扱い)“ハムスケ”に乗り、ゴ布林・ライダー達をお供に散策(あるいは遠乗り)に出かけていた。そしてその途中に見つけたのが……

「ほう……”帝国の甲冑を纏つた騎兵”の集団か」

お供のゴ布林・ライダーの一体が一足早く伝令として駆け戻り、現在ネムは残りのゴ布林・ライダーを引き連れ距離をとりながら追尾しているという。

「臭いな」

「ああ」

キーノ、別の世界ではイビルアイと偽名を名乗るのが普通であり、この世界でも村の外では仮面をかぶり同じ偽名を名乗る彼女の言葉にモモンガは頷き、

「帝国兵がわざわざこんな辺境の村を襲うメリットは少し思いつかないな……だが、最近異常な頻度で近隣の開拓村が襲われていると聞く。野盗化した元帝国兵の可能性もあるが、」

モモンガは思案し、

「だが、いずれにせよ国境侵犯には違いない。エンリ、村外での迎撃の準備を。ただし全員は殺さぬように。事情聴取のための人員もいりよう」

「はっー!」

エンリは一礼すると品がないと思われない程度の早足で家を出るのだった。

第03話：〃 OVER KILL 〃

モモンガ（とキーノ）のそこはかたなく異国情緒を感じさせるログハウスを出た村の女神官エンリ・エモツトは、広場にいた村人に村長への連絡と緊急警戒の鐘を鳴らすように告げた。

カルネ村は異端異教の村、王国では珍しい〃死の神〃の信徒の村として知られている。

対外的にはトブの大森林から出てくる魔物対策としているが、本当の理由は王国内部からの不当な弾圧に備え防衛準備を整えていたのだ。

その一環が鐘一つで女子供は勿論、非戦闘員の男性も然るべき場所へ避難するよう普段から訓練していることだ。

また、この文明レベルではありえないのであるが……カルネ村の家々や集会場には食料保管庫を兼ねた簡易地下シエルターを設置するよう義務付けられていて、またその地下室への扉は魔化された素材が使われており、ちよつとやそつとのことでは破壊されない。

また深さにも規定があり、家が燃えてもシエルターで蒸し焼きにならないよう配慮されていた。

そして逆に戦闘員は……

「傾聴してください！ これで全員ですか？」

広場に集まった武装した村民……人間種はもちろん、ゴブリンやオーク、トロールなどの亜人も多くいた。

それどころか魔獣やモンスターの類まで集結している。

「現在、村にいる戦える奴は全員だ」

そう渋い声で答えるのは、剃りあげた禿頭に褐色の肌、鍛え上げられた筋骨隆々の全身に入れる動物を象った刺青がトレードマークの男、モモンガより直々に〃修道拳闘士^{グセラッブライ}〃の二つ名を与えられた〃ゼロ^ダ〃だった。

「ああ。我々はいつでも問題なく戦える」

そう小さな、だが厚みのある声で返してきたのはまたしてもローブで身を包んだ骸骨だった。

ただしモモンガに比べるとローブは黒で、なんというか……少なからず格下臭がする。

だが、これを聞いたところで本人はそれも当然と答えるだろう。

この“骸骨エルの魔法使いダーリツチの名は”デイバーノック”。自称“大賢者モモンガ様の一番弟子”で、ゼロと同じく直々に“探求者ゲイザ”の二つ名が与えられている。

ある意味、この村で“偉大なる先駆者”として最もモモンガを尊敬しているのは彼ではないだろうか？

実はこの二人、モモンガが村を安住の地と定めてからも“完全なる人化”をかけて出る小旅行の最中で出会い、拾ってきた人材らしい。

エンリも詳しくは知らないが、ゼロは武者修行中に起こした食中毒で死に掛けているところをモモンガに拾われ、デイバーノックは傭兵団に所属していたがエルダーリツチとばれて叩き出されたところをモモンガに拾われたようだ。

ちなみにキーノはかつて“国墮とし”と恐れられたせいもあり、村の外に出る際には仮面で顔を隠し吸血鬼だとばれないような処置をして偽名を使うという念を入れねばならず、モモンガが小旅行に出るときは大抵は留守番してららしい。

どうにもモモンガにはどこぞの曹操サンよろしく人材収集癖があるらしく、他にも今は商隊の護衛依頼で村にはいないが、「御前試合で負けて心神喪失状態の剣士」をふらふらと王城から出てきた直後にスカウト（しかも不可視化をかけてわざわざキーノと一緒にデートがてら見に行つてたらしい）してきたりもしている。

『今度は久しぶりに帝国に足を伸ばしてみるかな？ いや、フルーダが面倒臭いな……』

と呟いていたとかいないとか。

ついでに言えば、ここに集まる一団……特に人間種にはある特徴があった。

そう、首から冒険者プレートを下げていたのだ。

カルネ村の住民ははつきり言って開拓村ではありえないツワモノ揃いだ。

いつ母屋である王国、特に貴族派閥から弾圧されるかわからないため、戦闘要員に選ばれた村民は戦闘訓練を定期的に行っている。

であるがゆえに徴兵対策に皆、冒険者登録をしていた。

また冒険者としておけば、今や村の住人と受け入れている亜人たちも登録できるのも旨味だった。

無論、名ばかりの冒険者ではなく資格を剥奪されない程度に依頼……薬草採取や探索など平和的なものを選ぶようにしているが、時にはモンスターハントや護衛任務なども請け負っているようだ。

「エンリ！ ポーションの用意もできてるよ！」

「ありがとう。ンファイ！」

人材収集は何も武人だけに限らないようだ。

何やら不可思議なポーションをエサに、バレアレ商店を祖母と孫そろって誘致したのはもう5年も前だろうか？

ただし、孫の初恋は実る様子も無いが。

「では、今回の作戦を説明します！」

第04話：「イチヤイチャ+エンリはこんな娘？」

さて、エンリが広場で各々の本業を休止して村を守る戦士となった者達に号令をかけている頃……

「モモンガ、何を書いてるんだ？」

相変わらず膝から降りる気配のないキーノが問いかける。

今のモモンガは、エンリが飛び込んできたときの本を置き紙にペンを走らせていた。

そう、驚くべきことに羊皮紙ではなく紙である。

それも現在、カルネ村の特産品としてめきめきと頭角を現してきた庶民でも手が出る比較的安価な紙、カルネ村どころか王国で一般的な麦わらを再利用したわら半紙である。

余談ながらわら半紙に限らず、この村に多くの特産品を作る技術を齎せたのは他でもないモモンガである。

では、彼はその雑多な知識をどこから仕入れたのか？

理由は……一言で言えば魔法、それもチートである。

彼がこの世界に漂着したとき、残念ながらナザリック地下大墳墓は同時に転移することはなかった。

だが、どんな加減がおきたのだろうか？

モモンガはおそらく最終日、最後の瞬間に溜め込んでいたナザリックのアイテムを、ヘアピン一本に至るまでアバウトなイメージでも自在に出し入れすることができるようになっていた。

たしかにこの世界においては途轍もないチートではあるが……現状、いや転移したその日からもつとも頻繁に出し入れするのが大図書館、“アッシュールバニパル”に収められていた数々の蔵書だといふのだから彼の今の在り方が容易に想像できる。

『今更ながらだが……本はいいものだ。漂着してから紙媒体の奥深さに気づくとはな』

とのことだ。

実際、かなり雑多なコレクションだがギルメンの趣味か自然科学や文化人類史の蔵書も多く、それらが知識の源泉となりカルネ村限定とはいえ他では作れぬ特産品を生み出し、直接的にも間接的にも多くの富を齎せていた。

「ん？ ああ、ラナーからの相談事、その返信だよ」

「……まさかラブレターじゃないよな？」

「それこそ、まさかさ。彼女は教え子……みたいなものさ。キーノだつて知ってるだろ？」

事実だ。

かつてモモンガはランポツサーイー世に請われ、短い間だったが娘のラナーの家庭教師の真似事をしていた時期があった。

無論、“完全なる人化”をかけ、貴族がうるさいので身分を偽つてだ。

実はモモンガ、カルネ村にたどり着く前にキーノを連れて諸国漫遊を楽しんでいた時期があった。

気楽な冒険者……いや、旅人生活だろうか？

その時は様々な出会いがあり……中でも今でも続く縁の一つが、ひよんなことから始まった即位前のランポツサとの出会いだった。

それが上記のラナーの家庭教師の件に続くのだが、

「美しいだけでなく聡明な娘だったな……ほんの少し話しただけで、俺が“人以外の何か”と見破ったときは驚いたもんさ。そうとわかってても全く動じなかったことも含めてね」

懐かしそうに語るモモンガに、キーノは少し頬を膨らませた。

そう、キーノは女の直感で気づいているのだ。

ラナーのそれが“《ただの恩師》”に向けるそれとは明らかに事ある感情だということぐらい。

「モモンガが昔の仲間風で言うところの“ハーレム系鈍感ラノベ主人公”体質だというのはわかっていたつもりなんだが……」

「ぐい挨拶だな」

モモンガは苦笑し、キーノの柔らかい金髪を撫でるとふにやつと

キーノは膨らませた頬を緩めた。

我ながらチヨロイン（by十三英雄）だとは思いますが、

（これも惚れた弱みと言うものだろう）

といつものように納得してしまう。

「ラナーへの返信はまあいいとしても……エンリだけに任せて大丈夫なのか？」

「心配ない。あの娘は俺なんかよりよほど軍事的センスに恵まれているんだし」

そこには確かな信頼があり、

「もしかしたら歴史に名を残す人物となるかもしれないぞ？」

☆☆☆

エンリ・エモット（暫定スペック）

種族：人間

フアーマー：Lv1

ジエネラル：Lv3

コマンダー：Lv4

カリスマ：Lv2

クレリック：Lv8

プリエステス（ジーニアス）：Lv5

ビショップ：Lv4

モンク：Lv3

メイサー（メイス使い）：Lv5

総合Lv：35

特殊装備（現在判明している物のみ）

・動く修道院（強力な防御力／耐性／回復）

・蓮の杖（別名：ロータスワンド。聖職者用装備）

備考

現在のネムと同じくらいかやや幼い頃（10年前くらい？）から、カ
ルネ村にやってきたモモンガとキーノから英才教育を受けた人物で、

十代にしてLv35に達した中々の俊英。

指揮能力も高いが、何より信仰系／聖職系に特化したビルドが目立つ。これもひとえに一途で強烈な死モモンガの神信仰のたまものか？

何気に第6階位の《ヒール／大治癒》とか第5階位の《死者復活／レイズデッド》なんかをさらつと使いそうで怖い。

前線でも戦えタンクも一応はこなせる頑強さを誇り、オマケに支援魔法も得意というかなり凶悪な娘っぽい。

ある意味、アンデッドの天敵。

第05話：“とりあえず現状の戦力を確認してみよっか？”

（“ブレイン”さんや”グ”が不在っていうのはちよつと痛いけど……）

広場に集まる猛者達……：難度120、英雄の領域に足を踏み込みながらも越えなお高みを目指そうとしている修道拳闘士ゼロを筆頭に、ゼロに置いていかれてなるものかといわんばかりに難度120に接近しつつある探求者^{ゲイザー}デイバーノック、それに他の村人だって主にモモンガが生み出すアンデッドを相手するなどをした日頃の実戦的な訓練と冒険者としてこなした数々の任務により、ここに集まる自衛戦を請け負う村人の中で難度30を下回る者は誰もいない。

少しだけ解説が必要かもしれない。

ブレインというのはフルネームを”ブレイン・アングラウス”といい、数年前の御前試合で現王国戦士長の”ガゼフ・ストロノーフ”に敗れた剣士だった。

ただ、その剣士としての才覚は決してガゼフに劣るものではない。御前試合直後、茫然自失としていたところを不可視化をかけてキーノとのデートがてらに試合を見物していたモモンガにスカウトされた。

以後、カルネ村に移住し、剣（刀）と拳の違いがあるとはいえ同格の好敵手であるゼロと互いを研鑽し、ある時はモモンガが提供する格上のアンデッド相手に挑み、剣士の頂点を目指さんとしているのである。

余談ながら最近では敬愛する”^{モモンガ}お館様”の影響からか刀剣のコレクションをはじめたらしい。

ただし美術品的な価値より実戦的な性能を重んじるようだ。

モモンガに与えられた二つ名はシンプルに”ザ・サムライ”南方で

剣士を表す言葉であり刀に志を託す者をあらわす言葉だとエンリは聞いていた。

“グ”はかつてトブの大森林に住まう“東の巨人”と呼ばれた巨大なウオートロールであり、今から1年ほど前にたまたま調査で縄張りに入ったエンリと彼女率いる19人のゴブリン軍団にケンカを売った挙句、手下とまとめて“O・H A・N A・S H I”され恭順を誓う。

以後はカルネ村在住であり、ブレインと同じく日々腕を磨いているようだ。

かつては再生力の高さや頭の悪さに定評があったグではあるが、模擬戦形式でエンリと同格かそれ以上の実力を持つブレインとゼロに一騎打ちで叩きのめされ、空中に浮かんだデイバーノックにアウトレンジから死なない程度にファイヤーボールで炙られアシッドジャベリンで溶かされ（注：炎と酸によるダメージは自慢の再生力も仕事を放棄するらしい）、エンリの治療術で癒された途端にキノノに実力判定と称し近接戦の縛りプレイなのにて手も足も出ないままボコボコにされ、トドメにモモンガの“指向性絶望のオーライ”を喰らい泡を吹いて失神するという経験を経て謙虚さを覚え、頭の出来は大きな改善をみせているらしい。

その一例として最近では武技を覚え始め、いつかはモモンガより聞かされた帝国の闘技場で無敗を誇る同族の強者、“武王ゴ・ギン”に挑んでみたいと考えているようだ。

現状、ブレインは前に少し語ったように商隊、村にあるバレアレ商店からポーシオンを大量一括買い付けした商隊の護衛で数名を率いてカルネ村を離れていて、グはトブの大森林に奥にあるひょうたん湖に魚を買い付けに向かった村人の護衛に手下のトロール共々ついていっており、少なくとも今日は帰ることはないだろう。

エンリは考える。

現状、手元にある戦力は自分を含めて難度100越えの強者が三

人、ネムと一緒にについていったライダー（キュウメイ、チョウスケ。チョウスケは伝令を終えると返す刀でネムと合流すべく戻ったようだ）を除く直轄のゴブリンが17人。一般兵扱い、それでも並みの王国兵を遥かに上回る難度と練度を誇る村民が100名強。

（ハムスケさんとネムなら心配ないだろうし……）

頭に思い浮かぶのは、モモンガが村に居つくと程なく連れてきた元“森の賢王”で今は聖獣扱いの巨大ハムスターと幼いながらもやんちゃでバーサークな妹だ。

ただでさえ村でも自分達に並ぶ強者枠の一人と一匹がセット、文字通りの人馬一体で動いてるのならなんの問題もない。

正直、その状態で倒すなら村の強者二人以上でかかるかキーノを連れてくるしかない。モモンガなら楽勝だろうが。

加えてネムもハムスケも戦場の“機”を見るのが抜群に上手い。今は見つからないように距離を置き“帝国の鎧を着た謎の騎兵隊”を追尾しているようだが、迎撃側が下手を打てば直ちに遊撃として突っ込んでくるだろう。

（冷静に考えればネムに手を焼かせる必要もない相手か……）

報告では騎兵の数はせいぜい30騎程度……よほどの精鋭でなければ大きな脅威ではない。

こちらが手をこまねく程度の猛者なら、ネムは必ず報告に一言加えてるはずだ。

普段は愛らしいがいざ戦いとなれば勇猛を通り越して蛮勇でさえあるあの妹は、自分よりも敵の強さを見抜くことに長けているのだから。

「よしっー！」

エンリは考えをまとめると作戦プランを話し始めた。

第06話：ある意味、カルネ村観光案内

エンリ・エモットはイメージする。

イメージするのは最強の自分……それも悪くはないが、今は村とその周辺の地形だ。

まず村の周囲はぐるりと先を尖らせた丸太の塀でぐるりと覆われている。

その高さは最低でも4mはあり、ちよつとした砦のようだ。

外側の先端には使い古した剣や槍の穂先、農機具を再利用した斜め下に突き出される“カエシ”が取り付けられ上りにくくし、内側には弓兵や弩兵が自由に走り回れるようキャットウォークが張り巡らされている。

しかもこの丸太塀、丸太一本一本が魔化がされていて見た目以上に頑丈で、その強度は王城の石造りの城壁を凌ぐかもしれない。

しかもかなりの難燃であり、火矢や油による着火程度では簡単に燃え広がらないように出来ているようだ。

門は2ヶ所で、トブの大森林へ向かう北門（裏門）と街道へ続く一本道が延びる南門（正門）だ。

裏門は門を閉め門をかけると自動的に不可視化の魔法が発動されるようになっていて、周囲の丸太塀に溶け込み、よほど上位の感知系魔法でも使わない限りそこに門があることを気づかれることはないだろう。

正門はそのような魔法ギミックこそないが、だからこそ堂々とした門構えであり、造りからして露骨なほど堅牢さをアピールしていた。左右の門柱とそれを繋ぐブリッジ部分は頑丈な焼きレンガで作られており、その威容は柱と言うよりむしろちよつとした塔だろう。

実際、門柱の内側には階段がつけられており、門柱の天辺には遠見櫓をかねた監視所に“連射式大型バリスタ”旋回式台座に据え付けられ、左右の門柱にそれぞれ一門ずつそれと見えぬように隠蔽設置さ

れていた。

正門自体も分厚い鉄板であり、蝶番なども含めて当然のように魔化されていてそんなじよそこらの破城槌じゃビクともしないだろう。

加えて破城槌対策としてさらに門前は広く街道へ続く道は綺麗に整備されているが、微妙に曲がりくねっていて門に対してなだらかな傾斜（上り坂）を描いていた。

そしてその道にも細工はしてある。

門から200mばかりは道の左右は冬でも枯れぬ背の高い草地（なので火が着きにくい）になっており、また中には道から見えぬように馬防柵と鋼線がランダムに張り巡らされている。

無論、これらの処置は伏兵を潜ませるためだ。

結論から言えば門を閉め、ポロボロスをはじめ扉の上から弓を雨霰のように射掛けるだけで簡単に撃退できるだろう。

だが、エンリはそれを良しとしない。

上策なのはそれだろうが、上策が必ずしも良策とは限らない。特に先々のことを考えれば、だ。

カルネ村を守る戦いは間違いなくこれからも続くとエンリは読んでいた。

むしろ、“帝国の鎧を着た騎兵”なんて者が攻めてくる今回のような事態がイレギュラーだと。

籠城による迎撃戦は、王国が軍として異端討伐を決断した時のためにとっておきたい。

エンリは正直、カルネ村以外にこれといった資産はなく、特に軍に對し実権のない（ように見える）ラナー王女の領地という肩書きをさほど信用していなかった。

逆に言えば王女が暗殺される……は難しいにしても何らかの冤罪で廃嫡されるなどで政治的に排他されれば、この村はただちに討伐対象になりかねない不安定で、危険な場所だという自覚はある。

貴族はそういう腹芸や搦手を得意とする薄汚い手合いだとエンリは社会通念的に認識していたし、こと王国に対しては間違った認識で

はない。

モモンガがどんな情報網をどれくらいの範囲で引いてるのかは知らないが、ここカルネ村では第一王子を筆頭に多くの貴族が“八本指”と呼称される犯罪結社と繋がっていることは常識であり、またどこによからぬやからの耳や目があるかわからない以上、村外で語ることは固く禁じられていた。

嫉妬を感じるくらいモモンガはラナーを高く評価してるが、だが頭脳だけで全てがなんとかなるわけではないことはエンリだつて知っていた。

加えて、この村には王国では異端である死の神を信仰し、亜人との共存を計り、村民数を考えればありえないほどの富を稼ぎ出していることも含め、欲に目がくらんだ貴族が食指を伸ばす大義名分と理由がそろい過ぎていた。

そうであるが故にカルネ村の住民は王国民と言う意識は低く、税の納め先であるラナーに対しても税率を低くしてくれていることに感謝はしても、やはり「ラナー王女の領民」という意識は高くはない。

良くも悪くもここは偉大なる賢者、村に多くの富と安寧を齎せてくれた“死の神”^{オーバーロード}、モモンガとその后であるキーノへの信仰と崇拜が中核となる村であるのだ。

余談ながらエンリは、後は諦めているが妃ポジには自分が納まると自負していた。

ただ……独占する気はないし、そこまで自分は独占欲は強くはないが、実の妹を含め何人がその地位に名乗りを上げているのか不明なのが気になるところだ。

☆☆☆

エンリは一度目をつぶり、情報を精査し纏め上げ迎撃プランを練り上げる。

頭の中に甘噛みされるような疼きを感じた……それが職業レベル、コマンダーとジェネラルが本気で仕事をし始めた感覚だと彼女自身

は気づかない。

そしてその裏側でまだ名前をつけられるほど顕在化していない”固有異能”^{タレント}が、こっそりとアップし補強を始めた。

再び目を開いたときに彼女が幻視したのは、まだ本来の視界の遙か彼方にいる帝国鎧姿の騎馬隊が迫り来る様子だった。

焦りはない。それどころか思考は雑念が晴れどんどん澄み渡ってくるような気がした……

「門外での迎撃作戦を執り行います！」

彼女は手に持つ”蓮の杖”を一振りし高らかに告げた。

第07話：“ジェネラルのお仕事”

門を閉めるだけで強固な砦に早変わりするのに、あえて城外戦を選
択するエンリ・エモットを人は阿呆と笑うかもしれない。

それは悪手だと。

だが、後世の歴史書ではこう評されることを書いておこう。

『エンリ・エモットは切り札、奥の手、隠し玉を作るのが非常に上手く、
またその使い方も上手かったようだ。加えて一見すると悪手に見え
るそれを、後から見れば最良手にしていた事例も多い。ある種、兵法
の正道を理解した上で邪道を使いこなせたからこそ、常勝不敗神話が
生まれたのではと推察される』

モモンガとキーノが村にやってきてから、もうかれこれ10年は経
つ。

その間、少しずつでも一步一步踏みしめるようにカルネ村は住民を
増やしながら防衛力を強化してきた。きつとモモンガはどこかに
籠って戦うことが好きなのだろう。イゼルオーン要塞とか喜びそう
だ。

そんなモモンガと共に生きると決めたときから、村は生まれ変わっ
たと言っている。

故にかつてならありえない光景がそこにはあった。

「正門前にゼロさんを中心に”拒馬(移動式の簡易馬防柵)”を設置！
騎兵の正面突破を阻止すると同時に回りこまれるのを防いでくだ
さい！ 拒馬の後には大楯隊と長槍隊、連弩(連射できるクロスボウ)。

別名：諸葛弩）隊を配置!!」

矢継ぎ早に指示を出すエンリの声に、

「心得た」

静かに低い声で返すゼロに、担当する者達が“応っ!”と唱和する。

今更だが、カルネ村には門柱の上に設置されたポリボロスや連弩をはじめ、『他の場所ではまず見ない武器や装備』が割と多い。

また村の防衛戦を前提としてるせいも、アウトレンジ攻撃を行いやすい弓／弩兵が充実しているのも大きな特徴といえた。

「シューリンガンさんとグリーンダイさんは短弓隊を率いて左右の草地に潜伏！ 命令次第、射撃しつつ距離を置き半包囲を開始してください!!」

「了解だ！ 姐さん!!」

ゴ布林・アーチャーの二人は胸を叩き元気に返事を返す。

ちなみに短弓隊は騎乗訓練もやっており、村の虎の子である数頭の馬を駆り流鏑馬じみた騎射もできるようだ。

今回はそこまでする相手でもないようだが。

「長弓隊は塀の裏側に身を隠し待機！ こちらも命令次第支援射撃を開始です！ デイバーノックさんとゴ布林・クレリックコナーさん、ゴ布林・メイジダイノさんは門柱上にて待機。最初に言っておきますがポリボロス同様に魔法を使える方々はカルネ村の秘密兵器、相手がありえないほど強者でもない限り今回は出番はありません」

「ムウ……残念だ」

この魔法を実戦で試したくて仕方のない、どこか子供っぽいエルダーリツチにエンリは微笑み、

「あくまで“今回は”ですって。それに私も今回は前線に出ませんし我慢してくださいよ」

それに口に出しては言わないが、予想される戦闘で得られる最大限の利益は『なるべく多くの村民に対人戦の経験を積ませる』ことだとエンリは心得ていた。

帝国であれ“帝国以外”であれ、正規兵と戦えるのなら願ってもな

い機会といえる。

王国、しかも正規軍との戦闘を常に考慮すべき指揮官としては、『的が向こうから来てくれた』ことは喜ぶべきことだ。

「デイバーノックを出してしまえば、経験を積む前に魔法乱射ですぐに決着がつきそうで怖い。」

エンリはこの集団を“軍”と捉えた場合、必ずしも一方的な蹂躪……いわゆる“無双”は良いとも思えない。被害少なく勝てるのはいいのだが、せっかくの戦訓を得る機会が失われるし、敵を侮るようになる危険性があった。

何よりも怖いのが、兵が「俺たちが何もしなくても勝てるんじゃないか？」と思ひ込み、一騎当千の猛者に依存し緊張感も防衛意識も欠落させてしまうことだ。

実は知性派脳筋なゼロはその辺は弁えてくれそうだが、

（「デイバーノックさん、絶対に浮きながらノリノリで試し撃ちしそうだもんなく）

そういうのは出来れば、たまに村に来る身の程知らずのモンスターとかにやって欲しいのが本音だ。

無論、王国に限らず誰かが本気で村を潰そうと大軍引き連れてやってきたときは遠慮なく吹き飛ばして構わないが。

「いや、姐さん。御大将は普通前線に出ませんって」

と苦言申し立てるのは、今にもホブ・ゴブリンに進化しそうなゴブリン・リーダーのジユゲムだった。

実に最もな意見だ。

「ところで姐さん、俺たちの出番はどうなってるんですかい？」

「もちろん、ありますよ？ 私作戦計画がきつちりハマるなら、矢でハリネズミになった兵隊さんが落馬して転がりまわるはずですから……」

エンリはにっこり微笑み、

「生きている人だけでかまわないので、死なないように取り押さえてください。あつ、でも抵抗する気が起きない程度に痛めつけるのはありです。人間、素直なのが一番ですから♪」

その悪意の欠片もない笑みを見て、ジユゲムと部下のゴブリンたちはゾツと背筋に冷たいものを走らせた。

こういう笑みを浮かべたときの姐エンリさんは、本気で怖いと言うのがゴブリンたちの共通見解だ。

今から約1年前、調査に入ったトブの大森林東部でこの悪意のない笑顔を浮かべたまま、

『蓮の杖』を魔法触媒ではなく打撃武器として使用したときの威力とグさんの再生限界の検証ですわね♪ モモンガ様も実験と実証は大事だつて言っていましたし。敬虔な信徒として神様の言葉には従わないと♪』

『マ、マテー！』

『知つてます？ メイスは元々刃の武器が持てない聖職者が、武器として用いたワンドから発展したそうですよ？ ならきつと、これも正しい使い方ですよね♪』

と“O・H A・N A・S H I”……一度頭を魔法で吹き飛ばしたグを大岩に座った状態で雁字搦めに縛りつけ、頭が再生され意識が戻るたびにメイスのようにワンドを振るい何度も何度も何度も何度も、蓮の薔をモチーフにしたらしいワンドの重くて硬い先端でグの頭を潰し砕き飛ばし続けたのだ。その度にグの絶叫が森に響き、周囲の動物や魔物や亜人を怯えさせ、同時に東の巨人が王の座から失墜したことを告げたのだった。

再生限界を見極めることはできなかったのは、その前にグの心がポツキリ折れたからだ……当たり前である。

ただ、エンリにも一応は言い分があり、『当時の愚……グは力の強弱でしか物事を判断できませんでしたから。これも教育の一環だと思つてます』

それを目の当たりにしたのが率いられていたジユゲム以下、エンリの近衛扱いになつてるジユゲムたち19人のゴブリンだった。

エンリの実にイイ笑顔を見つつ、姉妹揃つておっかない……改めてそう思いながら、ジユゲムはこの村に接近しつつある騎馬隊に憐憫を感じたのだった。

☆☆☆

たかが10年、されど10年。

異端異教の村として有事に備え培ってきた防衛力が試されようとしていた。

「どこの誰だか知りませんが、モモンガ様とキーノ様の安住の地であるカルネ村に手を出す……それがどれほど罪深いことか、いっぺん死んだ程度じゃ忘れられないぐらい魂の奥底まで刻んでやりましょうっ!!」

“蓮の杖”を天に翳^{かざ}すエンリの鼓舞に応え、村人の雄叫びが響き渡った!!

第08話：“ロンデス・デイ・クランプの憂鬱”

その日、特殊任務についていたスレイン法国の兵士、ロンデス・デイ・クランプは非常に嫌な予感を感じた。

それはただ直感と言うわけではなく……

「カルネ村、か……」

（あそこはかなり特殊な村だと聞いているが……隊長は資料を読んでいるのか？）

ちらりと隊長であるベリユースを見やるが……

（阿呆が……）

心の中で毒づいた。

きつと昨日襲った村での出来事、無垢な村娘を犯しながら殺したことも思い出しているのだろう。

どうしようもない下衆だが、それも仕方ないとロンデスは諦めもしている。

何しろベリユースは軍才がないどころか軍事訓練もまともに受けていない。

どこぞの金持ちのボンボンが、箔付けのために隊長役を買い取り作戦に参加、自分は体のいいお守り役を押し付けられたとロンデスは考えていた。

要するに貧乏くじだ。

その考えは的外れなものではない。

無抵抗で無力で無垢な民を殺し犯し奪い、そして焼き払う……凡そまともな軍人が喜んでやるとは思えない汚れ仕事を嬉々として行い、それを完璧にこなしていると勘違いしベリユースは呆れるほど単純に増長を始めていた。

（ベリユースは今回の作戦の意味や重要性をわかってるのか？ いや、ベリユースだけでなく上層部もだ）

“高度な政治的な判断”とやらで、『バハルス帝国軍のふりをして

国境周辺の王国の村々を襲撃、討伐名目で不十分な装備のまま出陣させられる“対象者”を誘い出すだけの簡単なお仕事』……言うならば自分たちは襲った村々も含め、対象者を釣上げるためのエサだ。

対象者が誰なのか想像はつくが、それを問うつもりも詮索するつもりもない。

誰が対象者であっても好んでやりたい任務ではないが、だからと言ってスレイン法国の正規軍人としてやるべきことはやるつもりだったが、

(なぜ、“カルネ村”まで襲撃する必要があるっ!!)

☆☆☆

まず、最初に言っておくがカルネ村は今回の誘引作戦における“襲撃リスト”には載っていない。

ただ、襲うなど特に止められていないだけだ。

そして、カルネ村の襲撃はベリユースの独断だった。

ベリユースの言い分は、

『対象者がまだ釣れない以上、襲撃を続けるしかないじゃないか』

一見、もつともらしい物言いだが本音が別にあることはロンドネスに限らず隊員の誰もが知っていた。

端的に言えば、ベリユースと一部の隊員は殺戮と強姦と略奪に味をしめたのだ。

“カルネ村”は、法国でも一定以上の知識がある者なら一度は聞いたことがあるはずだ。

名目上は一介の開拓村だが、その規模は開拓村にあるまじき大きさで、また村とその周辺はラナー王女の直轄領でもある。

同時に、巨万の富を生み出す村としても知られていた。

様々な毛織物を生み出す羊毛産業、麦わらを再利用することで価格を抑え庶民にも手が届く値段での販売を成功させた製紙業、大分前に店ごと拠点をカルネ村に移したバレアレ家による高品質なポーシヨ

ン卸業……他にもまだ規模は小さいが酒造やチーズやバターと言った乳性嗜好品を生み出す酪農にも積極的に手を伸ばし、大きな成長産業となることが確実視されている。

また王国有数の消費地である城塞都市“エ・ランテル”がすぐ近くにあるのも大きいだろう。

ラナー王女直轄ということとで他の王国の土地に比べても税率が低いが、それでも村から入る税金は巨大で、ラナーが打ち出した数々の改革の原動力になってるともつばらの評判だ。

その巨万の富を殺して犯して奪い取ろうとニヤけ面で考えてるのがベリユースであるが、

(だが、カルネ村の“もう一つの側面”を理解してるのか!?)

巨万の富を生み出すと言うことは、それだけ富を狙われやすいということだ。

建前では“トブの大森林から抜け出すモンスター対策”ということになってはいるが、村は『小型版エ・ランテル』と評されるほど頑強な丸太塀で囲まれていることは、一度でもカルネ村の資料を読んだ者なら誰でも知ってる話だ。

(しかもあの村の住民、かなりの部分が冒険者なんだぞ！)

村の中では特に語られる事はないが、主に徴兵対策として徴兵対象となる成人男性を冒険者として登録することが慣例化していた。

しかも名目だけの冒険者じゃない。

対象者の村民を一つの冒険者チーム“カルネ村修道会”として登録、冒険者組合史上最大級のチームとなっていて、オーダーに合わせて少人数でチームを組み、冒険者資格を剥奪されない程度にローテーションでクエストをこなす取り組みを行っていた。

“カルネ村修道会”というチーム全体で見れば“白金級”^{ブラチナ}冒険者チーム……それだけでも十分すぎるほど脅威だが、中には明らかに逸脱し実力ならアダマンタイト級と呼ばれる者が複数いるらしい。

穿った見方をすれば、“チーム全体の實力”の平均値をとらせ白金級で留めている事すら策略の可能性もある。

「それどころか……」

その活躍が滅多に表に出ることはなく、故に存在その物に『都市伝説疑惑』がある謎に包まれたアダマンタイト級冒険者……”ダークウォリアー”と”イビルアイ”が、カルネ村を根城にしているという噂まであるのだ。

二人の登録がエ・ランテルで行われているところを見ると、信憑性は低くはないとロンデスは考えていた。

(ただでさえ、たかだか25騎の騎兵じゃ砦などどう考えても落とせるわけないのに、)

これで本当に伝説の冒険者など出てきたら自分たちなど塵芥だろう。

もうこれだけで有り得ないほど憂鬱なのに……

(カルネ村の信仰は……)

ロンデスは、それ以上は考えたくないと頭を左右に振る。

もう精神的負担は御免だと。

無論、ロンデスは中止を進言したが欲に目のくらんだベリユースに聞き入られることはなかった。

もう自分にできることはないという諦観が心を蝕む……

「もう俺は、生きて故国の土を踏むことは無いかもな」

その呟きは、奇妙なほどの現実感を伴っていた……

第09話：汚ねエ花火

「俺、終了」

ロンドスは気がつくと思わず呟いてしまう。

もう「一体これのどこが開拓村なんだっ!? お前のような開拓村があつてたまるかつ!!」と衝動的にわめき散らしたくなる筈その物の閉じられた巨大な鉄門……広場のように開けた門前に腕を組み佇むのは強者の雰囲気を感じそうともしない褐色禿頭の偉丈夫だった。

いかにも質が良く動きやすそうな法衣を着込み、その丸太の如く太い両腕両脚には、同じ意匠が施された重厚なガントレットとレガースを装着している。

おそらくは噂に聞く“単身の實力ならアダマントタイト級”の一人だろう。確証はないが確信はあつた。

ベリユースどころか自分も、いや25騎全てでかかってもあつという間に返り討ちにされそうだ。

それだけじゃない。

その強者の左右には騎馬に回り込まれぬように“拒馬(移動式の簡易馬防柵)”が半円状に張り巡らせてあり、その後には明らかにこちらより多い数の兵が待機していた。

ロンドスは素早く戦力を分析する。

おそらく拒馬に立てかけられてる鉄板は、タワーシールドだろう。そして穂先を上に向け構えられてるのは丸太塀の天辺に届きそうなロングランス……馬が近づけば、即座に盾は起き上がり槍は突き出されるはずだ。

その後にも兵はいるが、おそらく弓兵……いや、弩兵か？

(これじゃあ王国の正規軍を正面切つて相手をするほうが、よほど楽だろうに……)

どうやらこちらが騎兵の集団だと言うのはとつくにバレていたらしい。

もしかしたら、攻城兵器なぞ影も形もない、無抵抗な村人をいたぶるためだけの軽装備の部隊だと言うことまでお見通しかもしれない。

(要するに俺たちはどうしようもない間抜けなことか……)

だから敵は十分な装備と余裕をもって待ち構え、対しこちらは騎兵の最大の武器である機動力や突進力を打ち消され、門の前で立ち往生だ。

彼我の戦力差は圧倒的……無様に逃げ帰るしか方法はない。

(もつとも逃がしてくれる保証は、どこにもないが……)

どうぞどこまでも政治的な汚れ仕事、大儀無き任務。更にベリユースのお守りもいい加減ウンザリだ。

いつそ自分だけさっさと降伏してしまおうかと考えるが、

「我が名は“ゼロ”。^{マスター}師匠より“^{グランプラー}修道拳闘士”の二つ名を賜った者だ」

低く静かに、そして誇らしげに口上が始まった瞬間、

(あつ、これ手遅れな奴だ)

逃げるタイミングも降るタイミングも完全に逸したことをロンドンデスは悟った。

「お前たちが何者なのかは問わん。されどここは偉大なりし”死の神”が安住の地と定めた村。土足で汚そうとするならば容赦はせぬ」

ギラリとどんな鋭利な刃よりも鋭い眼光をその男は放った。

☆☆☆

「はっ！ 異教徒どもが偉そうに!! さっさとその門を開けるがいっっ!!」

(バカ！ ベリユース、やめろっ!! 強者相手に挑発してどうするっ!?! 力の差さえも理解できないのかっ!!)

だが、その言葉が届く前に……

「それがお前の答えでいいんだな？」

見る目より“狙う目”に切り替わったその瞬間、ロンデスは褐色の巨漢……ゼロが消えたように見えた。

勿論、不可視化の魔法を使ったわけではない。

予備動作も助走もない。

“シャーマニック・アデプト”で全身に刻んだ動物を象る刺青の力を解放したわけでも、武技を使ったわけでもない。

ただ、ガントレットとレガース、モモンガより賜りしアイテムで底上げされた“純粋な身体能力”のみで、比喻でなくロンデスが瞬く間（約0.3秒）に10m程あった距離をもともせず騎乗するベリユースの眼前にまで跳躍し、

“パァン!!”

ロンデスが気がついた時には、命乞いをする間もなくベリユースの頭が派手な破裂音と共に爆ぜ散っていた……

第10話：「カルネ村防衛戦・前哨戦イベント終了」

“パァン!!”

感覚的には褐色の男が消えたと思ったら、斜め右前にいたベリユースの頭が破裂音と共に爆ぜていた。

ロンデスに言わせれば「な…何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった…」といういわゆるポルナレフ状態だったに違いない。

ただはつきりしているのは、褐色の男^{ゼロ}が何かをして嫌悪すべき隊長の首から上がなくなったのと、

“とんつ”

錯覚だと思うが空中で静止したように見えたゼロがベリユースの成れの果てのブレスプレートあたりを軽く蹴り、反作用で首から下はぐらりと揺れて落馬し、ゼロはむしろ優雅にさえ見える跳躍で元居た位置に戻ったと言うことだった。

目から入った情報の処理を拒否するような頭の痺れを感じながら、(ベリユース、駄目じゃないか。こんなにも中身を撒き散らしたりしちゃ)

と顔についた不快な感覚を拭う。

妙な柔らかさを持つそれは、きつとベリユースの頭の中に詰まっていた役に立ってなかった物だと妙に緩慢な思想でロンデスは理解した。頭蓋骨の中身が役に立ってたのなら、きつと自分はここに居ないのだから。

『斉射三連！ 放てっ!!』

現実的な感覚が戻ってくる前に、どこか遠くから聞き覚えのない若い女の声が聞こえた気がした。

どういうわけか明確な意思を持った声のはずなのに、意味が理解できない。

ただ、激しい痛みと共に意識が途切れる前に感じたのは、

イバーノツクの二人で集団化した睡眠魔法をかけてある。

カルネ村は豊富な資金を後ろ盾に、籠城基本の防衛兵力として今のところ弓兵と弩兵の育成に力を入れている。

その甲斐もあり、カルネ村の戦闘員の半数はこれらの兵士だ。

今回参加した兵もほぼその比率であり、人間だけで言うなら約50名が矢を放ち、斉射三連なので計150本の矢がベリユースを除いた24騎の騎兵に襲い掛かったということになる。

正面からは弩、丸太塀の上からは長弓、道の左右の草むらからは挟むように短弓に射掛けられた……加えて、エンリは実は事前にある命令を出していた。

それは、

『なるべく人を狙ってくださいね？ 軍馬は貴重なので、迷惑料代わりになるべく手に入れちゃいましょう♪』

かくて24体の急造ハリネズミは完成したのだ。

帝国兵風の鎧はあちこちに穴が開き、引つpegがして売ったとしても二束三文だろう。

無論、村で使う気はない。誰が望んで下級装備などを使いたがるということだ。

それにエンリには、10代の少女らしいささやかな夢がいくつかある。

例えば、今は兼任の短弓隊を本格的な弓騎兵（軽騎兵）に再編することなんかそれぞれにあたる。

できれば突破力を期待できる重騎兵も揃えたいが、馬への負担を考えるとスレイプニール^ハか、いつそモモンガに頼んで“アイアンホース・ゴレム”を出してもらったほうがいいかもしれないが……ただ、あまりにもモモンガに頼りすぎるのもどうかという葛藤もあった。

☆☆☆

「姐さん、こいつまだ生きてるみたいですね？」

「なら怪我をしてる馬と一緒に、広場に並べておいてください」

(モモンガ様も全員殺すなど言ってたし)

事情聴取がどこまで出来るかわからないが、

「回復させた後、《チャームパーソン／人間種魅了》でも使えばいいですか」

(抵抗レジストされたら《ドミネート／支配》って手もあるし)

エンリはもう平常運転だった。

もしかしてこの少女、アンデッド並の精神沈静化特性でも標準装備しているのだろうか？

「ところで姐さん、死んでるのはどうしやす？」

「そうですね……」

エンリは少し考え、

「《死者復活／レイズデッド》しても灰になりそうだし……そのまま腐らせるより馬は馬肉に、人は人間種以外の皆さんの御馳走っていうのはどうでしょう？ わざわざ埋葬する義理もありませんし」

巫人が人の肉を喰らうのは当たり前。だから人を襲うのだ。

エンリだけでなくそれはカルネ村の住人にとってただの自然の摂理であり、別に嫌悪感のある話じゃない。

共に暮らす村人を食料と看做さなければいいだけだ。

故に敵対者の遺体に配慮する必要を、エンリは特に感じてはいなかった。

むしろ馬にせよ人にせよ、放置して腐らせるなど公衆衛生的に言語道断だ。

「そいつぁいい。人肉なんて久しぶりだからウチの連中も喜びまさあな」

エンリはにっこり微笑み、

「それは何より。これで英気が養えれば上々ですよ♪」

ここは死モモンガの神を信奉せし村。死は生の一部であり、また死は誰かの生に繋がる。故に死は無駄にしてはならないのだ。

第1話：プリエステス・エンリ

『《マス・スライト・キュアウーンズ／集団軽傷治癒》』

ロンデス・デイ・クランプの意識が戻ったとき聞こえたのは、そんな呪文を発動した声だった。

七色に鈍く輝く不思議な色合いの金属でできたワンドを掲げ、見知らぬ神官服姿の少女が放ったのはおそらく治癒の魔法。

もつともこれは個々にかける第1位階の《ライト・ヒーリング／軽傷治癒》を範囲魔法にしたようなもので、重傷と言ってよいロンデスの怪我を完治するほどの効果はない。

というより手に入れた生き残りの馬と捕虜をまとめて治療しようと言う言わば手抜きのできなので、エンリはこれで駄目なら個々に治癒魔法を重ねがけするか、バレアレ商店謹製のポーシオンを頭からかけようと思っていた。

赤いポーシオン？

勿体無いのでこのぐらいじゃ使いませんとも。

とはいえこの処置でもロンデスの傷はとりあえず塞がり、一命は取り留めたようだ。

エンリ的には最も重要な馬の治癒だが……こちらは元々人間より矢が集中してなかったためほぼ全快していた。

一部、足を骨折していた馬もいたはずなのだが……問題なく立ち上がっているようだ。

エンリはよしよしと馬の頬を撫でる。

馬は興奮する様子もなく非常に大人しいが、どこか怯えたような目でエンリを見ていたのはきつと気のせいであろう。

「あれ？ 目が覚めたんですか？」

矢は抜かれ、おぎなりではあるが軽い止血の後に治癒魔法をかけられたのだろう。

板の上に寝かされた上半身を起こすと、目に入った血が滲んだ包帯の白さがやけに眩しい。

「(´・ω・´)……は？」

「堀の内側、あなた達が襲ったカルネ村ですよ」

その少女はにこりと笑い、

「意識が戻ったら早速聞きたいんですが……あなた達は何者ですか？」

「……バハルス帝国、特務作戦隊だ」

とつさにカバーストーリーを言えた自分を褒めてやりたいロンデスだったが、神官服の少女はつまらなそうな顔で、

「えいつ♪ 《チャームパーソン／人間種魅了》」

「あ、あれ？」

ロンデスは悩む。

俺は、何でこの少女に嘘をつこうとしたんだ？と。

「私はエンリ、あなたの命を救った普通の村娘です。兵隊さん、あなたはどこのどなたですか？」

マツチポンプも甚だしい上に「お前のような普通の村娘がいてたまるかっ!!」とツツコミたくなるセリフをしれつと告げるエンリだったが、ロンデスはそこになんの不自然さも感じず、

「あつ、ああ、そうだったな。命を助けてくれてありがとう。俺は、いや私はロンデス・デイ・クランプ。スレイン法国の兵士だ」

「なんで法国の兵士が、帝国兵の振りをして村を襲ったんです？ ここは“死の神”様を奉じる村ですよ？ スレイン法国の六大神信仰の中にも死の神はいますよね？」

厳密にはカルネ村で信奉される“死の神”^{モモンガ}とスレイン法国の“死の神”^{スルシャナ}は全くの別人、いや別神なのだが、あえて誤認させておくのもカルネ村の生存戦略の一つだった。

故にモモンガの名は決して村の外の者には語らない。必ずモモンガと言う個人名ではなく死の神という名詞を表現を使うのだ。

蛇足ながらキーノが表立ってその信仰対象、モモンガのようなシン

ボライズがなされないのは本人の強い希望によるものらしい。

「私だつて襲いたくなんてなかった。そもそもカルネ村は襲撃リストに載ってなかったんだ。俺は止める様に言ったが、ベリユースのクソ野郎が勝手にっ!!」

「落ち着いてください。ロンデスさんの本意じゃなかったことは理解できましたから」

慈愛に包まれた笑顔にほっと安堵の息を漏らすアンデス。

『もしかしてこの娘は村の聖女かなんかなのか?』と的に当たってるんだか外れてるんだか微妙な事を考えていた。

「質問を変えますね? どうやら襲撃リストに従い、他の開拓村も襲つてたようですが……どうしてです?」

「ある存在を誘引するためだ。その存在の名は聞いていないが……」

「いないが?」

「想像はつく」

「なるほど……誰です?」

「王国戦士長」ガゼフ・ストロノーフ」

☆☆☆☆

その後、いくつかの質問を重ねた後……

「大体状況は把握できました。ありがとうございます」

「役に立ったのなら何よりだ」

親しげにそう返すロンデスにエンリは微笑み、

「まだ怪我は完治していませんので、もう少し寝ていたほうがいいでしょう」

「ああ、そうだな。すまない」

《スリープ／睡眠》

酷い眠気に襲われ、再び意識を手放したロンデス……その寝顔はどこまでも安らかだった。

エンリは笑みを消すとゴブリンにそのままロンデスを縄で拘束するように命じ、

(彼ら先遣隊は所詮、戦士長をおびき出すための囷……ならば、)
「それをしとめるための本命の部隊がどこかに存在してるってこと
ね」

そして現在、ガゼフとその配下を追尾してるのだろう。

ゴブリン・ライダーの伝令が再び村に駆け込んでと報告が入ったのは、そのすぐ後の事だった。

第12話：“一人と一匹”

「たーいーくーつー」

「ネム殿」、それがしも気持ちは同じでござるが我らは哨戒役にして遊撃であるが故、安易に仕掛けてはならぬとの將軍殿からのお達しでござる」

カルネ村からそう遠くない平原、巨大な魔獣……いや、本人(?)の趣味なのか和テイストを感じるで鎧、いや赤備えの当世具足で全身を覆い、セツトになった鞍を背中につけた巨大なハムスターと、その上で駄々をこねる髪を左右で結ぶ幼女がいた。

「わかつてるよー、ハムスケ」。でも、今宵の“そーてんがげき”蒼天画戟は血に飢えてるのっ!!」

片手に手綱(とはいえハムスケは轡をつけていないので鞍につけられた転落防止のそれ)、片手でビュンビュンと大柄で物騒な長物を振り回す幼女……武将の卵、いや齡一桁にして英雄の領域に片足を突っ込んでいそうなエンリの妹、“ネム・エモット”がそこにいた。

彼女が持つ背丈の倍はありそうな武器の名は“蒼天画戟”蒼天画戟。

三国志演義においては最強武将の呂布が使っていたとされる方天画戟の亜流のような名前だが……確かにリアルの方天画戟というより、むしろ真・三国無双8に登場したハルバードに近い形状のそれだ。

ただ大きな違いは宝玉の色で、名のとおり紅玉ではなく蒼空色……蒼い宝玉が埋め込まれている。

全アダマンタイト製で、刃の部分は这个世界では産出されないはずのヒビイロカネでコーティング、魔化に加え様々な“魔法付与”エンチャントが成されてるようだ。

というより蒼玉は、ユグドラシル由来のデータクリスタルを元素材にしていると言えは凄さが伝わるだろうか？

加えて不壊属性／自己再生／切れ味低下阻止のルーンをびっしり刻み込んである。

魔化とエンチャントとルーン……おそらくモモンガ一党とドワーフの合作だろうが、この三要素を互いに打ち消させず構築するなど中々に大した技術である。

姉の持つ“蓮の杖”も大概だが、妹のそれだって負けず劣らず。

ユグドラシルの素材とこの世界の技術のハイブリッド……現在における完成形の 하나가、この蒼天画戟と言つて間違いない。

「いや、今は昼でござるが」

「むうー。ハムスケもおねえちゃんを將軍とか呼んでると怒られるよー？ おねえちゃん、あれでモモンガ様の女神官^{ぶりえすてす}つて立ち位置に意地と誇りをかけてるから」

「……今更感がパネエでござるな」

「言つちやだめだよ。ネムもそう思うけど」

何やら実の姉に辛辣な評価を出してる一人と一匹だった。

あまりにエンリをいじると後々恐ろしいことになりそうなので、少々話題を変えよう。

“蒼天画戟”だけでも頭の悪い……もとい。モモンガのネムへの過保護っぷりが垣間見える頭の痛い装備だが、それに輪をかけてるのが身に着けてる軽甲冑(?)だった。

端的に言えば……ミニスカ型の装甲をつけたレーザービスチェ・アーマー“幼き守護者”だ。

デザイン的にはF.G.Oに登場するデミ・サーバント、シールド／マシユ・キリエライトのそれに酷似している……というかそれをベースに特に胸の辺りを中心にぺったんな幼女用に平たく再設計されていると言つたほうが正しいか？

オマケになぜかへソ出して背中も見えるから、色々デザインが混じつてそうだが。

また円十字のタワーシールド型宝具は標準装備されてないが、その代わりというべきか？ 『大きさを半分にして円を外し形をシンプルにした浮遊する十文字盾』、対の“自立^{アン}防^{ロック}御^ク型^ク浮^{ロス}遊^ス十^{ガー}字^{ディ}機^{アン}動^ス盾”を小さな肢体の左右に浮かせていた。

一体、幼女に何を着せてるんだ？ あるいは何を装備させてるんだ？と小一時間ほどモモンガを問い詰めたくなるが、彼の名誉のために言っておくが断じて彼の趣味ではない。

むしろ、どちらかと言えばネムの趣味だ。

☆☆☆

今から少し前の話になるが……ネムは戦場に立ちたいと言い出したのだ。自分も役に立ちたいと。

ネム・エモットと言う幼女は、幼い頃から自分の“異常性”をよく理解していた。

そして、自他共に認める“早熟の天才”だったのだ。

“生まれたときから村にはモモンガとキノコがいた”

“子守を任されたエンリが、ネムを背負いモモンガの家に入り浸っていた（ネムを背負って女神官の修行をしていた）”

おそらくはそれがネムの『覚醒』のきっかけだと、少なくともモモンガはそう考えていた。

曰く、『物心がついた時には、モモンガが村に来てすぐにタイムした高難度魔獣のハムスケに鞍もつけずに乗り、走っても振り落とされることはなかった』。

曰く、『齢5歳にして普通の武器じゃネムの腕力に耐えられなくなっていた』。

他にもネムが示した異常性はいくつもある。

力を持って余す危険性も、力に振り回される危険性も、力に溺れる危険性もモモンガはユグドラシル時代に、何よりこの世界に流れ着いた後の様々な経験と出会いからよく理解していた。

だが、かと言って半端な装備で戦いの場にネムを出すのは危険……そこでモモンガは、今でもどういうわけかアクセスできるナザリツクのアイテム群に『なにか幼女用の防御装備はないか？』とアバウトな条件を頭で念じながら、謎の多い虚空に手を入れ取り出すと……

何が出てきたのかは……詳しくは書くまい。

だが、モモンガとしてはかつての盟友……もう二度とは会えないだろう懐かしき某ペロロンチーノバードマンの更なる闇、更に深き業など知りたくはなかった。

ギルメンの誰も知る“最強の吸血姫”シャルティアの前に、『知られた途端、リアルで実の姉茶釜さんに叩き潰された幻のNPC計画』があつたなんてことも知りたくなかった。

その名も決まらぬまま消えた『シャルティアよりちみつこくて平たい、極度のブラコン妹系NPC』が生まれる日を夢見て、ペロロンチーノが数々の汎用性を無視した“幼女／女兒特化装備”を用意していたことなど……

その文字通り“お蔵入り”していた誰も知らなかつただろう装備を、古き友人が血涙と共に書き残しただろう手記と共に引き摺り出してしまったモモンガの心境はいかばかりだったのだろうか？

女兒用ビキニアーマー（世界樹の迷宮X風）なんて一体どうしろと？　そして、ネムが一目見て気に入り「かわいいー♪　ネム、これ着たいっ!!」と言い出した時、止めるのに洒落ではなく骨が折れたモモンガである。

その時のキーノとエンリの視線は思い出したくない……

結論から言えば、今のネムが着ているマシユ・コスもどきのレザーライトアーマーは、ネムがお気に召した戦闘用装備の中では性能はともかく見た目はまだ大人しい方だ。

なんで（今でも生きていれば）ペロロンチーノが、世界を隔てる時空の壁を突き破り出現しそうな衣服ばかりをネムは気に入るのだろうか？

長々と装備解説をしてしまったが……ネムがモモンガより授けられた装備は、無論それだけじゃない。

その一つが“遠見の眼鏡”、遠視魔法のかかったいわゆる双眼鏡型のマジックアイテムであるが……それを覗き込んでいたネムは、

「あれ？」

途中まで距離をとりながらチェイスしていた騎馬集団とはまた別

の騎馬隊を視界に捉えた。

一見するとそれは傭兵の集団にも見えしたが、

(あの先頭を駆けてる人、もしかして……)

その短い黒髪の男に、ネムは見覚えがあった。

そう、去年のカッツエ平原。不可視化の魔法をかけたハムスケに乗り、王国と帝国の合戦見学をしたときに見た顔だ。

カルネ村の強者達に比べれば有象無象ばかりの王国軍の中で、今の自分より僅かに格上と思われるその戦い方と強さが目立っていたのでよく覚えていた。

「確か名前は、」

顔と名を一致させたネムは、もう一度お供のゴブリン・ライダーの一人をカルネ村へ伝言を持たせ走らせた。

第13話：追撃部隊

その日、ガゼフ・ストロノーフは焦っていた。

帝国兵と思われる集団に、辺境の開拓村が次々と襲撃され、その討伐命令が自分に下ったのだ。

とはいえ、同時に胡散臭さも感じていた。

帝国兵の行動の不可解さ……盗賊化した元帝国兵ならともかく、正規の帝国兵ならこの時期に王国、それも大して戦略的価値もない村を襲撃するなどメリツトがなさ過ぎる。

加えて、

『たかが帝国の雑兵ごときに“王国五宝物”は過ぎたものか……』
帝国兵が越境し王国の村々が襲われているのは言うまでもなく一大事、早急に事態の収束を図るべきなのに、貴族達はそれを阻害するように横槍を入れてきたのだ。

だが、同時に打開策もあった。

（ラナー姫には感謝の言葉もないな）

そう、出立する前日。ふらりと「クライムの顔を見に来ました」という建前でラナー王女がお忍びで屋敷に訪ねてきたのだ。

クライムとは、ラナーが示した改革の一つ“孤児救済策”を打ち出すきっかけとなった街で拾った子供で、今は剣士見習いとしてガゼフに住み込みで鍛えるよう依頼していた。

蛇足ながら残酷な現実を一つ書いておこう……クライムは、絶望と
言う言葉しか知らない生活から救ってもらった恩義と強い憧れをラナーに感じているが、ラナーにとってクライムは「きっかけの子供であつても、救済した多くの子の一人」という意識が強い。

さて、そんなラナーが何しに来たのかと言えば……

『ちよつとした餞別ですよ。これで少しは戦いが楽になるはずですよ』

そう手渡されたのは……見かけこそそこいらの古物商が二束三文

で売ってそんな古ぼけた、ありきたりの武器や防具だったが……
『なっ!?!』

ガゼフは思わず絶句した。
歴戦の戦士であり、平民でありながら王国戦士長まで上り詰めた彼は、手に取るなりそれが巧妙な偽装だと気がついたのだ。

希少素材で作られ、丁寧に魔化や魔法付与が施されたそれらの装備は、見かけに反してガゼフの経験からしても紛れもなくとんでもない逸品だった。

『貴方ごんに恩なが売これるもあろうかと』、用意しておいてよかったですわ♪』

『? そのフレイズはなんですか?』

『先生曰く、異国の“様式美”、だそうです。わたくしも実際に使う機会があるとは思いませんでしたが』

クスクスと笑うラナーはあくまで愛らしく、

『あつ、それと……』

彼女はウインクしながら、

『出所は詮索しないでくださいね? ラナーとの約束です♪』

悪戯っぽく微笑んだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ガゼフは部下と共に馬を駆り、ひた走った。
辺境の村々は悉く襲撃され、惨い有様を呈していた。

仕方なくガゼフは多いとは言えない部下を生き残った村人の護衛に裂くしかなかった。

戦力の分散は愚作だとわかっていても、他に策はなかった。文字通りに半減した部下を引き連れ、また駆け出すが……

(たしかこの先にある村は……)

「カルネ村、か……」

王国でも、一定の知識水準以上の者には名の知られた村だった。

曰く、

・ラナー王女の個人直轄領

・数々の特産品があり、人口からは考えられない富(税込)を生み出す村

・まるで砦のような鉄の扉をつけたレンガ造りの門があり、村をぐるりと丸太塀が囲んでいる。

・村民のかなりの数が冒険者

・六大神、中でも死の神を信仰していると言う噂

とまあこれを聞くだけでも特徴のありすぎる村だったが、ガゼフが頭を悩ませるのはそこではなかった。

『あつ、そうですわ』

それは帰り際にラナーが残した言葉、

『もしもカルネ村を訪れることがありましたら、“く・れ・ぐ・れ・も”粗相のないようお願いいたしますわね?』

と念押しされたのだ。

詳しくは聞かなかったし、聞ける雰囲気ではなかった……というか、笑顔で凄むと言う器用な顔芸を披露したラナーに気圧されてしまった。

邪悪でもなく歪んでもないが、なんかおっかなかった。

未だにラナーに憧れるクライムがいなくてよかったとガゼフは心底思う。

あれは“百年の恋も冷める”なんて生易しいものではなく……

(小便を漏らし、立ったまま気絶しかねんな……)

歴戦の自分でも背中に寒気が走ったあの気迫、質こそ違うがかつて

御前試合で対峙した天才剣士をガゼフは思い出した。

兎にも角にもガゼフとその戦士団は進路をカルネ村に向ける。

もう周辺には襲撃されてない村はないのだから。

当然、ガゼフは気づいていない。

自分たちは既にネムとハムスケに見えられ、カルネ村に伝令が飛んでいることを。

果たして彼らは、カルネ村にとって“歓迎されるべき客”なのだろうか？

第14話：「戸惑いのガゼフ」

「……これは一体どういう状況だ？」

ガゼフ・ストロノーフは思わず唾然としてしまう。

控えめに言って城砦にしか見えない正門は固く閉じられ、その門前には「拒馬（移動式の簡易馬防柵）」が敷設され中に『武装しただけの村民』と証するには、本格的過ぎる装備を施した者達が物々しい雰囲気を発しながら機敏に動いていた。

正直に言えば王国軍の正規兵よりもはるかに練度が高そうであり、可能なら部下にスカウトしたいほどだ。

そして、その中央に立つのは「少々露出過多の白い神官服に身を包んだ少女」だった。

「王国戦士団、戦士長」ガゼフ・ストロノーフ「殿とお見受けします。相違ないですか？」

落ち着いた声……大声を出して見るようには見えないが、距離の割には声がやけによく聞こえる。

もしかしたら、声になんらかの魔法をかけてるのかもしれない。

「そうだ！ 私がり・エステイーゼ王国戦士長、ガゼフ・ストロノーフだっ!! 貴殿の名を聞かせてもらえぬか!？」

逆にそのような魔法が使えるわけもないガゼフは、乱暴にならないように注意しながら大声で返すと、

「私はカルネ村神官、エンリ・エモットと申します。ここは王国第三王女ラナー・テイエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ殿下の直轄領、カルネ村です。どのような御用向きでしょうか？」

「近隣の開拓村が、帝国兵と思われる兵の集団に次々と襲われている！ それに対する追撃任務だっ！ カルネ村はどうなっているっ!？」

「ああ、なるほど……それでしたら既にカルネ村は襲撃を受けています」

「なっ!？」

さざりりと返された少女、エンリの言葉に絶句するガゼフ……そして同時にこの物々しい警戒態勢に納得してしまった。

(我々はまた間に合わなかったのか……)

「すまぬ。我々はどうやら間に合わなかったようだ……」

無力感に苛まれそうになるが、だがその少女はにつこり笑いながら謝罪を中断させた。

「ご安心ください。御覧のとおり村は無事です。“賊徒”は全て撃退しました」

まあ、エンリにしてみればそもそも村の自衛は村人が行うもの、自分たちの義務だ。だからこそこの10年、少しずつでも防衛力を可能な限り強化してきた。

良くも悪くも王国への帰属意識が低いカルネ村、戦士長を含めても王国将兵が自分たちを攻めることはあっても守ってくれるなど欠片ほども思っていない。

「はっ?」

エンリの言葉の意味が理解できず、思わずぽかんとするガゼフに少女は笑みを濃くし、

「詳細をお話しましょう。一人しか生き残りはいませんが捕虜も引き渡しますので、どうぞ村の中にお入りください」

だが、少女の目は笑っておらず……

「ああ、門を潜る前に下馬をお願いしますね? 何分、襲撃を受けたばかりですので御配慮ください」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆

来客用、普段は村の出入り商人が馬車馬を繋ぐ厩に軍馬を繋ぎ、徒歩で村の広場に向かったガゼフとその部下達。

本来、この手の対応は村長が行うのが普通だが、どうやらここでは女神官がその役割を担うらしい。

そしてガゼフが見たのは、

「うーむ……これは？」

置かれた板に簧巻きにされ寝転がされている男……その寝顔はひどく、状況に不釣合いなほど安らかだった。

「ただ魔法で眠ってもらってるだけです。彼の名はロンデス・デイ・克蘭プ、今回襲撃してきた騎馬隊の副隊長だそうです。帝国兵に偽装していましたが、れっきとした法国の正規軍人です」

「なんとっ!? エモット殿、それは本当か!?!」

「エンリで結構です。ええ。魔法で確かめましたので。抵抗レジストされた様子もないので間違いないと思いますよ?」

「何故、法国兵がわざわざ帝国兵になりすまし、開拓村を襲っていたんだ……?」

するとエンリはすつと目を細め、

『村々を襲撃すれば、討伐に出てくるだろう』とある存在”を誘引するため』だそうです。戦士長殿、心当たりは?」

「……言いたくはないが、いやと言うほど思い当たるフシがあるな」

ガゼフは考える。

おそらくは自分を誘引し、抹殺するのが目的だろう。

貴族たちの横槍を考えれば、あの者達が一枚噛んでいるのは間違いない。

いや、貴族派の者達は国王派でも最大戦力である自分を疎ましく思っているのは理解できるし、排除したいと考えるのもわかるが……(だが、法国が積極的に動く理由はなんだ? 連中の性質から考えれば、貴族派に金で雇われたというのは考えにくい……)

状況を深く考え、精査したいとこだが……どうやらその時間はガゼフには与えられなかったようだ。

「エンリ」

「あつ、デイバーノックさん。どうしました？」

ふと声の方向を見れば、そこに居たのは魔法詠唱者らしい男だった。

全身を見るからに上質そうなローブを纏い、腕には細緻な細工が施された銀色のガントレットを装着。顔には“泣いてるようにも怒ってるようにも見える奇妙な仮面”をつけていた。

「また伝令が来た。ネムがお前が言うところの“本命”を発見。追尾を開始するそうだ」

そのセリフを聞くなり、エンリは確かに笑った。

それは10代の少女が浮かべるにはあまりに獰猛なそれであった

……

第15話：“漆黒の剣士”

『法国ト思ワレル敵対集団、かるね村ニ接近ス』

再びゴブリン・ライダーの伝令がネムから届くと、エンリは獰猛な笑みを浮かべた。

ガゼフは思う。ラナーといいエンリといい、どうして私は年端もいかぬのに凄みのある笑みが似合う少女と縁ができてしまうのだろうか……

「どうやら戦士長殿の命を狙う本命の部隊が到着したようですね？」

「クッ！」

ガゼフは歯噛みしながら部下達に向き直り、

「全員、出撃準備！」

ガゼフにも戦士長としての矜持がある。

襲撃部隊に結局カルネ村でも追いつけず、事実上の追撃失敗。

加えて今度はおそらく、いや十中八九自分を狙ってきた部隊だと言
うのだ。

これ以上失態を晒すわけには、そして王国の民を巻き込むわけには
いかない。

だが、それは哀しいほどカルネ村の住民達との意識の差があった。

「どこへ行かれるつもりですか？」

ひどく抑揚のない声でエンリが口を開いた。

「無論、村外で刺客たちを迎撃するために……」

『それはお勧めできませんな』

☆☆☆

「それはお勧めできませんな」

ふとバリトンの柔らかい男性の声が響いた……

“カッーン……カッーン……カッーン”

綺麗に整備された村内の石畳の道に足音を響かせ、その男は現れた。

(こ、これは……)

ガゼフが最初に感じたのは、物理的な圧力を感じるほどの強者の気配。

漆黒の重厚なフルプレートフルプレートの鎧に包み、背には堂々たる大剣“イテン”を背負い、左腰にはレイピアのような鋭き細剣“セイコウ”を差し、右腰には投擲用と思われる短剣が複数並んでいた。

真紅のマントを羽織りヘルムはなく、その素顔は自分よりなお黒い髪を短くまとめ、瞳は深いアメジスト色……歳の頃は自分と同じくらいだろうか？

顔立ちは確かに整っているが、美と言うより精悍さが正面に出てしまっている。

ガゼフはそれが“数多の修羅場を潜り抜けてきた、戦う漢の顔”だということが本能的に理解できた。

そして首から下がる、彼には不似合いな安っぽい……だが、妙に見える覚えがあるプレートが実は全ての冒険者の憧れであるアダマンタイト級冒険者のプレートだということに気がついたとき、ガゼフは軽く驚いた。

圧倒的な存在感……その男の登場と同時に空気の質が変わった。

ガゼフとその部下達は呑まれ、村人たちは恭しく頭を下げる。

カルネ村の住人達はよく理解していたのだ。

語義どおり受肉し、生の人の姿で顕現する……ましてや村外の人間の前に姿を現すのであれば、それは村人の信仰と信奉と敬愛を一身に集める“死の神”モモンガ様ではないということ。

なので跪かない。内心で何を思おうと、神で無きその身に跪くことは許されない。

まるで水を打ったように静まり返る空気の中で、

「あ、貴方は……？」

「これは失礼、戦士長殿」

彼は穏やかな光を瞳に宿し、告げる。

「我が名は『ダークウオリアー』。なに、縁あつてカルネ村に住まわせてもらい、故あつてラナー王女より名代を賜つた……ただの冒険者ですよ」

☆☆☆

（ダークウオリアー卿……噂どおりカルネ村に住んで、いやそもそも実在していたのか）

その名は冒険者にさほど明るくないガゼフだつて知っていた。

二人にまつわるエピソードは、まるで現実感のない御伽噺のような物語だった。

ダークウオリアーとその妻『イビルアイ』。

曰く『史上最強の冒険者』。

二人にこれといったチーム名はない。それは一人でアダマンタイト級冒険者1チームに匹敵する能力があり、単体で大抵の事は解決してしまえるからだと伝えられている。

そして他に二つあるアダマンタイト級冒険者チームと違い、王国での活動実績はほぼない。

では、どこで彼らはアダマンタイト級となったのか？

その答えはただ一つ。

“ドラウデIRON・オーリウクルス”女王が率いる『竜王国』……それがダークウオリアーとイビルアイが、冒険者としてその名を轟かせた地の名であった。

第16話：“ビースト・スレイヤーズ”

現れた男の名は、竜王国においては「漆黒の剣聖」と名高い“ダークウオリアー”。

妻といわれる“仮面の大魔導師・イビルアイ”共々、比喻でなく伝説的存在……識者曰く「史上最強の冒険者」。

カルネ村に在住しているとされていたが、それはあくまで信憑性の低い噂話とされていた。そんな超英雄級の存在が、辺境の開拓村に居を構えるはずないと。

いや、それどころか実存を危ぶむ者すら王国では少くない。

何しろ、王国での活動実績がほとんどない……いや、表立って出ている話は皆無と言っていいかもしれない。

では、どこで、あるいはどうやって彼らは冒険者の頂点……アダマシタイト級となったのか？

答えは、“ドラウデIRON・オーリウクルス”女王が率いる『竜王国』だ。

竜王国である以上、その活躍は一つだけだ。

こと竜王国において、特定のチーム名を持たぬ二人は特別な二つ名で呼ばれることとなった。

そう、

“ビースト・スレイヤーズの天敵たる者達”

竜王国史上において、この二つ名を冠するのはこの二人のみだ。

数年前にアダマシタイト級になったセラブレイト率いる竜王国冒険者チーム“クリスタル・ティア”もこの名で呼ばれることはないし、この先もおそらくないだろう。

それほどまでにこの二人は飛び抜けていたのだ。

王国では同じく信憑性は薄いとされているが……この二人は20年以上前から、ブレデター・キャラバンのよう^{ブレデター・キャラバン}にやってくるビーストマンの大規模襲来、いわゆる“肉食獣の大遠征”に合わせてふらりと竜王国にやってき

ては、その度に夥しい数のビーストマンを屠ってきたらしい。

その衰えを知らぬ戦いつぶりから、竜王国ではダークウオリアーとイビルアイの二人は女王と同じく竜の血を引いていると思われる。故に長命なのだ。

他にも「フルーダと同じく長寿の魔法を使った」、「いやいや、不死の呪いをかけられた」だのと諸説ある。

曰く、「ダークウオリアー卿が剣を振るうたびに一太刀で10のビーストマンが切り伏せられ、ただ1度の戦いで1000を超えるビーストマンが切り捨てられた」

曰く、「イビルアイ様が一度魔法を放てば、100を超えるビーストマンが物言わぬ骸となった」

などその逸話が多い。彼らが瞬く間にアダマンタイト級に駆け上がったのも当然だろう。

おそらく、ガゼフもその逸話のいくつかは知っているはずだ。

だからこそ“卿”をつけるのだろう。

だが、何を思ったかは不明だが、二人がカルネ村に移り住んだときるのが約10年前だと言われている。

また、それに際して王国と竜王国との間で政治的取引があったときれるが……それも定かではない。

今のところはつきりしているのは、ダークウオリアーとイビルアイが住み着いて以後のカルネ村では、徴兵対象となる成人男性を中心に徴兵対策と思われる冒険者登録するものが増え、現在は白金級冒険者チーム……同時に全ての国の冒険者組合で見ても史上最大数チームとして知られる“カルネ村修道会”として活動していること。

また、二人が今でも『ビーストマンの間引き』で竜王国に遠征していることなどが知られている。

ただ、ダークウオリアーとイビルアイは専属契約の案件しか受けないと言われている、前出の通り王国での活動実績は表向きはない……それどころか一番近い城塞都市エ・ランテルの冒険者組合でも見た者がいないと言われ、その存在すら懐疑的だった。

ガゼフ自身、ダークウオリアーが王女の名代を務めてるなど初めて

聞いたぐらいだ。

その伝説の片割れが眼前にいる……穏やかな雰囲気の男性だが、その身にまとう空気には隙はなく強者ゆえの風格を醸し出している。

ガゼフは、その男が名乗るダークウオリアーという名を疑うことから出来なかった。

「状況は把握していますが……戦士長殿、現状村外に出られるのは得策ではないでしょう」

「……なぜです？」

「少々報告が気になり、魔道具で確認しました。確かにこの村を目指して走り来る騎馬の団があります」

とダークウオリアーは一呼吸置き、

「私の知識が間違っていないのであれば、今から来るのはスレイン法国の“陽光聖典”……天使の召喚術を使う手合いですな」

そして気圧されたままになっているガゼフの部下を見やり、

「貴殿らの装備では相性が悪すぎる」

ざっぱりと切り捨てた。

「だが！…しかし！…」

「まあ、落ち着いてください」

漆黒の偉丈夫、ダークウオリアーは手で落ち着くように促し、

「ここはラナー王女の直轄領、私はその名代……戦士長殿、何故我々が通常の開拓村にあるまじき高い自衛装備を持っているか、持つことを許されているかわかりますか？」

「……それは」

「私は貴族ではなく、ここに居る者達も皆そうだ。だが、確かに強者側ではある。平民から王国戦士長まで上り詰めた貴殿のようにね」

「つまり、この村……いや、この地の守護を委託されてる、と？」

「ええ」

ダークウオリアーは鷹揚に頷き、

「無論、私が名代なのも含め公にはありませんが。できれば、このことは内密に願います。王国の、特に貴族派の貴族たちに知られば面

倒になります故」

「心得た」

その面倒さに合点がいったガゼフは頷き返した。

「話を続けますが、我々はラナー王女よりこの地を託された守護者。なので今回の一件、我らが受け持ちましょう」

「いや、しかし……」

「戦士長殿、誤解のないように言っておきますが、これは我々の善意ではありません。責務の話をしているのです。貴殿が討伐を命じられたように、我々もこの地を守護せし義務がある」

「だが、卿も言っていただろう？ 相手は法国の誇る六大聖典が一つ、陽光聖典だと」

「それがどうしましたか？」

「なっ!？」

絶句するガゼフに、

「今回の件、どうやら戦士長殿の暗殺を目論む物……であるならば、逆に言えば貴殿以外の兵力は考慮してないでしょう。それに戦士長殿、貴殿の装備は万全とは言いがたいのでは？ 誰による策謀かはあえて気づかないふりをしますが」

無言のガゼフにダークウオリアーは思慮深い瞳で、

「であるならば、我々なら十分に勝機はある。万全ではない戦士長なら楽に屠れると奢る者達に、一体どこに足を踏み入れたのか……それを体に教えるのも一興かと思いませんか？」

「ダークウオリアー卿……」

そして柔らかく微笑み、

「死ぬとわかつていながら、みすみす王の忠臣を死地へ送り出すなど、カルネ村の名折れなのですよ。貴殿はここで死なすには惜しい漢だ」

第17話：『カルネ村の七星剣』

「エンリ、ゼロ、デイバーノック」

「ハッ！」

名を呼ばれた三人は、改めて頭をたれる。

「いけるな？」

シンプルな、そしてそれだけに信頼を置いた言葉に、

「もちろんですっ!!」

三人は嬉しかったのだ。

実力を疑われてるわけじゃない。ダークウォリアーの言葉はあくまで確認だ。

エンリは、満面の笑みを浮かべていた。

いの一番に呼んでもらえる、信頼してもらえる……それがたまらなく嬉しかった。

ゼロは、修行僧らしくいつものクールな表情を崩さない。

だが、グツと一際固く握られた拳が口よりも雄弁に彼の喜びと覚悟を表していた。

デイバーノックは、既に皮膚はなく骨だけとなった顔なので表情はわからない。

しかし、かつて眼球のあった場所に爛々と輝く紅光は一層鮮やかな色を燈し、彼の熱意を体現しているようであった。

生身であろうと骸骨であろうと、この三人の思いは究極的には一つだ。

そう、ただ救済されるのも甘やかされるのも励まされるのも教えを請うのも導かれるのも、他も全部全部やつてもらった。

ただ与えられるだけでは満足できないのだ。

きつと彼は、『お前たちからも俺はたくさんものを貰ってるし、十分すぎるほど返されてるさ』というだろう。

それが嘘偽りのない言葉だということも……そんなものは百も承

知だ！

「だけど仕方がないのだ。どうしようもないのだ。」

「その衝動は止まらない、止められない。だって自分たちは願ってしまっただけで、望んでしまったのだから。」

「継るのでも追いかけるのでもなく、」

「あの偉大なる御方の横に並んでみたい」

と……

「ネムとハムスケには私から《伝言／メッセージ》を入れておいた。あの二人のことだ、介入するタイミングを見誤ることはないだろう」

「強くなればなるほど、見えてくれればくるほど、どれだけ遠くにあるのか理解してしまう大きな背中……」

「メッセージの魔法一つとってもそうだ。」

「キーノはともかく、未だに自分たちは上手く使いこなすことができない。」

「しかし、たった三人で陽光聖典を相手取るのか……？ その三人が猛者だというのはわかるが」

「更に二人、いや正確には一人と一匹が加わる。それでも足りないというのなら……」

「ダークウオリアーはガゼフに振り向き、」

「私が後詰めだ。戦士長殿、これなら問題ないだろう？」

☆☆☆

「心配しないで欲しいな。この四人と一匹は、英雄の領域とやらに片足をつっ込んでる以上だ。私が名誉にかけて保証しよう」

「それを聞いていた三人の反応は……まあ、言うまでもないだろう。」

「ダークウオリアーとイビルアイ、いやモモンガとキーノという規格外の二人を除けば、レベル30前後かそれ以上にあるのは、上記の四人と一匹に加えて現在村にいないブレイン・アングラウスとグ……人呼んで“カルネ村七星剣”だ。」

勿論、このネーミングはモモンガである。

実は名づけられた本人達も何気に気に入ってる名は、伊達でも酔狂でも名前倒れでもない。

近年、十分な実力があると判断された者達から順次、毎年の“ブレデター・キャラバン肉食獣の大遠征”の時期になると、ビーストマン対策にローテーションで竜王国への同行が許されているのだ。

無論、最年少のネムも例外ではない。

基本、主戦力のモモンガかキーンが引率で、7人中2〜3人がチームを組んで転移魔法で竜王国に渡り、入れ替わり立ち代り対処に当たる。

また、本当に敵が大規模だった場合は全員で対処する場合もあるが……それでも最低でも総数万単位になるビーストマンの遠征に対しては絶対的な少数といえる。

しかし、その絶望的な数の差に対しても、いやそもそも普通の人間の10倍の難度を誇るビーストマンに対しても彼らは彼女らは臆することなく、こうして生き残っている。

それを支えたのは、いや土台になってるのは実力だが、精神的な支柱はモモンガやキーンに対する信頼であり、信仰であり、崇拜であり、憧憬であり……それらの想いが同じ戦場で戦うたびに強くなり混ぜ合わさり、語弊を恐れず言うなら生まれた精神的混合物“狂信”こそが、その源だった。

そのような修羅場を越えてきた“カルネ村七星剣”にとり、この程度の人数差がなんだというのだろうか？

天使使いの法国精兵？ それがどうした。こちらを食料と看做してないだけマシだ。

二足歩行の獣が群れを成して腹を満たすために人を喰らう……そのような原初の恐怖が想起される地獄絵図に比べれば、想定される敵など優しい物だ。

「では、諸君……」

元来、身内には過保護気味な筈のダークウォリアー、いやモモンガは胸を張り告げる。

「遠慮はいらぬ。存分に暴れてくるがいい」

第18話：“幕間・ビーストハントの舞台裏、あるいは はダークウオリアー誕生秘話”

いきなりではあるが……ここで少し昔話をしよう。

モモンガとキーノが何故、カルネ村に定住する10年以上前からダークウオリアーとイビルアイという別の存在に扮してまで竜王国に出向いていたのか？

コネ作りや旅の資金繰りとかも色々あったが、真の目的は“レベル^{上げ}レベリング”の為だ。

ここで当然の疑問だが、ユグドラシル的に言えばLv100……カインストまで大分余地があったキーノはともかく、元カインストプレイヤーだったモモンガに果たしてレベリングの余地があったのか？ということだ。

その答え、いや原因はモモンガがこの世界に漂着してから得た能力、“完全なる人化”の副作用だ。

これはそもそも、とある“トンデモアイテム”に端を発するのだが……だが、これを語るにはしばし時が必要だろう。

なぜなら、これにはモモンガがこの世界で出来た“最初の友人達”、鈴木悟の名を捨て「この世界で、この世界の住人として生きる意味」を覚えてくれた友人との物語があるのだから。

だが、この“完全なる人化”によりモモンガの身に起きたことは今でも説明できよう。

人化により、確かにモモンガは幻術で見た目を誤魔化すのではなく、ちゃんと受肉し人間となれた。

食う飲む寝る、そして女を（その気があるなら男も）抱ける……もしかしたら、子供すらも作れるかもしれない。何しろ排泄以外は未使用で消え去った“分身”が生えてきたのだから。

だが、お骨様として生きるときに無くしてしまった物があるよう

に、受肉し人化することで無くしてしまった物があつた。

それが“種族Lv”だ。

モモンガの100Lvビルドの内訳は、種族Lvが40で職業Lvが60だった。

つまり人間になるため40Lvを丸々失い、レベル的には出会った頃のキーノと大差なくなつてしまつていた。

これにはモモンガは非常に焦つたらしいが……ふと悪いことばかりではないと思ひ直した。

種族Lvが失うと同時に種族特性も失われたが、「もしかしてまた別の自分にリビルドできるチャンスかもしれない」と一念発起。

たっち・みーを筆頭にかつて憧れたアインズ・ウール・ゴウンの前衛職の猛者達を目指すことに決めたのだ。

最初の友人達が繋いだ縁で、モモンガはかつての冒険は過去となつたキーノと巡り合い、そして文字通り「自分を、いや自分たちを再構築する旅」に出た。

実はビーストマンがまつわるエピソードは、所詮その一篇に過ぎない。

即位前のランポツサとの出会いもその一つだし、また同時に友人から頼まれた「ユグドラシル由来の物品の調査と探索」も同時にこなした。芳しくはなかったが、結果が全くなかつたわけじゃない。

そして、かつての憧れに手を伸ばすため、モモンガはある縛りを自分に課した。

それは“魔法職としての自分を封印”すること。実はモモンガ、種族が変わつたにも関わらず総合Lvに対応はしてしまふが、アンデツドしか使えないはずの魔法も普通に使えていたのだ。

だが、自分を鍛えなおすことのためにそれをあえて封印、魔法の使用を最低限にすることがダークウオリアーの誕生へと連結された。

☆☆☆

その旅路は、決して愛する妻の胸のように平坦な物ではなかつた。

モモンガは、自分になかった強さを貪欲に求めた。時には『能力を下げる代わりに獲得経験値をあげる首輪』^{チョーカー}まで装着して、だ。

人間種しか取れないものも含めた多くの前衛職Lvを取り、また武技の数々さえも覚えた。

多くの場所を巡り、多くのものと出会い、多くの強者と戦い……そして多くの別れを経験した。

そして人化したモモンガは、人が誰でもそうであるように歳を重ねた。

本来、それは人の身では長すぎる旅路だったが、幸いモモンガを受肉させたトンデモアイテムは指輪の形をしており、それを外すことでまた本来のスケルトン・ボディに戻ることができ、種族Lvも回復した。

指輪を外したら経過した肉体の老化がリセットされ、“アンデツドの時間”が戻ってくることを知ったとき、キーンは狂喜した。

もう自分は一人では生きられないのがわかっていたから。

暖かさに慣れすぎ、200年以上前に心臓と一緒に止まったはずの胸のときめきに身を任せるのは、心地よすぎたのだから。

人間とオーバード、言い換えれば生と死の狭間を揺り動く稀有な生き様は、様々な変化をモモンガ自身に齎せた。

終末の世界で純粋な人間と生きていた時間より遥かに長い時をこの世界で生きた……この世界で人として生きた経験と記憶の蓄積が、骨になったからと言って無くなる訳はない。

生と死を繰り返した内面は円熟し、そして人外としても新たな変化……いや進化が起きたようだ。

だが、生憎と今はそれを語る時ではない。

ただ言えるのは虚構の世界から消えぬまま零れ落ち、この世界に漂着したときのモモンガと今のモモンガは同じではないと。

変化のない、死者であるがゆえに不死のアンデツドの身が本質であろうとも、モモンガは生きているのだから。

生きているということは、否応なく変化し続けるということだ。

終生の伴侶となるだろうキーノとの長い旅路を終え、カルネ村と言
う安住の地に落ち着いた今でもきつと、彼は愛すべき人々の中で日々
変化を続けているのだろう。

☆☆☆

ダークウオリアー（モモンガ）

種族Lvを人化で喪失したため、この世界にいて新たに入手した
職業Lv

ウオリアー：Lv10

ストライカー：Lv5

エアライダー：Lv3

マーセナリー：Lv2

ソードマスター：Lv5

ソーサルナイト：Lv5

クラフトマン：Lv5

聖騎士パラディン：Lv4

従来の職業Lvと合わせ総合Lv99。実はオーバーロード時（Lv100）と比べLvだけ弱体化している。逆に言えばまだわずかに“伸びしろ”がある。

備考

種族Lvとのコンバート扱いで、お骨オーバーロード様状態の時は上記の39Lv分の職業レベルはオミットされる（だが習得した武技はそのまま使える）。

本来、格闘家が持ちやすいストライカーを獲得したのは無手でも多く倒したからと思われる。

エアライダーは空中戦の経験から、マーセナリーは傭兵家業（竜王国で冒険者登録する前は傭兵として行動することがままあった）をこなしていたからだろうと推察。ソーサルナイトは“魔法騎士”の意。

クラフトマンは、旅の途中で実験がてら色々アイテムをいじつてたからだろうか？

闘技場へや武術大会に出てはいないためデュエリストやチャンピオン、また軍の指揮は取ってないためコマンダーやジェネラルはとれていない。

聖騎士は……憧れと、命を奪うと同時にそれだけ多くの命を自らの剣で救ってきた証。

『ですよ？ たっちさん』

また、本人の性格にあまり影響は出てない気もするが、カルマ値も中立く善になってる可能性アリ。

ダークウォリアーなんて暗黒騎士っぽい名を名乗ってるのに、行動から聖騎士が取れてしまっているのが、このシリーズのモモンガ様。

第19話：“中間管理職の悲哀をニグンさんに感じるのは間違ってるだろうか？”

さてこの世界ではモモンガとキーノ、あるいはダークウオリアーとイビルアイ、そして今はその弟子たちも加わり毎年ビーストマンの間引きを行っているようだが……

原作を正史とするなら、本来ならそれを請け負う存在がいたはずだ。

そう、“ニグン・グリッド・ルーイン”率いる『陽光聖典』だ。

モモンガ、いやダークウオリアー一党が竜王国の専属となつている現状、ビーストマンとの戦いに陽光聖典が投入されることはない。

それどころか、その大元である竜王国とスレイン法国の関係は、露骨な対立関係や険悪ではない物の、お世辞にも良好あるいは友好的とはいえない。

基本、法国は“人類のみを救済”する方針であり、竜王国王女ドラウディロン・オーリウクルスは、『存在自体が面白くない、だが強いゆえに手が出しづらい相手』であるドラゴン・ロード、1／8とはいえそのドラゴン・ロードの血を引く女だ。

そして食おうと攻めてくるビーストマンも亜人……

法国にとって所詮、竜の庇護下であることをよしとする人の誇りを捨てた救う価値もない人類と、野蛮で下賤な亜人との戦いだ。干渉する意味も無い。

それに小癩なのは、ドラウディロンが雇う相手だ。どうも何かと対立するアーグランド評議国が推挙したと噂される二人、ダークウオリアーとイビルアイだ。

活動期間の割りに老いた様子がないのでおそらく不老か長命の亜人、あるいはドラウディロンと同じく竜の血を引くと思われる人間と法国は判断していた。

法国が人類擁護／亜人排斥を国是としてる以上、明確な敵対関係にある評議国と竜王国の繋がりが強くなるのは面白くない。

確かに国家としては評議国は竜王国に不干渉のようだが、最近はずいぶん引き連れ竜王国に乗り込んでるらしい二人にはあの忌々しい“白鎧”の息がかかっているのは間違いない筈だ。

まあ、法国・竜王国・評議国のややこしい国家関係は一先ず置いておくとしても、ビーストマンと血で血を洗う闘争を繰り広げていないニグン達陽光聖典が、原作と比べ難度や練度が大きく劣ってるかと言えば……確かに劣っているかもしれないが、それも小さなものだろう。

法国には(陽光聖典で勝てる程度の)投入すべき戦場が多くあり、実際某孕ませ王が幅を利かせるエルフとの戦争など様々な戦いに参加していた。

人的消耗がビーストマンとの戦闘よりは少ないと思われるため、難度はともかく練度ではむしろ勝ってるかもしれないくらいだ。

「嫌な天気だ……」

ガゼフ・ストロノーフとその一党を、自分を含め騎乗した部下と共に追いかけるニグン・グリッド・ルーインは、急に曇りだした空を睨むように独りごちた。

吹き付ける風が急に温度を下げたように感じ、寒さに頬が引きつると同時ある違和感……かつてとあるアダマンタイト級女冒険者につけられた傷が疼き、同時に湧き上がる不快な記憶に顔をしかめた。

(しかもよりによってカルネ村に入ったか……)

ニグンの正直な心情を端的に述べれば、『ベリユース地獄に堕ちろ!!』だ。

実はニグン、作戦発動前に「名目上は隊長である」ベリユースと一度だけ顔合わせをしていた。

自分の地位を知っていたようで、妙に媚びてきたが……そこには不愉快さしか残らず、ニグンに言わせれば「唾棄すべき小物。生きてい

ても役に立たない俗物」だった。

陽光聖典隊長という地位にあるせいで、ニグンはある程度は状況が見えていた。

あのような小物の俗物が名目上は先遣隊の隊長を任される……一見すると、くに法国は今回の作戦を重要視してない様にも見受けられる。だが、そうじゃない。

上層部に便利屋扱いされてる傾向はあるものの……自分達は六色聖典の一つ、天使を使役し集団戦を得意とする陽光聖典だ。

投入された理由はガゼフ・ストロノーフを確実に捕殺するためだろう。

つまり、

(先遣隊は捨て駒……)

王国辺境の村々を襲う帝国兵に偽装した先遣隊……それを追うガゼフ達戦士団が追いつき、先遣隊と交戦してる間隙について自分達は包囲し、一気呵成に殲滅する。

そういうシナリオだった。

そして今回、上層部が手を結んだ醜悪な王国の貴族派貴族は、こう国王に報告するのだろう。

『ガゼフ・ストロノーフ、越境した帝国兵と交戦、討ち死』と。

その時、証拠として提出されるのは“帝国の鎧を纏った兵士”などで何の問題もならない。

もし生き残っているなら、軍人としての覚悟もなくやたらと口が軽そうなベリユースは口封じに始末する予定だったが……

(あの阿呆がっ!!)

そんな悠長な事を考えず、会った時になんらかの理由をつけてさっさと息の根を止めておくべきだったとニグンは後悔していた。

『よりによってカルネ村を襲撃だどっ!?!』

ロンデスが気を利かせてベリユースがカルネ村襲撃を決めた直後にこっさり放った伝令からそれを聞いたとき、ニグンは素直に激昂し

た。

なぜ、襲撃リストに記載されてない村、しかもカルネ村を襲うのかと。

カルネ村、通り一遍の知識でも「城塞都市エ・ランテルの小型版のような、開拓村とは名ばかりの砦」、「村民のかなりの数が徴兵対策で冒険者となっている。名ばかりの冒険者ではなく、きちんと依頼をこなし白金級」……

そして、

(ダークウォリアーとイビルアイが住居としている村……)

あの竜の血を引くと噂され、毎年ビーストマンの屍の山を築いてると評判の恐るべき強者。

「竜王国までの移動時間を考えれば、村に常駐してる可能性は低いが……」

できれば、それが杞憂であってほしいと自分の信奉する六大神、光の神に祈った。

ニグンの願いは一部叶った。

ベリユースは望んだ通りにもうこの世にはいない。いや、ロンデスを除く先遣隊の全員が既にこの世から消えていた。

ニグンは知らなかった。

ダークウォリアーとイビルアイが、その弟子達を引き連れ『一瞬で竜王国とカルネ村とを往復できる手段』を持っていることに。

そしてニグンの最大の不運は……カルネ村で信奉される神は、光の神などではなかったことだ。

闇よりなお深き深遠たる死の神が治めし地に、光の加護が届くことはない……

第20話：“舌戦 あるいは『口は災いの元』”

ニグン・グリッド・ルーインは善良な男だった。

少なくともスレイン法国基準ではそういうことになっている。敬虔な信徒であり、人類のために敵である亜人やモンスターと死を恐れず勇敢に戦い、慈悲なく排除できる鋼鉄の意志もあった。

ただ、時折ひどく“間の悪い”男でもあった。

(なんだ……?)

周囲に何の変哲もない草地の丘陵地帯……このなだらかな丘を越えれば、カルネ村が見えてくるはずだった。

馬で駆け抜けるなら、ほんの僅かな距離……だが、

(何者だ?)

前方に三人の見覚えのない者達が立っていた。

真ん中に立つ一人は、法国のそれに比べやや露出が強い白い神官服に七色に鈍く輝く不思議なワンドを携えた少女。

左に立つ一人は、無骨なガントレットとレガースを装着した筋骨隆々とした禿頭のモンクらしき男。

最後の右に立つ一人は、漆黒のローブに怒ってるような泣いてるような奇妙な仮面をつけた男……マジックキャスターだろうか？

「全員、馬を止め、天使を展開せよ!!」

ニグンは一度部下達の行軍を止めさせ、最大限の警戒を促す。勿論、間違っても下馬はさせない。

あれは油断していい相手ではない……そう直感が告げていた。

「スレイン法国六色聖典が一つ、陽光聖典とその隊長であるニグン・グリッド・ルーイン殿とお見受けしますが、相違ありませんか？」

神官服の少女がそう問いかけてくる。

大声を上げてるようには見えないが、やけに鮮明に声が聞こえることを考えるとなんらかの魔法を使ってるのだろう。

それに自分は精神系の魔法に対抗できるアイテムを授かってる。問題ない筈だ。

「ああつ！ 私がニグンだ！ 娘、何用だつ!?!」

と必然的にこちらは大声で返す羽目になる。

とはいえ、口調は彼にしては割と丁寧だ。少なくとも亜人相手のそれとは比べ物にならない。

相手が同じ人間ということもあるし、また神官服を着ているというのも大きい。

話に聞けば、カルネ村は四大神しか認めぬ王国の異教徒どもには珍しい“死の神”、つまりはスルシャーナ様を信仰しているとされている。

なので、あまり悪印象は抱けないのだ。

無論、ニグンはカルネ村で崇められる神がスルシャーナとは別人、いや“別神”^{べっじん}であることなど想像もつかない。

「我が名はエンリ・エモット。この先にあるカルネ村で、死の神様に仕える神官をしています」

自己紹介を終えたエンリは、

「ルーイン殿、何故名高きルーイン殿と陽光聖典が越境したのかは問いませんし、私たちにはその権限もありません。ですが、ここから先はラナー・テイエル・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ王国第三王女の私領です。『帝国と違い』明確な敵国ではないと言っても他国である法国の、それも戦闘部隊の立ち入りは御遠慮いただきたいのですが」

凜とした声で告げる。

腐つてもスレイン法国は六大神を信奉する宗教国家だ。神官とは敬意を払うべき職業であり、またニグンは意図的に勘違いさせられているが……スレイン法国でも信奉される死の神の神官と明言されれば、正直躊躇いもあった。

だが、ニグンはふと気になる言い回しを感じる。

(何故、この娘は“帝国”を強調した?)

「神官、つかぬ事を聞くが……ベリユースと言う名に心当たりはあるか?」

露骨過ぎるカマかけだが、

「ええ、もちろん。”帝国の甲冑を着たベリユースなる人物”なら心当たりはあります。その名を何故名高き法国特殊部隊の隊長が知っているかは、詮索しないことにしますね?」

エンリはあえてそこに乗ったようだ。

(なるほど……ベリユースは村を襲い、既に返り討ちにあつた。それに飽き足らず自分たちが法国の人間だと口を割ったか……ならば娘が我々のことを知つていても、待ち構えていても不思議ではないか) ニグンは表情に出さぬよう苦労しながら、余計な村を襲った挙句に秘密を漏らしたベリユースに腸を煮えくり返させた。

実際にしゃべったのはロンデスだが、ニグンは知る由もない。

(そして、この娘はベリユースが法国の人間だと知った上で、“帝国の人間として始末”をつけていいと言う事か……無論、我々がここで大人しく帰るならだろうが)

どうやら思ったよりも頭の回る娘のようだ。

だが、ここで、これだけで引くわけにはいかぬ事情がある。

「もう一つ聞きたいことがあるっ!」

「なんなりと」

「王国戦士長、ガゼフ・ストロノーフは知らぬかつ!」

すると娘はにつこりと微笑み、

「存じておりますよ? 今は村、カルネ村で馬を休めていただいています。どうやら、かなりの強行軍でお疲れの様子でしたので」

ニグンは絶句する。

この娘、我々が陽光聖典だと分っているのなら、おおよその目的は推論できてるだろう。

なのにガゼフは村にいと平然と言い切ったのだ。

「神官、悪いことは言わぬ。ガゼフとその一党を村の外へ出せっ!」

「そして貴方達に討たれると？」

「そうだっ!! 大人しくガゼフを差し出すならば、我らも村を焼かずに済むのだっ!!」

ニグンにしてみれば、「村を焼かないでおいてやる」というのは最大限の譲歩だ。

要するに、「ガゼフとその一党を差し出すなら、村には手出ししない」という意味で言ったようなのだが……

ただ、亜人ばかり相手にしていたせいかすっかり忘れてるようだが、

「はっ? 今、なんと言いました……?」

物には言い方と言うものがあるのだ。

特に人間相手にはそれが重要であることを、ニグン・グリッド・ルーインは完全に失念していた。

“口は災いの元”とはよくぞ言ったものである。

人類の歴史において、たった一つの“失言”の為に政治的、社会的あるいは物理的に落命した者が多いということを、ニグンはその身をもって文字通り痛感することになる……

第21話：…着火!!…

「今、貴方は言いましたよね？　」ガゼフ殿を差し出せば、村は焼かないで置いてやる」と。それはつまり、ガゼフ殿を差し出さないなら、村を焼くという意味ですか？」

エンリにとり、『実際に陽光聖典ごときが村を焼けるかどうか』が問題ではなかった。

上から目線の発言も別にそこまで気にしない。

何しろ、そのセリフだけで万死に値するのだから。

「そ、そうだ！　我らとて遊びで来てるのではぬあい！　ガゼフの首を取らず帰れるものかっ!!」

エンリを左右から挟むように立っていたゼロとデイバーノックは、身長差の関係からエンリの頭上で顔を見合わせた。

そして二人は悟った。「あつ、こりゃアカン奴だ」と……

この娘、時折過激だったり常識を置き忘れていたりするような部分もあるが、普段（非戦闘時とも言う）は割と温厚だ。多分。

だが、その中身はとんでもない激情家で、特に付き合いが自分たちより長いせいかモモンガ、キーノ、カルネ村関連の失言での心理的導火線の着火率の高さとその短さには定評がある。

エンリの体から濛々と立ち込める“ソレ”は、どことなくダークウォリアー……否。彼女が主神と崇めるモモンガが得意とする“絶望のオーラ”に似ていた。

流石は自他共に認める死の神に仕えし女神官と言うところか？

「フフツ……フフツ……そうですか。死の神様が安住の地と定めたカルネ村を焼くと言いますか……」

彼女は奇妙な笑い声を納めるとエンリはカツと刮目し、

「交

渉

決

裂！

Ordina la canna che mostropa pace ed on

o

！ 目覚めなさい、「蓮の杖」!!」

そのワンドを掲げた。

“蓮の杖”、あるいは“ロータスワンド”。

七色に鈍く輝く不思議な金属で出来た、先端に花の蕾のような装飾が施された杖だった。

だが、エンリの声と同時に蓮の杖は、その名の由来となった本来の姿を取り戻す。

金属で出来ているはずの蕾がほころび、見事な満開の蓮の花を咲かせると同時に杖全体を12色の色に激しく輝かせた！

「《マス・ターゲティング／集団標的》、《マキシマイズ・マジック／魔法最強化》！ 咲き誇れ《ロータス・フェイズバレット／蓮の不可視弾》!!」

☆☆☆

ニグンは眼前で起きた現象を理解できずにいた。

エンリが交渉決裂を宣言すると同時に杖が輝きだし、その美しさに一瞬目を奪われた。

だが、その直後……

「なっ?」

俄かには信じられない不可思議な現象、召喚した全ての天使が同時に碎け散るという異常事態が起きた。

何が起こったのか、何をされたのか……理解が追いつかない。辛うじてわかるのは「エンリが何かをやった」ことくらいか？

隊員が呼び出した特殊能力を持たない“炎の上位天使（アークエンジェル・フレイム）”ならまだしも、自分が召喚したより上位の天使“監視の権天使（プリンシパリティ・オブザベイション）”までも一撃で碎け散ったのだ。

付け加えるなら、“監視の権天使”は味方の防御力を引き上げる特殊能力を持っている上、ニグン自身も『自ら召喚した天使を強化する固有異能』を持っているのにも関わらずに……

ニグンは知らない。

多目標同時ロックオンで放たれた、その最強化された不可視／無属性の空間座標魔力攻撃は“不可視の魔力弾”を叩きこむのではなく“破壊術式を対象に直接投射する”タイプ、蓮の杖を触媒とした物理的な防御は事実上不可能な特殊攻撃魔法であった。

そしてその天使一体につき与えられた威力は、モモンガが最強化と三重化をかけた《マジック・アロー／魔法の矢》に匹敵する。

そしてエンリは意図的に天使だけを狙った。

初撃で全てを終わらすのは惜しいと思ったから。

それになんだかんだと言いながら、彼女は妹思いの“良い姉”なのだ。

だが、ニグンはそれらの答えや事情を知ることはないだろう。

なぜなら、

『武技』^鋼断^裂だんれつぱ^破!!』

彼に残された時間はあまりに短かったのだから。

☆☆☆

その光景を第三者的な視点から見ればこうなるだろう。

何の前触れもなく陽光聖典の右斜め後方の草原がザザツとざわめき、巨大な“何か”が砲弾のような勢いで飛び出した。

その背に乗る小さな影から、

『武技』^鋼断^裂だんれつぱ^破!!』

並の人間では反応できない速度で放たれた斧戟の一振り……

“斬っ!!”

武技により威力を高められ宣言通り鋼塊すら断ち裂く一撃は、ニグンを馬ごと縦に切り分けたのだった。

“ドンッ!”

「征^ゆくで^ぎざるよー! 《能力向上》《要塞》《不落要塞》《剛撃》!!」

ニグンを屠った勢いを殺さず四肢でしっかり大地を踏みしめる赤い具足を纏った魔獣と、

「ネムだつて負けないよお〜♪ 《のーりよくこーじよー》
《そくおーはんしゃ》《りゅーすいかそく》《りょーいき》!!」

きわどいあるいはあざといデザインのリザービスチェ・ライトアーマーに身を包み、対の浮遊十文字盾を従え大きな戟を握る幼女は、

「武技 《尾銳鞭斬劍》!!」

「武技 《えんざんれつぷーせん》!!」

蓄えた凶悪な威力を開放する!!

“ ビュオン!! ”

“ ヒュバン!! ”

刹那、どこぞの空間斬という大袈裟な二つ名持ちの使うウルミのようでありながら、その実10倍以上は軽く威力がある鞭の柔軟性と剣の鋭さと硬さを併せ持たせたハムスケの尻尾が5名の隊員の胴を防御具ごと寸断し、ネムの人間の動体視力では捉えられぬほどまで加速された蒼天画戟の刃が間合いにいた3人の首を一薙ぎで跳ね飛ばした!!

隊長が既にこの世にいないことを自覚できぬまま棒立ちする陽光聖典に、

「カルネ村七星剣」が一匹、「聖獣」ハムスケ!」

「同じく」カルネ村七星剣」が一人、ネム・「狂戦士」・エモット!!」

「ここに推参っ!!」

盛大にかつ華々しく見得を切るっ!!

第22話：“一騎当千”

不可視化を切った最初の一太刀でニグンを屠り、着地と同時に数々の武技を発動。

エンリの多目標ロックオンの空間座標攻撃で、天使による武力展開を一時的に失っていた陽光聖典相手に赤い具足姿のハムスケは変化する蒼天画戟の高速横薙ぎで間合いにいた3名に首を跳ね飛ばしていた。

「カルネ村七星剣」が一匹、「聖獣」ハムスケ！」

「同じく」カルネ村七星剣」が一人、ネム・ジ・ベルセルク「狂戦士」・エモット!!」

「ここに推参っ!!」

啞然とする陽光聖典相手に華々しく見得を切る一人と一匹!

そう、このコンビが野生の勘に磨きをかけた元「森の賢王」と、この攻勢ポイントを見極める戦術眼と天性の直感なら姉すら凌ぐバーサークな妹が、『エンリに天使の悉くを一撃で落とされ呆然とする』なんて好機を見逃すはずがなかった。

お供のゴブリン・ライダーは突撃させるには少々危険なので周囲の警戒に走らせ、本当の単騎突撃だ。

なら、さらに動揺と混乱と殺戮を広げるため奇襲にて真っ先に大将の首級みしるしをあげるのも必定であろう。

ネムは戟を片手に握り直しながらサムズアップとウインクを決め、「ゼロお兄ちゃん、デイブお兄ちゃん、もたもたしてるとネムとハムスケが全部食べちゃうよ♪」

それは過言ではない。

初太刀で馬ごとニグンを縦に真っ二つにし、その後計8人をこの世から解放してるのだ。

放って置けばこのコンビだけで全てが終わってしまう。

ややもすると挑発的な言葉を向けられたゼロとデイバーノックは

顔を見合わせるが……

「なあ、デイバーノック……ここは大将首を上げた我らが七星剣のマスケットに、このまま花を持たせてやるのが大人の対応というものだろうが……」

「つまらんことを言うな、友よ。我らは偉大なるマスター師匠に比べれば未熟、頭に卵の殻をつけたままの雛だ。であるならば、雛には雛らしい態度と言うものがある」

「そうだな。その通りだ。我らは未だ未熟。ならば……《能力向上》《能力超向上》《鉄壁》！ 目覚めよ！ 足の豹（パンサー）、背中の隼（ファルコン）、腕の犀（ライノセラス）!!」

「竜よ！ その吐息で敵を焼き尽くせ！ 《ドラゴン・ライトニング／龍雷》!!」

「そこなくつちやネ！」

「で、ごぎるなっ！」

もはやその顛末は語る必要すらないだろう。

ただ、エンリの……

『みんな！ 斃たおすのはいいけど、馬はなるべく生かしておいてくださいいね〜〜っ!!』

という戦場とは思えぬ暢気な声が妙に印象に残った。

ただし、ゼロとデイバーノックは気がついていない。

落ち着いてるように見えて、モモンガもキーノも存外大人気ないということを。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆

「あれ？ イビルアイ様、どうしたんですか？」

陽光聖典を殲滅し終えるタイミングをまるで見ていたように魔法で転移してきたのは、赤いマントに仮面がトレードマークの小柄な少女、かつて“国墮とし”と恐れられた250歳越えの吸血姫にして、共に過ごした長き旅路の間にモモンガの女性のストライクゾーンを思い切り下方修正し、見事に正妻の座を射止めた張本人……イビルアイことキーノ・ファスリス・インベルン嬢であった。

ん？ 意外と策略家？ いや、残念ながら普段のモモンガの周りでも今にも猫耳と尻尾生やしてコタツでまどろむ猫っぽくなりそうなくらいふにやけてる姿を見てる限り、その線は薄いだろう。

ちなみに仮面装着時は村の外だろうと内だろうと、村人以外が居ようと居まいと基本“イビルアイ”で通すのが掟だ。

カルネ村の住人は、ホントによく訓練された村民だと思われる。もつとも村内をうろちよろするとき仮面をつけてるのは、村外の人間が村に居るときくらいだが。

「なに。お前達だけじゃ屍を運ぶのも大変だろうと思ってるな」

と虚空から次々と取り出したのは、マジックアイテムの“シユラウド・オヴ・スリープ安眠の屍衣”だった。

死体の維持だけでなく蘇生の時に色々の特典がつく中々の逸品だ。どうでもいいが……虚空から取り出すとは、モモンガから何かアイテムを貰ったのだろうか？ いや、原作より大幅にLvが上昇してるキーノのことだ。もしかしたらその手の魔法を自己開発したのかもしれない。

「イビルアイ様、わざわざ敵にそんなアイテムを？」

「ああ。モ……ここほん。ダークウオリアーからの指示でな。どうやら何か策があるみたいだぞ？」

どうやらモモンガと言いかけたようだ。

イビルアイが来ている事に気がついたららしいネムが、蒼天画戟ごと右手をぶんぶん振って駆け寄ってくる。もう片手に回収したらしい血塗れの水晶のような物を持ちながら。

☆☆☆

ネム・エモット

種族：(これでも一応) 人間

二つ名：狂戦士ジ・ベルセルク

職業Lv

ファイター：Lv5

ウエポンマスター(ジーニアス)：Lv3

ハルバーディア(ジーニアス)：Lv5

ライダー：Lv5

アーチャー：Lv3

サージェント：Lv1

コマンダー：Lv1

テイマー：Lv2

ベルセルク(ジーニアス)：Lv4

総合Lv29

固有異能：Lvとは無関係にあらゆる武技をマスターでき、また同時発動可能な精神力上限が無くなる。

備考

戦闘特化型クラスの集中習得に加え、ジーニアスを三つ持つ紛うことなき“戦闘の天才”あるいは“早熟の天才”。これに本人の在り方にびったりなタレントまで持つてるのだから手がつけれない。

ウエポンマスターは技能的には『苦手な武器がなくなる(全ての武器に適性がつく)』という苦手というマイナスを補正するものだが、

ジーニアスの場合は『全ての武器を使いこなせるようになる』というマイナスからプラスに転じるものと推定。

また、得意武器（愛用の蒼天画戟はハルバードの一種と解釈）やよく使う武器には個別にクラスLvがついているようだ。

作中にまだ表記は少ないが、哨戒任務パトロールでハムスケによく跨つてると、また途中で騎射で村への土産にする獲物をしとめてる事からライダーとアーチャーにクラスがついたようだ。

サージエントとコマンドーは、まださほど経験はないがゴブリン・ライダーを引き連れてるからだろうか？（姉は最初からゴブリン軍団を与えられ、村人を指揮してるためサージエントをとらず最初からコマンドーで、すぐにジエネラルを習得）

テイマーが付いたのは、ほぼほぼハムスケと行動を共にしているからだろう。

最大の特徴で、二つ名の由来にもなってるベルセルクは”とてもレアクラス（モモンガ談）”で、本来なら『敵の血を浴びるとボーナスがつく』という物だったが、能力変化をおこしており、「敵の血を浴びると感情状態テンションが急上昇する」ということを基点に、テンション次第で身体能力が全体的に引きあがる（テンションが高いほど効果大。ジーニアスはその強化度がより高くなる）と言うものになっていた。

ただしバッドステータスも同時に発生しており、狂乱状態に陥りやすくなると同時にカルマ値が強化値に反比例して下がるようだ。

単体ならともかく、ハムスケ騎乗の場合は相乗効果でモモンガとキーノを除く、カルネ村最強戦力と言える。

るほどな」

全員の帰還をカルネ村で待っていたモモンガ、いやダークウオリアーはどうやらネムがニグンから回収したらしい水晶を魔法で鑑定していた。

「コイツは『魔封じの水晶』というアイテムさ。一種のスペル・コンデンサー、名前の通り魔法を励起状態で封じ込められるんだが……法
国も随分と勿体無い使い方をする。どうせ入れるならもつと上位の魔法を込めればいいものを」

「ん？ 何が入ってるんだ？」

問いかける愛妻の頭を撫でながらモモンガは苦笑し、

「込められた魔法自体は『サモン・エンジェル・7th』／第7位階天使召喚』、『威光の主天使（ドミニオン・オーソリテイ）』を召喚する物
だな」

「ドミニオン・オーソリテイ？ それは前にカツツエ平原で数任せで召喚したあれか？」

真面目な口調で返しているが、抵抗するそぶりもないまま撫で繰られまくってるイビルアイ様である。

きつと仮面の下は緩みきつてるに違いない。

イビルアイは仮面に感謝すべきだろう。何をしゃべっても胸と同じように平坦な声になる変声機能込みで。

「ああ。あの『首なしの天使』だ。流星にあの時は途中から面倒になっ
てね」

と以前、バハルス帝国の皇帝直々依頼で行ったアンデッドの間引きを思い出すダークウオリアー。

実はその任務はアンダーカバーで受けた物であり、本命の任務はカツツエ平原にある朽ち果てた城跡、『遺跡』の調査だった。

その折、押し寄せるアンデッドの群れを捌きながら調査することが面倒になったダークウオリアーはドミニオン・オーソリテイを召喚し相手をさせたことがある。

それも12体……ニグンはあの世とやらで泣いていいと思う。

ただ、隠し部屋から貴重な遺失物複数を回収した後に、『あれ？ ド

ミニオン1ダース召喚するくらいなら《天軍降臨／パンテオン》使った方が早かったんじゃないかね?』と思っただが後の祭りだ。

最もこれは人の身でとれた職業“パラディン聖騎士”とソーサルナイトの影響とコンバートされた本来の魔法職の相乗効果で、天使召喚魔法が一応得意となったので試してみたかったというのもあったようだ。

おそら“門番の智天使（ケルビム・ゲートキーパー）”以上の上位天使召喚なら日に4体、ドミニオン・オーソリテイなどの中位なら日に12体、“監視の権天使（プリンシパリテイ・オブザベイション）”なら日に20体召喚可能といったところだろうか？

「ダークウオリアー卿は、天使の召喚もできるのか？」

そう問いかけてるガゼフ。

言い忘れていたが、ここは野外……というかカルネ村の中央広場で、今は“シユラウド・オブ・スリープ安眠の屍衣”に封入された陽光聖典一同の屍が安置されている。

そして衆人環視というのは大袈裟だが、ガゼフとその部下たちが遺体の確認を行ってる中、右手はイビルアイの頭を、左手では今回の一番手柄であるネムの頭を撫で回しているダークウオリアー卿様であった。

ダークウオリアー卿は撫でてる身であるので気づいてないかもだが、ネムは幼女にあるまじき恍惚とした艶っぽい表情を浮かべ、ついでにビスチエアーマーの股の部分から溢れた透明な体液が、つうつと太腿の内側を伝っているのだが……そろそろ止めないと放水（意味深）的な意味で大変な事になるような気もするが、村人にとつてはいつものこと。むしろ「微笑ましい光景」にカテゴライズされてるようで特に指摘する者はいない。ただ、小さな指でそれとなくビスチエの上から幼い器をいじりだしてるのは、ちよつぴりはしたくないと思わなくもないが……「まあ、ネムだし」の一言で片付けられる事ではあった。

ちなみに撫で回してる張本人は気づいたとしても「ネムは可愛いなあ」の一言で済みます。間違いない。情報ソースは右手で撫でられて

ネムと大差ない状態になつてる吸血姫だ。

無論、ガゼフ隊の面々は見なかつたことにしてるようだ。というかコメントのしようがない。

ただきつと後の王都には、ダークウオリアーの有り得ない評判が広がることであろう。

「苦手ではない……と言っておきましょう」

ケルビムを団体さんで呼び出せるこの男が得意ではないと言いついたら、おそらくこの世界で得意なものなど居なくなってしまうだろうが。

「ところで戦士長殿」

「なんででしょう？」

「先遣隊のロンデスなる人物を引き渡すのは構わないのですが、」

ダークウオリアーは一度言葉を切り、

「ただ、陽光聖典の遺体はこちらで引き取らせていただけませんか？

悪いようにはしないので」

「……どういう意味です？」

カルネ村を二度襲った法国の特殊部隊……原作と呼ばれる世界線ならチュートリアルに該当するような襲撃イベントだが、この世界ではそうではない。

ダークウオリアー、いやモモンガは既にこの世界の住人となって、住人として生きる覚悟を決めてから経った年月は並みの人間の一生分を超えていた。

ゆえに……相応に“しがらみ”と言うものは存在する。

良く言えば“縁”ともいえるが、そういう物がある以上、どうやらこの襲撃劇の顛末は素直なものとはならないようだ。

第24話：考察 状況把握は大事です”

「端的に言ってしまうえば、主に政治的な理由で戦士長殿の手に余る……そういうことです」

カルネ村に住むと噂されていた伝説的……というより王国では都市伝説や幻扱いされているアダマンタイト級冒険者、ダークウオリアーから王国戦士長ガゼフ・ストロノーフに提案されたのは、村の近郊で文字通り全滅させられた法国の特殊任務部隊、“陽光聖典”の遺体の処遇だった。

蛇足ながらイビルアイとネムを撫でていた手は既に頭から離されていた。

イビルアイは仮面のしたで名残惜しそうな顔をしながらも大人しくしているが、ネムはいつの間にか姿を消していた。

戦闘で火照った幼い肢体を、頭とはいえ狂おしいほど愛している男に弄られたのだ……どこで何をしているのかは『お察しく下さい』ということだろう。

幼いということは理性も自制も未熟であつてもなんらおかしいこととはなく、同時にネムは情欲に忠実な自分の性格も素直な反応を示しよく濡れる自分の肢体を気に入っていた。

「先ほども言いましたが、こう見えても私はラナー王女より名代を任されています。なので戦士長殿を取り巻く政治的事情もある程度は理解しているつもりですが、」

そしてダークウオリアーはちらりとガゼフを見やり、

「僭越ながら……本来、装備すべき装備の装着を許されぬまま出陣させられたのでは？ 理由はおそらく、貴族派貴族の横槍というところですかね」

「……慧眼、恐れ入ります」

「いえ。戦士長殿を疎ましく思う勢力の筆頭とさえ彼らでしようから、褒めいただくには及びません。ですが……お気づきですか？ 戦

士長殿は政治的にはかなり厄介な立場に立たされている状態なんですよ」

「とうとうと?」

「物言わぬ死体、まさに『死人に口無し』の状態ではありませんが、装備や人相から彼らが陽光聖典であることは明白。ならば死体の状態でも十分に証拠になります。そう、貴族派貴族と法国上層部が内通していたという、ね」

空気が重くなる……そう、ガゼフ自身も正直、自分でどうにか解決できる許容量を越えていることは薄々自覚していた。

だが、他者から口に出されると事態の重さが双肩にかかる気がする。

元平民の彼は、『剣と自分を取り立ててくれた王への忠義があればよし』というスタンスから宮廷政治には深入りしてこなかった。王の剣には、伏魔殿での政治的駆け引きは無用と。

そして今、そのツケを支払わされてる気分になっていた。

「ただでさえ六大貴族の中にも帝国と内通してるものがある現状、この上法国の繋がりまで暴露された場合の貴族たち、特に貴族派の俗物たちがどのような暴挙に出るか想像できますか?」

「ダークウォリアー卿、それはっ!!」

過ぎた言葉は寿命を縮めさせることは、さしものガゼフだって知っている。

伊達に王宮へ出仕してはいないのだ。

「ここはカルネ村。不穏な目も耳もありません。あえて私の発言が漏れるとすれば、戦士長殿の部下でしょうが……そのような者に心当たりが?」

「そのような者はおらん!」

部下を信頼する、いや部下を信用してたいが為の力強い否定に、ダークウォリアーは「甘い男だ。だが、良い漢でもある」と好意的な物を感じていた。

愚直さは、それも強さの一つであるところの男は考える。

「そうですか。なら、問題ないはずです……ところで戦士長殿は自分が貴族に疎まれる自覚はおありのようだが、その理由まで想像できますか？」

「平民上がりの私が王の覚えがめでたいのが気に入らず、また貴族派にとつては国王派の主戦力である私が疎ましいのだろうと思ってるが……」

ダークウオリアーは難しい顔で腕を組み、

「……嫉妬と王の剣という立場、確かにその認識は間違っではない。ですが法国、それも六色聖典の一つが動くほどの事態はどう説明つきます？ 陽光聖典は紛いなりにも法国の切り札の一枚、軽々しく投入していい戦力じゃない」

「それは貴族派の貴族が法国上層部に依頼を、」

「それはありえない」

ダークウオリアーはぴしゃりとガゼフの言葉を途中で否定する。

「しかし、ダークウオリアー卿は貴族派貴族と法国上層部が内通していたと」

「確かにそう発言しました。そして“形的には”そういう体裁をとっているのかもしれませんが……ですが、」

ダークウオリアーはスツと目を細め、

「事実は逆ではないかと愚考しますよ」

「……どういう意味です？」

「元々、法国には戦士長殿を抹殺する計画があった……そして、王国の貴族派達は戦士長殿に向ける唾棄すべき感情を上手く利用された。私はそう考えますが？」

第25話：「『 妥当な落とし所』」

「元々、法国には戦士長殿を抹殺する計画があった……そして、王国の貴族派達は戦士長殿に向ける唾棄すべき感情を上手く利用された。私はそう考えますが？」

中の人ならぬ中の骨がモモンガであるダークウオリアーは語る。

「ガゼフ・ストロノーフ暗殺未遂事件」の首謀者は、王国の貴族派貴族ではなくスレイン法国上層部だったのではないかと。

そしてダークウオリアーは、さりげなく結界型の消音魔法をかける。

そう、イビルアイ^キが得意な『サイレンス／静寂』だ。

ここから先は、信頼度云々以前にガゼフの部下が聞いていい話でも聞かせていい話でもない。

「論拠は、簡単です。要するに力関係なんですよ。国力から考えても純粋な武力から考えても、人類最強なのは法国でしょう。そんな彼らが、『人類至上主義』を標榜する彼らが『人類国家の失敗作』である王国、それもその中で最も墮落した層と看做している王国貴族に精鋭部隊を貸すメリットも理由も言われも無い」

「ちよ、ちよっとお持ちをつ!! 『人類国家の失敗作』とはなんのことです!？」

するとダークウオリアーはひどく冷めた目で、

「リ・エステーゼ王国の誕生は、王国民の意思や初代国王の偉大さだけと言うわけではないんですよ。建国には法国の『肥沃な土地で人類の安全地帯を確保したい』という意思が強くかかっている」

「バカなっ!!」

否定したい……あるいは王国戦士長という立場が言わせた言葉だったのだろうか？

「残念ながら事実です。詳細を話すと長くなるので、ラナー王女にでも聞いてください。あの娘^こはただ愛らしいだけでなく私よりずっと

聡明で、歴史の造詣が深く、説明も上手い。戦士長殿の疑問をわかりやすく答えてくれるでしょう」

本人が聞いたら狂喜乱舞し、その勢いのままベッドに引き摺り込み
そんな発言をするダークウオリアーだ。

それにしてもガゼフはやはり政治的には疎い。

あえてダークウオリアーは、「ただの領主と名代ではありえない」
つながりの深さ」を発言に混ぜてみたのだが、それに気づく様子は
無かった。

(判つてはいたが、この男に政治的駆け引きの才覚は期待するだけ無
駄か……)

落胆はしない。だが、同時に「自分がもう少し、単純武力ではなく
政治的に意味のある存在」と自覚すべきだとも思う。

以前、ベッドの中で幼さの残る肢体を白濁に染めた、あられもない
姿のランナーから聞いた言葉が脳裏に浮かんだ。

(いずれランポツサより装備や部下ごと譲り受けたいと言っていたが
……)

このままではひどく無防備で危なっかしい。

(まあ、ランナーのことだから上手くやるだろうが)

ダークウオリアーは思考を切り替え、

「だが、今は話が進まないの、『そういうものだ』と納得していただき
たい」

不承不承と言う顔のガゼフを確認しつつ、

「だが、王国は法国の期待を裏切り、墮落の一途を辿っている。もはや
人類の安息の地などではなく害悪」

それはカルネ村の内部においては常識であった。

少なくともカルネ村では「王国や貴族にとって都合の悪い情報や事
実」が周知され、それが王国への帰属意識の低さの一因となっていた。
「その象徴ともいえる貴族の依頼を、法国が受けると言うのはかなり
考えにくいんですよ。だから、むしろ法国に『戦士長殿の抹殺』あり
きの作戦がまず存在し、貴族達が利用された……そう考えた方が自然
なんですよ」

ガゼフは押し黙ってしまふ。

淡々と、ただ事実のみを並べるようなダークウオリアーの言葉には、否定しようとしてもそうできぬ重さと真実味があった。

そしてガゼフは、反論できるほどの材料情報を持ち合わせてはいなかった。

正直に言えば……腸に直接手を入れられ捻られるような不快感はあった。だが、それは「ただ王の剣であればよい」と政治、国際情勢と言うものを無視してきた自分が甘んじて受け入れなければならぬ感覚だと言うことも理解していた。

「ダークウオリアー卿は、どうすべきと考えるのでしよう?」

「ロンデスのみを証拠品として王都に連れ帰るのが一番でしょう。陽光聖典のことを貴族たちのいる御前報告では語るべきではない」

ダークウオリアーは断定的に言い切り、

「『不十分な装備にも関わらず、辺境の村々を襲う不逞の輩を、戦士長殿とその一団が裁きを受けさせるために連れ帰った』……それが無駄に波風を立てない”妥当な落とし所”というものです」

「し、しかし……!」

「戦士団は陽光聖典と接触していない。その姿も確認していない』。ほら? 嘘は言っていないじゃないですか?」

「……それは詭弁と言うものでは?」

「詭弁? 違いますね」

ダークウオリアーは良い笑顔で、

「これが政治というものですよ」

☆☆☆

「一つだけ……これは興味本位でお聞きしたいのですが」

「かまいませんよ」

ガゼフは徐に、

「回収した陽光聖典の遺体はどうするので?」

「ああ、これですか？」

ダークウオリアーは居並ぶ安眠シユラウド・オブ・スリープの屍衣を見やり、

「有効利用できそうな人物にアテがあります」

『厳密には人じゃありませんが』と心の中だけで付け加えておく。

「お任せください。悪いようにはしない」

「……多分私は、承諾するしかないのだろう。口惜しいが……」

「その矜持は心地よいものですがね……戦士長殿、帰ったら王の御前で報告する前に、ラナー王女と話してみるといい」

彼は言葉の目線を少し上げ、

「きつと貴方が足りないものを、色々気づかせてくれるはずだ」

第26話：前半↓骨墮とし&後半↓友よ”

ガゼフ達の一行がカルネ村を去るのを見送った後、ダークウオリアーは広場に控えているエンリたちに待機するように伝え、イビルアイを連れ立って家へと戻った。

待つことしばし……

「待たせて悪かったな」

再び姿を現したのは白磁の体に豪華なローブを纏い、この世のあらゆる財宝すら凌ぎそうな黄金の杖を携えた姿……

村人の信仰と信奉と敬愛を一身に集める紛う事無き”オーバーロード 死の神・モモンガ”の姿がそこにはあった。

降臨したその姿に、一同はあまりに自然に無音で跪いた。

神には礼拝が必要なのを、カルネ村の住人は良く理解していたのだ。

「畏まらずとも良い」

見た目の恐ろしさと相反する優しげで穏やかな声に村人は頭を上げる。

そしてアンデッド創造で何体かのスケルトンを呼び出した。

受肉した姿ではなく本来のあるべき姿……オーバーロードで創造するのは、やはり作ったアンデッドに高性能化のボーナスがつくからだろう。

加えて死霊魔法に限らず、魔法行使をメインとする場合はコチラの方がしつくりくる。

「少し友人に会いに行ってくるよ」

「もしかしなくても”ツアー”のところか？」

そう聞いたのは共に来ていた仮面を外し、愛らしい素顔に白と黒のシックな色合いだが、妙に少女趣味なフリフリミニスカ＋ニーソ姿の……というより、どうも『ご注文はうさぎですか？』に登場するシャロこと桐間紗路が愛用している、ハーブティー専門喫茶店”フルー

ル・ド・ラパン”の制服っぽいそれに身を包んだイビルアイ改めキーノである。

どうでもいいが、魔法でウサ耳（ロツプイヤー）を生やせばより完璧になるだろう。何が完璧かは知らないが。

細部のデザインが異なるので、おそらくは未だにアイテム限定でアクセスできるナザリックにストックされていたメイド服なのではないだろうか？

げに恐るべしは、在りし日のアインズ・ウール・ゴウンである。それとも1／3のメイドをデザインしたホワイトブリム氏の執念だろうか？

本当に蛇足だが……キーノが好んで着る私服は、やたら可愛いものが多い。ついでに二次元作品に出てくるような制服系も多い。

無論、彼女の趣味でもあるのだろうが……本質的にはかつて国墮としならぬ”骨墮とし（主に性的な意味で）”の際に用いられた主武装の数々がその原点だった。

仮面の魔法詠唱者”イビルアイ”モードの時はともかく、旅の時代も人目がないとき（仮面をつける必要がないとき）は戦闘服（？）に身を包み、手変え品変えモモンガに迫ったようだ。

もちろん、下着も可愛い系で統一され、パジャマにいたっては黒猫の着ぐるみ、通称”くろぬこぐるみ”だ。

下着もパジャマも夜はすぐに脱がされてしまうのだが。

ちなみにエンリは神官服メインであまり持っていない私服も清楚系、ただし下着は反動からか派手^{エロ}だったり……ついでにネムは着けない／履かない派だ。姉と違って着けなければいけないほど膨らまないというのが本人の言い分。

「ああ。ツアーならきつと、”^こ陽光聖典の遺体^れ”を上手く活用するだろう」

「違いないな。法国への釘刺しにでも使うかな？」

お骨様は《ゲート／転移門》を開き、懐かしき……とは言えない頻度で会ってはいるが、この世界で一番古い友人の元へ向かうのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆

それは人の手で創るには不可能なほど巨大で、荘厳な空間……いや
神殿だった。

そしてこの空間に相応しき存在が横たわっていた。

アーグランド評議国永久評議員、八欲王の災厄を封じ込めた遺産の
管理者……現存する最強の竜王にして、ブラチナム・ドラゴンロード“白金の竜王”の尊名と
共に崇められべき存在。

その名を“ツアインドルクスⅡヴァイシオン”、通称“ツアー”。

この古代の息吹が残る静謐な空間にふと“違和感”が生じる。
本来、多重の結界があるこの部屋に直接転移できることはない。
だが、数少ない例外が存在する。

それはツアーが認めた者……とても覚えのある魔力反応に、ツアー
は思わず巨大な顔を綻ばせた。

「やあ、久しぶりって程じゃないけど来てくれて嬉しいよ。我が友よ」

「ああ。俺もだよ、我が友よ」

出現した骸骨……モモンガは、とてもとても優しい声だった。

ツアーとモモンガ、その出会いは今からおよそ100年前まで遡
る。

そう、いわゆる“100年の揺り返し”に繋がる物語……

それは普通の人間の一生分よりなお長く続く、骨と竜の友情の物語
だった。

過去Ⅰ：お骨が空から落ちてきたってさ
第27話：“過去篇Ⅰ・終末の過ごし方”

凡そ今から100年前、“ソレ”は唐突に起こった。
空が割れ……

「どわあああああーっ!!?」

「親方、空から骸骨が……?」

その風景を見上げながら思わず100年ほど前に旅をした仲間の
持ちネタを呟いてしまうツアインドルクスⅡヴァイシオン、ツア
だった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆

その日、鈴木悟はとても寂しい気持ちで過ごしていた。
一世を風靡したDMMO-RPG“Yggdrasil”……1
2年続いたそのゲームのサービス最終日を、鈴木悟は“たった一人”
で迎えていた。

原作という世界線では来た筈のへろへろは来なかった。
日頃の過労がたたり、緊急入院したとメールが届いていた。

たっち・みーもウルベルト・アレイン・オードルも来なかった。
降りしきる雨の中、二人は同じ場所で互いに銃口を向け合い引き金
に指をかけていたのだから。

ペロロンチーノも来なかった。

彼は急な陣痛が起きた年齢が自分の半分にも満たない身重の妻を
抱え、産婦人科のある病院に車を走らせていた。

皆、それぞれの日常があった。

それを知っていたからこそ、悟は激昂することが出来なかった。

だからせめて自分だけは、最後までモモンガでいたかった。

生きてきた年数の約半分を、ゲームに費やしその名と共に過ごして
きたのだから……

だが、だからと言って空虚な玉座で最後のときを過ごしたくは無
かった。

そこは、かつて仲間達と過ごした時間がこびりついているような気
がしたから。

失ってしまった……もう戻らない過去が楽しければ楽しかったほ
ど、現在の孤独を浮き彫りにさせてる気がした。

だからその残滓にすぎるのは、鈴木悟には耐えられそうも無かった
……

最後の日くらい、思うままに過ごしてみようと彼は外へ出た。

もう誰も来るはずが無いことをわかっていたから。だから、
ユグドラナルこの世界を少しでも長く見ていたかった。

普段なら異形の者が入れないはずのバザーやマーケットも、あちこ
ち普通に開放されていた。

散財するのも悪くないと、回れるだけの店で買い捲った。

驚くべきことに世界級ワールドアイテムが、『わかる人だけわかればいい』と
言いたげにそれとなく捨て値で売りに出されており、それを2つも購
入できた。

売りに出されていた“シューティングスター流れ星の指輪”を5つ購入。たった1個を
手に入れるためボーナス全額をガチャに溶かした時を思い出し、少し

切なくなつた。

そこかしこに神話級ゴツスを含む貴重なアイテムが特価で売り出されていた。それを片っ端から購入してみる。

一日で、ナザリックに溜め込んだ財貨の1／10以上を使ったが、後悔はなかつた。

鈴木悟はその日、初めて「自棄買ヤケい」というものを経験したのかも
しれない。

バザーでは、かつてナザリックに攻め込み、いつの間にか顔見知り
になってしまった人たちともエンカウントすることが出来た。

幾人からは、礼まで言われた。『魔王でいてくれてありがとう』と。
おかげで楽しかったと。

餞別と称していくつもの貴重なアイテムを貰ったり、あるいは交換
したりして楽しめた。

街中ではPKもPKKもできない。

とても平和な時間を、悟は過ごせたようだ。

ただ帰る頃には目新しい世界級アイテムは計3つに、シューティン
グスターが計7つに膨れ上がっていたのは御愛嬌だろう。

☆☆☆

23：00過ぎ。ナザリック地下大墳墓へ戻つた悟はギルドの象
徴、ギルド武器の“スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン”を
手に取つた。

その思い出を杖の形にしたようなスタッフを手に、玉座に戻らずそ
のまま外へ出た。

破壊されてしまえばギルドが崩壊するギルド武器を手に持つたま
ま外へ出るなど普通なら正気ではないが、破壊され全てが終わるなら
それもよいと考えていた。

23：50、何を思ったか大墳墓の地表にいた悟は《フライ／飛行》
に強化をかけ、上空へと飛び立った。

もしかしたら、ナザリックだけでなく最後の瞬間に“自分の生きて

きた世界”を脳裏に強く焼き付けておきたかったのかもしれない。

上へ上へ駆け上がる……

もし自分に青春時代なんて呼べるような物があつたとすれば、それは全てユグドラシルと共にあつた。

喜びも悲しみも友情も、全てユグドラシルの中にあつたのだ。

もしかしたらユグドラシルの終了は、同時に鈴木悟と言う男の青年期の終わりを意味していたのかもしれない。

「なべてこの世は美しき場所なればこそ」

そうとある詩の一節を諳そらんじてみる。

だが、

「されど現世うつしよに我、生きること望まじ。止める者無く惜しむ者もまた無し。現世こそ虚ろなりて、幻影の中こそ実でありなん」

それが偽らざる本音だつた。

現実に俺の生きる場所は無い。お帰りと言う人も居なければ、居なくなつて惜しむ人も居ない。現実はただ虚ろで、ユグドラシルの中でこそ俺は確かに生きていた、と。

「失われた過去は戻らず、ただ虚空の彼方に消え去るのみ……我もまた然り、か」

そして鈴木悟は、終焉を受け入れるように瞼の無いはずの目を閉じた……

彼は気がつかない。今がユグドラシルという“ゲームの最後の瞬間”だつたことに。

そして自分の言葉がまるで発動呪文だつたかのように、空が裂けた事を……

第28話：『過去篇Ⅰ・スケルトン&ドラゴン』

さて、想像してほしい。

空から突然落つこちたと思つたら、目の前に白くてデカくていかにも強そうなドラゴンがいた情景を。

今から約100年前……まだ鈴木悟の名を捨てていなかった頃のモモンガが、“この世界”で始めて見た光景がまさにソレだった。

「や、やあガイコツ君」

だが、いきなり『目の前に黄金の杖を両手で握り締めたローブを纏った骸骨』が落ちてきたツアーも、実はかなり困惑していたのだが。

「あつ、どうもです。えつと……ドラゴンさん？」

どうやら骨折した様子もなく、五体満足。種族的には死んでるけど無事なようだ。

もしかしたらパッシブスキルの上位物理無効化IIIが仕事したのかもしれない。

尻餅をついていた悟は、立ち上がると同時に思わず素で返してしまふ。

「へっ？ ガイコツ？」

「うん。これ以上ないほど立派な骸骨だよ？ 君は」

「……ほわつと？」

「あー、自分で確かめるといいよ。鏡かなんか持ってないかい？」

モモンガは片手でスタッフを持ったままいつものクセで虚空に腕を突っ込む。

いや、もうこの時点で色々おかしいのではあるが、人間……に限らず全ての知的生命体は、許容量キャパシティ・オーバー限界を起こした場合、精神的保護機構が働き色々切り捨てるのかもしれない。

そして悟が取り出したのは、実は遠視機能がついた魔法の鏡だったのだが、

「フワアッ!!」

骨の体がうつすら輝く。種族特性である精神沈静化が働いたのであろう。

「もしかして気がついていなかった？」

「ええ、いや、確かにユグドラシルの中では〃死の支配者〃オーバーロードだったんですけど……」

「ふーん。〃ゆぐどらしる〃、ね……」

悟は「えっ？ まさかサービス終了直前のサプライズ・イベントかつ!? なら、サービス終了時間はまだ過ぎてないとか？ あるいはユグドラシル2のチュートリアルだったり……」とブツブツ呟いていたが、ツアーはとりあえず一番重要な事を聞くことにした。

「ねえ、ガイコツ君……君はもしかして〃ふれいやー〃なのかい？」

「へっ？ ドラゴンさんもプレイヤーですよ？ 竜種の。えっ、もしかしてNPC、いやレイドボス？ いやいや、いくらなんでもこんな流暢にしゃべるAIなんて未だに開発できる訳が……」

「申し訳ないけど、私は生まれたときからドラゴンだよ？ 一分一秒とてドラゴンをやめたことはないかな？」

「えっ!? それじゃあ、やっぱりレイドボスなんですかっ!?」

「残念ながらそっちでもないんだ。ねえ、ガイコツ君……」

「ハ、ハイ」

ふと目の前のドラゴンが真剣な目をしたような気がして、背骨がピーンと伸びた。

「ここはもう〃ゆぐどらしる〃……ゲームの世界じゃないんだ」

「……………は？」

☆☆☆

「ば、バカな……今時、異世界転移なんて……そんなジャンルが異様な盛り上がりを見せた時代もあるって、話では聞いたことあるけど……!？」

呆然とする悟……さつきから自動車のウインカーの如く点滅を繰り返しているが、沈静化の仕事は中々終わらないようだ。

だが、徐々に落ち着きを取り戻す精神状態の中、それが事実であることを鈴木悟は受け入れ始めていた。

目の前のドラゴン、ツアーに言われるまま試してみた情報ウインドの展開もGMコールもできない。そして何よりログアウトができない……ログアウトできない状況のフルダイブ環境でデスクゲームなんて、それこそ今では古典文学作品の棚に並ぶことも珍しくない古典ラノベの舞台だ。

それが現行の法律ではどう足掻いても不可能だということは悟も理解している。

「昔の友人の言い回しを借りれば、『ここはゲームじゃなくてクソツタレな現実』ってことになるのかな?」

「そ、そんな……」

また白磁のスケルトン・ボディを点滅させる悟だったが……

「ああ、そうだ自己紹介しておこうか? 私はツァインドルクスⅡ

ブラチナム・ドラゴンロード

ヴァイシオン、〃白金の竜王〃なんて大層な名で呼ばれることもあるけど、どっちも長ったらしいから〃ツアー〃でいいよ」

「あつ、俺……じゃなかった私は、」

「〃俺〃でいいよっ」

楽しそうな笑い声を上げるツアーに悟はコホンと咳払いして、

「俺は鈴木悟。いや、モモンガ……なのかな? この骨の体の場合」

「モモンガ……がいいね。響きから考えて〃スズキ・サトル〃は、君が向こう側で人間だった時の名前だろ?」

悟は小さく頷き、

「そっか……俺はもう人間じゃない、のかな?」

「そう悲観することはないさ。アンデッドもそう悪いものじゃないと昔の仲間も言っていたしね。種族固有のメリットあるし、それに……そうだな、もしかしたらその鎖骨がセクシーとか言い出す娘も、この世界のどこかにいるかもしれない」

「いや、それ全然嬉しくないんだけど……」

少し拗ねてしまったような悟……モモンガにツアーは苦笑して、

「それに人間に戻れなくても、人間に化けれない訳じゃないし。ましてや人として生きれないなんてことも無いけどね」

「へっ?」

「まあ、それは追々にね」

ツアーは一度言葉を切ると徐に、

「モモンガ、ちよつと私の昔話に付き合ってくれるかい?」

「昔話?」

「ああ」

ツアーは長い首を頷かせ、

「君にとつてもぎつと良い」この世界のちゅーとりある」になると思
うよっつ」

第29話：“過去篇Ⅰ・賢しき竜の言霊は、過去を押し流し明日への道標となる”

賢き竜ツアインドルクスIIヴァイシオンは、かく語る。

今から500年前、後に六大神と呼ばれる事になる異界から来た超絶存在の降臨から始まる、長い長い物語を……

鈴木悟、いやモモンガは大いに興味を刺激され、積極的に聞き入った。

ツアーの語りが上手いせいとか、どんどん引き込まれ感情移入していった。

特に強く感情を揺さぶられたのは、八欲王に葬られたおそらく同郷同族の存在、死の神“スルシャーナ”の最後だ。

既に死んでいる死の支配者^{オーバーロード}は普通の意味では殺せないかもしれない。だが、殺しきれないとは言っていない。

八欲王による集団リンチのような形でおそらくデスペナのレベルダウンを悪用されて、何度も何度も殺され、最後は殺しつくした……そのあまりに無残な最期に、モモンガは憤慨した。

沈静化が何度働こうが、構わず波のように次々と押し寄せる怒りに身を任せた。

「だから私は八欲王は嫌いなんだよ。世界を穢し、魔法の法則を捻じ曲げた……それ以前に彼らはどうしようもないほど外道だったのさ」ツアーはなお語る。

自分の同族の多くもこの世の摂理を守るために戦い、「スルシャーナと同様に八欲王に殺された」と。

モモンガはまたも憤慨する。

スレイン法国が大恩ある六大神の唯一の生き残りであるスルシャーナを守ろうとしなかったことに、それどころかアンデッドの神

をよしとしない一部の神官が八欲王と内通し、スルシャーナを陥れた可能性があることを。

そして、スルシャーナが死んだことを法国が誤魔化し続けていることもだ。

更に今の法国の在り方も、モモンガは気に入らない。

ツアーによれば今の法国は「人類至上主義」で、亜人や異形を認めず排除しているというのだ。

むぎむぎスルシャーナを八欲王に殺させた挙句、スルシャーナの種族すらも排除対象とする……おそらく同種族であるモモンガも当然排除すべき存在のはずだ。

モモンガの脳裏に在りし日の「異形種狩り」に会ったときの絶望が去来する……

その瞬間、スレイン法国と異形種狩りの人間プレイヤーの姿が重なった。

ツアーは、一言も嘘は言っていない。多少の憶測は挟んだが、概ね事実だ。「実は人間種は脆弱で、被捕食側の存在。八欲王がいなければ今頃は滅んでいたかもしれない」等々伝え忘れたことはあれど、些細な事だ。

（だって骸骨であるモモンガを、今の法国が受け入れるわけ無いじゃないか）

だからこれでいいのだ。

事実は並べただけでも強い。そしてモモンガは「ツアーの望みどおり」に法国への猜疑心と警戒心を募らせ、溜め込んでゆく。

☆☆☆

カツツエ平野の由来を聞いたときは、ただ哀しかった……カツツエはドイツ語の「猫」。猫を象徴とするギルドにモモンガはとても心当たりがあった。

平野の霧も出沒するアンデッドの群れも、もしかしたら無念のまま

滅んだ猫達の怨念や呪いなのかもしれない。

200年前の“常闇デーブダークネス・ドラゴンロードの竜王”とプレイヤーの殺し合いは、

八欲王の前例がある以上、納得はできないけど理解はできる。

それでも戦いで磨耗したデーブダークネス・ドラゴンロードがい
ずこかの洞窟で長い眠りにしていると聞くと、心底安心した。

そして100年前にツアーが共に旅した十三英雄の冒険譚に、その
愉快痛快な物語にモモンガは激しく胸を躍らせた。

自分もそんな冒険を試してみたいと思うほど。

どれぐらいの時間が過ぎただろうか？

彼の物語が終わりを迎えようとしていたとき、ふとツアーは切り出
した。

「ねえ、モモンガ……君は帰れるとしたら、元の世界に帰りたいかい
？」

あくまで仮定で尋ねる。だってツアーも帰り方なんて知らないの
だから。

下手な希望は持たせたくはない……そう思える程度には、竜は骸骨
に好意めいたものを感じ始めていた。

「帰りたくない……帰りたくないよ。ツアーさん」

「ツアーでいいよ。なんで帰りたくないんだい？」

泣けない骨の身なのに、泣きたくなるほど優しい声……比喻でなく
モモンガは骨身に染みた。

「俺にはもう何も無いんだ……あの世界には。何もかも消えてしまっ
たんだっ!!」

モモンガは激昂と共に思いを、叫なべなかつた思いを吐露する……

「ナザリックはユグドラシルごと、友達の思い出ごと消えてしまった」
リアルには彼を繋ぎ止める物はもう何もなかった。

かつてのアイズ・ウール・ゴウンのメンバーとはリアルで、オフ
会で会ったこともある。

特に無課金同盟を組んだペロロンチーノやウルベルトとはオフ会
以外でも会っていた。

だが、“いた”だ。

ペロロンチーノからお気に入りというロリ物ばかりのエロゲーを「布教活動じゃあーっ!!」とたんまり押し付けられ、どっぷりハマってしまったのも……

ウルベルトと禅問答じみた「悪についての定義」で一夜を議論で明かしたのも……

もう今はない……全ては過去だった。

「かつてはあったんだ。きつと帰りたい理由も……でも、今はない」リアルでももう会うこともなく、同時にゲームからも誰もいなくなつた。

名前だけは残っている者も、もう何年も顔を見ていない。

ナザリツク地下大墳墓……モモンガにとり、それは楽しかった時間を封じ込めたモニュメントであり、リアルで生きる生者には用のない場所……そう墓場だった。

沈静の波が訪れ、思考が冷静になつたにモモンガは自覚してしまふ。来ることのないギルメンを待ち、あの場に居続けた自分はもしかして“墓守”ではなかつたのかと……

そして、自分は思い出だけで生きていけるほど強くはない、と。

「そっか……」

ツアーは自分のそばに座っていた骨の体を大きな腕で抱き寄せる。

「モモンガ、なら君は改めて……違うな。新しく生きてみるべきだ」

「新しく……生きる？」

「ああ」

ツアーは鷹揚に頷き、

「君はもう元の世界に未練はない……そうだろ？」

「うん……」

「だけど、ここは君が帰りたくない元の世界じゃない。新しい世界だ。『モモンガという写し身を使ったスズキ・サトル』ではなく『モモンガという人物』として……この世界の住人として新しく生き始めるには、そう悪い状況じゃないんじゃないかな？」

「……そう、かも」

何も無いことが判っている場所に帰るなら、何も判らない場所の方が希望が持てそう……モモンガはそう考えた。

戻ったところで、富裕層の働き蜂として終わる生涯に希望なんて持てやしない。

それに何より……もうあの星の人類は未来はないだろうから。もうどうにもならないくらい、人は己の愚かさであの星を汚してしまっただ。

アークロジエを維持するだけの資源も、もはや枯渇へのカウントダウンに入っている。滅びが確定した世界に帰る意味などどこにあるというのだろうか。

「だろ？ だけど、ちよつと骨の身では厳しいものがあるのも事実だね。君はとても好ましい性格をしているけど、誰もが君の内面を見るはずもない。人間は特にそうだ。本質よりも見た目で判断する……でも、きつとモモンガが望むものは人の営みの中にしかないと思う。君が元は人間だとするのなら、ね」

「ツアー……俺はどうしたらいい？」

「ふふん。任せてもらおう。私が君の望みを叶えるよ」

そしてツアーは自分が管理していた八欲王の遺産の中から、一つの指輪を取り出す。ゴッズ 神話級アイテムリング・オブ・ヒューマンピーイング “人間の証明たる指輪”を。

「モモンガ、君がこの世界に生きる一人となるのなら、新しい世界で新しい人生を始めるのなら私は君を心から祝福しよう。受け取るといい」

「これは……？」

「君が死者としてだけでなく、生者としても生きていくことが出来る……そうだね。そんな文字通りの魔法の道具さ」

そうツアーは大きな瞳をウインクさせるのだった。

第30話：〃 過去篇Ⅰ・そそのかし 竜言飛語〃

「《オール・アプレーザル・マジックアイテム／道具上位鑑定》……お
おっ！ こんなアイテムがあったんだ！」

モモンガは、幻術で人のように見せるのではなく本当に人間になれる
神話級アイテム〃ゴッズ人間の証明たる指輪〃リング・オブ・ヒューマンビーイングのスペックに目を輝かせ
た。

「だけど種族Lvと種族特性や種族ボーナスが丸々無くなるのかあ
……あつ、でも魔法が丸々使えるのはいいかも」

「種族れべる……人間以外の種族が持つ固有の難度だっけ？」

モモンガは首をかしげると、

「ああ。〃 ぶれいやー〃」の言葉で言う〃 総合れべる〃 のことさ。こつ
ちの世界で強さの基準で、大体総合れべるを3倍にすると難度になる
と思っ方がいい」

「そういう感じなんだ？ あつ、そういうことなら……」

とモモンガは虚空に手をつ突っ込むが、

「あれ？ そういえば俺、どうやってアイテム取り出してるんだ……
？ あれ？ なんでナザリックのアイテムが取り出せるんだ……？」

ぴたつと手を止め、いきなり悩んでしまう。

わからない。でも、わかってしまうのだ。

ゲームのときと同じような感覚で、アイテムが取り出せるのを。

いや……とモモンガは考え直した。コンソールを使わずに自分は
取り出している。なので厳密には同じじゃない。

「イメージ、の問題なのかな？」

「……モモンガ、一つだけ確認したいんだけど従属神、君たちの言葉で
言う〃 えぬびーしー〃 は取り出せそうかい？」

ツアーに促され、モモンガは試してみる。

ナザリックのNPC達をイメージして……

「……駄目、みたいだ」

「なるほどね……いくつか仮説は成り立つかな？」

内心ホツとしながらツアーは続けた。

彼としても100年前の“魔神戦争”再びなんてのはツアーだつて望んではいない。

「もしかしてモモンガが大事そうに持つてる黄金の杖は、ギルド武器かい？」

「ああ」

「間違いなく“ゆぐどらしる”の世界は閉じたんだね？　そして君はその時、黄金の杖を持ち出して拠点の外にいたと？」

「閉じたのは多分だけど、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを持って外にいたのは確かだよ」

「なるほどなるほど……大分読めてきた」

おそらくではあるが……ツアーはこの世界でも有数にユグドラシル・プレイヤーに造詣が深い。

本人望まずとも関わる事が多かったために、そうなってしまったのだ。

「モモンガ、細かいところは判らないけどおそらく“意思ある者”は呼び出せなくなってるのかもしれない。いや、この世界に顕現できない以上、ゆぐどらしるの終焉と同時に消えてしまったのかもしれないな」

（あるいは彼の拠点とそこに紐付けされていた従属神が“重すぎて”、この世界に顕現できないって可能性もある。意思や記憶を持たないアイテムの方が“軽い”だろうしね）

そして更に深く思考を潜らせる。

（とすると彼のギルド武器にアイテムは紐付けされてる可能性もあるね……）

だが、いずれにせよ、

（モモンガに言うべきじゃないな。憶測に過ぎないそれに縋れば、彼は前を見れなくなるかもしれない。取り戻せない過去ばかり振り返っても、幸せなんて無い……ははっ、プレイヤーは排除すると心の決めていた私が笑ってしまうな。モモンガが不幸になってほしくないな

いなんて)

無論、打算はある。これ以上、世界を歪ませられるのは御免こうむる。

だが、モモンガに“世界を穢す者”になって欲しくないのも、またツアーの本音だった。

(我ながら酷いエゴだね……)

「意思ある者……？ 話の流れから察するとNPCのことだと思っけど、彼らはデータの塊だぞ？ アイテムと元になってるものは同じはずなんだが」

「そうとも言い切れないのさ。少なくともこの世界においてはね」
「どういう意味だ？」

☆☆☆

「そんな馬鹿な……NPCがユグドラシルの記憶を持ち、自分の設定を知った上で自我を持って動き出すなんて……？」

「事実だよ。実際、私はぶれいやーとも従属神、えぬびーしーとも戦ったからね」

愕然とするモモンガに、淡々とした口調で返すツアーだった。

「でも、少しだけ惜しいことをしたかな。一度でいいから、意思を持つNPCと話してみたかったよ」

「……私はお勧めしないよ。モモンガ、特に君には」
「なぜ？」

少し心外と言う雰囲気を出すモモンガだったが、

「従属神はぶれいやーに絶対服従だ。従属神にとつてぶれいやーは造物主なんだから当たり前前かもしれない。そして『そうあれ』と作られた通りに行動する……モモンガ、君は自分のギルドの全てのえぬびーしーを把握してるかい？ そうあれと作られた彼女ら彼女らの忠誠を受け止めきれるか？」

言葉に詰まるモモンガにツアーはかぶりをふって、

「私はそうは思えない。少し話しただけでも判る。君のようなタイプは、間違いなくその重圧に耐えられないよ」

「俺が、弱い……から？」

「違う。君が善人過ぎるからさ。モモンガ、確認したいけどギルド武器が壊された場合、ギルドは崩壊するんだよね？」

「ああ。ルールのにはそうなるけど……」

「ギルドが崩壊した場合、えぬぴーしーは命令を受け付けなくなり暴走する……そう、制御不能の巨大な力を持つ“魔神”という存在、世に災いを齎す存在となるんだ。君がそのリスクを背負わなくてよかったと私は思ってるよ」

100年前の魔神戦争の根本的な原因はそれだった。

ツアーは今となれば思うこともある。結局、殺し合うしかなかったけど、それでも哀しく儂い存在だったと。

「ツアー……」

「過去に縋って生きるのも、また一つの生き方だとは思う。それは否定しない」

「だけど、俺はそんなに強くないよ」

ツアーは微笑み、

「なら、失った物を嘆く暇は無い……前を向いていくしかないだろう？」

第31話：「過去篇Ⅰ・黒騎士のようで黒歴史 ベオウルフにランツクネヒトを添えて。デザートにマール様はいかがですか？」

モモンガは「人間の証明たる指輪」を満を持して試してみる。

「おおっ、これはっ!？」

公称177cmとされてるお骨様だが、どうやらこの世界においては骨格身長が177cmっぽく、それに受肉させる……筋肉や神経や皮膚を被せていくのだから当然一回り以上大きくなる印象だ。

例えば、純然たる死の支配者ボディだと目立つ下顎骨(下あごの骨)が人間にしては尖りすぎてたり、赤い宝玉型の世界級アイテム、いわゆる「モモンガ玉」の存在を考えたら内臓の収まる位置が……などそのまま肉付けしただけでは問題が多発しそうだが、そこは魔法。

受肉エフェクト(?)の中で各部の不具合は見事に是正されていく。ついでに言えば、リアルでは生きていく分には問題ないがそれ以上のもものではなかった食事情のせい、痩せぎすだった本来の体とは似ても似つかぬ健全で健康的な筋肉がついていた。

ボディビルダーのようにこれ見よがしにつけた筋肉ではなく、スポーツ競技選手のように必然的についた筋肉を思わせる……いわゆる「細マッチョ」体形だ。

まあ、思わず鏡の前でポーズングしてしまう気持ちも理解できないはない。

肉付きが良くなったせい、顔自体もなんとなくだがリアル鈴木悟より5歳ほど若返ったようにみえる。

というより、栄養状態が良いことが当たり前だった21世紀前半に彼が生まれていれば、割と童顔だったことがわかる。

アイドル顔ではないが俳優顔、黒髪で優しげな目元のいかにも人当たりの良さそうな青年……それがこの世界で受肉したモモンガだっ

た。

モモンガは宙に浮かんだままの“遠隔視の鏡”で、物珍しそうに自分の頬をペタペタ触りながら確認してみる。

「あれ？俺、こんな顔だったっけ？」

記憶にあんまり自信はない。そして視点を少し下げ……

(よ、よかった……復活してるよ)

ナニが復活したかは問わないが……排泄以外に未使用のまま無くなる危惧があったそれは、無事に生えてきたようだった。

しかも本人の願望かどうかは知らないが、後の多くの処女の破瓜の血を吸う……ことになるかもしれないモモンガ様の分身おとめ(?)は、心持ちサイズアップしてる気がしないでもない。

「あー、モモンガ。無事に人に化けたのは何よりだけど、」

その様子をどこか微笑ましげに見ていたツアーは苦笑しながら、

「そろそろ服を着たほうがいいんじゃない？ 私は一向に気にしないけどね」

「ふわっ!？」

☆☆☆

さて、全裸の受肉モモンガが取り出したのは黒いフルプレート・アーマーだ。

原作でのモモンは聖遺物級アイテムでの統一だったが、どうやら今回は種族Lv喪失によるレベルダウンを考慮したのかどうも聖遺物級レリックと伝説級レジェンドアイテムの混合っぽい。

例えばその全身鎧は原作の“漆黒のモモン”のそれに近いデザインだが、細部が結構違う。

何よりモモンの初期装備は魔法で編んだソレだが、この鎧はちゃんとした物理的な物、それも伝説級の中でも上位に来るだろう逸品だ。アダマントタイトを地金に希少金属を混ぜ合わせた合金を用い、ユグドラシル式の魔法付与や魔化が施した鎧は失った種族特性を補えるだけの防御力と特性を有していた。

他の装備との相乗効果もあるのだが、上位物理無効化 I I I / 上位魔法無効化 I I I、冷気・酸・電気・炎攻撃無効化 I I I、刺突武器耐性 I V、斬撃武器耐性 I V、殴打武器耐性 I V、毒・病気・麻痺など状態異常に絶対耐性等々を受肉したモモンガに与えている。

もつとも原作との一番の違いは兜ヘルムを装着してないことなんだが。

別にナルシスト的な意味で顔を晒したいわけではなく、そうそうダメージを食らうことも無さそうなので、あえて視界を狭くする（死角を増やす）ヘルムをかぶる必要はないという判断だった。

あと、マントは別物……豪華なファーのついた薄茶色の代物で大きさ自体もかなり大きく、きつと包くるまれば簡易寝袋になりそうだ。もしかしたら獅子か何かの毛皮だろうか？

ついでに言えばこの時に選んだ主武装は、二つ。

腰に吊るしたのは間違いなく高性能なのだが、伝承の関係からか“子持ちの母竜”相手には途端に鈍なまくらになるという微妙な特性（ただしその名の通り刺突は効果が落ちない。また鈍器として使う分には有益）を持つ片手カッパ両刃剣『フルンテイング（“突き刺す者”という意味がある）』。

背中に鞆ごと背負うのはやはり性能は抜群なのだが、総合Lv90以上のプレイヤーが装備すると伝承どおり自壊してしまう（使い手の力で折れてしまう設定。ただしLv90以下の者が再び握れば即時修復される親切設計）両手持ちの大剣『ナイリング』だった。

どっちもゲルマン叙事詩“ベオウルフ”に登場する剣で、性能自体は文句なく伝説級なのだが伝承をモチーフにした妙な特性のせいか、揃って聖遺物級に分類されていた。

このフルンテイングにナイリング、モモンガがドイツというか……ゲルマンっぽい何かに弩ハマりしなおかつ拗こらせた時期（つまりパンドラズ・アクターの誕生時期と一致）に入手した物であり、実は立派な黒歴史の一部だった。

実際、ゲットしたのはいいが魔法職だったモモンガにまともに装備できるわけもなく、仮に装備できたとしても特にナイリングは振るつた途端に折れてた可能性が高い。

さらに黒歴史を晒せば……モモンガは装備できないことを殊更悔しがつていたという。

というのも、カツツバルゲルもツヴァイヘンダーもマクシミリアン1世統治下のドイツに実在し、その精強さを欧州全土に知られた伝説的傭兵団“ランツクネヒト”の象徴的な武器であり、そのカツコイイ響きも相まってベオウルフに加えその世界観にも浸りたかった本人としては残念無念だったに違いない。

こうして苦勞して入手したにも関わらず、当時は装備も出来ずコレクターアイテム以上の価値がなくなり、半ば死蔵していた二つの剣をモモンガは存在を思い出しつつ、内心ウキウキしながら引つ張り出し、装備したのだった。

モモンガは気づいてないが、ベオウルフは「竜殺しの伝承」として有名なのだが……ツアーも知らないからなのかもしれないが、特に気にした様子もないので問題ないのだろう。きつと。

まあ、黒歴史とえば、今の装備に行き着く前に本質的には臆病なモモンガが一度神話級アイテムで身を固めようとして、ツアーに『それ、性能が凶悪すぎて絶対に悪目立ちする。いきなり法国に目をつけられるかもね』とやんわり指摘されたこともそうだろうし、何より「素っ裸で鏡の前でポーズングした挙句、自分のやや肥大化し蘇生したマール様を凝視してしまう」のも後からすれば立派に黒歴史だろう。

人と言う生き物は、もしかしたら生きてる以上は黒歴史を量産してしまう哀しい存在なのかもしれない。

☆☆☆

前衛用装備一式を“簡単早着替え”に登録したモモンガにツアーは優しい声で問いかける。

「モモンガ、いっぺんに色々なことがそろそろ疲れてきたんじゃないか？」

「……そういえば、少し疲れたかも。あれ？　そういえば何時から眠ってないんだっけ……？」

オーバードロード・ボディの時は飲食どころか睡眠も疲労も感じず、酸素すらいらぬ状態だ。

時間感覚がおかしくなつていても不思議じゃなかった。

「困った男だね。もしかしてこの世界に落ちてくる前から寝てないんじゃないのかい？」

「た、多分……」

そんなモモンガにツアーは苦笑し、

「今は少し休むといい。戦士にも休息は必要なんだからさ」

第32話：“過去篇Ⅰ・魔法使いのお婆さん？ いや
いや、ワシはただの死霊使いじゃよ”

獅子の毛皮のマントに包まり、体を丸めツアーの腕の中で安らかな
寝息を立ててるモモンガは、正しくヒロインの姿だった……

ま、まあ、そのような描写もどうかと思うが、事実なのだから仕方
がない。

ついでにツアーも転寝しているのだが……ふと、気配を感じた。

彼の持つ超感覚をすり抜け、ねぐら 罅へ潜り込める存在など生憎と一人
しか知らない。

「……もしかしなくても”リグリット”かい？」

うつすらと目を開けたツアーが呼びかけると、視線の先にあった何
もないはずの空間がかすかに揺らぎ、ステルス 陰行を解除した老婆が現れた。

なんとというか……全盛期の宮崎アニメに登場しそうな、見かけの老
いを全否定するような元氣澆刺という雰囲気を発散する三編みお下
げがトレードマークの老人だ。

「久方ぶりじゃな。ツアー」

「人間の時間感覚だとそうなるのかな？」

「まあ。それにしても……」

その背筋がピンと伸びたかくしゃく 豊饒とした老婆、100年ほど前にツ
アーが共に旅した”十三英雄”の生き残りである”リグリット・ベル
スー・カウラウ”は面白そうにモモンガを見て、

「しばらく見ん間に男色に走ったかの？ それも良しじゃな。昔の仲
間がああ世とやらで喜んで薄い本を執筆しとることじゃろうて」

どうやら御伽噺おとぎばなしとしても人気の十三英雄の最低一人以上は、お腐り
あそばされてたらしい。

「ひどい風評被害だな」

というか、骨と竜の間に果たしてBLは成立するのだろうか？ そ

れよりどちらかと言えば異種k……いや、よそう。

「オヌシ、その状況ではいかなる言い訳は効かぬと思え。せめてワシの納得する説明を試みせよ」

「それは本人に聞いた方がいいだろう」

とツアーは力加減を間違え強打しないように気をつけながら、指先でモモンガの頭を撫ぜる。

「モモンガ、そろそろ起きてくれないか？ 来客だ」

☆☆☆

「魔法使いのお婆さん……？」

どこか小動物っぽいしぐさで目をこすりながら瞳を開けたモモンガの第一声がそれだった。

「ほっほっほっ。こりやええ。当たらずとも遠からずと言ったところかろう？」

そうリグリットは愉快そうに笑い、

「坊主、ワシはどちらかといえば“死霊使いのババア”じゃな。なんだったらネクロマン婆ばあと呼んでもいいぞ？」

「リグリット、実の名より長くなってるんだが？」

実に適切なツツコミを入れるツアーである。

そして、

「モモンガ、彼女はリグリット・ベルスー・カウラウ。これでも1000年前に共に旅をした十三英雄の一人だよ」

「……へっっ。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「十三英雄のお話はツアーから。お会いできて光栄です。カウラウさん」

「リグリットでええよ、ボン。それと畏まった言葉も不要じゃ」

「そうそう。畏まった言い方をするほど立派な人間じゃないよ、リグリットは。悪戯好きだし」

「ほほう。ヌシがそれを言うか？ 100年前、ワシらを散々謀^{たばか}つてくれた性悪トカゲが？」

「それは100年前に何度も謝ったじゃないか。いい加減、勘弁してくれ」

うんざりした口調のツアーにモモンガは小首をかしげ、

「ツアー、100年前に何かやったのか？」

ふふんとリグリットは鼻で笑い、隅っこにおいてある白銀の豪華なフルプレート・アーマーを見やり、

「100年前、その巨大トカゲは中身空っぽの甲冑を遠隔で操り、まんまと我らの中に潜り込んだのよ」

100年前の十三英雄の冒険譚の中のツアーの抽出話をリグリットから聞いたモモンガは、

「ツアー……それは流石にリグリットさん達に怒られるって」

「じゃろ？」

「仕方ないじゃないか。竜のこの身じゃ漂着したプレイヤーに同行できろわけないだろ？」

「そりやそうだけど……」

「カカカツ。コヤツ、でかい図体の割に肝っ玉は小さくての。流れ着いたプレイヤーが悪化するんじゃないかと気が気でならんのだよ」

笑い飛ばすリグリットだったが、ツアーは露骨にジロリと睨み、

「当たり前前だろ？ 八欲王のような事があれば、今度こそ世界は是正

しきれないくらいに歪みきって、おそらくは終わる」

「さてと……」

リグリットは話を一旦切ると、モモンガをまっすぐに見つめた。

「プレイヤーの話を普通に受け止める……想像はつくが、ボンは一体何者じゃ？」

第33話：「過去篇Ⅰ・裁きたいんじゃない、育てたいんだ」

「まず俺の名は、モモンガって言います」

名を語ってなかったことを思い出し、立ち上がって姿勢をただしりグリットに伝えるモモンガ。

「それと……」

チラリとツアーを見る。

彼が頷くのを確認してから、

「この世界にちよつと前に漂着したばかりのユグドラシルのプレイヤーです。加えて、」

徐にモモンガは完全人化を齎す^{リング・オブ・ヒューマンビーイング}。人間の証明たる指輪^{リング}を外した。

「……こりや魂消たわい」

リグリットの眼前に現れたのは豪華なローブを身に纏い、体の中心に赤い宝玉を輝かせる白磁のスケルトン・ボディの……

「えっと、その……こういう異形種^もです」

営業職で身に着けたビジネススマナーに則った一礼をするモモンガであつた。

名刺があれば完璧だつたのにと思いながら。

「坊主^{ボン}、オヌシはアンデッドだつたのか……種族はエルダーリッチ、ではなさそうじゃのう？ この感じじゃと」

実はリグリット……十三英雄の生き残りである彼女はモモンガと言う名前にお骨様ボディという組み合わせに、もしかしたら「思い当たるフシ」があるのかもしれない。

だが、彼女は演技派であり同時に見た目どおり老獪でもある。その内心はようとして知れない。

「ええ。『死の支配者^{オーバード}』と言って、スケルトン系アンデッドの中では

最上位に入ると思います。多分」

「カカツ。こりや凄いのぉ〜！ いくら死霊使いネクロマンサーと言つてもこりや無理じゃ。何せワシより遙かに格上ときておるわい♪」

それにしても驚くべきはこの老婆の豪胆さだ。

世間では『生者を憎む』とされるアンデッド、それも自分を一撃で殺せるかもしれない特上のそれを目の前にして、物怖じしないどころか呵呵大笑しているのだから。

「ああ、えつと……俺は生きてる人を憎むとか変な属性はありませんからね？」

「わかっておるわかっておる。ボンの顔を見てればわかる」

「えつ？ そうなんですか？ 表情筋とかはないはずなんですが……

骸骨ですし」

ナイスお骨様ジョークをかますモモンガ……いや単に素かもしれないが。

「こう見えてもネクロマンサーの端くれじゃからのう。長い間アンデッドを相手にしてれば、顔を見ただけで判ることも相応にあるわい」

どうやら相手は一枚も二枚も上手なようだ。

「そ、そういうもんなんですか？」

「そういうもんじゃよ。ボンも長生きすればわかるぞい」

☆☆☆

「モモンガ、悪いけどちよつとりグリットと打ち合わせたいんだ……少し席をはずしてくれるかい？」

「打ち合わせ？」

元営業職サラリーマンの哀しいサガか、つい反応してしまいそうになるモモンガだったが、

「君の今後の方針についてさ。そうだな……」

ツアーはいくつか自分が管理してる八欲王の遺産、その中でもレア度は高くて危険度の低いものを抽出して取り出し、

「部屋の端っこでこれらの鑑定でもしてくれるかい？ 気に入ったものがあればあげるよ」

アイテムを手にとるとネクロマンサーでなくともわかるほど、赤い瞳の光をキラキラと輝かせるモモンガ。

流石はツアーである。この短時間でモモンガのキャラを読み取り、その扱い方を心得始めていた。これが噂の竜の超感覚というやつだろうか？

ついでに喜び勇んで「ひゃっほお〜っ♪ レアアイテム、ゲットだぜ！」部屋の隅っこに駆けて行くその姿を見るツアーは、「オモチャを与えて喜ぶ子供を微笑ましげに見る母親の目をしていた」と後にリグリットは語る。

そして心の中で『これからはオカンドラゴンと呼んでやろう』とも。

「単刀直入に聞くがの……ヌシは何を考えておる？」

「色々とき」

「フン……なら、質問を変えよう。あの骨のボンはカルマ値、性格とかとは無関係に個が持つ資質は明らかに悪側じゃ。もしかしたら極悪かもしれんな」

まるで少なからずモモンガを知っているような口調だが、十三英雄の成り立ちを考えれば別に不自然ではないだろう。

「それが？ だけど、その性格はとても好ましく善良で、その魂は赤子のように無垢その物じゃないか？」

モモンガの資質を聞いたところで気にする様子もないツアーの返しに、リグリットは溜息と共に苦笑する。

『プレイヤー絶対殺すマン』のヌシがそこまで唆そそのかされたか？ あのボン、存外にとんでもない人誑たらし、いや竜誑たらしの才能があるかもしれないの

「二重三重の意味で人聞きの悪い。私はそんな物騒な存在じゃないよ？ じゃなければ君たちと旅なんかしないさ。それと唆されてもいないし、誑されてもいない。ただ、感じたままを言葉にしてるだけだよ」

「ヌシにそこまで言わせるか……末恐ろしいボンじゃな。まあ、それ

「はいいじやろ」

リグリットは一度言葉を整え、

「もう一度聞くぞ？ ツアー、ヌシはボンをどうしたい？」

「彼を傷つけたり排除したりするのは論外。善良なものを力尽くで対処するのはポリシーに反する」

「じゃが、世界に仇なす存在となるならば、そうは言ってられんじやろ？」

「そうだね。害をなすなら相応の手は打たなければならない……だからこうして手を打とうとしてるんじゃないか」

「というと？」

ツアーはどこかドヤ顔で、

「害をなす可能性があるなら無害にすればいい。リグリット、私はモンガを育ててみたいのさ」

第34話：“過去篇Ⅰ・” オカンドラゴン

「リグリット、私はモモンガを育ててみたいのさ」

「そう言い切る」ブラチナム・ドラゴンローブ 白金の竜王“ツアインドルクスⅡヴァイシオン、ツアーにリグリットは呆れを含んだジト目で、

「オヌシは一体何を言っておるんじゃない？」

「そんな変な事を言ってるかい？」

「変か変じゃないかで言えば明らかに変じゃし、どちらかといえれば妄言の類だと言いたいところじゃが……」

だがリグリットはニカツと笑い、

「悪くはないのう」

「リグリット、君は実にいいタイミングで来てくれたよ」

そうツアーは笑うが、

「この竜、何やら悪い顔をしてるように見えるのは、ワシの気のせいだろうか？」

「君は悪戯好きで困った人物ではあるが……」

「聞けよ。この巨大トカゲ」

「だが、私よりも人間世界に造詣が深い。だろ？」

リグリットは腕を組み、

「……何をさせたいのかはつきり言え」

「モモンガに人間の世界で生きてゆく術すべを教えてやって欲しい」

☆☆☆

「なぬ？ ヌシ、ボンを評議国で育てるんじゃないのかえ？」

「体は骨でできている。だが、その心は人間……」

どこかで聞いたような言葉をのたまう竜に、

「たわけ。普通の人間じゃって一部は骨でできてるわ」

すかさずツッコむ老婆。実にいいコンビである。

「まあまあ。とにかく、評議国でモモンガを私の庇護下にずっと置くのは、彼にとつて飼ひ殺しに等しいだろう」

苦笑していたツアーは不意に真顔になり、

「人は竜よりずっと社会性動物だ。人が自分を研磨し満足するのは、人の社会でしか……人と人の中でしかありえない」

「言いたいことはわかるがのう」

「それに、足りないんだよ……」

「足りない？ 何がじゃ？」

ツアーは少し言葉を選ぶように、

「彼がこの世界の住人として生きていく覚悟とその意味、モモンガ自身で学び取ってもらおう」ために、さ。この手のことはことは教わって覚えられるものじゃない。自らの体と心で学んでいくものだ」

「ツアー、ヌシが親になる日が来るのかはワシにはわからん。わからんが、」

老婆はニヤニヤ笑い、

「存外に子煩悩、それもかなりの『教育ママ』になりそうじゃな？」

「せめて教育パパと言ってほしいとこだね？」

「今更何をぬかすか。このオカンドラゴンめが」

心理的クリティカルヒットを喰らったツアーは思わず反論しそうになる自分を自制する。友人とじゃれあうのは後だ後と自分に言い聞かせながら。

「ところでリグリット、引き受けてくれる気はあるのかい？」

「面倒そうじゃが、同時に面白そうでもある。引き受けてやるのも吝かでもないぞ？」

「じゃあ是非とも頼みたい」

「いいじやろう。じゃが一つだけ聞いておきたい」

「なんだい？」

「ヌシがボンに」リング・オブ・ヒューマンピーピング「人間の証明たる指輪」を渡したのは、人化の際に種族レベルが消失することを判った上でか？」

リグリットはモモンガがはめていた指輪がどういうものかは、当然知っていた。

それがどのような機能を持つかも、それが元々は八欲王の持ち物でツアーが管理していることも、何よりツアーが気安く……まして会ったばかりのプレイヤーに思惑なく貸し出すような竜ではないことを。

「当然じゃないか。会話の中でさりげなく聞いたけど、モモンガの種族Lvは40で総合Lv100……いわゆるカンストプレイヤーだ。種族Lvが40ということは現在のLv60、難度に直せば180。つまり、」

ツアーは言葉を切り、

「現状、別にこの世界で最強と言うわけじゃない」

「難度180というところ、インベルンの嬢ちゃん」と大差ない、か……考えたもんじゃな。今のボンなら、万が一にも暴走してもどうにでもなるか？」

「そんな物騒なことは考えてないさ。ただ、自分が『完成してしまっている』と思い込んでいそうなモモンガにも、まだ先が……変われる要素があると知って欲しいだけだよ」

そ知らぬ顔のツアーに、

「悪い竜じゃなく。将来的に人の姿でカンストしようとするれば、かなり長い時が必要。少なくともユグドラシルよりはずっとレベリングがしにくいのがこの世界じゃ。ボンが人のままカンストする頃には、どっぶりこの世界に浸っていいような」

「そこまで都合よく考えてないさ。何しろ指輪を外せば、すぐにLv100のオーバードの出来上がりだし」

「あのボンがそんな器用な性格してないことを理解した上で渡したんじゃないろうに」

「さあ、どうだろうね」

プラチナム・ドラゴンロード

“ 白金の竜王 ” ことツアインドルクスⅡヴァイシオン……彼はまさしく賢き竜であった。

第35話：〃 過去篇Ⅰ・異世界講義、お金と仕事の話

〃

モモンガの今後の方針について、一応の合意点に達したツアーとりグリット。

「まず、人の街の中で指輪を外してはならんぞ。街だけでなく人前でもじゃ。この世界はボンが生きていたユグドラシルよりもアンデッドに対しては厳しい。人間にとってほぼほぼアンデッドは人を襲うものという認識が確定しとる」

「なるほど……よりシビアな世界観なんですね？」

と答えるのは、指輪で受肉した状態に戻ったモモンガだった。話し合いが終わったために呼び戻されたらしい。

ちなみに骨↓人への変化による装備転換だが、いわゆる〃早着替え〃に人化時の装備を登録していたため素っ裸でリグリットの前に立つ羽目にならずに済んだようだ。

それにしても、全身鎧姿の青年がちやぶ台で老婆にレクチャーを受けてる姿はかなりシユールだ。

ちなみにこの手の学習機材(?)は、全てモモンガが謎空間から引っぱり出した。

「まあ。その辺は仕方ないと諦めてくれ。さて、人に完全に化けるのはいいとして……次に必要なのは〃人としての立ち位置かの?」

「立ち位置?」

「そうじゃ」

リグリットは鷹揚に頷き、

「人である以上は飯を食う。飯を食う以上は金が要る。金があるなら働かねばならんのが道理じゃろ? 人として生活するなら、まずそういう基盤が必定じゃ。ボン、おそらくユグドラシルの金はたんまりもってるじゃろ?」

「え〜と……ユグドラシル金貨であれば」

「坊主、それは努々使うでないぞ？ ユグドラシル金貨はこの世界の一般的に流通してる各国の金貨より金の含有量が多く、その価値は凡そ2倍。しかもこの世界の冶金技術では量産が難しい細緻な細工が施され、磨耗や欠損を防ぐための硬化魔法など様々な魔化がされておる。見る者が見れば一発で出所が疑われるわい」

これは各国の造幣担当部署が、金をケチつてるというだけではない。

純金はとても柔らかい金属で、一説には「同じ厚さの人間の親指の爪程度の硬さ」と評されているほどだ。

人の手から手へと渡り、また同種の硬貨とまとめられ、宝箱や皮袋に詰め込まれることも多い硬貨。そんな荒っぽい扱いがされるのに、柔らかい純金をふんだんに金貨に使ったらあつという間に傷だらけになり磨耗し、硬貨として意味を成さなくなってしまう。

さらに純金は「柔らかすぎて」すぐに変形してしまうため逆に加工が難しいというもある。

現実世界でも細工物は純金である24金より、金が75%で残る25%が他の金属である18金の方が細工物に使われる事が多いのは、何もグラム単価の安さだけに限った話じゃない。

また金は鉱山で産出される場合は不純物を含有している場合が多く、純金を効率的に生み出すのは電解精錬など、魔法があるとはいえない世界ではかなり敷居が高い精錬技術が必要になってくるのだ。

どうやらこの世界において商業系スキルや錬金系スキルも手慰みで覚えたらしいリグリットは、そのあたりも妙に詳しそうだが……この世界の流通金貨は21・6金〜22金（金の含有率が90〜91・67%）が多数派で、現実世界に置き換えれば実際に流通貨幣として用いられていたナポレオン金貨やソブリン金貨と同等だ。原材料費と冶金／精錬などの製造コストと使用に耐える強度を考慮すれば、実用硬貨として極めて妥当な選択だろう。

要するに金の含有量が少なければ少ないほど価値は下がるが硬く

なり、磨耗が少なく貨幣として扱いやすくなる。

だが対してユグドラシル金貨は24金、つまり純金の硬貨だ。厳密に言えば現実世界で純金、24金とは純度99.99%以上の金の含有をさす物のことであり、対してユグドラシル金貨は元はデータ上に存在していただけのことはあり、現実には難しい本当に100%金オンリーという違いがある。

しかも魔化による硬化処理やら何やらが施されていることになっている。そして高純度だけでなくコイン自体も直径も大きく厚みもよりあるので、総じて金の含有量は2倍、美術品的価値を除く地金型金貨的な価値でも2倍となるのだ。

「それに一番の問題は、忌々しいスレイン法国がユグドラシル金貨を“知っている”ということじゃ。ボン、あいつらの手はヌシが考えているよりずっと長い」

リグリットは一度言葉を切るとツアーを見た。彼が頷くのを確認してから、

「きやつらにプレイヤーの存在を勘付かれるのは極力避けるのが得策じゃ。もし勘付かれたら面倒じゃ済まんぞ？ 連中は保護の名目で手段を選ばずボンを取り込もうとするじゃろう。そしてそれが叶わぬと判断すれば……」

「消される……ですか？ スルシャーナのように」

「そうじゃな。あるいはスルシャーナのように、じゃ」

モモンガの背に控えてるため、彼はツアーの顔を見ることはなかった。

ツアーにとり幸いだろう。なぜなら、そのモモンガの返しに彼はとても満足そうな顔をしていたのだから。

☆☆☆

「人の波間に紛れるなら、人のように振舞うのが最適じゃ。この世界の現地の金を稼ぐのは、その第一歩と心得よ。稼ぐ手段を見つけられ

ば、必然的にそれに見合った立ち位置、社会的地位が手に入る」

「リグリットさん……その、俺に向いている仕事ってなんでしょう？」

リアルでは営業とかやってたんですが……」

「営業というと売り込みじゃな？ う〜ん……確かに商業系クラスは取れるじやろうが、ボンは商人をやりたいのかえ？」

「いえ。できれば戦闘職、それも前衛系のクラスをとりたいです」

リグリットは腕を組み、

「ならば一番手っ取り早いのは、冒険者か傭兵じゃな。あるいは護衛と言う商売もあるが……どれも難があると言えはあるのう」

「どういう意味ですか？」

「冒険者というのは各国に冒険者組合と言う一種の冒険者ギルドがあつてのう、そこに登録し仕事を斡旋してもらいのじゃが……」

「す、すごい！ まさにファンタジー系RPGの王道じゃないですかっ!？」

「とおくころがギッチョンじゃ。これが結構に曲者での。原則……いや、建前として冒険者は国家間の諍いには不干渉で、徴兵も制度的に免除なんじゃが、どうしても登録した組合に縛られてしまうんじやよ。しかも組合というのは国ごと、地域ごとに良くも悪くも特色がある。ワシの個人的な意見じゃが、ボンがある程度この世界に慣れ、見る目を養つてから自分の水に合う組合に登録するのが得策じやと思ふ」

リグリットは小さく苦笑し、

「それにほれ、ボンの事情は少々特殊じゃろ？」

「すると後は傭兵と護衛ですか……」

「どっちも信用商売と言えはその通りじゃからなあ。その信用をどうやって得るかじゃ。それにボンは人を躊躇いなく斬れるかのう？」

「うっ……」

それは何気に重い問題だった。

確かにユグドラシルの中でなら、モモンガは人を屠った事はある。それもごまんとだ。

わずか41人で1500人の人間種プレイヤーを振り返りにした
こともあるが……それはあくまでゲームの中での話、当たり前だが鈴
木悟としてリアルで殺人などしたことはない。

「あく、それについては私から一つ提案があるんだけど」

「なんじゃッアア？ オヌシの娼夫にでもなれというのかのう？」

「君もそのネタ好きだね」

ギョツとするモモンガにツアアは苦笑し、

「いやそうじゃなくてね。モモンガ、この世界の見聞を広めることを
兼ねて、アーグランド評議国評議会の“調査員”エージェントをやってみる気はな
いかい？」

第36話：『過去篇Ⅰ・暗黒戦士の産声』

「モモンガ、この世界の見聞を広めることを兼ねて、アーグランド評議国評議会の“調査員”^{エージェント}をやってみる気はないかい？」

「エージェント!? なにそれ、カッコイイ!!」

子供のように……と言うか子供そのままに目をキラキラさせ始めたモモンガのリアクションに、ツアーとリグリットが思わず頭を撫でてしまったことを誰が責められようか？

無論、ツアーは気を使って指先でだ。

「えっ? えっ? えっ?」

目を白黒させるモモンガに、

「確かに妙案じゃな。評議会の依頼をいくつかこなすうちに自然と信用もできよう。さすれば、フリーランスの傭兵やら護衛やらもじきに成り立つようになるじゃろうて」

「えっと、ツアー……ところでエージェントってどんなことをやるのかな?」

ツアーに視線を向けたモモンガに、

「大雑把に言えば、“世界を大きく歪ませる予兆を察知するために、人間社会に送り込む調査員”ってところかな?」

ツアーの話 요약すればこうなる。

評議国は100年前の魔神と十三英雄の戦いの後にできた国家で、その主導的立場であり発起人であるのはツアーたちドラゴンだった。

また国民は亜人が主流で、人間種はいないわけではないが明らか少数派だ。

その建国の理念は「世界の滅亡を阻止する」こと。

スレイン法国のそれと似てなくもないが、あつちは「人類の滅亡を阻止する」という人間至上主義的な考えに基づいており、評議国の建国理念とは折り合いが最悪、評議国が基本人外／異形の国家として考

えるなら正反対の思想と言っている。

なぜなら評議国は「人類の存続と世界の存続の二者択一なら、迷うことなく世界を選ぶ」国家であり、極論すれば世界の存続のためなら人類という種の滅亡も容認する国家なのだ。

「具体的に言えば、今回はたまたま私の前にモモンガが落ちてきたし、おかげで事なきを得たけど……100年ごとにおこる公算が大きい、いわゆる“百年の揺り返し”。100年ごとに転移してくるぷれいやーが巻き起こす騒動や異変を事前に察知するのが一番大きな役目だよ」

そしてツアーはもう一度指でモモンガの頭を撫でながら、

「モモンガ、よく聞くんた。ぷれいやーは君のような善良なものばかりじゃない。むしろ君のような存在は稀有、例外的と言っている。彼ら彼女らの多くは人間……人間であるからこそ、善性も悪性も持つ。また善性は時の移ろいと共に容易に悪性へと変わり行く。それはわかるね？」

「ああ勿論。俺も何度も“異形種狩り”に合って……大きな理由もなく、面白半分に人間に襲われてるから」

『たちさんに出会ってなければ、すぐにユグドラシルをやめてただろうな……』という言葉をもモンガは飲み込んだ。

「そして滅びの予兆は、大抵が人間の世界で観測される……これはきつと、どんな異形の姿をしても、ぷれいやーが元々は人間だったことが大きく影響してると思う」

納得のいく話だった。

人間種だろうがそれ以外だろうが、ユグドラシルのプレイヤーは元をただけばただの人間だ。ミノタウロスの国で暮らした“口だけ賢者”のようなケースもあるが、少なくとも人間に化けられるか人間社会に馴染める素養があれば、人間世界をベースにする方が馴染みがある分、何かと都合がいいのであろう。

「でもツアー、プレイヤーの出現は100年ごとなんだろう？俺がここにいてことは、次は100年後じゃないのか？」

「そうとばかりは言い切れない。同時多発的に複数のぷれいやーが

別々の場所に漂着する可能性も捨てきれないし、それに問題はぶれいやー本人だけじゃないんだ」

「とうとうと？」

「さっきも言ったろ？ ギルド武器を破壊されるなりして暴走、魔神と化した従属神……えぬぴーしーとか、ぶれいやーが遺した危険極まりないアイテムの発見と回収も重要な任務さ」

「特に法国は六大神、記録上はこの世界に漂着した最初のプレイヤー達の遺産を大量に隠し持つとるよ。中にはボン達が言うところのワールド世界級アイテムも混じってるらしいのう」

「んげっ!？」

リグリットの追加情報にモモンガは妙な声を出しながら法国に対する警戒レベルを一段階引き上げた。

確かにモモンガにワールドアイテムは通用しない。何しろお骨な体の中心部で輝く赤い宝玉、通称“モモンガ玉”は立派なワールドアイテム、その効果を相殺できる。

「だからといって警戒しないわけにはいかない。

全200種類の世界級アイテムの中でも、別格の20……1回限りの使いきりアイテムゆえに、その効果は絶大にして凶悪なそれは、使われるたびに洒落にならない事態を引き起こす。

例えば、“聖者殺しの槍”など使用者の完全抹消と引き換えに、使った相手を完全抹消することができるのだ。

そしてツアーは八欲王が世界を歪め、自分たちの魔法を穢しユグドラシルの魔法を世界に蔓延はびこさせたのはそのワールドアイテムのせいだと踏んでいた。

「そんな状況だからね。だから人間社会を見張る監視者、エージェントが必要な状況になってくるのさ。だけど評議国の住人は人間以外が多数派、人間もいなくはないけど生半可な強さだといざという時には返り討ちにあいかねない。リグリットも言ってたけど、特に法国には要注意だ。どんな遺産を隠し持つてるか判らないし、それを使えるだけの人員も用意していることだろう」

モモンガにはツアーが言わんとすることが判ってきた。
つまり、

「ある程度の強さがあつて、ユグドラシルの装備やらなにやりに詳しい……まさに俺が適任ってことだね？」

「モモンガ、大変な仕事になると思うけど引き受けてくれるかい？」

「ああっ！」

☆☆☆

力強く頷くモモンガだったが、ミッションの性質上、すぐに始められる訳じゃない。

相応の準備も訓練も必要になる。

それに、

「ボンには〃人として活動するときの名〃が、まずは必要じゃない」

リグリットはそう切り出した。

「えっ？ どうして？」

「モモンガはボンの本来の名、ヌシの骨オーバーロードの身としての名じゃろ？ 世の中には名を用いてかける呪いもある……じゃが、真名を知られなければどうということはない」

うーんとモモンガは考え込むがリグリットは力カツと笑い、

「なに、難しく考えることはないぞえ。冒険者など本来の名を捨てた者なぞ〃まんとおる。名がないと不便なのでつけるようなものじゃて」

モモンガはふと自分が漆黒の鎧を身に纏つてることを思い出した。
しかもこの世界では〃南方系〃と認識されることが多い黒い瞳に黒髪だ。

「〃暗黒戦士〃……」

ふとそう口から漏れた。

「なぬ？」

「いえ、黒い見た目のまんまですけど……」
黒騎士ブラックナイト〃っていうのも考えたんですが、割とメジャーな響きなので他の人も使ってる気がし

て」

「ああ、たしかに歴史上には黒騎士を名乗った者はごまんとおるな。そういえば十三^み英雄^{うち}の一人も、黒騎士を名乗っておったわい」

「でしょ？ だけどダークウオリアーなら似たような意味でも誰も使っていないでしょうし、第一、俺は騎士ってガラじゃないですから」
きつとモモンガの中での騎士像は、かつて同じ時間を過ごした白銀の聖騎士なのだろう。

「ダークウオリアーか……いいんじゃないか？」

ツアーもその響きが気に入ったのか、賛成の意を示した。

こうして、かつて鈴木悟と呼ばれた青年……モモンガとしての再出発、そして生涯“もう一つの名”として背負う名が決まったのだった。

だが、彼がこの世界に旅立つにはもうしばしの月日が必要だった。未だ出てこぬ“もう一つの姿と名”はこの時は影も形もなく、また何より……そう遠くない将来に伴侶となる最愛の存在と出会ってもいないのだから。

だが、それを今語るのは野暮と言うものだろう。

もし再び過去を振り返る日があるのなら、その時に改めて……

第37話：「モモンガ様は非常に凝り性です」

時間軸は再び現在へと戻る……

「モモンガ、今日はどういう用件だい？」

「ツアーの顔を見に来たってだけじゃ駄目か？」

ツアーが八欲王の遺産を守りながら塹とする神殿と思しき場所……久しぶりというほどの長い時間は経ってないが、モモンガが一番最初に会ったときの姿のまままでここを訪れていた。

「こんな顔でよければいくらでも、さ」

ひじょーに余談ながら……この骨と竜、同性ながら二人になると未だにイビルアイことキーノが嫉妬するほどダダ甘な気配を出すらしい。

本人達の名誉のために言っておくが、揃ってBL趣味はないことを断言しておく。

「だが、そのためだけに君が来るとは思えないな？」

「お見通しか。いや、今日は俺が住むカルネ村に珍客があつてね。ついでにそれをツアーへの土産にしてみたのさ」

パチンとモモンガが骨の指を鳴らすと、開きっぱなしの《ゲート／転移門》から次々と安眠シユラワド・オヴ・スリープの屍衣を担いだスケルトンが現れた。

「モモンガ、それは？」

「スレイン法国名物六色聖典が一つ、陽光聖典……の成れの果てさ」

「そりゃ結構なお土産で」

中身を察したツアーが愉快そうな笑い声をあげた。

「法国との取引材料にするといいよ」

「いいのかい？ 奴やつこさん達、必ず蘇生するんじゃない？」

「構わないさ。法国にデスペナのほとんどない第9位階魔法《トウル・リザレクション／真なる蘇生》を使える者がいないのはほぼ確定だ。連中が使えるのは、《オーバーマジック／魔法上昇》を使っても

第8位階までが精々だろうし。つまり、」

モモンガは苦笑する気配と共に、

「大袈裟な儀式を行って蘇生するにせよ、陽光聖典全員の大幅なレベルダウンは免れないのさ。法国に無闇やたらにケンカを売るつもりはないけど、恩を着せるふりをして戦力減少を謀れる好機だと思ってるよ」

モモンガの予想だと、法国が使うとすれば第5位階の《レイズデッド／死者復活》が関の山、どれほど陽光聖典の価値を高く評価し頑張ったとしても第7位階《リザレクション／蘇生》が精々だろう。

いや、蘇生魔法の層の薄さから考えて、リザレクションは厳しいか？

いずれにせよ、ニグンや隊員達の大幅なレベルダウンは避けられず、陽光聖典としての活動は難しくなると踏んでいた。

実際、この予想は当たり陽光聖典は部隊活動を凍結。復活したニグンもとある漆黒聖典の一人の付き人扱いでダウンしたレベルを取り戻そうと奮闘する日々を送ることになるのだが……それはまた別の話だ。

「あつ、忘れるところだった。ツアー、これはオマケだ」

とモモンガは水晶塊を立てかけてある白銀の鎧に投げる。

間髪いれず鎧は動き出し、それをナイスキャッチ。

相変わらずツアーの操作術は巧みであった。

「ほう、これはなんだい？」

「〃魔封じの水晶〃。ツアー待望のユグドラシル産アイテムだ。中に封じられてるのは第7位階魔法《サモン・エンジェル・7th／第7位階天使召喚》、首無しの天使こと〃ドミニオン・オーソリテイ威光の主天使〃を呼び出す奴さ。端的に言えば、冒険序盤の中ボスを呼び出すアイテムかな？」

「へえ。仕事熱心な孝行息子を持って私は幸せだよ」

とツアーがお気に入りのネタを披露すれば、

「照れるじゃないか。〃母さん〃」

「モモンガ、ここは〃父さん〃と呼ぶべきところじゃないのかい？」

「いや、婆ちちゃんがこう呼んだほうがツアーが喜ぶって」

「あの悪戯者めっ」

古い友人にどうやって仕返ししてやろうかと頭を捻らすドラゴンがそこにいたという。

☆☆☆

「ツアー、その水晶、中の魔法を開放すると多分トラップが発動するぞ？」

「トラップ？　どんな？」

「おそらく感知系の魔法が自動起動するタイプだと思うけど……確認はないな。ただ陽光聖典の隊長が持っていた物だから、極端にヤバいものじゃない筈だぞ？　常識的に」

「モモンガ、スレイン法国に常識を求めるのか？　随分、無謀な事を考える」

「それもそうか」

ツアーの皮肉にモモンガは苦笑で応えるが、

「しかし、このまま持っておくのも気味が悪いな」

「なんだったら、ここで発動させてみるか？　覗き見対策ならバッチリとってるし、それ以外の魔法でも俺なら大抵の事は対処できるから」

　　というかツアーの峙自体が探知魔法や搜索系魔法への万全の対処がしてあるため、大きな心配は要らないかもしれないが。

「ん？　陽光聖典の隊長とやらしか発動できないような細工はされていないのかい？」

「特に個人認証化もされてないし、これといったロックもかかってない。というか多少の素養があれば誰でも発動可能になってる時点でかなり無用心だよ。まあ、中身が威光の主天使じゃあ、あんまりロックかける意味はないかもしれないけどさ」

「なるほどね。物は試しか。やってくれるかい？」

「りよーかいだ」

こうしてモモンガは水晶に封じ込められていたドミノン・オーソリデー威光の主天使を召喚するが……

“びきつ”

「あつ」

小さな音を立てて空間の一部がひび割れ、それがすぐに修復される。

モモンガはそのエフェクトに見覚えがあった。

「どうやら俺の攻性防壁が仕事したみたいだ。やっぱり感知系だったか……」

「ちなみにモモンガ、どんな防壁をしかけてたんだい？」

「大したもんじゃないよ。《トリプレットマジック／魔法三重化》、《マキシマイズマジック／魔法最強化》、《ワイデンマジック／魔法効果範囲拡大化》、《ペネトレートマジック／魔法抵抗難度強化》、《エクステンドマジック／魔法持続時間延長化》をかけた《チェイン・ドラゴン・ライトニング／連鎖する龍雷》が消える時間ギリギリまで暴れ回り、その時感電死した者を触媒に、《テイレイマジック／魔法遅延化》で時間差をつけた最大6体のデスナイトが顕現するって感じ」

さらつと言いつ切るモモンガ。

原作と比べるとどっちが被害が大きいかはさておき、1000年の時は彼を随分と凝り性にしたようだ。

「言葉を聞く限り、随分派手っぽいね？ 竜を象った雷が暴れ回りゾンビの巨人騎士が現れるなんてさ」

ツアーと未だに切れず離れずの良好な関係のせいか、それともリスペクトされてるのか？

モモンガはドラゴンと名の付く魔法を比較的好んで使う傾向がある。対処の面倒臭さからデスナイトを選んだが、内心「触媒召喚するのはスケリトル・ドラゴンの方が良かったかな？」とか思っていた。「派手なだけだよ。むしろ威力より見栄え重視？ オマケにドツキリ要素を加えただけ。電気に完全耐性をもつツアーなら問題にもならないだろ？ デスナイトじゃ何体いても相手にならないだろうし」

（よし、やっぱり次はファイナールにスケリトル・ドラゴンの団体召喚を

追加しよう。20体くらいで骨竜^{デスパレイド}大行進させれば、見栄えもそれなりに良くなるだろうし」

やはりどこかずれてるお骨に、

「そりやそうだけどね。やれやれ、法国の連中に少しだけ哀悼の意でも示したくなるよ」

そう苦笑するツアー。

「いいじゃないか法国だし。それに六大神の遺産なんて大層な代物をいくつも隠し持ってるんだろ？ どうせ大したダメージも出ないうちに鎮圧されるさ。むしろ嫌がらせ程度にしかなくてない気がしてきた……」

「いくら法国でも、それだけ仕込めば流石に少しはダメージ出るんじゃないかな？」

しかしツアーもモモンガもこの時はまだ知らなかった。

この一撃で《ブレインナーアイ／次元の目》を使っていた土の巫女姫とその取り巻きが文字通りに全滅。神殿自体も大ダメージを受け、オマケに半ば消し炭と化した遺体が搬送中にデスナイト化し、更なる惨禍を撒き散らしたことに……

まじかる☆ぷりんせす ラナーちゃん

第38話：“前半↓暗部との対峙、後半↓黄金という二つ名の真なる由来？”

さて後日。場所は変わってトブの大森林南西部の某所……

「やあ、待ってたよ」

と中身が空っぽの白銀甲冑はむしろ親しげに片手を挙げて“彼ら”を迎えた。

「先日は随分と大変だったみたいじゃないか？」

「……よくも抜け抜けと」

そう今にもギリツと音が聞こえそうなくらい奥歯を噛み締めるのは、見た目は粗末な槍を手にした黒髪の青年だった。

「私の友人曰く『見た目が派手なだけで、そんな大した事はしていない。精々嫌がらせ程度』そうだよ？ 私なら問題なく対処できるとも言っていたかな？」

青年の後ろについていた一団から殺気があがるが、槍の青年は手を伸ばしてそれを制した。

「それなりに苦労したようだけど……その程度の実力で、友人の住む村に随分とナメた真似をしてくれたそうじゃないか？ いい度胸にも程があるよ」

ツアーは竜の超感覚のせいか、かなり大雑把ではあるが法国で唐突に巻き起こった惨禍を把握していた。

モモンガが仕込んでいた色々強化した《チェイン・ドラゴン・ライトニング／連鎖する龍雷》と時間差で触媒召喚されたデスナイト×6での総死者数はざっと2000人以上〜3000人以下というところか？

無論、一番市民に被害を与えたのは、半壊した神殿から搬送中の遺体が化けたデスナイトだ。

だが、同時に相変わらず油断のならない相手だとも思う。特に目の前の連中……

この世界では伝説のモンスターに数えられるデスナイト、それもモンガがボーナスが付く〝死の支配者〟^{オーバーロード} モードで召喚した強化版だ。

1体で街ひとつを簡単に生きる者なき〝死者の都〟へ変えるデスナイトが6体もいたのに、その程度の死者で抑えているのだから。

「カルネ村の襲撃は想定外だ。かの村は襲撃リストには記載されてなかった……現場の独断だ」

「ふくん……それが言い訳になるとでも？ 法国には監督責任という言葉はないのかい？」

口調こそ軽いですが、ツアーの言葉に笑いは入っていないかった。

「ツアインドルクスⅡヴァイシオン……我々をここまで呼び出した理由は何なんだ？」

「フン。まあ、いいか。確かに君たち〝漆黒聖典〟と長々と立ち話するなんてゾツとしないしね」

デスナイトがスレイン法国神都に齎した被害が極小に済んだ最大の理由が、この漆黒聖典の緊急出動だった。

実際、この連中が出張り素早くデスナイトを駆逐しなければ、法国の死者はもう少し少なく見積もっても方はいつていただろう。

その事態でさえ、番外席次^{切り札}を切っていないのだから小癩なものだ。ツアーは面白くなさそうに森の奥に顔を向け、

「奥に陽光聖典隊員の遺体がある。我が友は君たちよりずっと寛容だね。村を襲撃した〝不埒者達〟を深く追求せずに返却するそうだよ。これ以上、法国と波風立てる気はないとき。持って帰りたいなら好きに持って帰るといい」

そう言い切ると気配を戦闘時のそれに切り替える。

その急に濃度をました殺気に思わず隊長以外の漆黒聖典は武器を構えようとするが、

「やめろ。安い挑発だ」

「漆黒聖典、一つだけ言っておく。私は友人ほど寛容にはできてない

んだ。これ以上ふざけた真似をするなら……」

「全面戦争でもするか？」 ブラチナム・ドラゴンロード 白金の竜王」

「それも吝かじゃないってことさ。ただ、その時は覚悟するといひ
……」

ツアーは声から温度を消し、

「彼は寛容で温厚だが、怒らせたら私よりずっと怖いぞ？」

「ほう……それは興味深い」

「なんだったら試してみたらどうだい？ 私としてもスレイン法国と
いう名が歴史用語になるのは大歓迎なんだ」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆

さて、再び場所は変わってリ・エステイーゼ王国、王都。

ロ・レンテ城内、ヴァランシア宮殿、離宮……別名“ラナーの勉強
部屋”

原作と呼ばれる世界とは少しだけ異なる風景が王城にはあった。

そう大きく分けて三つの建物から成り立つ王族が住まうヴァラン
シア宮殿……より少し離れた場所に、こじんまりとした離宮が建つて
いるのだ。

幼き日のラナーが、記憶に残る限り生まれてはじめての我侘^{わがまま}、「勉強
部屋が欲しい」と国王ランポツサーIII世にねだって建てさせた離宮
だ。

彼女はみかけはただの瀟洒な館だが、実はラナーと“先生”しか知らない多くのマジックアイテムやギミックが仕込まれており、色々な意味で実に快適で居心地が良かった。

ちなみに調度品に擬態していたり他の何気ない日用品に紛れていたり、あるいは壁紙やカーペットやシャンデリアなどの内装自体に仕込まれてる魔法的な品々は先生に着工祝いや新築祝い名目で貰ったものだ。

ラナーは「王城の中で最も安全な居場所」であるこの離宮をこよなく愛していた。

なにしろこの離宮には先生との思い出が詰まっているのだ。思えば先生に初めてを捧げたのもこの場所だった。

破瓜の痛みに驚くも、それが強い快楽となつて思わず緩くなり、盛大に黄金水を放出してしまったの今となつてはいい思い出だ。

その時も先生は「赤ちゃんみたいで可愛いよ、ラナー」と優しく頭を撫でてくれて……また漏らした。きつとそれでクセになつてしまったのだ。

それ以来、先生の前での放水は彼女のゾクゾクするほどのお気に入りだ。よほど彼女の性癖タレントと相性が良かったのだろう。流星は黄金姫と呼ばれるだけのことはある。

今では絶頂時イクだけでなく、もよおしてくると両脚を開いて先生に見て貰ったり、先生の前でスカートをたくしあげて立ったまましたり、溜まってきたらおなかを押してもらつてポンプごっこで遊んだり、オムツプレイをしたりと何かとバリエーションを増やし進化していた。先生も可愛いと一部分を膨張させながら喜んでくれるし、排泄行為という不浄で恥辱な姿を先生に見られて嬉しい。

これがきつと先生の国の言葉で言う“Win-Win”どっちもお得”ということなのだろうと聡明なラナーは理解していた。

あるいは需給バランスなのだろうと。

そしていくら粗相をしても、痕跡が魔法の力で跡形もなく消え去るのもこの場所を愛する理由の一つだった。

もうなんの勉強部屋なんだかツツコミたくなるが、きつとラナーな

ら期待を裏切らずにサムズアップしながらイイ笑顔で言つてのけてくれるだろう。

『もちろん保健体育の実技の為ですわ♪。そのためにわざわざこの離宮を建てたんですもの♪』

と……

そして彼女が好むのは水芸だけではない。先生が別世界に普通の人間として生きていた頃、山ほどロリゲーを貸し与え布教活動をしたバードマン的（あるいはその眷属たる吸血姫的）な意味での多彩さを誇るのがラナーという、裕福で栄養状態が良さそうな割には小さく部分的に平たい少女だ。兄二人があんななのに。

何やらその幼さをそこはかとなく残す体形にさえ作為的なものを感じるが……

ちなみにその多彩さの一例だが……ヒントを言うなら、彼女は“犬好き”だ。

それだけ聞くなら原作と同じだが、『自分がなりたいくらい犬が好き』というコメントを聞く限り、どうやら違うベクトルのようだ。

好意的な解釈をするなら、現在進行形で滅び行く王国の王女として何かとストレスが溜まってるので、水分と一緒に体外へ放出したいのだろう。

絶対、違うだろうが。

そして今、先生以外の殿方があまり訪れることのないこの場所に、珍しい部類に入る客が訪れていた。

勿論、先生ではない。

そう、

「うふふ。随分と急なお越しですね？ ストロノーフ様」

第39話：“ラナー無双篇・マジカルプリンセスが
ホーリーアップですわ♪”

外周1400m、12の巨大な円塔が防衛網を形成し、城壁によつて囲まれている王城ロ・レント。

その中には奇妙な建物がある。

外観はさほどおかしいという訳ではなく、むしろ周囲に風景に溶け込むような離宮……その離れその物が勉強部屋名目で建てられたり・エステイーゼ王国第三王女ラナー・テイエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフのプライベートルームだった。

普段、先生と呼ばれる人物と父親以外の殿方が訪れることはないこの空間に、今日はどちらかと言えば珍しい類の訪問者があった。

その客の名はガゼフ・ストロノーフ、王国戦士長である。

「なるほど……ダークウオリアー様がそのような事を」

貴族趣味に加えて少女趣味全開に見える内装にインテリアの数々、だが実は巧妙に偽装されたマジックアイテムやギミックの巣窟たるこの空間に、なぜガゼフは訪れたのか？

まあ、実は訪れること自体は問題はない。

紛いなりにもガゼフは王の側近中の側近であり、建前的には「王族の護衛」という名目で登城が許されているからだ。

立場的にはこの離宮の真相も知らずに幾度となく来ている元貴族の冒険者ヴァージンスノウ嬢より上なのである。

だが、当然何の理由もなく無骨者である自覚のあるガゼフが進んでこの場所へ足を運ぶことはない。

しかし、今日は特別だった。

「ラナー王女、本当なのですか？　王国が法国の意向で建国されたというの……？」

するとラナー曰く「頭のよろしくないからこそ価値のある貴族た

「ち」が間者に送り込んできたが、とつくに先生から貰った魔法のハン
ドベルで《ドミネート／支配》をかけ、便利な道具に成り下がったメ
イドたちに紅茶を用意させたラナーは、ティーカップを傾けながらク
スクス笑い、

「見かけによらずストロノーフ様は可愛げのある方ですね？ 見直
しましたわ」

「ど、どういう意味でしょうか？」

相手は敬愛すべき王族（ただし王子は除く）ではあるが自分の半分
ほどの年齢の娘にからかうような視線を向けられ、思わずドギマギし
てしまう中年剣士だったが、

「だってそうでしょう？ 今更、その程度のことを気にするのですも
の」

「今更？ その程度？」

ギョツとするガゼフにそのリアクションが気に入ったラナーは、
ちよつとだけ茶目つ気を出し、

「このまま会話を続けるのは吝かではありませんが……ちよつとまど
ろっこしいですね？ せつかくこうして顔を合わせてるのですか
ら。えいっ♪ 《チャームパーソン／人間種魅了》♪」

「はうっ!？」

いきなり魅了の魔法をかけられ、さつきと違う意味でドキドキして
しまうガゼフ。

今まで礼儀として保っていた心の距離、いや間合いを強引に詰めら
れ、心の防壁が突き崩され中から親しみが染み出すような感覚……現
代人なら堤防やダムが決壊に例えるだろうか？

だが溢れ出る“人工的な親しさ”にガゼフは頭を振り飲み込まれ
ないように注意する。

「これは驚きました。不完全とはいえ、アイテムもなく精神力だけで
抵抗してみせるとは。流石はお父様の見込んだ王国戦士長というこ
とでしょうか？」

「ラナー王女……何を……何故、私に魔法を……？」

「だって仲良くなりたかったんですもの♪ クライムを預かってもら

うという縁ができてから、いい加減時間も経ちますし、貴方もダークウオリアー様との知己も得た。ね？ いい加減、わたくし達がもつと親しくなってもいい頃合だと思いませんか？」

「……しかし……」

ガゼフは一人でこの離宮に乗り込んできたことを後悔していた。

見かけはどんなに乙女チックでも、ここは魔窟……いや、小さな魔王城だったのだ。

「というか王女が魔法を使うなんて聞いていない!!」

そして今更だが……ラナーの言う未だ名の出てこない先生は、間違いなくこの世界屈指の魔法使いで、ついでに赤い宝玉仕込んだ立派な骨格と立派なマラー様を持っているのだろう。

つまり、彼女はキーノ達同様にある男の『一つは骨で二つは人間の、《三つある全ての姿》を知っている』数少ない人物の一人なのだ。

「まあまあ。これからは込み入った話になりますし、肩の力を抜きましょう？　ねっ、ガゼフ隊長♪」

☆☆☆

「まず重要案件を話す前に、この私の勉強部屋と取り巻く環境について説明しておきますね？」

「は、はあ……」

何か色々諦めたような顔をしている王国戦士長がそこにいた。不屈の漢には似つかわしくない表情だが、相手が自ら仕える王族なのでから仕方ないという心境だろうか？

それにいけ好かない王子じゃないし。

「建物自体にも部屋ごとにも《サイレンス／静寂》が常時展開されている完全防音なので、よほど強力な魔法を使われな限り声が外に漏れることはありません。また盗聴だけでなく覗き見なんかの他の感知魔法を使われた場合も含めて《アラーム／警報》が鳴り、対抗魔法が起動しますので問題ありません」

ちなみにこれも水晶の置物に偽装したアイテムに組み込まれた、一

種の攻性防壁が常時展開されているのであるが……ラナーのイメージもあるのでモモンガのそのように凝りまくった凶悪な代物ではない。

精々、レイスやらゴーストやらハイ・レイスやらが仕掛けた術者の元にまとめて召喚、わざと対象を逃げさせて消える瞬間までよってたかって追い掛け回すというラナーらしい悪戯心に溢れた可愛らしい(?)術式だ。

これを仕込んだ先生とやらによると、

『名づけて攻性防壁(弱)術式《ハロウィン・ナイト／亡霊の馬鹿騒ぎ》という感じかな?』

「またこのメイドたちは貴族たちのひも付き……ですが、永続性の《ドミネート／支配》をかけていますわ。ただ、それでも魔法が解けた場合に記憶が残りますので、同じく永続性の《メモリージャミング／認識阻害》を重ねがけています。具体的には、メイドたちはガゼフ隊長が来たと言う大雑把な情報は記憶できても、何が話されていたかまでは覚えられません。例え真横で聞いていたとしても、意味のないあやふやな情報として認識されますから」

「何やら難解ですな」

少しは碎けた雰囲気になってきたガゼフに彼女は微笑み、

「まあ、そういう魔法だと思ってください。こういう場合は、先生曰く『深く考えたら負け』だそうですね」

「なるほど、真理だ」

「更に今は人払いの魔法をかけているので、何重に安全ですわ♪どんな話をしようとも、ね」

ラナーは慣れていた、というより手馴れていた。行動にいちいち卒が無い。

まあ、思う存分乱れてもいいように、先生が来るたびにいたして居るのだから当然かもしれないが。

「さて、ガゼフ隊長がお聞きになりたいのは、」

ラナーにつこり微笑み、

「他人の国に勝手に期待し勝手に失望した独りよがりのお馬鹿な宗教国家と、安寧を耽溺するあまりに危機感ないまま屋台骨まで腐り果て、もう崩壊の秒読みに入ってる救いようのない我が国にまつわる“喜劇”でしたわね？」

その言葉はどこまでも辛辣だった。

☆☆☆

ラナー・テイエル・シャルドルン・ライル・ヴァイセルフ

種族：人間（ヴァイセルフ王家第三王女）

自称・黄金姫、黄金（水）姫、先生の愛弟子、先生の最愛の教え子、

先生の妃、先生の愛犬 e t c e t c ……

職業Lv

プリンセス：Lv5

バトル・プリンセス：Lv3

アクトレス（ジーニラス）：Lv5

クイーン：Lv1

知恵者ワイズマン（ジーニラス）：Lv5

策士（ジーニラス）：Lv5

ウィザード：Lv3

魔女ウィッチ：Lv3

軽戦士フェンサー：Lv2

ソードダンサー：Lv2

総合Lv34

固有異能タレント：思考加速と擬似並列思考化マルチタスク

特殊装備

魔法のサーベル（名称現在不明。拵えは装飾剣／儀礼剣っぽい華美

な物)、フェアリー・ダガーズ(ロングスカートの下、ガーダーベルトに装着されるいつも携行してる護身用短剣。外からそうと見えない隠し武器「おいきなさい。わたくしの妖精たち」)、他にも両手のブレスレットにバングル、チョーカー、サークレット、リング、アンクレット等々様々な「装身具に見えるマジックアイテム」があるようだ。無論、これら「いつもは会えないし、そばにずっと居れる訳でもないから護身具代わりに使いなさい」と先生からのもらい物。身内にはほとんどんかく、過保護なお骨様である。

特記：素でも《フライ／飛行》で飛べるが、飛行の時は箒ではなく専用のフライングボードを愛用(箒と同じくウィッチのクラス補正が入る)したりする。

割とお転婆だが、それを隠す気はあまりないようだ。姫様らしいことをしない／興味を示さないため、原作と違い周囲(特に次兄)の評価は「化物」ではなく「係わり合いになりたくない変人」に落ち着いている。

備考

“先生”に言わせると、初めて会ったときには既に『プリンセス、アクトレス(ジーニアス)、ワイズマン(ジーニアス)、策士(ジーニアス)が発現し、それぞれLv1ずつ持っていた』。ネムと同じくジーニアスを三つ持つ真性の天才。

実はエンリとほぼ同期。共に過ごしてる時間差を考えると、エンリとのレベル差が1に収まっているのは、彼女が天才であるだけでなく先生がいけない間も続けてる不断の努力の賜物だろう。

それだけでなく普段からつけてるチョーカーは、『自分の能力を下げる代わりに獲得経験値を上げる首輪』のデザイン違い(受肉モードでクラフトマン技能を持つてるところかお骨様がデータクリスタルで普段着けられる外見に変えたらしい。またデザインパターンはいくつかあり選択できる。何故か犬の首輪っぽいデザインも入っている)であり、その効果もある。

総合Lvはガゼフに匹敵するのにガゼフが何も気がつかないのは、このチョーカーでスペックダウンしてるせいと能力欺瞞の指輪のせ

いのようにだ。

聞きなれない職業^{クラス}レベルが多いが簡単に説明すると、バトル・プリンセスは戦闘技能持ちのお姫様が取れるスキル、クイーンはプリンセスの上位互換のようなものだが……既に発現してるのが未恐ろしい。ワイズマンはまんま知恵者でレベルが上がるほど学習能力／記憶力が高くなる模様。策士はまんまだろう。

魔法職系はラナーにねだられ自分もラナーに教えられる数少ない分野（と本人は思っているが、ラナー曰く『生きること全ては先生から教わった』）ということに教えた中で発現。特にウィッチは^{スベルキャスト}術式投射より飛行術／魔法薬練成／錬金術に高い適性をもつクラス。フエンサーとソードダンサーは、先生が護身術として剣術を教えるうちに発現した。

余談だが、某ヴァージンスノウと犯罪結社の剣舞担当の人に続く三人目のファンネル使い疑惑。そりゃ本人がこれだけ強ければクライム君にも特別な興味を示さなくなるだろう。

目下の目標は長距離の空間移動系の魔法を覚えること。第3位階魔法まで使える(!?)ので『ティメンジョン・ムーブ／次元の移動』はできるが、カルネ村めでひとつ飛びするにはまったく距離が足りない。

また習得クラスも含めエンリと好対照で、

エンリ：将軍／指揮官係、神官／信仰系魔法、メイス等の重装備が得意。防御力に定評。タレント：現状確認できず（発現しないと一言っていない）

ラナー：姫／女王（政治）系、英知系技能、純粹魔法職、サーベルやダガーなど軽装備が得意。運動性に定評。タレント：あり

ただし方向性は違うが、どちらもワン娘体質。

第40話：ラナー無双篇・先生仕込みの講義開始ですわ♪”

ヴァイセルフさん家三女のラナー姫は、聡明な少女だ。

多少、変た……少々風変わりな性癖をしていても、他人に迷惑をかける分、八本指の特殊娼館を愛顧する王国の腐れ貴族に比べれば可愛いものだろう。

「他人の国に勝手に期待し勝手に失望した独りよがりのお馬鹿な宗教国家と、安寧を耽溺するあまりに危機感ないまま屋台骨まで腐り果て、もう崩壊の秒読みに入ってる救いようのない我が国にまつわる”喜劇”でしたわね？」

最近、性癖に限った話に限らず更に色々尖がってきてる気もするが、歪んでない分マシ。歪んでない分、残念臭がしないでもないが、毎度立ち込めるアンモニア臭に比べれば微々たる物だ。

「結論から言えば、王国の成立が法国の意向なのは事実ですわよ？法国は肥沃な土地が多くの人を育み、異形種と戦う勇者たちが現れることを期待していたんですわ。ちなみに今の王国貴族はその当時、建國に出資した地主や商人達ですの……まだ200年も経ってないのに何を根拠に高貴な血とか言っているのやら。お笑い種だとは思いませんか？」

実に楽しそうに話すラナーだが、聞いていたガゼフは笑うに笑えなかった。

だが、奇妙な説得力があった。

そもそもリ・エステイーゼ王国の建国は200年前の十三英雄が活躍した”魔神戦争”の後だ。

より正確に言うなら、暴走したNPCが引き起こした騒乱で滅んだ大きな人間の国を、アゼルシシア山脈を挟む形で東西で再編したのが今のバハルス帝国とリ・エステイーゼ王国だった。

「彼らは大半は、元々貴族でも何でもありませんわ。確かに王国よりも古くから続く名家もありますが、言ってしまうえば総じて王国の出資者。その出資額に応じて与えられたのが爵位……要するに今の貴族位はいわば“売位”の産物と考えて差し支えありませんわ」

一氣に言い切ったラナーは、一度冷えかけた紅茶で喉を潤し、

「そして法国にスカウトされ建国事業、アゼルリシア山脈西部の人間国家再編事業の代表を請け負ったのが初代国王……その程度の話です。たった200年にも満たぬ歴史じや伝統も高貴もありませんですもの。まあ、その事實は隠蔽されてますからガゼフ隊長が知らなくても無理はありませんが、王国貴族なら誰でも知ってることですのよ？」

何やら王国の闇、その深遠を覗いてる気分になつてきたガゼフだったが、この姫様はさらに容赦なく追い討ちをかけるタイプだった。

「ガゼフ隊長、これで王国も今は“威張りんぼジル君”……もとい。鮮血帝のおかげで数を減らしましたがちよつと前まで帝国にもうんざりするほどいた貴族が、なぜ能力如何に関わらず無駄にプライドが高く嫉妬深く、領民のことを考えず人間としての質が最低で最悪なのか理解できたでしょう？　ほとんどの貴族は無意識だろうが無自覚だろうが常にコンプレックスを抱えていて、その裏返しが今の平民を人間と看做さない高慢さや傲慢さなんですよ。それはそうですよね？　誇るべき伝統も格式も、それらに裏打ちされた高貴さなんて物も本当は影も形もありませんよ、誰よりも知っているのが貴族たち本人なんですから」

そしてラナーはチャーミングにペロツと舌を出し、

「まあ、人材の質の悪さに関しては王族も人のことは言えませんけどね」

その笑顔が歪んだ人とかけ離れたようなそれだったら、まだ良かった。

だが、茶目つ気たつぷりのラナーの笑顔は、素……戦場で磨きぬかれた剣士の勘がそうであることをガゼフに告げていた。

そう、心底楽しそうにラナーは国家の暗部をしゃべってるのだ。い

くら聡明であつても、未だ10代の少女が、だ。
ガゼフはそれがたまらなく恐ろしく感じた。

☆☆☆

正直、ガゼフは今すぐに家へと帰り深酒をし、布団に包まって不貞寝したかった。

だが、勿論ラナーはそれを許さない。

何しろ先生直伝の“講義”はまだ終わつてないのだ。

「それにつけても法国は馬鹿だと思いませんか？」

自ら“湯が冷えないティーポット”から紅茶を煎れ直しながらラナーは続ける。

「人間なんて愚鈍で脆弱で臆病な種に安寧で肥沃な土地など与えたら、墮落するに決まつてるでしょうに。凡そ全ての生物は生存のために戦い、人間は殊更恐怖のために戦う……生存の危険がないのに戦うなんて奇特な事をするのは、少数派に過ぎません。その程度のこと子供でもわかるでしょうに」

「なら、私はその奇特者に入るといふことですか……」

すると途端にラナーは面白いものを見つけたような顔になり、

「ガゼフ隊長、なぜ貴方は王国戦士長……いえ、剣士になつたのです？」

「それは私には剣しか……腕っ節しかなかったからです」

「けっこうけっこう」

その返答にラナーは満足そうな顔をし、

「つまり腕っ節でお金を稼ぎ、そのお金で参加費を払って出た御前試合でその強さを証明し、そして現在の戦士長に至る……ほら？ 生存に直結してるじゃないですか。貴方に剣の腕がなければ、今頃どこで何をしていたと思います？」

「そ、それは……」

すぐに答えられぬガゼフを気にした様子もなく、

「実力で勝ち取ったものですもの、誇つていいことですよ♪ さて、

戦わずとも生存の危険がなくなった人間は次に何を求めると思いますか？」

ガゼフは少し考え、

「豊かさ……ですか？」

「正解ですわ♪ 思ったよりも頭の回転が速いようで何よりです」

そしてラナーは最初から不足気味だった遠慮が、輪をかけてなくなってきた。

「豊かさ……端的に言えばお金、ですわね。皆がガゼフ隊長程度、生活に困らない位あればいいなんて慎ましやかな金欲なら問題はないのですが、大半はそうじゃない。金庫がいっぱいになっても金蔵が破裂してもまだ『金が無い』とのたまうのが人間です。それに金は欲だけでなく嫉妬心も高効率で誘発するものですよ？ よく言うじゃないですか？ 『金持ちが妬ましい』と。あれ、貧乏人だけの思いじゃないのですよ？』」

そしてラナーは思い出す。

先生との色気が無い類の思い出……決して城に籠っていただけでは得られなかった数々の経験。

素敵な素敵な“課外授業”……いや、色気が無いとは言い切れない。

むしろ、自分からおねだりして強引に濡れ場にもつれ込んだことも何度もあった。

“そう、誰もわたくしを知らない街の、人気の無い裏路地で先生に……”

思い出して体の奥から潤いが溢れそうになったが、今はまだ我慢と
思い直す。

今はまだ早いと。

「ガゼフ隊長、金持ちだって自分より金持ちは妬ましいんですのよ？」

それは彼女がその目で見た風景や情景……

「そして嫉妬は、相乗効果で更に欲望を増幅する……先生曰く『欲望は膨張する』、周辺国全てに戦争を仕掛けた国家元首が遺した言葉だそ

うです」

それは、先生のいた世界のとある独裁者の遺した言葉だった。

その存在は後世に爪痕に似た影響を与え続け、人類が終末を迎えたあの世界でさえ思想的末裔達が欧州アークロジューで戦を起こしたのだ。

「では際限の無くなった欲望が、次に求めるのはなんだと思いますか？」

「……皆目見当もつかないのですが」

「でしょうね。だって貴方はそれを使おうとしないどころか、持っている自覚すらない。だから今回の遠征もこうして追い詰められたというのに」

「えっ!？」

ラナーはにんまり笑い、

「答えは『権力』ですわよ。ガゼフ隊長」

ラナーにとってガゼフは中々教え甲斐がある生徒らしい。

勿論、ラナーのことだから思惑も他意もあるのだろうが、それでもどうやらこの語らいは気に入ったようだ。

それはガゼフ・ストロノーフと言う男にとって幸か不幸か……判断の難しいところである。

いずれにせよ、運命の歯車が大きく切り替わる……その切っ掛けになるだろう邂逅なのは確かだろう。

第41話：♪ ラナー無双篇・先生は叡智の源泉ですわ



『権力は腐敗する。絶対的な権力は絶対に腐敗する』……これも“先生”の言葉です。そして先生の言葉通り、王国において貴族と言う権力はどうしようもないほど、どうにもならないほど腐敗しました」

実はこの言葉、原典は初代アクトン男爵である“ジョン・エメリク・エドワード・ダルバークIIアクトン”が遺した格言だった。

それにしても……疑問は残る。

「先生の言うことはいつも正しいですわ。もしかしたら先生は人類という劣等種には、過ぎたる叡智の持ち主かもしれないですわね♪」

おそらく先生とは某ダークウオリアーとは別パターンの受肉モードだけで、中身は多分あのお骨様のはず。むしろ別の骨だか得体の知れない何だかが入っていたら驚きだ。

確かに異世界から流れてきた骨ではあるが……だが、「あばたもえくぼ」的な鼻肩目があるとはいえ真性の天才であるラナーに、ここまです評される存在ではないはずだ。

何しろ、最終学歴は小学校だ（義務教育が崩壊した世界では、それでもまだマシな方なのだが……）

その答えは唯一つ。原作の彼には無かった物……それは時間だ。

そう、先生の中の人ならぬ中の骨は、鍛錬以外の空いてる時間を読書に費やした。

ゲーム時代の彼の行動パターンは見る限り、彼は知識欲も好奇心も旺盛で、向学心が高く研究／探求熱心、オマケに偏執的な凝り性だ。

だから最初、評議国での下積み時代にこの世界の文字を覚えることもかねて、この世界の本を読み漁り世界を理解することに努め、やがて旅に出る前の修行あるいは訓練中に強制エンカウントイベントが

発生したキーノを連れ立って旅出た後もそれは続いていった。

そして数十年に及ぶ長い旅路の折り返し地点を過ぎた頃には、ビブリオフィリアとは言わないまでもかなりの濫読家らんどくかになっていたようだ。

そして、とつづくにこの世界の書物には飽き足らなくなっていて、“アッシュールパニバル最古図書館”に収められているかつての仲間たちギルメンが寄贈した蔵書に食指を伸ばしていた。

さて中でもお骨……先生お気に入りなのはエロに定評のあるペロロンチーノが、エロに厳しい運営の目を掻い潜り、ダミーデータで巧妙に偽装（エロマンガに参考書のカバーを被せるようなもの）し収蔵した“攻めたラインナップ”かと思いきや、さにあらず。

実は一番読んでいたのは、ギルド最年長者で本業が大学教授の“死獣天朱雀”が趣味と実益を兼ねて遺した専門の文化人類学や歴史、技術発展史の蔵書と、自然回復を目的とした研究所の平研究員だった“ブルー・プラネット”が遺した自然科学や農業関連の蔵書だった。

そう、先生がこの世界を知る上で必要な比較対象として選んだのが、自業自得で滅びの瀬戸際に立つ人類がかつて歴史を彩った政治／経済／軍事の出来事に加え、第一次・二次・三次産業である農業、工業、商業の詳細に至るまで記してあるこれらの蔵書だったのだ。

そう、これらの本はまだ中世／近世の途上にあるようなこの世界においては、教科書でありマニュアルであり同時に予言書ですらあった。

もし彼がこれらの本を片っ端から読破しなければ、きつと今頃は“超絶の黒い戦士”という名だけが広まり、カルネ村で神として信仰されることもなければ、ラナーに先生と呼ばれることもなかったろう。

彼はこれら知識を血肉の無い骨の身の情報学的血肉とし、時には実践と実験と検証を行い、一步一步確実に自分のものへとしていった。

100年前の彼でなく、今の彼をもし死獣天朱雀が見れば、きつと自分の大学で一度試しに特別講義で教鞭をとるように薦めたに違いない。

正体が最強の骨（何か骨太っぽい表現だが）である先生は、死獣天

朱雀とブルー・プラネットの収蔵タグがついた本の中には全く意味のわからないものもあったが、ならばと簡単そうなものから読み始め、少しずつでも理解を深めた。

無論、他にギルメンが遺した本も役に立ちそうな物や興味そそられるものは片っ端から目を通した。

時折、本に熱中しすぎて「かーまーえー！」と言わんばかりに一緒に旅をしているかまってちゃんの愛妻が、ペロペロしたりレロレロしたりハムハムしてきたりの妨害工作(?)をしてきたが、それでもめげることはなかった。

嘘だ。時々、いやかなりの頻度でめげた。具体的には甘えるしぐさが妙に猫っぽいのだから、構う以外の選択肢がなかった。

“可愛いは正義”とはよく言ったものである。

ちなみに意外でもなんでもないが、ペロロンチーノの蔵書を一番好んで愛読していたのはペロペロ／レロレロ／ハムハムしてきたその吸血姫な愛妻である。

懐かしき友人を楽しげに語る姿に軽い嫉妬を感じなくは無かったが、『下地を作っていてくれた』ことにも感謝しつつバードマン・コレクションをねだったらしい。

読書の時間が極端に削られることを恐れた骨は、よく考えもせずそれを受諾し、謎空間から表紙と中身の落差が激しい書物を諦めたような顔で取り出した。

『ほほう……モモンガはこういうシチュエーションやプレイが好みなのか……』

とりあえず確実に言えるのは、色々バリエーションが増えたようだ。

関係は不明だが、妻が妙にプライベートのコスチュームやら下着やらに凝るようになったのもこの頃らしい。

☆☆☆

「わたくしは先生から生きること全てを学びました。もし先生に出会わなければ、わたくしはきつと全てに退屈し、退屈に押し潰され、この世の何にも興味を持たなかったかもしれないわね……」

ありえたかもしれない自分の姿をイメージし、歪みきつた笑顔の想像の自分に少しだけゾツとするラナーだった。

ある意味、イメージしたのは最強の自分かもしれないが、冗談ではなかった。

あんな顔をしていたら先生の前に小さな胸をはって立てないではないか。そんな人生、送りたいとは思わない。

「そう言えば権力と腐敗の話でしたわね？　今更、身の丈に見合わぬ権力を手に入れた人間がどうなるかなんて、説明する必要もないでしょう。貴族つて分不相応のレッテルを貼り付けて、王宮あたりにはゴロゴロいますもの。ガゼフ隊長もよく目にしてるでしょ？」

「ま、まあ、そうですね」

その強烈な物言いに、思わず返答を淀ませてしまう生真面目なガゼフに、

「ガゼフ隊長……忌憚のない意見を聞きたいのですが、貴族たちを見ていて王国の未来は明るいと思いますか？」

「……それを私に聞きますか？」

「ええ。ガゼフ隊長にこそ聞きたいんですよ。何しろ貴方はこの王国の歪み、その体現者ですもの」

ラナーの言う通りである。

目の前の男は、「ただ平民の出である」という理由で無能な貴族たちに反対され、一代限りの名誉である騎士にすらなれなかったのだ。「騎士は貴族の名誉」というくだらない理由で。

「……明るい訳がない。国の礎となるのは民だ。その民を大事にせぬ国は、」

その先は口が過ぎるとガゼフは言葉を飲み込んだ。

「でしょうね。常識的な言葉でなによりです」

よくできましたとばかりにクスクスと笑うラナーに苦虫を噛み潰したような顔をするガゼフ。

だが、ふとその笑い声をラナーは止め、

「ところでガゼフ隊長」

「なんです?」

「わたくしの見立てですと、現状のままでは例え延命に成功しても、あと5年以内に王国は滅びますが、その後の身の振り方はいかがなさいます?」

特大の爆弾を落とすのだった。

第42話：〃 ラナー無双篇・わたくし、異能バトル系より日常系ラブコメが好みですの♪〃

「わたくしの見立てですと、現状のままでは例え延命に成功しても、あと5年以内に王国は滅びますが、その後の身の振り方はいかがなさいます?」

「らら、ラナー殿下下っ!?!」

飲んでた紅茶を噴出し、思わず王女から尊称が変わるほどに慌てる素直なガゼフだったが、

「ララ・ラナー」ってなにか響きがいいですわね? 先生に貸していただいた〃らのべ〃という書物に出てきそうな可愛らしさですわ♪」

本来、電子書籍……つまり単なるデータとして収められてる蔵書だが、他のアイテムと同じようにこの世界に引つ張り出す場合はきちんと物理的な形をとり、質量を持った本として現れる。

ただし本の装丁はこの世界の書物に準じたそれで、もしかしたらオリジナルのラノベスタイルだとファンタジー感が台無しなので人知が及ばぬシステムも空気を読んでいるのかもしれない。

ちなみに出てくる本は神聖^{日本語}文字で書かれてるのだが、ラナーは翻訳メガネ(女性用アンダーリムデザイン/赤いラウンドフレーム。ガ○パンの武部沙織モデルに酷似)を先生から借りてるので問題ないようだ。因みに先生、この手のメガネを多数デザイン違い(どうもユグドラシル時代、メガネチェーン店とのコラボ企画があった様で、当然のようにフルコンプしていた)で持っているらしく、割と関係者に各々のキャラに合わせばら撒いているようだ。

例えば、エンリが愛用してるのは同じ赤のアンダーリムでスクエアフレームのモデル、こちらはどちらかといえば〇おん!の真鍋和仕様というところだろうか?

そして意外と言えば意外だが、ラナーは異能バトル物より日常系ラブコメを好む傾向があつたりする。

例えば同じ学園物でも、“異能バトルは日常系〇なかで”より“冴えない彼女〇育て方”を好むらしい。

この世界とは全く違う世界観が理解できるか不明だが、ラナーに言わせると……

『例え世界が違おうと、例えどれほど文明が進もうと、あるいは価値観が異なろうと所詮人は人、どこまで行っても考えることや感情は大差ないようでむしろ安心しましたわ♪』

とのこと。

また異世界転生物を一読し、聡明な彼女は凡そ先生がどこから来て、どうしてこの世界にはありえない筈の知識を持ちえるのか理解してしまったようだ。

だからと言って先生の評価が変わるはずもない。

むしろ、それを当然として受け入れた。

思えば、募り募ってついに内から溢れた想いをラナーが伝えた時、「アンデッド実は不死者、正体は骸骨ただけ……」と人化を解除しやんわりと遠まわしに先生が断りを入れても、彼女は1ミリたりとも動じはしなかった。

むしろ、

『このわたくしが生涯の師とお慕いする先生が、ただの人間であるはずがないとずっと思っていましたわ♪ むしろ納得です。異世界人？

お骨ぼでい？ バッチこいですの!!』

とお骨を押し倒し、唇のない顔にキスの嵐&鎖骨をprprprなどやりたい放題。

まさか力任せに振りほどくわけにもいかず、何よりも初めてがお骨じや色々とあんまり、いやいやそれどころか将来的にラナーがお骨にしか萌えなくなったら一大事と、リング・オブ・ヒューマンビーンズ“人間の証明たる指輪”を嵌め直して慌てて受肉し、お骨から先生モードに変化。

かくてラナーは、盛大に黄金（水）姫に相応しい派手な放水ショーを披露する流れとなった。

とにもかくにも方向性は大方、かなり違うが「精神的人外性」はこの世界線においても健在なようである。

☆☆☆

「さて、ガゼフ隊長。そんなに声を荒げるほど驚く事実でしたか？」
「それはそうですね！ まさかラナー殿下の口からそのような言葉が……」

「ある程度の権力を持つてれば自然と行き着く結論ですわ。本気で判っていないのは無能な貴族ぐらいで、無能ではない貴族がいても打つ手がないので目を逸らす、あるいは口にはだしてないだけですわ」

「元々、ここ最近”威張りんぼジル君”……失礼。鮮血帝ジルクニフが、毎年毎年農繁期を狙って戦争をしかけてくるのは何故だと思いませんか？ 帝国だって戦費は無料タダって訳ではありませんのに。むしろ貴族を粛清してせしめた財産と浮いた国家予算の大半を、王国併合のための必要経費と割り切り戦費につきこんでるのかしら？ 本来、もつと富国のために生産性の高い分野に投資したいでしょうに、まったくお疲れさまってとこですわ」

「何やらどこぞの氷の妖精のような言い回しを始めるラナーだったが、

「直接的には農業生産高の減少化工事に労働力の間引き、大きく言えば経済減退による国力の衰弱化……常備軍が整備されてる帝国と違い王国は農民の徴兵、農繁期に攻められれば収穫が滞り石高に大打撃を与え、戦場で農民を殺せば労働力も消費人口も一気に減らせて一挙両得、一石二鳥。そもそも軍事費というのは性質的に生産性が皆無……作ったものが新たな拡大生産を生むわけでもなく、消費／消耗の一方。それはもう見事に『王国は衰退しました』への一步通行ですわね」

例えば剣や槍に使う鉄を鋤や鍬に変えて、農民に無償で貸し出せば、それだけ生産高に還元できる。

だが、兵器は戦場で使えば消耗の一途、生み出すのは敵と味方の死

てくれるでしょう」

「殿下……」

「まあまあ、そんな呆れた顔をしないでくださいませ。それに王国が経営破綻する前に飢饉の一つでも起こればその瞬間に王国終了のお知らせですわ。今の王国は一部の例外を除き余力はありませんし、余力がないのにも関わらず貴族は相変わらずの民も国も省みない贅沢三昧。その詰め腹は重税と言う形で平民に背負わせて平気な顔をしている……これで今回のようにスレイン・フランスの手が及ぶのなら、滅亡は更に早足でやって来るかもしれないわ」

どうやら今回の出征のカラクリを全て知っているようなラナーは笑みを濃くし、

「あつ、それなら重税に耐えかねた民衆の一斉蜂起という選択肢もございますわね。どちらかと言えばそっちの方がわたくし好みですわ。派手ですし♪」

王国に用意されたロクでもない未来……あまりに惨めな終末の予言を心の底から楽しみに告げるラナーに、ガゼフはウンザリしていた。

いや、正確にはもう詰んでるとしか判断できない王国に陰鬱な思いを感じていた。

その表情変化を見逃さなかったラナーは、だからこそこは畳み込むべきと判断したのだ。

「ところでガゼフ隊長は、ランポツサーイー世個人にのみ忠誠を誓っているのですの？ それとも王国に忠誠を誓ってますの？」

第43話：〃 ラナー無双篇・わたくしに仕えなさい♪

〃

「ところでガゼフ隊長は、ランポツサイ一世個人にのみ忠誠を誓っているのです？ それとも王国に忠誠を誓ってますの？」

そんなある種の核心を突いた質問に、

「なんとも答えにくい質問ですな」

実はこの返答、ガゼフが少しずつでもラナーに毒されてる動かぬ証拠でもあった。

少なくとも原作の彼なら、ここで言葉を濁すことはなかつただろう。

「もし、お父様のみに忠誠を誓っているのなら、万が一の時はもう縛るものが無い以上、自由にしてください。忠誠と言うのは誰かに強制されるものじゃありませんし、していいものでもありませんから」

「しかし殿下！… それでは……」

「いいですよ。今の王国にガゼフ隊長は過ぎたる存在なのは事実です。基本的なその後の進路は、帝国か法国に降ることですが……個人的にお勧めは帝国です。ジル君、鮮血帝は性格に難はありますが、能力至上主義の合理主義で人を見る目は確かです。悪いようにはされないはずですよ？」

明らかに去年のカツツエ平野での戦いで、ジルクニフからスカウトされたことを知ってる口調だった。

どうでもいいが、ラナーはどうも既に鮮血帝という恐ろしげな二つ名を持つバルス帝国皇帝ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルニクスと顔見知り、それも割と親しげ、あるいは近い感じだ。

実はこれまで二度ばかり“威張りんぼジル君”という発言をしていたりしている。まるで幼馴染のようなものだが……その認識はあながち間違いではない。

「だが、俺にどうしろと言うのだっ……!?!」

王城からの帰り道。他の誰でもない、不甲斐ない自分自身にガゼフは憤慨した。

確かにダークウオリアーの言うとおり、自分は見えてないものが多すぎた。足りないものが多すぎた。

それに気がつかせてくれたラナー殿下には、どれほど感謝しても足りないのかもしれない。

(王国が、もうそのような状態になっていたとは……)

『もしお父様に万が一のことが、いいえ。そうでなくとも貴族派貴族たちの圧力でお父様が王位を禅譲、あるいは貴族派達が強硬策に出てバルブロ兄様が王位を篡奪した時点で王国は終わります』

ラナーはそう断言していた。

貴族派の首魁であるボウロロープ侯の娘を娶ったのは貴族派と王家派の軋轢を一時的にでも抑制するための政治配慮とも取れるが、第一王位継承者なのに自分の立場も考えず貴族派に祭り上げられて喜んでいる愚物……それがガゼフのリ・エステイーゼ王国第一王子“バルブロ・アンドレアン・イエルド・ライル・ヴァイセルフ”への評価だった。

そして王のランポツサイー世も、バルブロが王になれば王国が貴族たちの玩具に成り下がることがわかっているからこそ、高齢であるにも関わらず王位を降りれないでいる……ガゼフはそう思っていた。

だが、実像は更に酷かった

バルブロは王国最悪の犯罪結社“八本指”と懇ろだねんじと言うのだ。

確かに王国貴族の大半は腐れ果て、八本指と繋がりがある者も爵位に関係なく多く、ゆえに迂闊に手が出せないとされてきたが……まさか次代の王の第一候補がここまで腐っているとは!!

(民は度重なる戦争と、それでも贅沢を止めぬ貴族のせいで重税にあえぎ、生き地獄に等しいというのに……)

「この世には、滅んだ方がよい国があるというのか……」

思わず自分の口からこぼれ出た言葉に、ガゼフは自身で驚いた。

とても王に忠義を捧げた者が言う言葉ではないと。

「やめよう」

今はこれ以上、考えたくは無かった。

だが、いずれ深く考え結論を出さねばならない問題でもある。残された時間は、あまり長そうも無いのだから……

『もし、有事の際にガゼフ隊長がわたくしについていただけるのであれば、その時は戦士団もまとめて面倒見て差し上げますわ♪』

不意に蘇るラナーの言葉……

「そうだ。クライムの寝顔を見るとしよう」

ラナーより預かった元貧民街の孤児だった住み込みで腕を磨く劍士見習い。

(あの子は真面目だからな。もう寝ているだろう)

朝早く起きて訓練をはじめ、夕方にはクタクタになっている。きつと今頃はぐっすりな筈だ。

劍の腕なら多少の自信があるが、改めて不甲斐なきを思い知らされたこんな自分をあの子はまるで御伽噺わとぎばなしに出てくる英雄を見るような、尊敬で編まれたきらめく視線を向けてくるのだ。

それが照れくさくもあるが、嬉しくないといったら嘘になる。

それに何やら見るととても癒されるのだ。

(存外、ラナー殿下はそれがわかっていて俺に預けたのかもな)

あの王女なら、それぐらいの気を回してもおかしくない。

(そう言えば、お借りした装備を返却するのを忘れてしまったな……)

結局、ラナーより借りた武器／武具一式は今回の出征で威力や性能を発揮することはなかったが。

「借りばかり作ってしまう……」

果たして自分は返せるのだろうか？

そんなとりとめの無いことを考えながら、ガゼフは家路を急ぐのだった。

その姿がどことなく蝙蝠と評される“子煩悩なとある貴族”と似ていることを、本人は気づくことは無かった。

エ・ランテルでアンデッド・ナイトが開催されるよう
ですよ？

第44話：「アインズ・ウール・ゴウン」

さてガゼフが帰路についた後、ラナーは……

「大体、予想通りでしたわね」

ガゼフの言動が自分の予想の範疇を出なかったことに満面の笑みを浮かべる表情は、やっぱりラナーだった。

去年のことだったか？ 毎年恒例のカツツエ平野での合戦で、それなりに顔見知りになってしまった……されど王女として公的には顔をあわせたことの無いジルクニフが、戦場でガゼフをスカウトしたという話を小耳に挟んだのは。

それを聞いたとき、

『頭は切れるしそれなりに果断も英断もできるのに、相変わらず変なところで抜けてますわね？ ジル君らしいと言えばそれまでなのですが』

ラナーは思う。

ガゼフ相手に交渉は無意味なのだ。父への忠誠心が高い、あのアダマンタイトよりも頭の固い堅物を、説得あるいは懐柔しようなんて無駄な努力だ、と。

自分の思うとおりに動かしたいなら、説得するのではなく「自分で考えるように仕向け、なおかつ思い通りの結論が出るように筋道を立てて思考誘導すればいい」のだと。

実はラナー、とつくに今回の出征に限らずカルネ村にまつわる全ての事象を完全把握していた。

別に特別な魔法を使ったわけじゃない。とはいえ、全く魔法が無関係という訳ではない。

要するに《ゲート／転移門》を通じてやってきた先生が直接経緯と顛末を教えてくれたのだ。

勿論、門が開く予兆と同時にラナーは椅子を立ち、その姿が見えた途端に王女としてははしたないが飛びつき&抱きつき、王女でなくともだらしくなく嬉シヨンしてしまう。

「自分が（先生の）犬になりたいくらい犬が好き」と公言するラナーなので、もしかしたら本当にマーキングのつもりなのかもしれない。

先生の服に粗相をして汚してしまったので、おシモが緩い自分にお仕置きをしてくれるように要求。

お尻を叩く罰で再び粗相。どうやらだらしないうちはお尻が赤くなる程度じゃ躰にならないようなので、今度はお尻を抉ってくれるようにおねだり。もう趣旨が変わってるような気もするが、ラナーも先生も気にしない。

そして最後は先生の暖かいものが勢いよく流し込まれているのをお腹の中で感じながら口を金魚のようにパクパクさせ白目をむいて最後の大放水……とここまでが様式美。

そして、目を覚ませば自分が起きるまで優しく頭を撫でてくれる先生に再び抱きつく。

自分の胎内なかで汚れた化身をお口で清め、放出された白濁を舌で絡めて存分に味わい、ドロリとした喉越しを楽しむ。

いや嘔下じゃなくて顔や体に浴びるのもいい。先生の匂いを刷り込みまわりつかせるだけで安心できる。

その心地よさはどんなドレスや香水にも勝る。

やっぱり自分は、先生の飼いだらラナーは夢心地に改めて想った。

☆☆☆

それにしても……彼女の記憶の中にある先生とやらの姿は、多少の違和感はある。

魔化が施された深い蒼が映えるラピスブルーの生地ミスリルの

糸が柄や文様に見せかけた隠しルーンを描く刺繍が合わさった後ろが長い燕尾型のコートにウエストコートの組み合わせ。

色使いやデザインはフランス革命以前のブルボン王朝華やかかりし頃（「ベルばら」の世界観と言うと判りやすいか？）の意匠、正統派の「アビ・ア・ラ・フランセーズ」を感じさせるが、下半身は当時の貴族ファッションの主流であったふくらはぎが見えるブリーチズ^{半ズボン}ではなく、ジョージ・ブライアン・ブランメル以降の細身の長ズボンとロングブーツの組み合わせだ。

どうやら先生には「ふくらはぎのラインの美しさを競った」と言われる全盛期のフランス男性貴族のセンスと価値観は理解できないらしい。

そして左腰には鞘から柄尻に至るまで宝石が鑲められ豪華な装飾がほどこされた細身のサーベル。

……と、ここまでで既に漆黒のフルプレート・アーマーとは別世界だが、確かに服装は着替えればどうとでもなる。

だが、問題なのは服の中身だ。

全身の体つきや局部のサイズ^{マール様}、優しげな顔の造りは確かにダークウオリアーと全く同じだ。

だが、肌はいくぶん白く髪は王国でも珍しくない少しくすんだ金髪で、そして瞳は空の青を映すようなトパーズ・ブルーだった。

「先生」、即位前のランポツサイーII世の窮地を救い、その縁で幼いらナーのほんの一時期の家庭教師を務めるはずが、彼女自身の強い懇願と懸想があり今なおこうして時折会う男……

その名は、

「先生……アインズ様……わたくしの愛しいご主人様……」

「アインズ・ウール・ゴウン」

公式的な身分は、各国へ赴くアーグランド評議国「特使」。竜王国のドラウディロン・オーリウクルス女王と同じ竜の血を引く竜人であり、永久評議員ツアインドルクスⅡヴァイシオンの遠い親戚筋とも噂される男……

事実、ツアーは実の息子のように彼を可愛がっている。

煌びやかな服装や華美な装飾品は宝物を好む竜の性質ともされ、凄まじい資産をもつとも言われている。

そして言うまでもなく、“死の支配者”^{オーバーロード} モモンガの二つある人の姿の一つ、戦士や冒険者のような力技ではどうにもならない事態に備え、とある老婆の提言で設定した『上流階級者としての立ち位置』だった。

実はダークウオリアーとは違うベクトルでアインズはそれなりの有名人だ。

例えば、ガゼフはラナーの先生がアインズであることは知らなかったし、ランポッサもかつての命の恩人がアインズであることをガゼフに限らず口外していなかった（それは当時の王室スキャンダルだから。彼の命を狙ったのは身内だったから）。

つまりアインズが父の命の恩人だと知るのは、おそらく教え子のラナーくらいだろう。最も彼女はアインズ・ウール・ゴウン、ダークウオリアー、モモンガが同一人物だと知る王室唯一、王国でも数少ない人間だが。

だが、このエピソードとは無関係に、王宮に出仕しながら政治や上流階級に疎いガゼフでさえアインズの名を出されたら聞き覚えくらはあっただろう。

そう、“敏腕特使”としてだ。

彼の外交的功績を物語るエピソードは多いが……例えば、「評議国と竜王国の間に締結された各種支援条約」などは王国でも有名だった。

今から20年ほど前、始まったビーストマンの捕食目的侵攻……今で言う“肉食獣の大遠征”^{ブレデター・キャラバン}による年々の被害拡大に悩む当時の竜王国のドラウデイロン・オーリウクルス女王にダークウオリアーとイビルアイを斡旋したのが、アインズ特使であると言われている。

また、それまではフリーランスの傭兵のような立ち位置だった二人の超英雄級の存在を、評議国の竜王国に対する支援の一環として竜王

国で冒険者登録するよう説得したのもアインズ特使だったと伝えられてるが……言うまでもなく、一人二役のオバロ名物マッチポンプだ。

勿論、ドラウは委細承知の上で、むしろこの茶番に大いに乗り気だった。

彼女は普通に竜の血を1/8引いてるし、国の窮状に対して竜が実質支配する国家の協力を仰げるのならむしろ望むところだ。

評議国は国是的に大規模な軍勢を援軍とすることはなかったが、ダークウオリアーとイビルアイ二人でも戦力的には十分だった。

それにドラウ個人としても『生涯幼い姿を貫き通す覚悟』を決めるほど、何やら乙女(?)な出来事があったようなので……誰にとってもいいことづくめだったのだろう。きつと。

あのお骨はドラゴン特効のタイム技能でも持つてるのだから？

そういう訳で、竜王国では武の英雄であるダークウオリアーとイビルアイは実在する英雄譚。救国の英雄として国民なら誰でも知る存在となっているが、実はその二人を竜王国に招き冒険者として登録するに至る影の功労者とされるアインズ・ウール・ゴウン特使も救国の有名人だ。

例えば、ダークウオリアーとイビルアイを題材にした舞台や歌劇は竜王国ではとても人気のある演目だが、そこに必ず登場するのが『自由を愛する二人の英雄に對峙し、竜王国に残り冒険者として説得するアインズ特使』という鉄板シーンだ。

そして、それらの民衆に愛される演目を見た商人が情報を王国へと持ち帰り、アインズ特使の名声へと繋がっていた。

それには巧妙なプロパガンダ、何より「ダークウオリアーとアインズが別人である」と強く印象づける意図があったのだが……それは王国に限らず今のところ成功してるようだ。

リロードすることをやっていた。

余談ながらそれを知らなかった(モモンガを老いで死ぬ普通の人間種プレイヤーだと思っていた)キーンとの間に一悶着あったのだが……まあ、それはいずれまた別の機会に。

長々と“人間の証明たる指輪”リング・オブ・ヒューマンビーイングの機能説明をしてしまったが、この指輪には当然、黒髪黒目の戦士ダークウオリアーだけでなく金髪碧眼の評議国特使“アインズ・ウール・ゴウン”としての姿も当然、セーブされていた。

モモンガが何故、ダークウオリアーとは異なる“もう一人の人間としての自分”にかつて仲間と過ごした、強い愛着のあったギルドの名をつけたのか？ それには原作と異なる理由と想いがあるのだが……いずれそのさして重くないそれらも明らかになる日も来るだろう。

何せこのお骨、未練とか郷愁とかとうに乗り越えているのだから。

100年という月日は、不老のはずの死オーバーロードの支配者を成長させ、新たな力を得られる程度には長い時間なのだった。

第45話：「ナチュラル・ボーン・キラ」

舞台は、唐突に切り替わる。

そうここは……

「ふにゃ……」

淡いパステルピンクの天蓋付きのベッドで一人の少女……多分、少女と評している年代の女性が丸まっていた。

いや、比喻でなく毛布に包まって丸くなっていた。

どことなくその姿はコタツで丸くなる猫を思い出させる。

顔は中々可愛らしく髪型は金髪のショートボブ、格好はフリルがふんだんにあしらわれたベビードールを寝巻きにしてるようだ。

一見するとどこかの金持ちお嬢様という気もしなくも無いが……

「朝だぞー！ 我が妹よっ！」

ばぁんと扉を入ってきた闖入者。そしてどことなくその少女と似た造詣の整った顔の金髪青年が入ってくるなり、

「ばちっ」

少女は目を覚まし、反射的に枕の下に隠していたステイレットを手にとり、猫と言うより獲物に飛び掛る山猫を思わせる素早さで無反動にベッドから跳ね起き、

「おいおい我がが麗しの妹よ、随分過激な朝の挨拶だな？」

しっかりと青年の首筋に《マジックアキュムレート／魔法蓄積》ファイヤーボールが込められているステイレットの先端を突きつけていた。

「あれ？ お兄ちゃん……？」

「そうだぞ、妹よ。おはようだな」

「おはよ、お兄ちゃん」

「Chu」

そして妹……クレマンティーヌ・メルヴィン・クインティアは兄の頬に優しくキスをする。

「んー……でも、いくらお兄ちゃんでも年頃の妹の部屋に堂々と入ってくるのはいかがと思う」

少し恨みがましく言うクレマンティーナに、優れたビーストティマーの資質を持つ兄、クアイエッセ・ハゼイア・クインティアは妹の柔らかい金髪を撫でながら、

「ゴソゴソ入ったほうがよかったかい？」

「それはそれで嫌かも」

それにしても仲のいい兄妹である。

ちなみに二人のミドルネームのハゼイアとメルヴィンは死の神スルシャーナの従属神の名で、兄妹だったという伝承が残っていた。

☆☆☆

「ほえ？　大神官長様から直々の任務？」

「ああ。そうなるな……私も詳細は聞いてないが、状況から考えてかなり厳しい内容の任務になるだろう」

スレイン法国が誇る六色聖典、その中でも名実共に最強の“漆黒聖典”。

彼らはその特殊性から、法国の深部に住居をあてがわれていた。

そして言うまでもなくここはクインティア兄妹が与えられてる住居で、スレイン法国の全ての基礎を作ったとされる六大神風の言い方をすれば、3LDKのマンションということになる。

21世紀の日本、首都である東京と比べても間取りは広く、一等地という立地条件でこれでアメニティが整っていたらいわゆる“億ション”となってもおかしくはない。

税金で暮らしていることも考えて、なにやら“官僚貴族”っぽい匂いもするが……まあ、基本、特殊な才覚持ちの集まりで命がけの任務ばかりなのでこの程度の優遇は当然なのかもしれない。

ちなみに兄妹別々の住居も持つことも出来た……というか普通は別居なのだが、クアイエッセが猛烈に反対し、過去に色々あって基本お兄ちゃんっ娘のクレマンティーナも特に反対する理由も無かった

ために同居となっていた。

ちなみに遅く起きたにも関わらず、朝食を作ったのはクレマンティーヌ。トーストとベーコンエッグを中心としたものだが、クアイエツセ曰く中々に美味らしい。

何気に殺しだけでなく家事も万能な自慢の妹だった。

クアイエツセは割とシスコン気味で、クレマンティーヌはかなりのお兄ちゃんっ娘だ。

原作とある意味、真反対だが……それなりの過去はある。

簡単に言えば、若いと言うより幼い頃から魔獣召喚／使役の固有異能^{タレント}を発芽させ、漆黒聖典の一員となった兄クアイエツセは家族の誇りとし、対して妹のクレマンティーヌは“出洩らし”とされたのだ。

だが、そんな妹を庇^{かば}い続け、妹の才能と将来性を兄は信じ続けた。そして、それが開花する日が来たのだ。

その対価は両親の死……その日、全盛期から比べれば衰えたとはいえ前衛バリバリの戦士職だった両親が血だまりの中に倒れ伏し、両手に血がこびりついたステイレットを握ったまま呆然と立つ妹の姿をクアイエツセは目撃した。

☆☆☆

スレイン法国でも親殺しは重罪だが、それが訓練の中での死なら不可抗力。

クアイエツセはそう強弁し、状況を整え、そしてそう報告書を提出した。

『妹を裁き処断するのは簡単だが、それは国家的な損失になる』
という内容で。

漆黒聖典の中では本名を隠す二つ名が使われるが、その魔獣召喚／使役能力から“一人師団”の名を持つクアイエツセの証言は軽くは受け止められなかった。

そして皮肉にも、それを後押ししたのはクインティア夫妻が遺した手記だった。

両親は妹を味噌つかす扱いたたけたのではない。

ただただ、その気質と才能と性格と能力がかみ合った妹を、“世に出すことを恐れた”だけだった。

だから、それらが発芽しないように細心の注意を払っていたのだ。だが、その手記を見つけたクアイエッセは大きな笑い声を上げた。

『こんなことを秘密にしてるなんて国家と死の神に対する背信行為だよ。父さん、母さん』

妹はサイコパスでもサイコキラーでもシリアルキラーでもない。

快樂目的で殺人などしないし、殺人に快樂も覚えたりしない。むしろ『何も感じない』。

そう、殺すことに命を奪うことに忌避感も嫌悪感も躊躇いも恐れも無い。

ただ淡々と作業のように殺す。必要だから命を奪う。

クレマンティーヌは、生まれ乍らに「殺しを楽しむ感覚は一切無いが、必要であればどんな殺し方でもできるし、何人でも殺意なく殺せる」という気質と性質を持っていたのだ。

『素晴らしい！まさに死の神の使途としてあるべき姿だっ!!』

クアイエッセはそう歓喜した。

都合がいいことに、そして判りきっていたことだが妹は制御不能の狂人の類ではない。

むしろ殺しに関わる部分を抜けば、年頃の娘らしく愛らしい部分を引き持ち持っている。

そして全てを知ったクアイエッセは、ますます妹を溺愛し、両親が下地を作った身体能力を自ら召喚した魔獣と戦わせることで鍛え、ついには自分と同じ法国最強部隊、漆黒聖典の一員“疾風走破”の名が与えられるまで昇華させたのだ。

そう、クアイエッセにとりクレマンティーヌは今も昔も愛らしい自慢の妹であり、そしてつまるどころ彼もまた狂信者であった。

☆☆☆

クレマンティーン・メルヴィン・クインティア

種族：人間

役職：漆黒聖典第九席次“疾風走破”

職業Lv

アサシン（ジーニアス）：Lv7

マスターアサシン：Lv3

ファイター：Lv7

ナイキ・マスター：Lv3

軽戦士^{フエンサー}：Lv3

ローグ：Lv3

シカケニン：Lv3

ウィザード：Lv2

ドクター：Lv2

総合Lv33

特殊性：殺人やそれに準ずる行動になんら感情変動が無い”
生まれ乍らの殺人者”。

備考

原作より微妙に強化されてるような気がしなくてもないクレマンティーン。キーノやカルネ村の面々、そしてラナーのようなモモンガによりナチュラルにレベリングされてるわけではないのに、総合Lv33は立派。

現在、固有異能^{タレント}の発現は確認されていないが、ジーニアス付きのクラスLvを一つ持ち、またその一部が特異な精神構造は十分にタレントに匹敵すると思われる。

ビルドは暗殺者と軽戦士に特化したタイプであり、速さ……俊敏さ

と鋭敏さを最大の武器とする彼女に見合ったものだろう。

メイスやモーニングスター等の殴打系の重量武器も使うが、あまり得意としていないようだ。もしかしたらイメージ的にトンファーとかヌンチャクの方が与えたら上手く使えるのかもしれない。

ウィザードを持っているのは、《マジックアキウムレート／魔法蓄積》で愛用のステイレットに自前で魔法をためこむためかもしれない。

気を体の内側に展開し身体能力を底上げしたり強度を上げたりするナイキ・マスターを習得していたり、おそらくは効率よく拷問を行うために解剖学を学んだ結果ドクターを習得していたりと、何気に多芸である。

原作との相違は、実は殺しだけでなく拷問に対するスタンスにも現れている、原作で拷問は「嗜虐心を満たすための楽しみ」ではあるがこのシリーズのクレマンティーヌは「情報を効率よく聞きだすためのただの手段」であり、そこに感情が入る余地は無い。とにかく“濡れ仕事”に対する異常な適性の高さと精神的安定性を除けば、わりと普通の少女(?)である。

ある意味、原作とは別の意味での厄介さをもつようだ。

第46話：久しぶりだよカルネ村（番台席娘、追加版）

さてさて、またしても場面は変わる。

メインタイトルに偽り無く、何やらとても久しぶりな感じがするカルネ村だ。

さて、そのカルネ村だが……

「よしよし。順調順調」

と満足げにカルネ村上空200mで設計図片手に俯瞰しながら、満足げに頷く豪華なローブを纏ったお骨、我らがヒロイン（？）のモモンガ様だ。

いやだって、主に性的に齧られる事多いし。骨だけに。

それでもつてこのカルネ村でスルシャーナを遥かに凌ぐ死の神、現存神として崇め奉られているモモンガが何をしているかと言えば……

「モモンガ、進捗具合はどうだ？」

と《フライ／飛行》まで使って飛びつき、ついでに鎖骨をカジカジと甘噛みし、今日も愛情表現に余念の無い吸血姫な愛妻キーノだった。

ちなみに本日の衣装は、何を思ったかラブラーブ！の第1期OPチエツクのミニスカ型ステージ衣装・にこモデル風だ。

いや、確かに原作より小奇麗になってるイビルアイ・モードの衣装もロリパンク風なのでそこまでかけ離れているわけじゃないかもしれないが……

ただしスパッツは未装着で細部のデザインもけっこう違う。ついでにスパッツ履いてないんで角度によっては丸出しなおぱんつは子供っぽいと言うより幼さ全開のにゃんこ柄。柄だけでなく素材もデザインも間違いなく女兒用のそれだ。

勿論、仮面なんて無粋なものをつけておらず、金色の髪はしつかり櫛を通してツインテールにしりボンでまとめている。

何やら絵面だけ見ていると次元と時代の隔壁を超えて、今にもお巡りさんやら色んな意味元凶の鳥男が飛んできそうな事案だが、見た目はともかく年齢的には全く問題ない。

というかモモンガより年上（モモンガは鈴木悟時代を含め130歳弱）な推定250歳以上のこの吸血姫は、一体何を目指してるのだろうか？

ちなみそんな姿だから下から見上げてもおぱんっ様は丸見えだが、そんなこと村人の誰も気にしない。

むしろ知り合ってから100年経つのに、未だに新妻どころか恋人同士のように子供っぽい求愛を続けるキーノを微笑ましく見るだけだ。

というかカルネ村はパンチラどころかパンモロも割とありふれているので、いちいちかまってられないのが本音ではないだろうか？

局地的に黄金水の雨が降ったりもするし。

「中々の良い感じだ」

そのコメント、村の土木工事の進捗について述べてるのか、さつきから尻を撫で回しているイビルアイの衣装コスについてのことなのか微妙だ。

☆☆☆

さて、いきなりのカルネ村土木工事で驚くかもしれないが……話は、ツアーの壱に陽光聖典の成れの果てを託送した翌日のことだ。

第44話にてガゼフが王都に着く前に、公的身分は評議国特使にしてラナーの幼い頃からの家庭教師でもある、“アインズ・ウール・ゴウン”が彼女の部屋を訪ねたことは既にラナーの粗相込みで述べた。それでアインズ・モードのモモンガは、別に愛犬を愛でに行つたのではない。

またしても公的には、カルネ村とその周辺の領主であるラナー・

テイエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ王国第三王女にとある許可を求めに行ったのだ。

本来、この役目は住所不定有職であるアインズではなくカルネ村に住んでることになっているラナーの名代でもあるダークウオリアーが行くべき部分ではあるが、モモンガ的にはアインズの方が見慣れている姿だろうから気を使っているのだろう。

多分、ラナーのことだろうからお骨様モードで行ったところで、気にもしないで飛びつき嬉ションしそうではあるが。

さて、その内容と言うのは「帝国の鎧を着た正体不明の武装集団」に襲撃されたことに託けた「カルネ村防衛力強化計画」の提案だった。要するにとりあえずはそんなじよそこらの砦以上の強度を持つカルネ村だが、いつそ本格的な城砦級の防御力を持たせてしまおうと言うのがその骨子だ。

できれば、ある程度の自給自足が出来ればなお良い。

現在、カルネ村の城壁に相当する魔化された丸太塀は居住区と各種作業場や工房、備蓄所、そしてドライアードのピニス・ポール・ペルリアをリーダーとするドライアード&トレント有志組が管轄する一部の高付加価値な農園や果樹園が入っている。

余談ながら彼女ら彼女ら森の精霊たちは、トブの大森林に現在進行形で封印されている」とある巨大災害の復活」に怯えていたためにモモンガが安全を考え説得、数年前にカルネ村に移住してもらったのだ。

その対価は、その災害が復活した場合はモモンガ達が対処し、討伐することだ。

実はモモンガ、その時にピニスから聞いた「かなり前に一部が暴れた際には人間や亜人を含む七人組がこれを退治し再び封じ込め、もう一度これが目覚めたときには戻ってくるという約束をした」という話からそれが十三英雄と推察、試しに何の気まぐれか王都で冒険者をやっている悪戯好きの老婆、恩人のリグリットに確認。

案の定、十三英雄の一部がやった冒険らしく、その時に判明した封

印の魔樹“ザイトルクワエ”の情報提供を受ける代わりに、その討伐を正式に引き継いだのだった。

他の住民達にも人間、人外を問わずにそれなりの物語がある。

例えば、今でこそ村にある公衆浴場の番外席次ならぬ“番台席娘”ほんだいせきつこ

として村の一員となり元気に過ごしてる人間の娘は、10歳のときとある貴族に拉致され、散々性玩具として玩ばれた挙句に飽きたので奴隷として売り払われかけた……貴族が腐りきってるこの国には珍しくも無いが、中々壮絶な過去があった。

また30名強の山小人ドワーフが住んでいるが、彼らは揃ってなんらかの鍛冶屋スミスであり、酒職人を兼任してるものも数名いる。

そして彼ら彼女らの最大の特徴は、全員がルーン工匠だということだ。

その話は詳細に書くとも長くなりすぎるが、彼らはクアゴアやフロスト・ドラゴンの一件で大恩あるモモンガ達への恩返しと、何より現在は外敵が一掃されたために順調に復興しているが、ルーン技術を「時代遅れ」と称し省みなかった祖国への決別を胸に秘めていた。

☆☆☆

人間の世界観で言えばカルネ村の領地は辺境の開拓村と考えれば規格外に大きいが、だが城壁都市エ・ランテルなどに比べればさほどというわけでもない。

だが、人間がその勢力圏としていないトブの大森林まで入れると、実は膨大な面積となる。

10年前にカルネ村に定住して早々、モモンガとキーノは今はハムスケと名乗る大森林の南の魔獣、“森の賢王”を服従させ配下に加え、やがてリザードマンたちと交易を結び、鉱物資源等の地下資源を求めてアゼルリシア山脈まで足を延ばし、現状この2者と極めて強い結びつきを持っていた。

また、1年ほどまえにエンリと彼女が率いる討伐隊が野生のゴブリンやホブゴブリン、オーガたちがカルネ村付近に出没することから端

を発した“東の巨人”ことトロールのグの討伐／服従に成功させ、今や南部に続き森の東部も勢力圏に収めている。

また“西の魔蛇”ことリユラリユース・スペニア・アイ・インダルトとは良好な関係にあり、事実上はモモンガ一党が実質的なトブの大森林の支配者と言えよう。

実際、リユラリユースには眷属の蛇系モンスターたちに“ザイトルクワエ”の24時間体制の監視任務を依頼している。

無論、その対価は彼の生存圏、縄張りの保障と不可侵だ。

こうしてカルネ村は人類としての領地、それ以外の者達の生存圏と言う二つの側面を持っていた。

人口比率にもそれが現れていて、純粋な人間種としての人口は前に出てきたとおり785名だが、ドワーフや他の亜人を加えるとその総数は1000人を越える。

言い方を変えれば、モモンガを頂点とするその一党の勢力圏、アゼルリシア山脈からトブの大森林南部と東部の中でカルネ村は南端であり、人間世界に突き出た拠点であるということだ。

そして、今回の問題は人間側の側面で発生し、だからこそ厄介なことになる筈なのだが……

モモンガはそう考えると同時に、好機とも捉えていた。

大義名分を得て、堂々とカルネ村を要塞化する好機だと。

第47話：／ カルネ村防衛力強化計画……の草案

数日前、ツアーの塹^{ねぐら}から戻ったモモンガはラナーの元を《ゲート／転移門》を使い訪れた。

無論、先生……この王国でさえ名士として知られるアインズ・ウール・ゴウン特使の姿でだ。

ラナーの興奮が収まるのを待ってから、ベッドの中で自分と先生の体液の混合物をうっとりとした顔で堪能していたラナーの細く小柄な肢体を抱きしめながら、モモンガはある事案を切り出した。

モモンガからラナーに提示された「カルネ村防衛力強化計画」の概要はこうだ。

現在ある居住区や付属する施設に張り巡らせた丸太塹をそのまま内堀として転用。

その周囲に更に丸太や石材など他の素材を用いた外堀を設置、その外堀には当然のように監視塔を置き、弓兵をはじめとする飛び道具兵員用の頑強なキャットウォークを内側に張り巡らせる。勿論、よじ登り防止のカエシも取り付ける。

そこまでなら単純に現在ある塹の拡張版だが、

「さらにそのさらに外側に堀を作り、川から水を引こうと思ってるんだ。無論、周囲をぐるりと囲むようにね」

それが策の一つだった。

「お堀ですか？」

「ああ。幅は10m前後つてところかな？ 堀への用水路は畑への灌漑^{かんがい}用水にも利用する方針……というか、灌漑用の水路は前から引きたかったからな。そのついでみたいなものさ。構造的には外堀の表門と裏門の扉を跳ね橋にするつもりさ。それに加えて、」

モモンガは棘付きの針金、その切れ端のようなものを謎空間より取り出した。

「鉄の荊いばら? 先生、拷問器具かなにかですの?」

おそらくだが、ラナーはこれの本体はもつと長いと推測、体に巻きつけて棘を肉に食い込ませるイメージをしたのだろう。

そういう緊縛プレイも悪くないと思いつながら。

「まあ、そういう使い方もできなくはないがね。だが、生憎と不正解だ」

モモンガは苦笑し、

「これは有刺鉄線といってね。柵に使うものだよ」

史実の有刺鉄線は1865年頃フランスで発明されたが、その普及は1870年代のアメリカであり、今でこそ立ち入り禁止の場所によく見かけるが、最初は主に防牛柵として用いられていた。

「でも、こんなに短い鉄で出来た棘では鎧を着た相手には……ん? 待ってください。もしかして堀と組み合わせますの?」

「ラナーは相変わらず賢いな。これで作った柵……鉄条網」で外堀と堀の間を幾重にもぐるりと囲むのさ」

モモンガは長く美しい金髪を撫でる。

「門を兼ねた跳ね橋を上げてしまえば敵兵は堀を渡るしかない。そして身長以上の深さと一定以上の幅がある堀は重装兵を、渡ろうとする段階で阻む。泳ごうとすれば装備の重さで沈み溺れてしまうからね。舟を用意しようとしても今度は堀の幅が狭すぎる。身動き取れない狭い水路にはまり込んだ舟なんていい的さ」

それは舟だけでなく距離が短いからと言って騎乗したまま渡ろうとする者にも同じことが言えた。

また、破城槌ジャガーノートなどの門や城壁にぶつけるタイプの大量兵器は全く使えなくなる。

「重装兵が駄目なら軽装兵でって話になると思うけど、堀からあがろうとした軽装兵には今度は人工的に作られた茨の垣根がまっている。その中を進むのは、非常に厄介なんだよ」

「先生、もしかして有刺鉄線は直接敵兵を傷つけるためではなく敵兵の行動を阻害し、絡めとるためにつかいますの?」

「そうだよ、ラナー。有刺鉄線……鉄条網と言うのは中々に秀逸でね。張り巡らせるのが楽な割には効果が高く、適度な高さがあれば人だけじゃなく馬防柵としても十分に使えるのさ」

「つまり先生は、飛び道具の射角を得るためにこれらの大掛かりな工事をを行いますのね？」

「どうやらラナーは一步先を読み、そう結論したようだ。」

鉄条網はその性質から弓矢を水平から射ち込むのは向いてないが、斜め上からは射ち放題だろう。

「今回の戦いで改めて思ったけど、弓という武器は塀の様な場所から真下を狙うのは不向き。弩は構造上、矢が落ちてしまうので狙えない。据え置き型の飛び道具なら尚更さ。台座に乗せる以上俯角（水平より下の角度）をとらせるのは今の技術では難しい……それに動いてるより止まっている的に射掛けるほうがよっぽど簡単だろう？」

カルネ村はその性質上、常に寡兵で大軍を迎え撃つことを考えなければならぬ。

具体的には、帝国ではなく王国の正規軍との戦闘を前提としている。

その場合において、最も有効打を期待できるのが長間合いの飛び道具だ。

今回の戦いでモモンガは思ったが、一騎当千というのはどんな場面でも有効だが、同時に「多勢に無勢」というのも真理だ。

正直、例えば数は力だといっても捕食本能と身体能力のざり押しでやってくるビーストマンは、普通の人間の十倍の力を持つとはいえず、そこまで脅威じゃない。

ビーストマンは確かに群れと言う単位で行動するが、軍事的な意味での統率や指揮とは無縁だからだ。

はつきり言えば、力押しで来るなら、それ以上の力で押し返せば簡単に撃退できる。

10倍もの身体能力差がある人間なら何を駆使しても対処は難しいかもしれないが、力で上回るモモンガやキーノ、万全な装備のカルネ村の七星剣にラナー、おそらくガゼフだってそう難しい話じゃない。

い。

つまり戦術すらも考えなくていい、力と力のぶつかり合いだけで力
タが着くのだ。

だが、それを人間に置き換えたらどうだ？

人間は脆弱だが、その分知恵を回す。これが中々に厄介だ。

実際、人間同士の戦争では搦手どころか戦争が戦場ではなく戦場外
で決まるということさえままある。

例えば、政争一つとつてみてもカルネ村の政治力は王国においては
ラナーが頂点であるが、彼女がどれほど優秀であつても……否。優秀
であればこそ、王国貴族達への影響力は低い。

話が出たついでにガゼフで例えるなら、彼は王国最強の剣士であつ
ても、政治的には弱者であり、そのせいであやうく死に掛けたのだ。

これは人間社会では珍しい話じゃない。常勝無敗で天下無双の将
軍の最後が、味方との政争の末の敗北なんて話は歴史を紐解けばさら
にある。

そして戦場で考えてみても、人は勝てないのなら武器を改良し戦術
を練り、計略を仕掛け謀略を使う。

実は人間と言う種を最も侮つてない、警戒してるのはモモンガなの
かもしれない。

確かに今は周囲の生物が強力すぎ、相対的に脆弱種、悪く言えば被
捕食者なのだろう。だが、このまま生き残り文明を加速し続ければ
……モモンガはその顛末を知つてるのだ。

そう、人間は身体能力で勝るはずの物を含む他の生物を悉く滅亡さ
せ、ついに星まで殺してみせた。それは地球産の他のいかなる生命体
でも出来なかったことだ。

「弓や弩が真下を狙いにくい／狙えない武器なら、発射点に近寄せ
なければいいだけさ」

だからこそ、モモンガは考える。

カルネ村が政治的な勝利を収めることはない。だからこそ、頭を捻

り策を考え、武器を改良し攻め寄せる敵を片っ端から倒すしかないのだ。そう、同じ人間と言う種の特性を生かして、だ。

確かにそんなことをしなくとも、自分が超位魔法の一発でも撃てば、少なくとも戦場レベルなら勝敗は決するかもしれない。

だが、同時に自問する。

『それは果たして正しいのか?』

と。
確かにそれが必要なら躊躇いはない。だが、人の可能性を良くも悪くも知っているからこそ、それを嘲笑うような行為は正しいのかと。カルネ村に生き、自分を神と崇める人々は、それでも神に継るしかない能のない人々ではない。

神の恩寵を知り、その恩恵にあずかりながらも自分たちのできることは自分でしようとする人々だった。

きつとだからこそ村に愛着が生まれる……そんな矜持と覚悟を踏みにじるような行為が正しいのかと。

だから、自分は本当にどうしようもなくなるその時まで、最大限“手を貸す”だけでいい。

過保護でもあるし、過剰サービスは大好きだ。

例えば、カルネ村には村内複数箇所にある魔力ポンプ式の水汲み場につながる地下水脈と、公衆浴場などに接続されている温泉脈が走っているが、これは《ザ・クリエーション／天地改変》で近場の水脈と湯脈を繋げたものだ。

結局、モモンガは必死に生きる人間を見るのが好きで、そんな姿を愛していた。

人の身でなくなつた今だからこそわかることもある。

人は断じて弱者などではない。

この100年で改めてそう思ったのだ。

とまあ、そんなことを考えながらも、

(堀を渡つてる最中や鉄条網に絡まつてる最中に《チェイン・ドラゴン・ライトニング／連鎖する龍雷》とかを撃つと、かなり愉快痛快な

事になりそうだなあ。昔はリアルでも害獣対策に電気柵とかあったっていうし)

と、思ってしまうあたり、やっぱり敵対者には割と容赦ないモモンガ様なのであった。

第48話：「カルネ村○○○○祭りとか？」

「うそん……」

表向きは元がついてしまう、実は現役の漆黒聖典第九席次“疾風走破”ことクレマンティーヌ・メルヴィン・クインティアは、やってきたカルネ村の情景を見るなり呆然としてしまった。

ちよつとした人類ぽかーん計画である。

「えくと……カルネ村？」

村から少し離れた草むらの中に身を潜ませ、遠眼鏡で村の様子を見ていたクレマンティーヌが頭を抱えるのも無理は無い。

なにせ、その情景は……

(どう見ても、建造中の城砦……よね?)

しかも何やら明らかにヤバそうだ。

何がどうヤバいかと言えば……

“カルネ村ゴーレム展示会”とか“カルネ村アンデッド祭”とかでもやってる……とかないよね?”

まず最初に目に付いたのは、重機よろしく……というよりまさに“機動警察パトレイバ〇”に出てくる人型作業機レイバーの如く作業しまくる石や金属の人造巨人^{ゴーレム}達だ。

どうやらそのゴーレムたちは川へ続く巨大な水路、そしてそれに繋がる堀を掘ってるようだ。

他にも丸太を運搬し、地面に突き刺す役割を担ってるようだった。

だが、ゴーレムはその大きさとパワーゆえに細々とした作業は苦手だが、それを補うべくちよこまかと小気味よく動いているのがスケルトン達だった。

そして、そのスケルトンたちはスコップやツルハシ、もっこや一輪手^ね押車などを器用に扱い、ゴーレムたちの作業を補完しているのだ。

もうその時点でクレマンティーヌ的には「お腹いっぱいです。勘弁

してください」状態だろうが……だが、無慈悲な精神攻撃は止まらない。

これらの非生物に加え、トロールやオーガ、ゴブリンと言った知能が低いとされる亜人や人間たちが一緒になって作業しているのである。

共通項は、神聖文字で“安全↑第一”と描かれた黄色いヘルムと首から下げた柔らかそうな布だった。

なんというか……由緒正しい土建屋スタイルとでも言おうか？

これでニツカポツカでも履いてれば完璧だろう。

いや、中に本当にあのダボダボズボンを履いてるのがいた。それも複数。

由来は間違いなく「土木作業といったら、やっぱりこのスタイルか？」と言い出したお骨様だろうが、それにクレマンティーヌが気づくはずも無い。

というかゴーレムとアンデッドと亜人と人間が一緒くたに働き、凄まじい勢いで砦を建築してる奇妙な光景にクレマンティーヌはどう判断したものやらと頭を悩ませてしまうのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆

さて、そもそもクレマンティーヌがカルネ村なんて特に法国人にとっての“超危険地帯”に足を運んでるかと言えは……

究極的に言えば、彼女のLUCKが低めなせいだろうか？

大神官長直々に呼び出されてみれば、

「ズーラーノーンへの潜入工作ですか？」

「うむ」

大神官長は鷹揚に頷いた。

秘密結社“ズーラーノーン”。要するに邪教集団である。

ただ、洒落にならないのはその規模の大きさとやってきた数々の所業だ。

特にズーラーノーンを印象付けることになった事件は、今から約20年前に起きた“死の螺旋”事件だ。

ある日、ズーラーノーンは“死の螺旋”といわれる大規模儀式魔法をとある小都市で敢行、住民を全滅させアンデツドの楽園にしてしまったのだ。

「此度、きやつらは王国の城壁都市“エ・ランテル”で死の螺旋を行おうとしているようだな」

(んげっ……)

クレマンティーンとしては声を出さなかった自分を褒めてやりた
いとこだ。

ちなみにエ・ランテルはその時に犠牲になった街と比べて遥かに大きく人口も多い、という訳で軽く被害は数倍だろう。

もちろん、クレマンティーンは国家全体で見れば上層部に入るし、
法国が王国に謀略を仕掛け帝国に取り込ませたがってることは知っ
ていた。

だが、王国の守りの要であり対帝国戦の防波堤、帝国から見れば取
れば対王国戦の橋頭堡になるエ・ランテルが“死都”になってしまえ
ば、どの国にとっても大幅に計画が狂う。

“死の螺旋”は最終的には強力なアンデツドを生み出す術式だと
言われ、例えば王国にとっても帝国にとっても要所でありうるエ・ラ
ンテルがアンデツドが溢れ変えり、それこそ簡単に討伐できない強力
なアンデツドがたむろする街になってしまえば、間違いなく帝国は戦
争計画は見直さだろうし、王国は最終的にエ・ランテル奪還など考え
ずに新たな緩衝地帯として利用する方針とするだろう。

そうやってしまえば法国としてはこれまでの努力が水の泡だ。

ならばどうするか？

そりや事前に止めるしかない。

「だが、ズーラーノーンの誰がどのような方法で“死の螺旋”を行おうとしているのか未だにつかめん。十二高弟の一人なのは間違いのないのだがな」

「つまり私はエ・ランテルに潜入し、潜伏してるズーラーノーンの高弟と接触。協力するフリをして情報を抜き出せ……ということですか？」

「なんだったら殲滅してしまっつかまわん。“死の螺旋”が最終的に阻止できるなら手段は問わん」

「なら、最初から漆黒聖典全員で殴りかかったほうが……」

情報によれば、ズーラーノーンの高弟の中には、自分より強い可能性がある難度100越えが三人はいるらしい。

正直、単独でのアンダーカバー・ミッションなど冗談ではなかったが、

「だが、ズーラーノーンの情報は欲しい」

大神官長はどこまでも無慈悲だった。

「それにしても、そんなに簡単に信用してもらえるものでしょうか？」

「なに、奥の手はある。きやつらが喉から手が出るほど欲しがる物をちらつかせてやれば良い」

そう言っつて大神官長が取り出したのは……

「これって……」 叡者の額冠 “じゃないですかっ!?”

“ 叡者の額冠 ”

それはスレイン法国最秘宝の一つであり、装着者の自我を奪い去る変わりに本来なら決して使えないはずの高い位階の魔法を使うための触媒となすことができる。

つまり、人間をある種のマジックアイテムに作り変えるための宝物であった。

「ちよ……大神官長様、なんでこんなものが……それに、どうして……

？」

「ふむ。数日前にちよつとした事故が“土の神殿”であつてな。その時に巫女姫が死亡し、サークレットだけが回収されたのだ」

そう、第37話によればモモンガの「《トリプレットマジック／魔法三重化》、《マキシマイズマジック／魔法最強化》、《ワイデンマジック／魔法効果範囲拡大》、《ペネトレートマジック／魔法抵抗難度強化》、《エクステンドマジック／魔法持続時間延長化》をかけた《チェイン・ドラゴン・ライトニング／連鎖する龍雷》が消える時間ギリギリまで暴れ回り、その時感電死した者を触媒に、《テイレイマジック／魔法遅延化》で時間差をつけた最大6体のデスナイトが顕現する」程度のちよつとした攻性防壁によるちよつとした事故だ。

その頃、クレマンティーンは任務で法国を離れていて、雷魔法で神殿が半壊した様子も顕現したデスナイト×6とスクワイア・ゾンビとゾンビの阿鼻叫喚な大行進も目撃しておらず、

「事故？・どうりで街中がどこか騒然としていたと思ひました」

事態を重く見た法国上層部は緘口令を敷いたのだった。

おかげでクレマンティーンもペアミッシヨンのために一緒に国を出ていた兄クアイエッセもその出来事も顛末も知らなかった。

そう、ゲス隊長がカルネ村に攻撃を仕掛けたことも、その煽りで陽光聖典が壊滅したことも、そして不思議と神都に帰つて来てもエンカウントしなかった他の漆黒聖典の隊長と隊員が、ツアーに呼び出され今まさにトブの大森林に陽光聖典の遺体を引き取りに向かつていたことも、何も知らされなかったのだ。

それが吉と出るか凶と出るか……吉と出る展開が全く予想できないのが不思議である。

第49話：「叡者の額冠」は呪いのアイテム？

モモンガの攻性防壁が炸裂した最中、兄とデート……もとい。任務で国を離れていたクレマンティヌ。

任務の内容はどうということではなく、ちよこつと兄クアイエッセと一緒にエルフをいじめた。言い方を変えれば、エイヴアーシャー大森林まで援軍に行っていたのだ。

帰国して任務後の休暇明け、大神官長から呼び出しをくらうと、

“ エ・ランテルで悪さしてるらしいズラに潜入してくんね？”

“ なんでやねん。単独アンダーカバーとか無茶振りなんすけどー。てか、漆黒聖典全員で凹った方がよくね？”

“ 情報欲スィー。おk？”

“ ぜってー信用されねーし”

“ 土産ならあんでー”

と大体こんな感じの会話の後に大神官長の懐から出てきたのは、一度お亡くなりになった後にデスナイトとして再デビューを果たし、多くのゾンビの集団を引き連れて華やかに地獄絵図を飾った土の巫女姫の遺品、“ 叡者の額冠” だった。

何やら巨大な魔法に巻き込まれた臭いが大神官長曰く、

『動作確認はしていないが、見せ金ならこれで十分だろう』

とのこと。

なんとなくそのサークレットはすす焦げてる気がした。

「それとこれを今回の装備として渡しておく。任務の性質上、正規装備持参と言うのは厳しいからな。というより流石に神の遺産の持ち出し許可は出せん」

と渡されたのは、

「なんです？ この悪趣味な魚鱗甲冑は？」

その珍妙な装備を思わずマジマジと見て、

「げっ!？」

残念、今度こそクレマンティーンは声を出してしまった。
でも仕方の無いことだろう。

なんせそれは、自分が普段愛用しているビキニ・アーマーじみた軽
甲冑より1ランク以上は落ちる同種装備に、“冒険者のプレート”を
打ち付けたインスタント・スケイルアーマーだったのだから。

「まさか、このプレートって本物の冒険者プレートじゃありませんよ
ね？」

さすがに薄気味悪そうに言うクレマンティーンに、

「一部、本物も混じってるが……安心しろ。ほとんどがレプリカだ。
我が国の各部門に始末された冒険者のプレートに、レプリカには行方
不明になったプレート未回収の冒険者の名が刻んである」

(本物混じってるー!!?)

思わず心中で絶叫するクレマンティーン。殺すことに忌避感はないが、だからと言って気味の悪さを全く感じないという訳ではないのだ。というかその“揺らぎ無き殺人術”の見事さから誤解されがちだが、彼女は断じて殺戮人形などではなく意外なほど普通の感性の部分も多いのだ。それが彼女にとって幸運なのかは微妙なところだが。

ただ誤解のないように言うておくが、これ一応はクレマンティーンを気遣ってる装備だ。

一件乱雑に縫い付けられてるように見える冒険者プレートとそのレプリカだが、素材特性に合わせきちんと計算され配されており、本来の装備に比べれば劣らないとは言わないが、見た目以上の強度があるスケイル・ビキニアーマーとなっているのだ。

いや、彼女のには性能どうこうよりも、

(わ、ワタシってば装着しても呪われないよね……?)

「……どういう意図です？」

「“疾風走破”、君は法国に不満を持つ不穏分子だ」

「はい？」

首をコテンと横に傾けるというちよつと可愛い姿を晒してから、

「大神官長様、お言葉ですが……最初から不満を持つほど法国に期待

することなどありませんが？」

つい本音を行ってしまふあたり、クレマンティーンもまだまだ老獪さとは程遠い。

これには流石の古狸、大神官長もバツが悪そうに、

「……コホン。そういう設定だと理解したまえ」

「は、はあ……」

困惑したままのクレマンティーンだったが、

「君は元々、祖国に不満を持ちストレスの捌け口に冒険者を殺めてきた」

（いやいや。殺しじゃストレス発散にならないんだけどな……むしろ何も感じないから、暇つぶしにすらならないし）

クレマンティーンにとり、殺しはあくまで「必要だから殺る」程度の認識であるのだから当然だろう。

「そして、溜まりに溜まった祖国への不満がついに爆発。土の神殿を半壊させる大規模破壊活動を起こした」

「……半壊したんですか？ 土の神殿」

（一体、何があつたんだろ？）

どうも表情に出ていたようで、

「……事故だ。それ以上は聞くな。禁則事項だ。〃
巨大雷撃魔法の後、死霊騎士殺戮行進〃^{エレクトリカル・デスナイト・バレード}などなかった。いいな？」

「りよ、了解！」

（ホントに何があつたっ!?!）

有無を言わさぬ……というより死んだ目をした大神官長に軽くビビり領くクレマンティーン。

もし、不満が溜まると言うのなら、陳腐すぎる設定に現在進行形で法国への不満が募りそうだった。

それ以前に、

「じゃあワタシめはどうやって土の神殿を半壊させたの？」

「第7位階の炸裂魔法を封じた水晶を発動させたでいいだろう。そして無事に破壊工作を成功させたお前は、目的の一つだった〃叡者の額冠〃を奪い、法国より逃亡する」

ミー／死者の軍勢』でアンデッドを人為的に大量発生させ、それらを触媒とすることで“死の螺旋”を遂行することができるといふ計画だったのだが、これには巨大な盲点があったのだ。

そう、使用者をマジックアイテムに作り変える“叡者の額冠”は、国民の管理が行き届いたスレイン法国ですらも「100万人に1人しか適合者がいない」とされるシビアなユーザー指定があるのだ。

当然、カジツトが投入可能なブローラーノーンの構成員の中には適合者はいない。

このまま、“叡者の額冠”は文字通り宝の持ち腐れ状態で、計画は頓挫……

それが当然の流れだったはずなのだが、

「噂に聞いたことがある。5年前、ワシと入れ違うようにエ・ランテルを出てカルネ村と言う辺境の開拓村に移り住んだ薬師の少年が、あらゆるアイテムを使いこなせる希少な固有異能タレントを持っていたそうだ」

“叡者の額冠”は確かに呪いのアイテムなのかもしれない。ついでに冒険者プレートも持ち主の怨念がこびりついていたのかもしれない。

そして今回、その呪いを一身に受ける羽目になったのは、言うまでも無く……

「お兄ちゃん……ごめ……ん……」

第50話：「刀剣志士」

唐突だが、「カルネ村の七星剣」という名詞を皆さんは覚えているだろうか？

基本ユグドラシル基準で大体Lv30～Lv40の間にいるこの世界の基準なら明らかに猛者であり、色んな意味で頂点にいるモモンガ（Lv100、ダークウオリアー&アインズの受肉時はLv99）、その妻のキーノ（Lv80以上は确实。漆黒聖典隊長と互角かそれ以上？）という例外的な規格外戦力除けば、カルネ村の主力である5人と1体と1匹だ。

既に法国の先遣隊や陽光聖典相手に無双を披露したエモット姉妹にゼロにデイバーノック、そしてハムスケ。

残るグとブレイン・アングラウスは、その迎撃作戦時は村を離れていた。

トロールのグは配下のトロールを引き連れ、リザードマンたちの住むひょうたん湖にカルネ村の通商隊の護衛として向かっていた。

普通の人間にとっては相変わらずのデンジャラス・ゾーンなトブの大森林なので、このぐらいの護衛は必要だ。

それにグはエンリと直属のゴブリン^{愉快な仲間達}兵団に調伏される前は、これでも「東の巨人」として森林の支配階級の一角を担っていたのだ。

現在、プレート・メールをゴ・ギンばりに装着し、大剣もより長く大きく高性能なものを賜って当時と大分イメージは変わったが、それでもグにとっては森は勝手知ったる自分の縄張り。地の利も実力も十分、まさに護衛として適任だろう。

しかも今回の取引は割と重要なのだ。

ひょうたん湖南部を生存域とするリザードマン五部族連合はカルネ村の技術協力もあり、生簀^{いけす}による魚介類の養殖が軌道に乗り、自分たちの食糧自給をまかなうだけでなく宝石の原石や砂金、岩塩などと並ぶ交易品の一つとしてまで放出するまでに至っていた（カルネ村は

変わりに通常は酒類やチーズやバターなどの乳加工製品などを放出。物々交換を成立させている)。

だが、その食料と富の収奪を狙ってか湖の北部を縄張りとするトードマン達が、ここ最近活動を活発化させているのだ。

そのため、今回のカルネ村通商隊が運んでるのは、いつもの嗜好品を含む食料ではなく村のドワーフたちがリザードマンたちの体格に合わせて打ち鍛えた武器の数々だった。

もしかしたら、近々戦になるかもしれない。

五部族連合上層部はそう考えていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆

さて、では一方ブレインはと言えば……

「あん？」

そうカルネ村七星剣の一人、騎乗し先頭を走っていたブレイン・アングラウスは、村がもう見える距離にあるのに率いていた部下達を止め、下馬を命じた。

「何だか妙な気配がしやがるな……」

そして街道沿いにある草むら……その一点を睨みつけるように目を細め、

「《神域》《領域拡大》《指向性領域》」

《神域》は五感を鋭敏化させ自分を中心にした半径6 m以内の半球状

の空間のあらゆる事象、それこそ空中を漂う粒子の微細な振動すらも捉える超高感度センシング・エリアを展開する武技だ。

そして、モモンガの使う強化魔法（あるいは魔法強化スキル）である《ワイデンマジック／魔法効果範囲拡大化》を参考に編み上げた、精神力を消費し探知範囲を拡大する《領域拡大》。

そして半球状に展開されるセンシング・エリアの範囲を絞り、指向性を持たせることで探知距離を延伸する《指向性領域》。

その結果……

「やつぱ、いやがったか……」

そして添えるように三尺三寸の堂々たる刀身を持つ大業物、愛刀“神刀・滅却”の長束ながつかに手をかけた。

☆☆☆

ブレインと彼が任務前に指名した騎馬術に優れた数名の冒険者登録をしている村人は、ギルド史上最大規模の冒険者チーム“カルネ村修道会”として請け負ったエ・ランテルと王都を往復する通商隊の護衛のためにカルネ村を離れていた。

護衛任務自体は、特にこれといった波乱はなかった。

確かに、通商隊馬車の御者の男ぎよしやがその盗賊団の一員……“死を撒く剣団”なんて大層な名前の傭兵団を名乗っていたが、マーケットがある戦時以外は荷馬車強盗やらが生業なので普通に山賊扱いでよいだろう。

そしてブレイン、御者の合図と共に襲い掛かってきた40名余りを「たった一人で苦も無く切り捨てた」のだ。

さて、ここで名前倒れの“死を撒く剣団”には残念なお知らせがある。

この男に出会った瞬間、いや彼が守る荷馬車を襲うと決めた瞬間から、“死を撒く剣団”の運命は決まっていたのだ。

盗賊の片棒担ぎだった御者にモモンガより授かった“支配ドミネートの手鐘ハンドベル”で洗いざらいを吐かせ、部下たちに馬車の護衛を任せるとそのまま

アジトまで道案内をさせる。

“死を撒く剣団”は、当然のように護衛を皆殺しにするつもりだったし、“カルネ村修道会”という最大規模の白金級冒険者チーム存在も知っていた。

だからこそ、組織の半分以上である40名もの人数を差し向けたのだ。

だが、彼らは知らなかった。

七星剣に数えられる者達の「本当の実力」を。

いや、誰が想像できるだろうか？

王国より遠く離れた地で、人間の10倍の身体能力を持つとされる万を越えるビーストマンの群れに立ちほだかり、悠然と勝利を刻む者達がいることを……

ビーストマン相手にも容赦なく振り下ろされる七振りの剣……その一太刀であるブレインが、たかが40名程度の人間に苦戦するはずも無いのだ。

言うまでも無く、アジトに屯たむろしていた残る30名あまりの盗賊達も全て速やかに襲撃役たちの後を追うこととなったのだ。

性処理用に監禁されていた女たちを連れ出し、再び馬車へと合流したときのセリフは、

「つまらん連中を斬っちまったなあ」

☆☆☆

ブレイン・アングラウスという剣士が御前試合にて周辺国最強と謳われることになるガゼフ・ストロノーフとの戦いに敗れたのは、今から4年と少し前のことだ。

その御前試合を愛妻キーンとの王都見物デーがてら、不可視の魔法をかけ見物していたモモンガは、即座にスカウト。

ガゼフに負けたことで自分に絶対の自信を持っていたブレインは茫然自失としていた。

そんな時、アーグランド評議国特使という肩書きで現れたアイン

ズ・ウール・ゴウンに誘われるまま向かったカルネ村で待つていたのは、目の前に現れたのは本当の生きる伝説……刃を交える必要もないほど圧倒的な存在感を放つ英雄“ダークウオリアー”だった。

もし、この時出会ったのが原作のモモンだったら、ブレインはシャルティア戦同様に心を押し折られていたかもしれない。

だが、ダークウオリアーはこの世界に現れて100年近く経つ……そう100年近く戦い続け、年齢に見合った老獪さも老練さも兼ね備えた超一流の戦士だ。

だからこそ初めての敗北を知り、挫折との向き合い方がわからないでいた青年に語りかける言葉があった。

『お前の限界はそこがいいのか？ それで満足なのか？ そこで満足なのか？』

『お、俺は……』

『だが、今見えてる強さ……その強さの先にある強さが見たいのなら、その道標くらいは俺が立ててやろう』

『俺にも目指せるのか？ 英雄の領域が……？』

だが、その言葉に漆黒の甲冑をまとう戦士は、

『英雄の領域？ 馬鹿を言うな。そんなものはただの通過点だ。お前の才覚ならその程度でなら容易いだろう。だが、その程度で満足なのか？』

『なに……？』

『お前に見せてやるといったのは、英雄の先にある“神の領域”という奴だ。ブレイン・アングラウス、心せよ。その道は果てしなく遠く険しい。だが、』

小さくニヒルに笑い、

『俺がその場所へ連れて行ってやる。どれほど時間がかかろうがな』

その後語るべき言葉は、さほど多くは必要ないのかもしれない。

強いて言うなら……同じ剣客ということもあり、「ダークウオリアーと最も多く剣を合わせたのは、カルネ村の内外を問わずブレイ

ン・アングラウスだった」と後世の歴史書には書かれている。

「カルネ村の七星剣が世にその名を知らしめる頃、『前衛の中では』
修道拳闘士^{グラップラー}“ゼロと双璧をなす”とまで謳われ、ダークウオリアーよ
り賜ったその二つ名は、”刀剣志士^{ジ・サムライ}”……

刀でその志を貫き、剣にてその士魂を示し続けた修羅……それがブレイン・ジ・サムライ、あるいはサムライ・アングラウスと語り継がれるブレイン・アングラウスの伝承だった。

第51話：“傾いて候”

ブレイン・アングラウス

いざ竜王国に赴けばビーストマンすら切り刻む、カルネ村の七星剣の一太刀。

ただ、その容姿は原作と比べるならかなり印象が違う。小奇麗になつてるし小ぎつぱりしてるし、何より結構派手だ。

髭はきれいに剃られ、原作より長く伸ばされた青みがかつたクセのある髪は後で組紐で結わえられていた。

また下半身は動きやすそうなレザーパンツとロングブーツの組み合わせだが、膝やつま先／踵など“武器として使える部位”には希少金属のゴツイ補強具プロテクターが装着されている。

そして一番のイメチェンを演出してるのは上半身の装いかもしくない。

着込むのはチェインシャツではなく、ミスリル糸が守護のルーンを刺繍する、どこか金欄きんらん緞子どんすにも見える地に魔化された多くのレアメタル・プレートが裏打ちされた“袖なし装甲服”。

そしてその上に重ねるのは、黒と黄で描かれる縞模様が見事な虎革の陣羽織だ。

手の動きを妨げないような蛇腹構造の燻し銀の籠手には魔法をプールできそうな宝玉が埋め込まれ、ペンダントも三種の効果異なるヘッドをまとめて装着する“トリンケッツ”というタイプになっている。

指輪はおそらく種類が変わり、間違いなく疲労無効化はつけているだろう。

そして何より印象深いのは刃渡り三尺三寸、エイ革巻き一尺五寸長束の大業物……抜けば艶かしく輝く黒曜片刃の刀身を鋼造りの朱塗りの鞘に収めた愛刀“神刀・滅却”である。

スカウトする前にブレインが所持していた、南方から流れてきたとされる刀“神刀”を文字通りの叩き台に、クラフトマン技能を持ちこの100年で数々の現地アイテムの改造を行ってきた（趣味に走ってきた）モモンガとドワーフが、希少金属とデータクリスタルをつぎ込んで打ち直し、鍛え直したのがこの“神刀・滅却”だった。

無論、ネーミングはモモンガで、

『神刀と言えば滅却しかないだろう?』

とのこと。

もしかしたら“あの作品シリーズ”は、遠い未来でも浪漫桜をリバイバルさせたのかもしれない。

もつともその作品に登場したほぼ同名の刀は、黒作大刀に似た片刃直刀であり、刀としての形状は全く違うが。

他にも室内などの狭所戦闘用に、切っ先が両刃となり刺突に効果を発揮する小鳥造（鋒両刃造）の小太刀（名称不明）も右腰に差していた。

大太刀は刃を上に向けた左腰に刀差、小太刀は右腰に刃を下に向けた太刀差……刀と脇差の二本差のセオリーをあえて無視しているということは、どちらも右手の使用が前提で“神刀・滅却”は順手での居合、小太刀は逆手抜刀を意識しているのか？

それにしても……組紐で縛った長髪に金欄緞子の胴纏と虎革の陣羽織、腰には朱塗りの鞘に収められた堂々たる大業物……侍というより、むしろそのスタイルは“傾奇者”に近い。

それではなければロックスターだ。

そしてブレインは長束に添えるように手を置きながら腰を落とし、

「《能力向上》《能力超向上》」

そして必要な脱力を行い、居合いの構えから……

「奥義《草薙》!!」

“ シュバツン!! ”

鞘走りから十分な加速を乗せた刀身で、名通りに水平に広がりながら草むらを薙ぎ払う真空の音速刃を解き放つ!!

☆☆☆

「なんとっ!?!」

だが恐るべきは、超音速で迫る不可視の風刃を、僅かな気圧の変化と第六感ともいえるまで研ぎ澄ませた危機察知能力を發揮した少女(?!):…漆黒聖典第九席次“疾風走破”ことクレマンティーン・メルヴィン・クインティアだ。

本能的に敵が斬撃を飛ばしてくるタイプの武技を使ったこと、そして横に逃げても避けきれないことを悟ったクレマンティーンは、頭に二つの選択肢を浮かべた。

つまり跳躍で飛び避けるか、這い蹲って頭上を通過させるかだ。

(跳ねるのは論外……)

こと殺し合いにおいて、クレマンティーンの異常性が顔を出し、脳味噌に氷柱^{ツララ}を直接ぶち込まれたような底冷えする感覚が全身を支配する。

彼女は、その感覚に身を任せ、

(伏臥の姿勢から四肢と全身のバネを使って一気に加速、間合いを詰め屠る)

ソニックブレードの飛んでくる方向から、目で確認しなくとも敵の位置は大体わかる。

ならば取るべき方策は一つ。

(斃して活路を得る……!)

相手はおそらく剣士、使った技は《空斬》を徹底的に強化拡大した物だ。

(なら放った後に必ず隙ができるっ!!)

「《<不落要塞>》《流水加速》《疾風走破》《超回避》《能力向上》《能力超向上》」

だからこそ両手で魔法を仕込んだステイレットを抜き放ち、その刺突に全てを賭けるっ!!

「殺^とるっ……!!」

☆☆☆

真空の刃が頭上を駆け抜ける感覚を合図にネコ科の肉食獣が獲物に襲い掛かる姿を髣髴させるような超低姿勢からの凄まじいダツシュ!

並みの人間、いや相応の剣士でも反応する前に眉間を貫かれるような早く鋭い一撃……勝ち目は十分あるはずだった。

派手な格好の剣士は、鞘から右手で剣を抜き放った形。

(あの姿勢からなら、刃を返される前に懐に飛び込める)

ステイレットの間合いは短い。

だが、懐にさえ入ってしまえば相手の獲物では、逆にその長さが仇となり自分は斬れない。

右腰にも予備のショートソード(?)を差しているが、位置的に空いた左手で抜くのは困難だろう。

クレマンティーヌは勝利を確信する。

タイミングは完璧、カウンターとして十分。

敵……標的……伊達男は、振りぬいて切っ先が斜め上を向く大太刀の握りを咄嗟に片手から両手に持ち替えるが、もう遅い!

刃が返され自分を向くが、今更何をやろうが手遅れ! 自分の勝利は揺るがない……筈だった。

「秘剣《とんびき鳶斬り》!!」

その時、クレマンティーヌの瞳に映ったのは、視界全てを埋める“四閃の軌跡”だった……

刹那、舞い散る真っ赤な血の花弁……

「お兄ちゃん……ごめ……ん……」

薄れ行く意識の中、クレマンティーヌは最後にそう呟いた……

第52話：「秘劍《鳶斬り》が生まれるまでのエトセトラ」

結果だけを見れば、ブレインの完勝に見えた。死合。だが、どうもそうとばかりは言い切れなかったようで、

「まだまだ未完ってことか……」

「チンツ」

鏢鳴りをさせながら黒曜の刃を朱塗りの鞘に納刀するブレイン。だが、その肩は少し沈み、背中はしよぼくれているようにも見えた。

☆☆☆

さて、そのブレインの背中が煤けてる理由を探求すべく、「先の戦い……カルネ村七星剣が一人、刀劍志士^{ジ・サムライ}ブレイン・アングラウスとスレイン法国六色聖典が一つ漆黒聖典第九席次”疾風走破”クレマソントイヌとの戦いを違う目線で少し振り返ってみよう。

居合い抜きの一撃で発生させた”奥義《草薙》”。その名のとおり不可視の真空の刃は、草むらを横一線に薙ぎ払いながら直進する。だが、機能拡張した《神域》で相手の大体の強さを把握していたブレインは、その一撃で倒せない「人間種の中でなら極上の獲物」であることを理解していた。

ただ、予想を僅かに上回ったのは草むらに潜んでいた敵……”ビキニアーマー女”の速度”だった。

伏せて《草薙》をやり過ぎたのはわかったが、そこから突進につなげるまでのタイムラグの短さと突進自体のスピードが尋常ではなかったのだ。

ブレインは冷静にビキニアーマー女の脅威度判定を上方修正し、その力を認めた。

(試してみるか……)

そう。つい最近、ようやく完成の域に達したと思われる新武技の“試し斬り相手”として申し分ない力量を！

ちよつと前までブレインの最強剣技は、“秘剣《獅斬三光》”と呼ばれる技だった。

これは《神域》を発動し、剣速を最大限に加速させる武技《神閃》を組み合わせ、相手の先を取る……それが骨子だ。

ブレインは二つ以上の武技の組み合わせの技を秘剣としている(奥義は組み合わせ不可の大技のことか?) ようだが、最初に完成した秘剣は《神域》の前段階にある同じ知覚系下位互換武技《領域》と同じく《神閃》の下位互換である《瞬間》を組み合わせた“秘剣《虎落笛》”だ。

彼の凄まじいまでの剣才を物語るエピソードとして、この《虎落笛》はカルネ村の移り住んでからわずか3ヶ月で生み出されたというものがある。

無論、これは「いずれガゼフ・ストロノーフに雪辱を果たす為」というモチベーションで編み出した技だったが……だが、それが甘かった。

モモンガにスカウトされた翌年、即ち3年前からブレインはその技量が認められ、毎年恒例となっている竜王国への“ピーストハント”に同行を許された。

だが、その戦いで《虎落笛》の力不足が露呈したのだ。

当たり前と言えは当たり前だが、いくらガゼフ対策とはいえ“対人間用”の武技であり、「並の人間の10倍の力を持つ」とされるピーストマン相手には、聊か威力不足だったのだ。

しかし、その程度で押し折れるくらいなら、ブレインはカルネ村でダークウォリアーと始めて対峙した時に剣士としては終わっていただろう。

彼の特筆すべきところは、一度“絶対なる神の高み”を知りながらもそこへ飛翔しようと足掻く強さ……こうと決めたら突き進む不屈

の心、すなわち”土魂（サムライ・スピリット）”である。

ブレインはまずその戦いでいきなり覚醒、《領域》の上位互換武技である《神域》、《瞬間》の上位互換である《神閃》を会得。

この二つを組み合わせ、”秘剣《虎落笛・改》”を編み出した。

そして生きて……一度も蘇生や復活を経験することなく竜王国より帰国したブレインは確かな手応えを感じていた。

そう自分の剣は、あの人外どもにも通じるのだと。

そして始まったのは慢心も驕りも捨てた、ストイックな開発と研鑽の日々だ。

つまらないプライドを捨て、モモンガ（ダークウオリアー）を手本とするだけでなく、ネムを連れてカツツエ平野まで宿敵ガゼフの戦う様を見に行つたことも何度もある。

というよりダークウオリアーの武技は凄まじ過ぎて、原理は理解できても現状の身体能力では再現できないものが多すぎた。

何しろ普通の素振りが《神閃》で加速した剣速と互角かそれ以上なのだ。

ともかくその甲斐あり、《神域》と二振り分の《神閃》をかけた斬り降ろし↓斬り上げの連続斬撃”秘剣《双虎斬》”を編み出し、この技にさら居合いを組み合わせることにより三連撃として完成したのがこれまでの最強技”秘剣《獅斬三光》”しげんさんこう”だった。

ところで、名前の感じが途中から変わったことに気づかれたらどうか？

実はブレイン的には”虎”というのはリアル・タイガーではなく、明言は避けてるもののどうやらガゼフ・ストロノーフを揶揄してる単語のようだ。

例えば、ブレインが魔化を施した虎革の陣羽織を愛用しているのも無関係ではないらしい。

しかし、《獅斬三光》は、かなり明確な対ビーストマンを意識したネーミングだった。

ひよっとして少なくとも現時点では、ガゼフ越えはできたという自

負の表れだろうか？

だが、居合いと《双虎斬》の組み合わせである《獅斬三光》は一度放つてしまえば、再び納刀するまで放つことはできない。

無論、《双虎斬》の連撃で繋ぐという手もあつたが……そこで止まつてしまえば自分ではないと、ブレインは考えた。

そう、彼が求めたのは「抜刀した状態で《獅斬三光》を凌ぐ技」。

そして、白羽の矢を立てたのがかつてガゼフより見て盗んだ「一呼吸で四斬撃を打ち込む」ことが可能な武技、“《四光連斬》”だった。《神域》で空気の微粒子の動きまで把握し、《神閃》で極限まで加速した《四光連斬》を組み合わせる……その名も、

「秘剣《鳶斬り》！！」

☆☆☆

確かに人類種レベルなら超高速と呼べる四連斬撃は、放たれた。きつと、ビキニアーマー女には同時に四つの剣閃が見えたことだろう。

蛇足ながら、《鳶斬り》の由来は、ブレインが新技の構想を練るため寝転がりながら空を眺めていると、空を優雅に舞う鳶の群れが見えたところから始まる。

“ピーヒョロロロ”というどこか可愛らしい鳴き声は、どこかの長閑で、21世紀序盤の日本なら「田舎の原風景」の一つにも加えられるだろう。

だが、獲物を狙うときの死角から急降下する鋭い一撃は、やはり彼らが猛禽であることを改めて思い出させるだけのインパクトがあつた。

そう、ブレインに「獲物を狙う急降下中の鳶の群れすら切れる剣、か……」と新技のインスピレーションを与えるほどに。

だが、ブレイン的にはまだまだ不満があるようで、

「あくあ……」斬らされ”ちまつたなあ」

そう全身をバラバラにされ事切れたビキニアーマー女……クレマンティーナを見下ろしながら、そうばつが悪そうに頭を掻いた。

「ブレインさん……？」

達人同士の戦い……呼吸を忘れ、あるいは固唾を呑みその一瞬を見守っていた部下の一人が冴えない表情のブレインを不思議に思い問いかけた。

「事情聞こうと思ったから、瀕死で留めるつもりだったんだよ。せいぜい、四肢を斬り飛ばす程度のつもりでな」

「へっ？」

「だが、この姉ちゃんの踏み込みが思ったより速くて、想定よりも深く刃が入っちゃったのさ」

そしてブレインは何を思ったかクレマンティーナの切れっ端を拾い集め始め、

「ブレインさん、何をやってるんすかっ!? 死体なんて放つとけばモンスターや獣が勝手に……」

“ごいん”

「アイター！」

軽く部下その1に拳骨をくれてやりながら、

「バカ。俺の剣の欠点を曝け出してくれたんだぜ？ それなりの礼をするのが粋いきってもんだろうが？」

「礼ですか？」

「ああ」

(まくたエンリに「未熟者」って笑われそうだな。事実だからしようがねーが)

「四斬撃を任意の1ヶ所に打ち込めるくらいの精度を出さんと、完成したとは言えんのかもな」

どうやら《鳶斬り》が完成へと至る……秘剣《爪切り》を凌ぐ武技となるのは、まだしばしの時が必要なようだった。

第53話：「クレマンさんよりエンリの方が怖いという風潮」

「《マキシマイズマジック／魔法最強化》……《リザレクション／蘇生》。はい、これでもうすぐ目覚めると思いますよ?」

そのやや露出過多な神官服の少女は、事も無げに表向き人類が使える限界とされる第6位階を超える魔法、第7位階魔法《リザレクション／蘇生》を、御丁寧に効果が乱数で決定される魔法を最大値で固定する《マキシマイズマジック／魔法最強化》までかけて使ってみせた。しかも「ワンド・オブ・リザレクション蘇生の短杖」といったマジックアイテムや《オーバーマジック／魔法上昇》による使用可能位階の上げ底などを行わずにだ。

エンリ・エモット……第04話にて「何気に第6位階の《ヒール／大治癒》とか第5位階の《死者復活／レイズデッド》なんかをさら々と使いそうで怖い」と書いたが、どうやらそれどころではなかったようだ。

もつとも、これは彼女自身だけの力ではなく、「ロータス・ワンド蓮の杖」の特殊効果も無視できないところだろう。

どうやらこのゴツ神格級アイテムの疑いのあるエンリ愛用の杖、ただの鈍器や空間座標攻撃の触媒ではなく、神官などの神職者が使用した場合のみと言う縛りはあるが、神聖／光属性魔法や信仰系魔法限定ではある物の様々なブースト効果があるようだ。

現状のエンリの実力だと、その種の第7位階魔法は使えるが、保有魔力の問題でマス集団化はできなさそうではある。

具体的には《リザレクション／蘇生》だけでなく《ホーリー・スマイト／善なる極撃》や、もしかしたら《サモン・エンジェル・7th／第7位階天使召喚》も発動できるかもしれないが、その三つとも対象は1人／1発ずつの発射／1体のみの召喚という感じだろう。

おそらく集団化して使えるのは、デスペナが大きな蘇生系の最下位

魔法《死者復活／レイズデッド》が限界ではないだろうか？

ただはつきり言えるのは、純粋な“治癒術師”としての腕前ならば、王都にいる“中二な彼女”より格上だろう。

また杖の数多の効果も、増大率／増幅率がカルマ値に左右（当然、＋なら効果増大。－なら効果減少）されていそうなのだが……驚くべきことに、エンリ・エモットのカルマ値は“極善”なのだ。

グを拘束して凹ろうが、法国先遣隊をハリネズミにしようが、マルチロツクオンの空間座標攻撃で天使を一掃しようが、繰り返すがエンリのカルマ値は“極善”なのだ。

要するに、彼女にとつてそれら全ての行動は悪意の欠片もない、純粹な善行だと思つてやっているのだ。

そもそも、エンリ・エモットと言う少女の公的な立ち位置は、お骨の玩具……ではなく、偉大なりし“死の神”に仕えし巫女、女神官だ。

他にもカルネ村においては間違いなくモモンガの一番弟子だが、王国という単位で見ればラナーとどっちが先に師弟関係を結んだのか意見の分かれるところだ。

原作におけるエントマとシズの「どっちが妹か？」論争みたいなものだ。

死の神の女神官である以上、自分の奪った命はモモンガへの奉納になる……神様へのお供物を用意するんだから、それは信者に取り善行以外の何者でもないという論理武装だ。

別にこれは人類にとり珍しい発想ではなく、現実の歴史でも聖地奪還に燃える十字軍華やかかりし頃、襲った異教徒の街の住民を皆殺しにし、踝まで異教徒が流した血につかりながら奪った金品を神への供物にしたなんて話が普通に残っている。

当時の十字教徒の価値観／世界観では、それらの行動は狂信でもなんでもなく、逆に疑いようも無く「敬虔な信徒による神聖な行為」であつた。

嘘だと思ふなら「十字軍 蛮行」というキーワードで検索してみるといい。中々に興味深い“欧州史の暗黒面”が出てくるはずだ。

はつきり言えば、王国だろうが帝国だろうが法国だろうが、鈴木悟

という人間が生きていた惑星ほしの上で人類がやらかした悪行の数々から比べればまだまだ甘いと言っている。

要するに人間の価値観なんて物は所詮、人間と言う存在自体がそうであるように万能でも万全でも完全でもない。その時代背景や世界情勢、あるいは時の権力者の意向でいくらでも変遷するということだ。

“そこまで極端かどうかはわからないが、エンリも少なからず” “そういうフシ” があるように見える。

もつともそのぐらい素っ頓狂な価値観だか善悪判断だかが無ければ、とても『死を想え』メント・モリを教義の根幹としてるような死の神の巫女なぞやってられないだろう。

そして中身が原作ラナーと違う意味で異形種じみてるとしても、エンリの力はやはり疑いようもないもので……

☆☆☆

「それにしても……蘇生させておいて今更ですけど、ブレインさんがわざわざ誰かの蘇生を頼むなんて意外ですね？ それも女の人だなんてけっこうびっくりです」

「ちよつとマテ。エンリ、それはかなり誤解を招く発言だろうが」

「ああ、いえいえ。特に他意は無いデスヨ？ ただ、ブレインさんも女性に興味があつたんだなあゝつて。もしかして、こういう女ひとが好みなんですか？」

暗闇から少しずつ意識が浮上する感覚……水の中から声を聞くような不明瞭な音。

それがクレマンティーヌが復活後に最初に感じた五感だった。

「ばーか。そういうこつちやねーよ。ただちよつと手元が狂ったというか……」

「はあ？」

「いや、四肢を斬り飛ばす程度で済ませるつもりだったが、誤つて殺つ

ちまったというか……」

(ちよつと待てつ！ そんな理由でワタシはバラバラになつたんかいっ!?)

そう全身全霊でツツコミたかったが、声も出なければ体も言うことを聞かない。

その理由をあえてクレマンティーヌは考えない……というか思考を保留していた。

「ハッハア〜っ♪ 未・熟・者ですねえ〜♪」

「予想通りのセリフをありがとよ。大体、なんでそんなに楽しげなんだよ?」

「だって他人ひとの失敗ふこうは蜜の味って言うじやないですか♪ それにゼロさんに並び称される〝七星剣、前衛の双璧〟の片割れの戦闘時の失敗談なんてレアでしょ?」

「阿呆抜かせ。お館様に比べれば、俺もゼロもドングリの背比べ。失敗も山積で、万事において粗あらだらけだ」

「それはそうですけど……つてどうやら意識が戻つたみたいですよ?」

その向けられた視線を視覚情報として認識した時、クレマンティーヌの背筋に悪寒……本能的な恐怖が走った。

男の方はまだいい。万全の装備でも勝ち目は限りなく0に近いが、思いつく限り何もかも自分に有利な条件を整えられれば、まだなんとかなるかもしれない。

だが、女の方は……

「ああ、蘇生したばかりなのでしばらく体も動かせないし声も出せませんから、無理しなくていいですよ? 今は回復を優先してください」

とさりと割とんでもない発言をしてから、

「そうしてもらわないと、こちらとしても聞きたい情報が聞けそうも無いんで。口が動かせないと色々不便ですし」

背中にゾクリとした感覚が走る。

この女に悪意は無い。悪意は無いが、

「ああ、そう怯えなくてもいいですよ？ 私、神官なんで躰や教育的指導には行いますが、拷問とかは趣味じゃないんですよ。無駄に労力がかかりますし……確かに合理的な側面はありますがね」

エンリは内心、ラナーなら「わたくしもですわ♪ 第一、エレガントじゃありませんもの」とか言い出しそうだなーと思いつながら、

「頭の中にある情報を引き出す方法なら、別にいくらでもありますし」

クレマンティーヌは思う。

その女の瞳は、法国の中にいる自分のような信仰心の薄い存在とは対極にある“ヤバい連中”と同じ輝きをしていた、と。

第54話：「 エンリさんを機軸にお骨様を考察してみる」

さて、尋問のお時間です♪

ポップな書き出しだが、あながちそう的外れでもない。

ここは薄暗い地下室でもなければ三角木馬なんて趣味の小道具……いや、失礼。普通は拷問具の類か？が置いてあるような部屋では断じてない。

というか愛用している大抵の魔法鎧より頑強で無効化／高強度耐性の防御魔法付与でんこ盛りの神官服、“動く修道院”をひん剥いたとしても素でデスナイトより頑強なこの娘、三角木馬程度に座らせた程度じゃ、両手を後で拘束して両脚に鉄球つけても気持ちいいだけだろう。

某お骨様にその体制で蠟燭垂らされたり股間に食い込む木馬を蹴られたりしたら、色々良すぎてすぐに失神してついでに即座に失禁するかもしれない。しれないじゃない、絶対する。おもらしキヤラは何もラナーに限った話、ラナーの特権という訳じゃないのだから。

というかモモンガに躡けられた娘というのは激しい調教された結果ではなく、徹底的な快樂と心身ともに甘美な弛緩を味わう……比喩的に言えば、徹底的に甘やかされて強制的に自我があやふやになるくらい蕩けさせられてしまうので、多かれ少なかれその傾向が出てしまう。

可愛さを優先するあまり、社会通念やら倫理観やら道德心やらが肉体以上に緩くなるのだから仕方ない。

モモンガの愛で方はむしろ甘い毒薬や麻薬に例えられていいのかもしれない。

普段はどれだけ凍々しくしゃんとしても、その内面はモモンガの甘さを脳も記憶もが忘れられず、また本質的には“面倒見のよさが寂

しがり屋の裏返し”であるモモンガも無条件に甘えてくる愛らしい娘たちを求めているから、ここで需給バランスがとれて目出度く共存が成立してしまう。

一緒に過ごす時間が長くなるほど甘美な毒は内面を腐らせ、侵食し、ますます依存心を強める……心の奥底での幼児退行を容易く誘発する。

別におかしな話ではない。「無条件な安寧の中でいられた時代への憧憬」である“幼児回帰願望”は誰もが持っているものだ。

だが、モモンガは色々と未熟な愛らしい少女たちの、未熟がゆえに不安定な部分は無意識／無自覚のうちに幼児化したゆえに純粋な、より根源的な依存へと書き換えてしまうのだ。

ラナーみたいに『いつかこの一番狭い穴にも先生の愛を挿入れてもらうんですの♪』と性感帯の気持ちよさに引き摺られて排水路を健気な努力で拡張する娘もいるが、基本彼女たちの失禁癖は、むしろ精神面の表れである可能性が高い。

肉体的に弄られたよりも、正直重篤であり危険である。

要するに「年頃の娘さんが、幼子のようにお漏らしし、そこに忌避感を感じずむしろ性的快感に身を振じらせる」のだから。

ネムは微妙だとしても、それ以外の面子は必ず一度は「粗相をしないように躡けられてる」にも関わらず、だ。

例え世界線がどれほど変ろうが、力行使するベクトルが変わろうが、人であろうが骨であろうが、恐ろしかろうが優しかろうが、その支配力やら本質やらにおいては、やはりモモンガは魔王なのかもしれない。

☆☆☆

ん？ エンリ姐さんは女神官じゃないのかと？

一体、いつからエンリが未通女おぼこだと勘違いしていたんだい？

古今東西を問わず、女神官やら修道女やらが一際“処女性”ヴァージニティを求

められるのは、建前に「神様に仕える＝神様の嫁」だからという考え方がある。

なら、その神様が実存する上に受肉し、おまけに御立派なマール様まで保有してたらどうなるか？……って考えるまでも無い。

端的に言えば、聖職者としての幸せも狂信者としての幸せも女としての幸せも一匹の牝としての幸せも、一石四鳥でやってくるお得なプランだ。

ついでに言えば、エンリが「死の神と合一」したのは、今のネムと見た目が変わらない頃だったりするのだが。

それでも胸が必要以上に膨らまないように気をつけながら、モモンガの好みの境界線上ギリギリの攻めたライン……小柄なりアルJK 1年程度まで成長したのは、やはり彼女も未だ人間らしく野心があったからだ。

なんのことはない。スレイン法国最深部にいる白黒頭つ娘と同じく、彼女もまた「孕みたガール」……要するにモモンガとの子供が欲しいのだ。

ダークウォリアーにせよアインズにせよ、受肉してる以上は受精する可能性は0ではない。そこに賭けて、モモンガの好みから逸脱しないように細心の注意を払いながら、妊娠し安全に出産できるギリの綱渡りしてるのがエンリ・エモットという少女だ。

前に何度か出てきたかもしれないが、エンリはキーノが座る^{正妻ポジ}后の座を狙ってるわけではない。

仕える身の方がエンリにとり喜ばしいのだ。だが、同時に吸血姫……アンデッドであるキーノが「出来ないこと」も理解していた。だからこそ、母になりたいのだと。

なんだかんだとモモンガのみならずキーノも慕っているのも、またエンリなのだ。

それに何より、性質的に難しいキーノはともかく悪友^{ラナー}も妹^{ネム}も母になろうという意識が、からつきしもないことがエンリ的には頭の痛い問題だった。

二人の共通見解は、「自分が一番可愛い。娘に愛されポジを取られ

頭衣姿となったクレマンティーヌは、村の教会の談話室で尋問という、なんとも珍奇な状況になっていた。

蘇生されてからしばらくは体も満足に動かないどころか声も満足に出せなかったが、よくわからない回復系魔法と魔法薬、そして田舎の開拓村にあるまじき美味な料理のせいか、クレマンティーヌはデスペナによるレベルダウンは間違いなくあれど順調に回復した。

そうならば、当然尋問がはじまるのだが……ここで問題が一つ。

「死んで蘇ったのだから、覚悟はしてましたが……やっぱり、何故カルネ村に来たのかは覚えてませんか？」

“こくん”

そう復活したクレマンティーヌには原作の復活直後のシャルティア同様、ここ数日の記憶が綺麗に抜け落ちていたのだった。

第55話：“わからないというのは存外強い武器になる？”

さて話は、尋問開始まで戻る。

エンリ・エモットの尋問に、“アイアン・メイデン鋼鉄の処女”が登場したり、石抱かせたりというような様式美は存在しない。

ただただ、

「《マキシマイズマジック／魔法最強化》《ペネトレートマジック／魔法抵抗難度強化》《エクステンドマジック／魔法持続時間延長化》……
《ドミネート／支配》」

といきなり強化したモモンガ様直伝の《ドミネート／支配》をかけるだけだ。

そりやこの魔法を素で使えるなら、そういう趣味でもない限り拷問の必要などないだろう。

なんともドライだし、もしラナーならもう少し遊び要素を加えそうなものだが、生憎とエンリは合理主義で、本人隠してるようだがモモンガや生存が絡まないと存外に面倒臭がり屋だ。

ちなみにエンリ、攻撃魔法のバリエーションこそ少ないが、詠唱可能な魔法の数ならデイバーノックに引けは取らない。

色々謎、あるいは未公開情報が多いゴツ神格級（？）アイテムの“ロスタス・ワンド蓮の杖”のサポートやらブースとやらの効果もあり、神聖／光属性の魔法や信仰系魔法のバリエーションは中々のものだ。

事実、本来の彼女の総合Lvでは使えないはずの、一般には「人類では使えない領域」と認識される第7位階魔法をジャンル限定とはいえ平然と使っているのだ。

「まず、貴女の名前と国籍、所属、役職、立ち位置なんかを答えてもらえますか？ あとついでに興味嗜好なんかを聞いておきますか。何かの突破口になるかもしれないし」

そして術に見事に掛かり虚ろな目をしたクレマンティーヌは、

「クレマンティーヌ・メルヴィン・クインティア。スレイン法国、六色聖典の一つ漆黒聖典の第九席次。コードネーム“疾風走破”。好きなものはお兄ちゃん。初恋の相手はお兄ちゃん。初めての相手もお兄ちゃん。男はお兄ちゃんしか知らない」

かなりの爆弾発言をかましてくれるが、兄に欲情する妹？ 妹に欲情する兄？ 別にそれがどーしたの？ 的なエンリ姐さん。

ラナーのように“らのべ”を読みふける趣味は無いが創作物ではわりとありがちなジャンルだし、ラナーによれば『退屈になりがちな日常の中で、背徳感が程よいスパイスになる』と王国貴族の中でもリアルでもままある話らしい。

なので、エンリが注目したのは別のことで、

「あらま？ まーた法国の方ですか？ あの国も懲りませんね。モ、お館様に対し不敬極まりない……ところでその疾風聖典。間違いました“疾風走破”さんがカルネ村に何の用です？ 威力偵察か何かですか？」

「……わからない。ワタシはなんでカルネ村のそばにいたんだろ？」

「はあ？ 聞いているのは私なんですけど？」

「わからない。何も思い出せない」

無論、人を蘇生させるのが初めてではない……というか、竜王国では割と需要のあるある能力持ちなエンリは、この状況に覚えがある。

そう、死から蘇ったものは数日間の記憶を無くすのだ。

一説によれば、デスペナルティーで起こしたLvダウンの日数分（例えば5Lvダウンしたら5日）とされるが、その辺りは定かではない。

エンリにしたところで、蘇生魔法というのはあまり実践がないのだ。基本、彼女が使うのは身内や仲間か、今回のようにどうしても蘇生して尋問せねばならない場合なので、仕方ないところだろう。「死んで蘇ったのだから、覚悟はしてましたが……やっぱり、何故カルネ村に来たのかは覚えてませんか？」

“こくん”

ならばとエンリは気を取り直し、

「『疾風走破』、貴女が知ってる記憶の中で一番新しく、そしてカルネ村に来る理由で思い当たることを話してください」

「……多分、エ・ランテルに潜伏しているズーラーノーンへの潜入工作」

「ズーラーノーン？ たしか私の生まれるちよつと前くらいに小さな街をアンデッドのリゾート地に変えた秘密結社だっけ？」

原作のエンリと違い、“ただの農家の娘”として生きることが叶わなかったこの世界のエンリは、好む好まざるに関わらず中々に世情に詳しくなってしまった。

視線を向けたのはクレマンティヌではなく、万が一暴れたときの鎮^{押さえ}圧役と斬った縁（？）で尋問に付き合ってたブレイン・アングラウスだ。

「確かガキの時分にそんな噂話を聞いたような？」

とはいえブレインとてまだ三十路には達していない。エンリとの年の差は精々あつて10歳程度、21世紀初頭の日本基準なら小学生だ。インターネットが概念すらないこの世界、当時の詳細など知るはずも覚えてるはずも無い。

「それで合ってる。……ワタシの任務は、エ・ランテルのズーラーノーンへの潜入。内容は内偵調査」

「？ なぜそこでカルネ村に来ることになるんです？ 確かにウチの村は死の神様を信奉していますが、ズーラーノーンとやらとは無関係ですよ？ 神官の私が保証します」

エンリがズーラーノーンの詳細を知らなくて幸運だったろう。もし知ってれば、この時点で大憤怒確定であろう。『そんなチンピラ組織とカルネ村を一緒にするなっ!!』と。

「わかつてる。大神官長様との話でもカルネ村の話は出てこなかったはず。命令された作戦は、“叡者の額冠”を手土産にエ・ランテルのズーラーノーンと接触。ワタシの立ち位置は、“脱走した元漆黒聖典”だった」

☆☆☆

「うくん……」

エンリは思わず腕を組んで考えてしまう。

《ドミネート／支配》の掛かりは完璧。抵抗レジストされてる様子も無い……ならば、コチヲを謀たばかってる可能性は0と考えていいだろう。

だからこそ、どうにもクレマンティヌの任務とズーラーノーンとカルネ村が上手く繋がらない。

失われた数日分の記憶……十中八九、エ・ランテルのズーラーノーンとの接触の中で何かがあつたのは間違いないのだろうけど。

すると、

『鍵は、その“叡者の額冠”というアイテムと見て間違いないだろうな』

不意に空間を揺るがすように声が響き渡り、

“ヴォーン”

ハム音のような音と共に空間が歪む。このエフェクトは《ゲート／転移門》ではなくただの《テレポーション／転移》だろう。

額面通りに神に等しい膨大な魔力保有量があるはずの使用者は、結構魔力的E.C.O指向なのかもしれない。

「ズーラーノーンとは、また随分と懐かしい名を聞いたな」

歪みより現れたのは、豪華な漆黒のフルプレート・アーマーを纏った静観な戦士。

マジックアイテムであるメガネの奥に輝く黒い瞳に短く揃えた黒い髪。左腰に細剣、背に大剣。

今や数多の吟遊詩人に謳われるその姿は、

「お館様っ!?!」

ついにド本命、アダマタイト級冒険者にしてカルネ村領主名代“ダークウォリアーカルネ村のラスボス”。興味本位に参上である。

第56話：“迷探偵ダークウオリアー　　女神官服の謎を追えっ!?”

興味や好奇心と言うのは、人間をはじめ多くの知的生命体の行動原理になりうる。

未知とは基本的に恐怖であり脅威である。知らないということはその害をなしたとき、手の打ち様がないことを意味するのだから。もしかしたら未知への探究心とか好奇心は、その根源は未知の恐怖に対する払拭なのかもしれない。知らないことが怖いという気持ちを、知ることが楽しいという気持ちに置き換え、知らない事象を知っているに書き換え知識と経験となし、知らない土地を歩き生存圏を広げてきた。

「ズーラーノーンとは、また随分と懐かしい名を聞いたな」

まあ、この正体がお骨な暗黒戦士ダークウオリアーに、この世にどれほど怖いものが残ってるかは定かではないが。

「お館様っ!?!」

わざわざ《テレポーターション／転移》を使つての不意打ち気味の登場に、慌てて頭を下げるエンリ&ブレイン。エンリなぞ今にも椅子から床に降り、反射的に跪きそうだ。

勿論、モモン……ダークウオリアーは、そんな畏まり過ぎた態度はちよつと勘弁して欲しい。

お骨様モードならともかく、受肉してる状態だと実際に肩が凝るのだ。

という訳でエンリ、立ち上がり椅子を譲るだけに留まるが、

「面おもてを上げよ。別にここは畏まった場ではないだろ?」

そう制してから、

「はじめましてだな?」 “疾風走破”

「だ、ダークウオリアー……?」

呼び捨てにエンリのみならずブレインの目つきも鋭くなるが、ダークウオリアーは「よい」と目線で示す。

強化された《ドミネート／支配》が掛かっているため虚ろな目であり、また感情が表情に出にくい状態だが緊張か恐怖かはわからぬが、体が小刻みに震えていた。

「いかにも俺がダークウオリアーだ。早速で悪いが、」

“ひよい”

「きやんっ!?!」

とダークウオリアー、立っていたエンリの細い腰を両手で抱きかかえ、そのまま膝に乗せてしまう。

「観者の額冠」というアイテムのこと、聞かせてもらおうか?」

先に言っておく。

ダークウオリアーはモモンガに悪気は欠片もない。

変に緊張してる空気を弛緩させるために、わざわざこういう演出をしたのだ。

それに、相変わらず露出過多の巫女服……もとい神官服着たエンリは可愛いし。

せつかくなので、今まで露出過剰／露出過多の神官服としか書いてこなかったエンリの女神官服、公式アイテム名“動く修道院”のイメージを描いておこう。

一言で言えば名前に反し、FGOのロリ・メドウスことLANCER槍使いメドウス“の衣装の色違いに、鎌槍の換わりに”蓮ロータスワンドの杖”を持たせたというのが一番近い。

肝心の色だが黒地に銀が基本のオリジナルに対し、白を基調として金の装飾や刺繍を施したものであり、意匠としては「ティーカップに似た印象」と評される某禁書目録インナントカさんの“歩く教会”に近い。

とはいえ、全体のイメージはあくまで白の長頭巾と、As版フェイトちゃんもびつくりな改造スク水ホデイスーツ(白)の組み合わせときてる。確かにこの世界にある女性用神官服の中では、トップクラスの露出度の高

さを誇るだろう。

そして白と黒という色ネガポジの違いはあれど、ボディスーツという共通項があるあたり、エンリとネムはやはり姉妹なのだと妙に納得してしまう。

ついでに言えば、エンリは下着はエロいと書いたが、要するに紐やらストラップでないと、衣装からはみ出してしまうというわけだ。ラインも出るしね。

そのうち、妹同様につけなくなるかもしれないが。

「ふにゃ……おやかたしやまあ〜」

(一瞬で蕩けたあーっ!?)

ただし、威力はエンリにとってもクレマンティーヌにとってもオーバークイル。

さっきまでの凜々しい女尋問官だか女異端審問官だかは異世界(?)へと吹っ飛び、クレマンティーヌは今にも自力で魔法を解きそう
だ。

顔を赤らめ目を潤ませ、抱きつきスリスリし、くんかくんかしてる
エンリは当分使い物にならないだろう。

とはいえ魔法の掛かりが無くなるわけではなく、何と言うか……
上位存在ダークウォリアーに術式ごと乗っ取られた感覚だ。

「えーと…… 叡者の額冠」というのはデスネ」

より淡々とした口調となって説明を始めるクレマンティーヌの背
中は、何故か少し煤けてる気がした……

☆☆☆

「なるほどな」

クレマンティーヌの口から語られた「叡者の額冠」の特性、「人間の意識と引き換えに位階ブーストアイテムに作り変える」と「ただし相性が厳しく、適合者は100万人に1人くらいしかない」という大きな二つの特性から、

「なら、目当てはインファイアに確定だろう」

「ふに？ んふいでしゆか？」

と撫でられすぎてすつかり身も心も蕩け緩みきったエンリが、焦点の合っていない瞳で問う。

何か上の口からも下の口からも種類の違う液体を色々垂れ流しているような気もするが、当然のように誰もスルー。

ブレインは「大将もお館様の前だけは、牝仔猫になっちまうんだよなく」と苦笑してるだけだし、モモンガは白い衣装の一部を黄色く染める「エンリは相変わらず可愛いなあ」と思ってるだけだ。

クレマンティーヌ？ 見なかったことにしてるらしい。

「ンフィーレアは、『あらゆるアイテムを使える』って固有異能タレントがあったろ？ 〃叡者の額冠〃の性質から考えて、それ以外にカルネ村に来る理由はないだろ？ 今回、特に法国はカルネ村に襲撃指示は出してないようだし」

「……そうなんですか？」

ただ、クレマンティーヌにはその記憶はなく、

「『疾風走破』、ンフィーレア・バレアレという名に聞き覚えは？」

だから、その質問にも首を横に振るしかなかった。

無論、まだ《ドミネート／支配》が解けてない以上、嘘の可能性は低いだろう。

「ということとは、そのエ・ランテルに潜伏してるズーラーノーンに聞いたのだろうな。やれやれ、あいつらはいつも何気に面倒ごとを持ってくる」

そう溜息をつくダークウオリアーであるが、

「お館様、連中のことを知ってるんで？」

ダークウオリアーの言い回しに察したブレインが素朴な疑問を投げかけると、

「まあな。知己があって嬉しい手合いじゃないが……」

彼は苦笑し、

「その昔、俺と妻は誘われたことがあるのさ。ズーラーノーンにな」

第57話：「知ってしまつた以上は……」

「知己があつて嬉しい手合いじゃないが……その昔、俺と妻は誘われたことがあるのさ。ズーラーノーンにな」

カルネ村七星剣の一人、配下のブレイン・アングラウスに問われるとモモダークウオリアーは苦笑と共にそう答えた。

そう、モモンガと愛妻キーノ……いや、正確にはダークウオリアーとイビルアイはかつてズーラーノーンに勧誘されたことがあつた。

それもカルネ村に居を構える前、ちようど竜王国で絶賛売出し中の頃だ。

その頃のズーラーノーンはとある小都市を“死の螺旋”による実験で壊滅させたばかりであり、ある意味において絶頂期であつた。

（確証があつたようには思えないんだが……だが、俺はともかくキーノの正体が”国墮とし”だつてのは気づいてた臭いんだよなあ）

面と向かつてそう追求されたわけでもなく、またそれをネタに加入を強要されたわけではない。

もしそんなことになれば、今頃ズーラーノーンという死霊系秘密結社だか宗教団体は歴史用語になつていただろうし、盟主であるズーラーノーン本人も同じく過去の人物になつていたことだろう。

まあ、そういうニュアンスで持ちかけられた……勧誘の際、「奥方と永遠の刻を過ごしてみたいと思わないかね？ 定命の君にはそれ相応に魅力的な提案だと思ふが？」とよりによって（おそらくは）ズーラーノーン本人から口説かれたのだ。

その時、モモンガは当然のように“リング・オブ・ヒューマン・ピーニング人間の証明たる指輪”を装着した、今と同じダークウオリアー・モードで遭遇したためにそう勘違いされたのだろう。

またその時に出会つた明確に名乗らず組織の名だけ出したスケルトンが盟主ズーラーノーン本人だと推測しているのは、自分と同じ“オーバーロード死の支配者”だつたからというところだ。

この世界に漂着して100年に及ぶ時間の中で、ユグドラシルでなら総合Lv80以上でなければ習得できないとされる同族オーバーロードと合ったのは後にも先にもこの1度限りだ。

本来ならLv60以上でなければ選択できない職業“忍者”が、ユグドラシル換算でLv20程度の存在が習得してる事例があるので一概にはLv80以上言えないが……遭遇骸骨はどう見てもLv70程度はありそうだったので、多分ズーラーノーン本人じゃないかと思っていた。

そう思えば“死の螺旋”、いや後に興味本位で壊滅都市を調べてみた結果で判明した“第7位階魔法《アンデス・アーミー／不死の軍勢》が使用できたのも納得できる。

そしてユグドラシル水準の強者が少ないこの世界で、総合Lv70ぐらいの実力と第7位階の魔法が使いこなせるなら、なるほど確かに超国家間秘密結社の一つや二つは作れるだろう。

その時に紳士武力行使せずかつ丁重にお断りしたためそれ以降の接触はなく、推定ズーラーノーンとの邂逅はその限りだったのだが……

「流石はお館様、無駄に顔が広いな」

感心してるんだか呆れてるんだか微妙な口調のブレインだったが、「これでも無駄に長生きしてるものでな」

と苦笑で返すモモンガである。

（だが、エ・ランテルで“死の螺旋”……いや、《アンデス・アーミー／不死の軍勢》を発動させる気なら、）

「クレマンティース、確認するが……ズーラーノーンが行おうとしているのは“死の螺旋”かどうかは判るか？」

「……その可能性が高いから、確認の為に潜入工作で派遣されたのが私だから」

「なるほどな……だとすれば、」

「エ・ランテルにいるのはズーラーノーン本人じゃないな」

「エ・ランテルにいるのはズーラーノーン本人じゃないな」

「えっ?」

「ブローラーノーン本人だったら”叡者の額冠”なんてブーストアイテムを使わなくとも、単独で”死の螺旋”程度なら起こせるさ。それに、本人ならあんな無駄な事はもう一度やろうとは思わないだろうさ。あやつもそこまで馬鹿じゃないはずだ」

「えつと……」

エンリを膝に乗せたまま苦笑交じりに微笑むモモンガは、

「20年ほど前の”死の螺旋”で使われたのは”第7位階魔法《アンデス・アーミー／不死の軍勢》”というのだが……実はあの時に行われた本当の目的、”儀式魔法の実験”は失敗だったのさ。それもくだらない理由のな」

☆☆☆

モモンガ、ダークウオリアーの口から語られたのは驚くべき事実だった。

「”死の螺旋”って儀式魔法はそもそも、《アンデス・アーミー／不死の軍勢》で召喚したアンデッドを触媒にしより強力な……通常の召喚では生み出せないようなアンデッドを生み出す儀式魔法だと認識されている。それで間違つてないか?」

「う、うん」

単に《ドミネート／支配》を受けているだけとは思えないきよとんとした表情で頷くクレマンティヌに、

「だが、本当の目的は違う。”死の螺旋”の意義はアンデッドの大量発生で生じた”負のエネルギー”を術者本人が取り込み、自らが強力なアンデッドになることを目的にしたものなのさ」

そこで一度言葉を切ると、モモンガはどう説明したものかと逡巡してから、

「だが、結論だけを先に言えばその実験は失敗してる。確かにアンデッドが高密度に集まればより高位のアンデッドを生み出す触媒にはなる。だが、その場で発生する負のエネルギーを取り込むことも、

ましてや自らを強力なアンデッドに生まれ変わらせることも全くの別問題なのだよ」

あんまりといえばあんまりなオチなのだ。が事実である。

実際、そもそも『死の螺旋』は二百年ほど前にある勘違いした者の説明から端を発した失敗することが当たり前前の儀式魔法なのだ。

自ら死霊使いの頂点を極めたと言えるモモンガにしてみれば「勘違いにも程がある」と瞬時に唾棄すべき内容だ。

「そもそも『アンデス・アーミー／不死の軍勢』その物が、字の如く『数千に及ぶアンデッドの軍勢を召喚する』以上の効果はない魔法だ。それを触媒にしてる以上、儀式で少々いじくったところで上手くいくわけはないのさ」

クレマンティーヌは比喻ではなく目が点になった。

確かに彼女は座学に関して飛びぬけて優秀という訳ではないし、所詮は特殊作業員である以上は本当の国家機密に触れられるという訳ではないが……自分の持っている知識とは量も質も違いすぎた。

「エンリ」

膝の上の少女にそう呼びかけ、

「今の話は全て聞いていたな？」

「はい」

さつきまでの蕩けた表情はどこへやら。

表情筋を引き締めた少女はまるで別人のように見えた。

「すまんが簡潔に書簡にまとめてくれ」

「かしこまりました」

モモンガは露出過多の神官服の少女を膝から降ろし、

「ズーラーノーンにスレイン法国……間違っても尻拭いしたい相手じゃないが、」

やれやれと言いたげな表情で、

「知ってしまった以上、まさか見過ごすというわけにはいかんだろうな」

第58話：人の社会は金がモノを言う

「ズーラーノーンにスレイン法国……間違っても尻拭いしたい相手じゃないが、知ってしまった以上はまさか見過ごすというわけにはいかんだろうな」

ちよつと……いや、割と本気で渋面を作るモモンガであった。ダークウオリアー

（実際、エ・ランテルが「死の螺旋」で生者お断りのアンデッド・リゾートになどになったら、困るのはカルネ村も同じだしな）

カルネ村の産業は一次二次を問わず、大きな括りで言うところの農産物がそのほとんどを占めている。

特にピニスンたちドライアードの力を借りて高品質が売りで実際に他の地区産に比べ高値で取引されている生鮮品の類は、エ・ランテルが主要消費地だ。

いくら《プリザベーション／保存》の魔法があると言っても全ての物品にかけるのは流石に現実的ではない。

例えばバレアレ商会の各種ポーションや毛織物、製紙に畜産加工品や酒類などそれなりに長期保存や長距離輸送に耐えられる生産物はあるが、それだけで村民全員が食べていくのは少々厳しい。

またドワーフ達のルーン工房で作られる武器／武具の生産キャパシティは有事に備えることを加味すれば、冒険者登録してる村の自警組織「カルネ村修道会」の消費分でほぼぼりミットとなる。

いや、仮に余剰生産分が合ったとしても、モモンガとしては少なくとも余計な騒乱を招きそうな王国市場にルーン処理武装を流す気はない。

それに今や「カルネ・ブランド」として高級地産ブランド化してるカルネ村の物品を取り扱ってる商会、最大手のロフーレ商会をはじめ王国全土に販売する卸先はエ・ランテルに集中してるのだ。

つまりエ・ランテルが経済活動が成り立たない死霊の街と化せば、カルネ村は一挙に消費地と販路を失う、露骨なまでの村の存亡危機

だ。

他にも原案モモンガの“カルネ・ブランド”確立に大いに貢献してくれたロフール商会代表バルド・ロフールに個人的な恩義や友誼を感じているとか、エ・ランテルが死都に変われば子供の頃から目をかけているジルクニフが困るだろうなくという思いもあるが、最優先すべきは……

(カルネ村の食い扶持くらいは守らないとな)

割と即物的あるいは現実的なそれだった。

どこぞの世界線ならば、冒険者としての名声を得るために最大限に利用したが、今のダークウオリアーは妻のイビルアイ込みで王国では“表立ってこれといった活動をしてない(腐敗貴族との面倒事を避ける為という理由もある)”だけであり、名声は十分すぎるほどある。故に行動理念はこういうものになるのだろう。

別に今のモモンガはカルネ村の村長でもましてや地下大墳墓の盟主でもない。だが、ダークウオリアーは領主であるラナーの名代であり、モモンガは崇められる死の神だ。

善意でエ・ランテルを救う気など毛頭ないが、民を食わせられない政治家も御利益の無い神様も等しく無価値だとモモンガは考える。

そして偉大なる魔導王ではなく、お骨ボデイに限らず時にはダークウオリアー傭兵や冒険者、また時にはアインズ評議国特使として大半をこの世界で生きる人の営みの中で過ごした一世紀にわたる経験が、彼に当たり前すぎる帰結を齎せた。

曰く、『人の社会でモノを言うのは金である』だ。

もつとも結局、なんののかんの理由を付けたところで種類の差異はあれ好意を持つ相手の為に動くのは、どの世界のお骨様でも同じなのかもしれないが。

☆☆☆

「手にある情報と状況から考えて、エ・ランテルで騒ぎを起こそうとしているのは“死の螺旋”の理屈は知りそれを準備できる地位……高

弟の誰かだろうな。ズーラーノーン本人はアレが根本的な意味で失敗だと理解してるから今更どうにかしようとは思わないだろう」

（もしその高弟が失敗の理由を理解していてそれでもやろうとするなら、単純にエ・ランテルに対するテロって線も考えられるか……）

「死者を用いた儀式魔法をやるなら、場所は共同墓地がベストだろうな」

敵国であるバハルス帝国との国境に最も近い大都市であるエ・ランテルは、戦場に近いせいかわの規模から考えても名物になるくらい大きな規模の共同墓地が、自慢の城壁の内側にある。

死体を触媒としたアンデッド生成ならまさに打ってつけだろう。

というより死体という触媒を使わずにアンデッドをぽんぽん生み出せるのは、ことこの世界に至ってモモンガをはじめ極々少数な者だけだろう。

そのモモンガでさえも死体を媒介しなければ召喚時間には限りがあり、永続召喚するにはやはり死体がいる。

（状況を考えれば……）

モモンガは自分の考察を書面に纏めていたエンリを見やり、

「エンリ、出陣の用意だ」

「はいっ！」

元気いっぱいに戻すエンリに続き、

「ブレイン、ゼロを呼んで来てくれ」

「お館様、そりやないぜ。俺は留守番か？」

確かに彼の主武装である“神刀・滅却”は、この世界の基準なら十分に高い神聖属性が付与されているが、アンデッドの中ではド定番のスケルトン系は強い耐刺突／斬撃属性を持っているのが定石だ。

ブレインほどの腕前があれば『切るべき肉がなくとも骨を断つ』ことぐらい出来そうであるが、骨の化け物は一般に殴打武器に関して脆弱だ。

またアンデッドは全般的に神聖属性の武器に炎や光、そして治癒魔法を弱点としてもっている。

モモンガの推測では、クレマンティーンが持ち込んだ“叡者の額冠

“は、エ・ランテルに潜伏してるだろうズーラーノーン一派にとつては本来計算外の代物、『ブーストで儀式魔法の成功率をあげる』程度の期待しかしてないだろう。

法国の諜報部が尻尾を掴んで潜入クレマンティヌ工員を派遣したということは、もう儀式は発動直前の段階にあると考えた方がいい。

では人類の限界を超えてると認識されてる第7位階魔法を“アンデス・アーミー 叡者の額冠”無しに発動可能か?と問われれば……ズーラーノーンの高弟レベルなら可能であるとモモンガは考える。

例えば本来は使えぬ高い位階の魔法でも、儀式などを使ってブーストし発動させることはできるのだ。

そもそも儀式魔法“死の螺旋”は、『アンデス・アーミー』を叩き台に儀式を併用し発動することを前提にした魔法なのだ。

最悪、今この瞬間に墓場からアンデッドがあふれ出てもおかしくない。

そんな状況が想定されている中でブレインを連れて行くのは少々悪手、同じ理由でデイバーノックもまずい。

アンデッドが溢れ変えるような乱戦の中で、まだ人への擬態魔法を覚えていないデイバーノックがスケルトン・ボディを晒せばどんな混乱を招くか簡単に想像できる。

「まあ、今回は留守番だ。カルネ村を空き家にするわけにもいかんしな」

ネムとハムスケもあまり相性が良い相手とは言えないし、グに至ってはまだひょうたん湖から戻ってきていない。

「それに……」

“ヴォン”

唐突に室内に生じた楕円形の暗闇から仮面を被った小さな影が現れた。

「ダーク、まさか私を置いていくとは言わないよな?」

モモンガは予想通りにわざわざ転移魔法で現れた最愛の存在に苦笑し、

「完全にオーバーキルだろ？」

第59話：「それは死亡フラグだ」

唐突の権田の常闇から姿を現したのは、

「ダーク、まさか私を置いていくとは言わないよな？」

愛らしい素顔を無機的な仮面で隠し、ちみっこくて平たい肢体からだに赤いマントを纏まとうという、世間に僅かながら知られた出で立ちのその少女（？）こそ、

「イビルアイ」

そう、モモンガの最愛の妻で、リアル世界では彼女いない歴〇年齢だった彼に始めてできた恋人にして某バードマンの布教せんこうで下地が出来上がっていたモモンガの女の子の趣味を確定させてしまった張本人、キーノ・ファスリス・インベルンだった。

「まさか。置いて行きやしないよ。むしろお前の範囲フィールド魔法が生きるミツシヨんだ」

モモンガはドヤ顔でブレインへと向き、

「完全にオーバーキルだろ？」

無論、イビルアイキーはふんすつ！とモモンガ専用のタッチパネル的な胸を張るのだった。

☆☆☆

さて、LUCK幸運値の低そうなオバロキヤラと言えば真っ先にあげられる候補の一人なクレマンティーヌであるが、やはりこの世界線でもあまり運は良さそうにない。

カルネ村に着くなりブレインに切り殺される、蘇生はしたがエンリから《ドミネート／支配》をかけられて何でも喋るトーキングマシン状態。

更にはさつきから行われている物騒な推測とエ・ランテル遠征プランの作成、イビルアイの転移登場に至るまで全て彼女が尋問を受けて

いる部屋、彼女の眼前で起きた出来事なのだ。

そして、『ドミネート／支配』をかけられた状態な筈なのに冷や汗が止まらない。

彼女は、スレイン法国が誇る六色聖典の一つ漆黒聖典の第九席次、“疾風走破”だ。自分の強さにはそれなりに自信があつたし、英雄の領域に片足を突っ込んでいると思つていた。

だが……

(とんだお笑い種だよね……)

現在、この部屋にいる五人の中で最弱なのは自分だということがいやというほど判つてしまう。

そもそもダークウオリアーと転移で出て来たちみっこいの……優秀(とクレマンティーンが信じて疑わない)な法国風花諜報部聖典が把握している外見と一致してる事を考えれば、あれがイビルアイで間違いないのだろう。

竜王国で人間十人分の強さを誇るとされるビーストマンを、群れごと駆逐してると噂される二人……眉唾物だと思つていたが、なるほど確かに噂は真実かもしれない。

何しろ自分には強さの底が見えないのだっ！

更には剣豪と名高い……そして刹那に自分を切り捨てたブレイン・アングラウスは言うまでも無く自分より明らかな強者。

そして死と蘇生でレベルダウンしてるだろう自分は、

(今はあの“シヨンベン臭い白巫女”よりおそろく下か……)

ちなみにエンリが用いた蘇生魔法が『鉄級冒険者以下ならかけた途端に灰になる』とされるほど激しいデス・ペナルティを起こす第5位階魔法『レイズデッド／死者復活』ではなく、“蓮の杖”の補助で可能となるより高位でレベルダウン幅が小さい第7位階魔法『リザレクシヨン／蘇生』だと気づいてないようだ。

もつともクレマンティーンは生涯気づくことはないだろうが、モモングの秘蔵っ子であるエンリはこの時点で総合Lv35、デスペナがなくともLv33の彼女より格上であつたりする。

流石にPVP的な意味においての対人戦闘技能に関しては流石に

ガチビルドのクレマンティーンの方が上だろうが、だが装備差が圧倒的過ぎて例えクレマンティーンが本国ガチ戦装備を持ち出したとしても、おそらくダメージは入れられないだろう。

ついでに言えば、デスペナが幅が小さいとはいえ発生したクレマンティーンのレベルは、ネムより下だったりする。

知らぬが仏とはこういうことを言うのだろう。

“はあ”

と溜息をついたあとに、

「もう……ゴールしてもいいよね？」

「その“疾風走破”。放置していたのは悪いと思うが、いきなり微妙な死亡フラグを立てるな」

とよくわからない苦言がダークウオリアーから飛んでくる。

蛇足ながらモモンガに縁深いアインズ・ウール・ゴウン、その前身の名が“ナインズ・オウン・ゴール九人の自殺点”……なんとなくながってるような気がしなくも無い。

(死亡フラグ……？ 前にどこかで聞いた事あるような？)

それが法国で言う“ぶれいやー神”の言葉だと気づくことは、残念ながらなかった。

「とりあえずクレマンティーン、お前の協力……情報提供は感謝しよう」

内心、『《ドミネート／支配》をかけておいて何を言ってやがるっ!!』
と思いましたがそれを頭にするほどクレマンティーンも愚かではない。

「という訳で騒ぎが終わるまで、ここで大人しくしてもらえないかな？」

「……もし従わない場合は？」

「もう一度蘇生魔法を使う羽目になるだろうな。ただ、エンリは私と共にエ・ランテルに出向く予定だ。村に帰るまでどれほどの時間がかかるかわからんが」

つまり死んだ状態のままモモンガダークウオリアー一味が戻ってくるまで放置とい

うことだ。

蘇生の約束をしてくれるならまだ善良と言えるが、それは単に自分にまだ利用価値があると看做みなしてるからだろう。

「俺は正直、どちらでも良い。死体は死体で省ける手間もあることだしな」

最初から選択肢など無かったとクレマンティーヌは理解してしまった。

目の前のダークウオリアーは、ブラフなどではなく本気でそう思ってることに、だ。

本気で自分など取るに足らない存在で、いつでも殺せ好きなきときに蘇生できると思ってるのだ。

そしてそれがおそらくは紛れも無い事実だということに。

「従いますよ。ワタンだってこれ以上の”ですぺな”での”れべるだうん”は御免なので」

するとダークウオリアーは少々感心したような顔で、

「流石は法国の漆黒聖典。プレイヤーの用語もよく知ってるじゃないか?」

「まあ、仕事柄」

すると何が可笑しかったのかダークウオリアーは機嫌良さそうに笑い。

「いいだろう。軟禁くらいはしようと思っていたが気が変わった。客人扱いするわけにはいかないが、村の中でならある程度の行動の自由は許そう。ブレイン、お前にお目付け役を命じる」

「うえ」

心底面倒そうな顔をするが、

「休暇配置としては悪くあるまい?」

「へいへい。わかりましたよ、お館様」

だが、そんなやり取りに驚いたのはクレマンティーヌの方で、

「よろしいので? 帰ってくる頃には村人が人っ子一人いなくなってもしれませんよ?」

せめてもの意趣返しで言ってみるが、逆にダークウオリアー興味深

そんな笑みと共に、

「やれると思うならやってみるといい。それもまたいい経験だろうしな」

内心、モモンガは『留守番で暇を持て余すだろうネムの良い遊び相手になるかもな』と暢気な事を考えていた。

第60話：“実は村外用装備つてのもありまして（エンリ&ゼロの場合）。あるいはライトアーマー”

「ゼロ、レガースとガントレットは神聖が前提で光もしくは炎のエンチャントが施されてる物を選べよ？」

「はっ！」

包拳礼（左掌で右拳を包んで一礼するアレ）で“グ修道拳闘士”の二つ名を持つ筋骨隆々の褐色の巨軀、ゼロはモモンガダークウオリアーに応えた。

それにしても動物を象ったタトウがいくつも踊る褐色の肌と、なんとなく背中に“亀”の一字を入れたくなる鮮やかなオレンジの袖なし道着“見習い拳士の道着”が抜群のコントラストを魅せる。

ちなみに背中に描くは亀一字ではなく通称“ラナー紋”とか“カルネ紋”とか呼ばれる紋章だが、それが『今は無きどこぞのギルドのエンブレム』に酷似してるのはきつと偶然か気のせいなのだろう。それにしてもガゼフと同じ方向性の雄臭い色気を感じる漢である。そしてこれに組み合わせるの、ソードブレイカーとして使えそうな突起が鏤められた尖ったデザインの燦し銀のレガース&ガントレット。

レガースの“しゆぎようぞう修行走”は神聖属性、蹴撃に炎属性の追加ダメージ、走力／踏力／跳力などの脚力ブーストが、ガントレットの“聖者の鉄拳”には同じく神聖属性、光属性の追加ダメージ、カウンター成功時のクリティカル率上昇、ノックバック効果がそれぞれ付与されている。

ユグドラシル水準ならそれほどハイレベルな装備ではないかもしれないが、少なくともこの世界なら伝説級の装備だろう。

対してエンリは……

「なんだか久しぶりに着てみました……お館様、似合いますか？」
とあざとい上目遣いににじり寄る。

元デザインは細部こそ違うが疑う余地も無くRider^{ライダー}な某聖女^{マルタ}さんの第3再誕だ。

ただし色は普段着ている”動く修道院（槍メドゥーサの白ver）”とは真逆に、白の部分が黒に反転してるカラーリングで尚且つタイツは未装備だ。

一応、露出を抑え（？）てシツクな色合いにした余所行き用^{おでかけ}の格好らしいが、この女神官ひよつとしては生足を出さないと死ぬ病気でモかかっているのだろうか？

「ああ、そういう清楚な服もエンリにはよく似合ってる。可愛いぞ」とモモンガは相変わらず無自覚に雌の部分を甘く侵食するセリフをのたまうが、オリジナルを知ってる身としてはあえて言わせて欲しい。

どこをどうとつたら清楚なんて単語が骨の隙間から出てくるのかはさておき……とりあえず圧倒的に胸部装甲の厚みが足りないよ。

FGOマルタの衣装は上乳が露出し前面にきわどいスリットが入ってるので、自然と目がいくその部分のボリウムが足りないよと非常に差異が際立つのだ。

本来の世界線におけるエンリ・エモットも、登場女性キャラの中では決してグラマーな方ではない。

だが、この世界線においては……何気に薄い。

いや、その分背丈も低いし顔つきもやや幼いので全体的には『原作エンリを幼くしたような』外観にバランス的な違和感はないし、あまけに比較対象は身近にいるのがイビルアイ^{キィ}に妹のネム、遠い場合もなにやら年齢2桁に達して程なく成長を止めたようなラナー姫やら頑として幼女形態から変化しようとしなない某竜王国の女王なので相対的に見た目年長組に入ってしまうが……

ぶつちやけかろうじて膨らんでのが判る感じだ。

精密に計測しないと正確にはわからないが……見た感じだと良くて原作のフォーサイト最年少や聖王国の目力オーバーキルな娘^{ドッコイ}と良い勝負、下手すればそれを下回るかもしれない。

僅差で身長は勝っているのに、だ。

まあ、肝心のモモンガは鳥頭と愛妻のせんん……影響で『ひんぬーは希少価値だつ！ ステータスだつ！』を地で逝く（誤字に非ず）お骨様なので問題は無いのだろうが。

むしろエンリ自身は内心、『ちよつと膨らみすぎかしら？ でも、モモンガ様との赤ちゃん欲しいし……あんまりおっぱいが小さいのは母乳の出が心配だもんね』と思つてるとか思つてないとか。

この修道女服の名は、“チャーム・マルタ聖女の誘惑”。ツツコミ所満載である。ただしエンリ自体はツツコまれる方だ。ダレのナニがドコにかはあえて言及しないが。

それはともかく彼女が手に握る杖は、これまで大活躍の“ロータス・ワンド蓮の杖”ではない。別に衣装に合わせた訳ではないだろうが、先端に十字架型のシンボルが埋め込まれた権杖だ。

無論、マルタが手に持つそれが元ネタになつてゐるのだろうが、ただしその十字架の部分（正確には先と左右）はオリジナルと違い、前方にかけて膨らみ先端が二股になり尖つてゐる“マルタ十字”がモチーフになつてゐる。

まあ殴打武器として使用した場合、更に殺傷力高そうだよな〜という感想はさておき、間違いなくユグドラシルでこれをデザインした人間は、“チャーム・マルタ聖女の誘惑”のデザイナーと同一人物だろう。

いやそれとも、元々セット運用が前提なのか？
このワンドの名はまんま“マルタ・インパクトマルタの鋼杖”なのでそれが正解なのかもしれない。

デザインも名前も立派だが、実は性能的には“動く修道院”と“蓮の杖”ほどには尖つてゐない。

“聖女の誘惑”は完全に下位互換性能だし、“マルタの鋼杖”は『第9位階を上限に使える魔法の上限を1位階あげる』とんでもスベックな“蓮の杖”ほどのブースト効果は無い。

とはいえ“マルタの鋼杖”は当然のように神聖属性で劣るとはいえ信仰系魔法のブースト効果があり、また殴打武器として使用した場合は打撃威力／クリティカル率上昇効果が付与され、更には“可変機能”が実装されている。

言うならば総合スペックは“蓮の杖”より明らかに落ちるが、よりメイス寄りの性能に磨きをかけたワンドと言える。

ゼロの装備もそうだが、実はエンリも今回あえて装備のグレードを落としている。

相手がアンデッドだとわかりきっているので、特效装備ならある程度装備のグレードを落としても問題ないという判断もあるが、基本的に強敵であるビーストマンとかとやりあうような本気^{ガチ}装備をあまり村の外で使いたがらない傾向がエンリ達にはあるようだ。

無論、ブレインのようにあまり気にしてない者もいるが、特に風花聖典が潜んできることが間違いないエ・ランテルではあまり上級の装備を見せびらかしたくは無いのだろう。

☆☆☆

「ぶー。お姉ちゃんもゼロお兄ちゃんもずーるーいーっ！ ネムもリビングデッド・ハンティングやりたーいっ!!」

と予想通りぶーたれてるのは、置いてけぼり確定のシールダーというよりロリ・ボンテと呼びたくなる衣装に身を包んだ幼女、村の広場まで見送りに出たネム・エモットだ。

内容は物騒だが、無邪気に駄々をこねるネムに心が痛むモモンガであるが、

「まあまあ、ネム殿。今度また拙者と一緒にカツツエ平原でアンデッド狩りと洒落込むでござるよ」

と小粋でいなせなフォローを入れるのは侍気質の巨大ジャンガリアン、ハムスケである。

「でもでも。アンデッドと市街戦なんて滅多にできないもん」「ネム、あんまり我が侷言わないの。お館様が決めたことよ?」

モモンガはフォローするようにネムの小さな胸……ではなく頭を撫で、

「流石に土産を買ってくる余裕は無いと思うが……ネム、いい子でお

留守番してたら何かご褒美をあげよう」

「びきにあーまー!!」

ここぞとばかり幼女は即答だった。まあ、前から狙ってたしね。

モモンガ、痛恨の失言である。

「うっ……」

「お館様……だめ？」

姉妹揃って上目遣いの上級クラスでもとってるのか？ 少なくとも

も対モモンガ特效が発動し、効果は抜群だった。

「あーもう。わかったわかった。帰ってきたら何か選んでやろう」

(せめて大人しめのデザインを選ぼう……)

そこには某バードマン・コレクシヨンの中からまともなデザインが見つかることを心から祈る、正体がお骨な黒の戦士がいたという。

第61話：「お爺ちゃんの思い出」

「では出発するー」

村人に見送られながら、城門と呼ぶべきカルネ村の正面門から飛び出す3騎のアイアンホース・ゴーレム。

ゼロとエンリがそれぞれ1騎。当然のようにイビルアイは先頭を走るダークウオリアーのゴーレムに同乗、しかも後に乗るのではなく前に、モモンガの腕に抱きかかえられるように騎乗していた。

まあ、これが二人の昔からの定番の、あるいは鉄板の乗り方であるのだが。

ゴーレムは必要になればその都度に生成してる様だが、鞍はちやつかり専用のタンデム用が用意されてる辺り確信犯だろう。

きつと愛する旦那の腕に包まって、仮面の下のキーノの素顔は緩みきつてるに違いない。勿論背中をぴたりと密着させるのも忘れない。

末永く爆発しやがれてつてとこである。

今回、わざわざ馬でなくゴーレムを3騎も生み出したのは、キーノが種族的な縛りで馬に乗れないとかモモンガが実はあまり乗馬が得意でない……お骨様モードの時は無論、乗れないがダークウオリアー・モードだと今度は装備が重すぎて普通の馬だとすぐ潰れてしまうという理由もあるが、ひとえに磨耗はあっても疲労が無いゴーレムなら一気呵成にフルスピードでエ・ランテルまで駆け抜けられるからだ。

本当の緊急事態なら、むしろ複数人が移動できる上位の転移魔法でもいいのだろうが、法国の諜報機関員がエ・ランテルに潜伏していることがわかってる（というか王国に一定以上の人口を抱える都市には大抵法国の諜報員やら工作員が入っているようだ）のだから、こちらの手の内は可能な限り晒さない方がいいに決まってる。

蛇足ながら……かつて、見聞を広めるためにこの世界を自由気ままに二人旅してた放浪時代、本当の危険地帯に行く時はゴーレムではな

くソウルイーターなどを騎馬代わりにして移動していたらしい。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆

その日のエ・ランテル城門警備担当エドガー・マクシミリアンと
ジョゼフ・ケンタツキーはありえない物を見た。

なんと全身を鎧で覆った巨馬が全速力で門に突進してくるのだ。

それも1騎ではなく3騎も！

先頭を切る馬に跨るのは、仮面の小さな人物を便乗させたエ・ラン
テルなら家の一件も買えそうな漆黒の全身甲冑に身を包んだ男だっ
た。

(あんなのに跳ね飛ばされたら俺なんて一発でひき肉だろうなあ
……)

とはいえ自分は門番で給料をもらってるのだ。力づくで止める
……のは無理でもせめて静止の一声でもかけなければ、給料泥棒の謗
りを受け、命は助かっても失職してしまうかもしれない。

エドガーは官給品の槍を握りしめ勇気を振り絞り、

「止まってくださいーっ!!」

“キキキイーっ!!”

すると何故かアスファルトをタイヤで切り裂くようなGet Wi
ldな音を響かせながら、見事な横滑り^{ドリフト}で馬を停止させる甲冑男。
堂々たる体格の甲冑男はエドガーが安堵する間もなく首からぶら
下げた冒険者プレートを見せ付け、

「アダマンタイト級冒険者、ダークウォリアーであるっ!!」

エ・ランテル冒険者組合の登録名簿には、確かに竜王国の冒険者組合から移籍してきたダークウオリアーの名もイビルアイの名もきちんと登録されている。

だが、公的には王国内で冒険者としての活動記録が無いため、二人の存在はその御伽噺のような活躍も含めて眉唾と思う人間も少なくなく、半ば都市伝説化していたのだった。

そんな二人が冒険者組合建屋に現れたのだから、当然のように騒然となった。

いや、正確には半歩さがって臣下のように付き従うエンリとゼロの姿に最初は注目されたのだ。

“カルネ村修道会” 自体は最大規模の冒険者チームとして冒険者組合のある周辺国にも知られた存在だが、お膝元であるエ・ランテルでは更に個々の存在もよく話題にあがるのだ。

中でも“カルネ村の七星剣”と名が知られた五人と一体と一匹は、純粋戦闘力なら白金級どころか上位のミスリル級……を通り越してオリハルコン級なのでは？と実しやかに囁かれていた。

七星剣の中でもグラップラー・ゼロとプリエステス・エンリ……二つ名持ちの二人を引き連れ先頭を切るあの漆黒の全身甲冑と仮面の女は何者だ？と。

「ダークウオリアー卿っ!! イビルアイ殿っ!!」

その答えを告げたのは、待ちきれず執務室からロビーにまで出てきていたプルトン・アインザック組合長だった。

都市伝説が、あるいは御伽噺の主人公が実在したことに、冒険者組合は驚愕に包まれた!

第62話：“因縁と呼ぶには薄い過去”

「そんなバカなっ!? ダークウォリアー卿、その情報は間違いないのかねっ!?”

いつもの擬態、平仮名喋りをする余裕もなく机をバンツと叩いてその反動で立ち上がり身を乗り出すのは、太りすぎのブルドックのような印象の男……エ・ランテル市長のパナソレイであった。

「我が名に誓って」

冒険者組合の応接室で告げられたのは、パナソレイにとって恐るべき内容だった。

いや、組合長のアインザックにとってもそれは同じだろう。

何しろ自分たちの街にいつの間にか名うての邪教集団が入り込み、潜伏してエ・ランテルを死霊都市に作り変えようとしているというのだ。

おそらくはエ・ランテル始まって以来の危機的状況、“死の螺旋”が発動すればだろう。

「我々は一体どのような対処をすれば……」

アインザックが唸るような声と共に焦燥の表情を浮かべた。

「カルネ村で確保した”ズーラーノーンのエージェント”によれば、いつ“死の螺旋”が発動してもおかしくない状況ですな。まず状況を確認しますが……」

ダークウォリアーは一度言葉を切り、

「ズーラーノーンに潜伏され儀式発動秒読み段階になっている時点で、我々は後手に回つてると言つていい。正直、現段階で共同墓地からアンデッドが溢れ出してないこと自体が僥倖だな」

あえて口調を変える。

「そこまで切羽詰って……」

「いるのや」

ダークウオリアーは彼の太刀筋が如くバツサリ切り捨て、

「既に入り込まれてる以上、まず重要なのは市民の安全確保だ。どんな手でも出るにしろ、もう避難やら何やらの基本方針固めと計画の立案、それに伴う予備命令の策定くらいはしておいたほうがいいだろう」

「急に言われても……」

パナソレイの言葉にダークウオリアーは渋面を作り、

「何故、私がわざわざ出向いたと思う？ 事態は一刻を争うんだ。未だに現実が認識できてないようだが……」

☆☆☆

実はモモンガダークウオリアーとキーノイビルアイは、“死の螺旋”発動後の街を見たことがあるのだ。

いや正確には、ブローラーノーンがやらかしたアンデッドだらけの街を、「第二のカツツエ平野みたいな場所を放置しとくのもなー」と考えたツアー……ツアーインドルクスⅡヴァイシオンが経過確認を兼ねて二人を後始末に派遣したのだ。

生き残りの住人などいなかったため、モモンガとキーノはせっかくの機会だからとお骨と素顔の本来の状態で新作／試作／初使用を含めた各種魔法を景気良くぶっばなし、効果確認の実験場にしたのだが……

結果は……ツアーに報告するため満足げな表情で意気揚々と二人が去った、その直後に“街の跡地”に調査に入ったスレイン法国漆黒聖典の報告書を引用しよう。

『指定された場所にたどり着いた我々が見た物は……何もなかった。比喩ではなく、街に大量増殖したとされるアンデッドどころか、“街自体が無かった”』

結局、この報告書では人間業とはとても思えず「件のプラチナム・ドラゴンロードが、始原魔法で何もかもを跡形も無く吹き飛ばしたのでは？」と結論付けられた。

ツアーにとっては酷い誤解、とんだ風評被害である。

とはいえ依頼したのもツアーだったので、まあそう文句も言えないだろう。

「エ・ランテルの共同墓地には自然発生的にアンデッドが発生し、それを駆除しているのは勿論知っている。だが市長、組合長……墓地から最低でも千を超えるアンデッドが人為的に発生した場合、エ・ランテルの持つ防衛戦力でそれに耐えられるかね？」

「ぐっ……」

「現状、我々がとれる手段はさほど多くない。方策としては大きく分けて二つしかないと言っていていいだろう」

「その二つとは？」

むしろ恐る恐るという口調でパナソレイが聞き返せば、

「発動前にこちらから討って出るか、あるいは発生したアンデッドを片っ端から狩りまくるかだ」

そして僅かな静寂の後……

「討って出ることとは可能なのか？」

アインザックが難しい顔で問えば、

「不可能ではないと言っておく」

簡潔にダークウォリアーは答えた。

「エージェントから聞き出した情報を精査し、“死の螺旋”の性質を考える限りズーラーノーンが潜伏し儀式を執り行える場所は限られている……だが、問題があるとすれば討伐に動いても実際に勝てるかどうかだろうな」

「どういう意味だ？」

「“死の螺旋”はズーラーノーンであつても簡単に執り行える儀式魔法じゃない。魔法自体の難解さもさることながら準備を行うには、相応の人員も時間も掛かる……それを出来る存在は、一握りの上位者。おそらく首謀者は“十二高弟”と呼ばれている盟主直属の者だろう」

ここでダークウォリアーをフォローするようにイビルアイが仮面

の下で口を開いた。

「組合長、一説には『十二高弟』の実力は、アダマンタイト級に届くとされている。エ・ランテルでそれに対抗出来そうな冒険者はどれぐらいいる？」

皮肉でも悪意でもなく純粹な質問……だがそれに今度こそアインザックもパナソレイも言葉を失った。

エ・ランテルを拠点とする冒険者は、最上位でもミスリル級……最高位のアダマンタイト級の二つ下だ。

そのミスリル級が3チームいるが、間が悪いことに2チームは依頼で街を離れていた。

「仮に迎撃を選んだら……」

「最低でも市民、非戦闘員の城壁の外への避難が必要だろう。三重の城壁をアンデッドを封じ込める檻^{おり}として使う。これだと人的被害は最低限に抑えられるが、建物や施設への被害は無視できないものになるだろう」

パナソレイとアインザックは色を失った顔を見合わせた……そして、

「ダークウォリアー卿、急で申し訳ないがクエストを依頼したいのだが……」

第63話：「英雄願望を拗らせた奴ってメンドい」

「お前がダークウオリアーで間違いないのかよ？」

「ああ。相違ないが」

神経質そうな男に険のある声と目線で呼びかけられ、
ダークウオリアーは怪訝そうな顔で応えると、

「お前、英雄なんだってな？」

「そう呼ぶ者もいるらしいな。生憎と自分でそう名乗ったことはないが」

英雄と呼ばれることを歯牙にも鼻にもかけてない態度が余計に神経質そうな男……エ・ランテルに現状唯一残っているミスリル級冒険者チーム「クラルグラ」のリーダー「イグヴァルジ」を苛立たせた。

実際、モモンガは自分を英雄だと名乗ったことはない。

というのも、彼にとって理想的HERO像というのはもう会えない
「純銀の聖騎士」であり、今でも自分はそこに遠く及ばないと考えていた。

だからこそ、未だに自分は「たちさん」に憧れ続けているのだと。

「だが、お前は王国じゃ一切冒険者活動はしてないって言うじゃねーか……！」

正確には『公的には』という枕詞がはいるのだが、所詮は国家機密級の情報に触れることのできない一介の冒険者であるイグヴァルジには知るよしもなかった。

「別に」冒険者活動は王国でしななければならない」なんて規則はないだろう？」

正論だが、正論というのは時にはひどく人を怒らせるものだ。

無論、モモンガにはイグヴァルジを怒らせる気などない。

正体がお骨な漆黒甲冑の重騎士は、変なところで割と天然なのかもしれない。

「俺はお前がビーストマンを塵死みなころしにしているなんて信じてないんだよっ!!」

「誰だか知らないが、別に君に信じてもらう必要はないだが……そもそも君が何を信じるかは君の自由なんじゃないのか？ それこそ私
が知ったことではないし」

と思いい切りトドメを刺した。

「テ、テメエ！ 勝負しやがれっ!!」

(なんだか面倒臭い男だなあ。どうしてこうなったんだ?)

☆☆☆

事の発端は、ダークウオリアーからの市長のパナソレイと冒険者組合長のアインザックの出した結論……

「被害を最小に抑えるため、我々は討って出たい。ズーラーノーンの潜伏先が判明してるなら尚更に」

「それについてなんだが……ダークウオリアー卿、“死の螺旋”阻止を改めて依頼したいのだが……いや、君達がなんらかの理由で王国では表立って冒険者として活動していないのは察している。だが、そこを曲げてお願いしたい」

するとダークウオリアーは鷹揚に頷き、

「いいだろう。依頼料はそちらの言い値でいい」

ひどくあっさり了承したことに軽く驚くパナソレイ達だったが、

「カルネ村はラナー王女殿下領だろ？ 知ってるかはわからないが、私はその名代でもあるんだ。エ・ランテルが壊滅すれば、そこを消費地にしているカルネ村も干上がるだろう？ 王都に販路を求めるのは運賃を考えればペイさせるのが難しいし、村単独で帝国で市場開拓するのは現実的じゃない」

ダークウオリアーは苦笑し、

「結局、エ・ランテルが無くなって困るのは、我々も同じだということだ」

積極的討伐を行うにせよ、それを察知したズーラーノーンが焦って計画を前倒して強制発動する可能性は否定できないというダークウォリアーの進言もあり、事態の收拾が確認されるまで冒険者への依頼斡旋は中断、ゲーム風に言うなら『緊急ミッション：エ・ランテルの防衛に尽力せよ!』という突発イベントが発生したというわけだ。

市長であるパナソレイは緊急事態の発令と全住民の脱出も視野に入れなければならない避難計画の策定をするために市庁舎へ慌てて帰り、アインザックは冒険者達への事態の説明と討伐計画の説明を行った。

『ズーラーノーンと思われる拠点に突入するのはダークウォリアー卿とイビルアイ殿、それにゼロ君とエンリ君だ。残る皆は、有事に備え万全の準備を整えると共に、即応状態で待機していて欲しい。無論、諸君らがクエスト受注を出来ない間の賃金は保証しよう』

だが、そこで噛み付いてきたのがイグヴァルジであった。

最初は、『白金級がよくてどうして突入に抜擢、ミスリルである俺様が留守番なんだよっ!』というところから始まった。

このイグヴァルジという男、実は少々英雄願望というモノを悪い意味でこじらせているところがあった。

だが、モモンガダークウォリアーはそんなことを知るわけも無く……

「悪いが私は君の実力を知らない。そうである以上、戦力評価はできない。故に連携を重視される少数精鋭の突入作戦には組み込むわけにはいかない」

と100年を超える戦闘経験を持つプロとして当たり前前の事を言い放った。

これに過剰なまでに反抗心を持ったのがイグヴァルジだったという訳だ。

だが、こんな不遜すぎる態度を取られればエンリもゼロも面白くない。

作戦前の景気づけにこの身の程しらずを一発凹ませてやろうかと前に出ようとしたが、ダークウォリアーに「かまわんよ」と軽く手で

制され、

「いいだろう。だが、作戦前にあまり手間はかけたくないな……組合長、どこか“実力試し”をしても問題ない場所はないかね？」

困惑するアインザックに彼は小さく微笑み、

「非常事態なのは理解してる。間違っても再起不能にさせるような真似はせんよ」

☆☆☆

用意されたのは冒険者組合に隣接してる訓練場だった。

そしてそこに対峙するダークウオリアーとイグヴァルジではあるが、

(身内以外とのPVPなんて久しぶりだなく)

なんて内心ではついお気楽なことを考えるモモンガであった。ダークウオリアー

考えてみれば、法国勢が攻めてきたときもまともに戦わなかったし。

相手が物足りないなんてものじゃないが……

「別にチーム全員でかかってきてもいいんだぞ？」

「ふ、ふぎけるなっ!! なめやがってっ!!」

(まあ、君がそれでよければいいんだけどね)

「では、始めようか」

第64話：“ 剣豪の闘気”

「では、始めようか」

エ・ランテル冒険者組合に併設された訓練場にてモモンガは、ミス
ダークウオリアー
リル級冒険者チーム“クラルグラ”のリーダーであるイグヴァルジ
と対峙する。

こうなった要因は単純に言えば英雄願望を拗らせたイグヴァルジ
が、王国で冒険者活動もしていないのに英雄と呼ばれているアダマンタ
イト級冒険者ダークウオリアーにからんだからなのだが……

ただ、ダークウオリアーがいつ“死の螺旋”が発動するかわからな
い非常時においてもこんな勝敗がわかりきってるPVPを受けたの
かと言えば……

（まあ、冒険者つてのは実力社会だからなあ）

生まれや身分、学のあるなしに関わらずのし上がれるのが冒険者稼
業だ。少なくとも建前ではそうなっている。

もつとも、王国ではダークウオリアーとイビルアイキィという、チーム
ではなく個としてアダマンタイト級冒険者登録してる二人を除けば、
残るアダマンタイト級冒険者はチームであり、またそのリーダーは貴
族だったりするのだが……

それはさておき、モモンガは竜王国でビーストマンの間引きを始め
てから、どんなに少なく見積もっても職歴20年を超えるベテランの
冒険者だ。

ならば、その在り方も慣わしもよく知っている。

（王国では、今のところはあんまり目立つことはしたくなかったんだ
けど……なんか貴族ともめそうだったし）

お忘れかもしれないが、モモンガはアダマンタイト級冒険者ダーク
ウオリアーとして以外にもう一つ、“人間として行動する顔”を持つ
ている。

そう、王都で活動するときによく使う“アークランド評議国特使”ア

インズ・ウール・ゴウン”としての顔だ。

ランポツサ王の命の恩人にして国王即位前からの友人、ラナー殿下の家庭教師……そういう立ち位置だからこそ、望む望まないに関わらず大半が腐敗と退廃の限りを尽くしている王国貴族とも相応の付き合いはある。

そういうバックボーンがあるからこそ時には人目を引く派手で華やかに振舞わねばならないアインズと異なり、ダークウオリアーとしては少なくとも王国では慎ましくやっていたかったところだが、今回のイレギュラーなケースは仕方ないと納得する。

降る掛かる火の粉は掃わねばならないし、この名前も知らない冒険者も振る掛かる火の粉の一つと思えば腹も立たない。

それに、

(多少は、実力を示すのも悪いことじゃないんだろうし)

情勢が変わって、エ・ランテルである程度の冒険者活動を行わねばならなくなる可能性も考慮すれば、そう悪い状況じゃないと自分を納得させる。

「テメエ……なんで剣を抜かねえんだよっ！ 背中の馬鹿でかい剣は飾りかっ!？」

自ら剣を抜き切つ先をダークウオリアーに向けながら吼えるが、「必要なら抜くさ。むしろ私に剣を抜かせることが出来たら上出来だよ?。」

と剣どころか拳を構えることすらしない。

「どこまでナメくさりやがってっ!! 往生せいやっ!!」

そう殺意満載で踏み込むイグヴァルジだったが、

(ある意味、往生はもうしてるんだけどなく。正体、骨だし)

小粋なアンデッド・ジョーク(?)を心の中で浮かべながら、

「喝っ!!」

(指向性《剣豪の闘気II》発動っ)

「くはっ!？」

ダークウオリアーの喝破を受けた途端、イグヴァルジに出た反応は顕著だった。

持っていた剣をカランと滑り落とし、そのまま両膝を折り朽木が崩れるように倒れこんだのだ。

息も絶え絶えで、顔からは血の気が失せている……むしろ気絶してないだけ奇跡だろう。

誰がどう見ても戦闘不能である。

そもそも《剣豪の闘気》とはなんなのか？

モモンガは“死の支配者”^{オーバーロード}モードのとき、種族スキルで《絶望のオーラ》というものを撒き散らせ、また原作に加え100年という月日を重ねたこの世界線では、本来は無指向性の範囲攻撃だったそれに指向性を持たせるまで研鑽していた。

だが、ダークウオリアーやアインズのような人間モードの時は、種族スキルである《絶望のオーラ》は使えない。

だが、その穴埋めをするように発現したのが、このエクストラスキルである《剣豪の闘気》であった。

どうやら、このスキルは前衛職持ちで一定のレベルに達した者に発現する物らしい。

どれが得意というものが高ければ《武人の闘気》と発現するようだが、ダークウオリアー（アインズ時のステータスや職業スキルはダークウオリアーと共通）のように刀剣ステータスが高い者には《剣豪の闘気》、ゼロのように無手格闘のステータスが高い者には《拳鬼の闘気》など派生するようである。

またこのような派生スキルには装備によって効果ボーナスがつき、例えば《剣豪の闘気》は刀剣類を装備しているとブーストがかかり、ブースト率は前衛ステータスの上昇に比例して大きくなる。

本質的には原作でセバス・チャンがクライムの路地裏特訓でみせたあのオーラと同じものと考えていい。

また、発現条件は前衛職業技能を持つことが前提で、総合Lvに依存する。簡単に言えば最低総合Lv40でI、Lv50でIIと上昇してゆく。またこれが通じるのは自分より格下であることによ

うだ。

基本、Iは訓練を受けてない者なら居竦いすくみにより行動不能にさせ、訓練を受け相応のものでも行動にウエイトがかかる。

IIならイグヴアルジのような訓練を受けた者でも、人間や亜人種なら生理機能に甚大なダメージを受ける。

IIIであれば、『斬られた』と脳が誤認し、良くて失神、運が悪ければショック死する場合がある……などである。

加えて面白い特性としては同じ“闘気属性”で同じ階位なら、相殺……打ち消しあうことが往年の少年漫画よろしく可能なのだ。

例えば、ゼロはもうちよつとで《拳鬼の闘気I》に手が届きそうだが、それをエクストラスキルとして習得できれば、ダークウオリアーが《剣豪の闘気I》を発しても闘気同士をぶつけレジストすることが理論上は可能だ。

ただパラメータはスキル階位だけでなく総合レベルの差なども関わってくるため、実際に対峙すれば同じI階位の闘気でもゼロは相当重く、油断すれば押しつぶされバッドステータスに飲み込まれそうな感覚を味わうことになるだろう。

また《絶望のオーラ》と同じく本来は無指向の範囲スキルではあるが、扱いに慣れればダークウオリアーのように指向性をもたせることもできるようだ。

そしてダークウオリアーはイグヴアルジを見下ろし、

「これで納得してもらえたかな？」

仮面を被っているので表情はわからないが……きつと鼻で笑っているイビルアイや「当然の結果」と言いたげなエンリやゼロを除き、見物していた周囲の冒険者達は、アダマンタイト級冒険者の実力の片鱗を目の当たりにし水を打ったような静けさに包まれていた。

第65話：「賑やかな夜の始まり」

メンタル面はともかく「脳天スイカ割り」よりはそこそこマシな対
ダークウオリアー戦を終えたイグヴァアルジ。

オマケに含み笑いのエンリに回復魔法をかけられるという追い討
ちで、軽く涙目になったようだ。

その非物理のインパクト（ダークウオリアーは一喝しただけ）が
あったせいか、以後の話し合いは非常にスムーズに進んだようだ……
言い忘れていたが、ダークウオリアー一行が村をたつたのは昼過
ぎ、むしろ午後のお茶の時間に近い。

アイアンホース・ゴーレムを磨耗を考えない最高速巡航でかつ飛ば
してエ・ランテルまで小一時間程度の小旅行。

そして事情説明とイグ君とのPvP、他の冒険者への説明などなど
……気がつけば、城壁に囲まれた街にも夜の帳が下りてきていた。
そう夜である。夜とは古今東西、人ならざる者達の時間だ。

☆☆☆

「た、大変だあっ!! アンデッドが墓場から溢れてきたぞおーっ
!!」

おそらく共同墓地の守衛についていたと思われる若い兵士が大慌
てで冒険者組合へと転がり込んできた。

「チツ……一歩遅かったか」

予想はしていたが思ったより早い災厄の発生に騒然となる場の中、
モモンガは小さく舌打ちしたが、

（いや、ここには残留冒険者が詰めている。まだ致命的な遅れじゃな
い）

するとロビーに陣取ってから時折話しかけたような表情をしながら
ら妙にキラキラした目線を向けてきていた若い冒険者に、

「そこの君、名は？」

「は、はい！ 銀級冒険者チーム“漆黒の剣”のリーダー、”ペテル・モーク”ですっ!!」

直立不動で一礼する実直そうな青年に、イグヴァルジと一悶着あった後だから余計に好印象を感じながら、

「ふむ。ではモーク君、我々は一足先に墓地へ向かうと市長と組合長に伝えておいてくれ」

現在、アインザック組合長は避難計画やら何やらの詳細をパナソレイ市長詰める為に市庁舎にいるはずだった。

そしてダークウォリアーは、居並ぶ冒険者達を一瞥し、

「我々は敵の初動を可能な限り抑えるために一足先に現場へと向かう！ 各員は組合長が戻り次第指示を仰ぎ、迅速かつ忠実にオーダーを実行することを期待するっ……」

そして100年物のカリスマと仄かに熟成された中二病を漂わせつつ、

「各員、己のもつ最大限の力を発揮し、奮闘せよっ!!」

「「「「「「はいっ!!」」」」」」」

「剣を掲げよっ!! 杖を握れっ!! エ・ランテル興亡この一戦にありだっ!!」

☆☆☆

そう遠くない将来に“冒険者の次世代を担う英雄候補の一人”として台頭し、後年は冒険者としても英雄としても円熟味を増しその名を少なくとも冒険者史に刻むことになるペテルは、酒を飲み上機嫌になると時折こう語っていたという。

『この出会いが、俺……俺たちの全ての始まりだった』
と。

「結局、俺は英雄っていうものがよくわかっていなかったんだよ。
“本物の英雄”に出会うまではさ」

同じくアダマンタイト級で、100年に及ぶ二人三脚の人間基準な
ら無茶を通り越して不可能な冒険の末、総合Lv90をとづくに超え
てるイビルキーアイノが一緒に、更に残る二人の弟子までいるなら万全ど
ろか完全に過剰戦力だ。

何せ脅威度のベクトルは違えど、単純な強さなら明らかに格上の
ビーストマンの群れ数千が相手でも、鼻歌交じりに駆逐できる面子な
のだから。

「ほ、本当なんだな……?」

だが、それを知らない兵士達は半信半疑な顔を向けてくるが、
「ああ」

「わ、わかった! どうなっても知らんぞ!」

モモンガは鷹揚に頷き、

「かまわん。自分の発言の責任くらいは待つか」

こうして重い響きと共に地獄の門は開かれ、

「愉快な賑やかな夜の始まりだな?」

居並ぶアンデッドの群れを見ながらそう楽しげに笑う夫の横で、妻
は仮面の下で微笑み返した。

第66話：”ドラゴンロード・タービュランス!!”

「《トリプレットマジック／魔法三重化》、《マキシマイズマジック／魔法最強化》、《ペネトレートマジック／魔法抵抗難度強化》、《ワイデンマジック／魔法効果範囲拡大化》……」

強化魔法の詠唱と同時にダークウオリアーの周辺には多数の光矢が出現し、イビルアイの眼前に拳大の無数の水晶が浮かんだ……

「《マジック・アロー／魔法の矢》！」

「《シャード・バックショット／結晶散弾》！」

その開放呪文と同時に放たれた9本の魔法の矢と無数の水晶の散弾が、門へと殺到していたアンデッドの群へと襲い掛かり、比喻ではなく一掃したっ!!

ただし、これでも二人はアンデッドの群れを《門ごと吹き飛ばさないうように》随分と気を使った魔法を使っているのだ。

その見たことも聞いたことも無い魔法の使い方に啞然とする衛兵達を尻目に、

「エンリ、ゼロ、お前達はここで街への流出を阻止せよ。できるな?」

「はっ!」

是非もなしだ。お館様モシガに飛べと言われれば、飛行魔法を習得していなくとも飛べませんとは言わずに「どのくらいの高さで?」と聞くのが二人に限らず七星剣だ。

「では妻よ。慎ましく征ゆくとしよう」

とにこやかにダークウオリアーが言えば、

「うむ。毎度おなじみの”血塗れのヴァージンロード”だな。いや、それとも相手がアンデッドならば血塗れにはならんのか?」

そう見つめ合って笑うと、

「《ヘイスト／加速》」

背中に背負った堂々たる両手持ちの大剣トウーハンドデッド・ソード”イテン”を右手で引き

抜くなり、加速の魔法を使い“ドンッ！”と音さえも置き去りにするように再び門へ迫ろうとしていたアンデッドの群れに突貫する！

「武技《音速衝鎧》」

“ヴァン!!”

普通の人間ではありえない加速と、それを下地に剣を振り上げる手や胴の捻りこみなどの体動を更に上乘せさせることで発生したノックバック効果もある音速衝撃波^{ソニックブーム}で周囲のアンデッドを残らず薙ぎ倒し、

「武技《真空斬》！」

その勢いを殺さぬまま剣を振り下ろし、不可視^{ソニックブレード}の真空刃を解き放つ！

帝国にいるであろう“自称天才剣士”の武技とは比較にならぬ威力を撒き散らしながら飛ぶ不可視の巨刃……だが、まだ終わらない。

これらの必殺と言える技さえも、更なる大技を繰り出すための下地作りに過ぎないのだ。

「風よ収束し螺旋を描け！ 《トルネード／竜巻生成》！」

片手から両手持ちに切り替えたイテンを再び大きく振り上げ、周囲で暴れ狂う風の残滓をかき集めて竜巻を生成、巨大な刀身にエンチャント……自然発生の竜巻でも時折起こるように、あまりにも圧縮／加速された空気中の微粒子が高速衝突し、激しく雷までも発生させた。

「月まで吹っ飛べ……」

そしてそれらを全て、

「複合魔剣《ドラゴンロード・タービュランス》!!」

音速を超える一太刀を相乗させるっ!!

それは言うならば、ソニックブームとソニックブレードをばら撒きながら“水平方向に伸びゆく、帯電した極超音速の竜巻”であった。複合魔剣……二つの武技を触媒に魔法と剣技を組み合わせた故の魔剣。

魔法使いのモモンガでは到達しえなかった、一世紀の時を経てもなお衰えぬ“純銀の聖騎士”への憧れ……人の身で研鑽を重ね、魔法剣

士として前衛に立ち続けたダークウオリアーだからこそ辿り付けた一つの到達点であった。

まさに“修羅の一太刀”である。

減衰するまで進路にある全てを真空の刃で切り裂き、音速衝撃波で叩き壊し、纏う雷で麻痺させ焼き、最後は竜巻に飲み込み粉々に砕き割る……これこそが、竜王国において『一太刀で百、いや千のピーストマンを屠る』と称されたダークウオリアーの最も得意とするコンボだった。

嵐と雷をその身に纏う天空の竜王ツァーが如き一閃……決して“ドラゴンロード・タービュランス”の技名が偽りでないことを告げている。

そして、やはりモモンガは孝行息子のようである。

☆☆☆

「相変わらず我が旦那様は派手好きだねー♪」

とコンボアタックに上機嫌なイビルアイ。

（これは妻としても負けてられんゾ！）

「《フライ／飛行》」

そして彼女はふわりと夜空に幼い肢体を浮かび上がらせた。

モモンガが百年経っても未だ“たちち・みー”を超えられぬ存在として憧れを抱き続けているように、イビルアイにとってモモンガはこの百年、ずっと焦がれてる、ずっと追いつきたい存在だ。

無論、妻となった今でも比喩ではない“百年の恋”は継続中。

恋愛は成就し、相思相愛になれてもそこで終了じゃない。モモンガやキーノのように長き刻ときを生きる存在にとっては尚更だろう。

だから、かつての盟友であるギルド・メンバー……癖の強いカンスト・プレイヤー達との冒険譚を懐かしそうに語るモモンガの姿に、今でも嫉妬を感じるのだ。

だが、この世界にはいない……もうモモンガの思い出の中にしかないギルメンたちに嫉妬する不毛さを、勿論彼女は理解している。

だが、頭で理解しているからと言って心から納得しているかと言え
ばそういうわけでもない。

かくも恋する乙女とは難しいものだし、恋愛感情とは理不尽なもの
だ。

他の誰よりもモモンガに愛されている自覚はある。

だが、それ以上を……もつと先を求めてしまうのもサガというもの
だろう。

何しろ、彼女は欲深い吸血姫なのだから。

だからこそ、彼女は“強さ”を求めた。

モモンガの背中を追うだけじゃ、守られるだけじゃ満足できない自
分がいたのだから。

この先ずつと、平たい胸を張ってモモンガの横に居たいのだから。

第67話：“吸血の砂漠”

ふわりと夜空に浮かび上がったイビルアイは、そのまま墓地の壁を越えて上空から戦場を俯瞰する。

そこには、ダークウオリアーが放った竜王の乱気流により、奥まで真つ二つに切り裂かれたアンデッドの群れがあつた。

『ダーク、今回は戦士縛りでカタをつけるのか？』

《メッセージ／伝言》でそう問うキーノ。

これまでメッセージが傍受されたことはないが、万が一を考えてモングアではなくダークウオリアーの時の愛称を呼ぶ彼女である。

『ああ。前の“死の螺旋”の時は、魔法の試し撃ちに使ったからな。なので今回は前衛全開で行くよ』

『なら、私は右の群れを貰うよ』

『いいぞ。お前の魔法、久しぶりにでかいのが見たいな』

キーノは仮面の下で喜色満面の表情で、

『愛する夫のオーダーに応えるのが善き妻というものだな♪』

「刮目して見るがよいぞ！」

超大張り切りな彼女は、

『《マキシマイズマジック／魔法最強化》、《ペネトレートマジック／魔法抵抗難度強化》、《ワイデンマジック／魔法効果範囲拡大化》、《エクステンドマジック／魔法持続時間延長化》』

まるで月に手を伸ばすようにキーノは両手を掲げる。

「我が名において生み出すは虚ろなる砂の大海 其は足を踏み入れし全ての血肉と魂が 無へと還る地なればこそ」

呪文詠唱と共に、両手首につけた様々な魔法効果が付与された、宝玉が埋め込まれた透かし彫りのブレスレットが月光に煌いた。

この世界には無い超希少金属七色鉱の一つ、アポイタカラを素材として作られたそれは、言うまでも無く夫からの贈り物だ。

無数の幾何学的意匠の魔方陣が展開され、その輝きを吸い込むように深く深く呼吸し……

「《ハムナプトラ／吸血の砂漠》!!」

☆☆☆

彼女が両腕を振り下ろしたときに起きたのは劇的な変化だった。

割断され二つの群れになったアンデッド、その右側の群れ足場が突如、きめの細かい砂地となったのだ。

月光に輝く不思議と赤い……夕暮れに染まる砂漠よりなお紅い砂は、突如変化を起こした。

砂が鳶のようにあるいは触手のように伸びて砂地を歩くアンデッドを次々と絡め捕り、紅き砂中へと飲み込んでいくのだ。

ただの《束縛》や《行動阻害》ではない。

何を隠そう、この“紅い砂漠”は、この1000年で手に入れたブラッドリンカーの職業スキルを持つ彼女の“鮮血の貯蔵庫”の一部を変化／変質させたものだ。

そう、この砂が紅いのは、血に染まつてるからである。

紅い砂漠に捕らえられた者は、生者であればミイラのように干乾びるまで血を抜き取られ、死者であれば種族：ヴァンパイアである彼女の根源的な力である“負のエネルギー”を吸い尽くされ存在を維持できなくなり塵芥と化するのだ。

言い方を変えるならば、これは攻撃であると同時に“補給”だ。

これこそがヴァンパイアという種族特性を持ち、総合Lv90以上の魔法詠唱者で、高い大地や鉱物への干渉力を持つエレメンタルマスター（アース）や錬金術師、アルケミスト加えて、ユグドラシルでは無かった……この世界独自の稀有な職業“魔法創造者”スベル・クリエイターを持つキーノだからこそ完成しえた魔法……

前衛に立つ愛する夫のために後衛に特化するよう己を健気に鍛え上げたキーノ・ファスリス・インベルンが自身の第5位階魔法《サンドフィールド・オール／砂の領域・全域》を叩き台に編み出した強力

扉のそばに押し寄せていたアンデッドは残らず消し飛び、

『気がついた時には、黒の戦士が門の内側にいて轟音と共にアンデッドを跳ね飛ばしていたんだ』

その後も圧巻だった。

よくわからない一撃が線上にアンデッドを纏めて切り裂き、ついで起こった“真っ直ぐに飛ぶ竜巻”が群れごと木っ端微塵にした。

オーソンウエルは、アンデッドどころか墓地その物が真つ二つになっただけと思っただけらしい。

『だけどふわりと浮かんだマジックキャスターはもつと意味不明だったよ。月の光を浴びてなんか呪文を唱えたら、いきなり墓地の一部が砂地になったんだ。それも真っ赤なき。腐れアンデッドどもは残らずそこに飲み込まれたんだよ……一体残らずな』

そして少し顔を蒼くしながらグラスを呷り、

『アレは英雄なんてチャチで生易しいモンじゃねえよ。それとはまったく別の何かだ』

そしてインタビューの最後で、オーソンウエルはこう付け加えた。

『なあ、俺は一体何を見たんだだろうな……？』

墓地とはそもそも生者の領域ではない。

故にその日のエ・ランテル共同墓地の中で起きた戦いは、決して生者が立ち入ってはならない……”人の領域から外れた戦い”だったのだろう。

で、両刃の刀身は分厚く、余裕をもって両手で握れる柄まで含めると全長は衣装を着ないお骨ボデイの身長に匹敵（スケルトン状態で177cm。受肉した状態だと180cmを軽く超える）する。

そして肝心の性能は元ネタになった“倚天の剣”が「天をも貫く剣」という意味を持ち「岩を泥のように斬った」という伝承もあり、

- ・ 神聖属性
- ・ 刺突／斬撃に威力ならびクリティカル率30%上昇
- ・ カウンター判定が成功した場合、クリティカル率100%に固定
- ・ 刺突／斬撃攻撃時に、それら80%威力の殴打属性追加ダメージが発生

- ・ 使用による磨耗／劣化無効。 火焰／酸／雷／冷気に完全耐性
 - ・ 上位物理攻撃無効 I I I / 上位魔法攻撃無効 I I I（総合Lv60以下の物理／魔法攻撃を刀身で受けた場合のみ無効化できる）
 - ・ 装備者Lv：無制限。魔法エンチャント上限：第10位階
- というものだ。

確かにこの世界の水準なら伝説物の剣だろうが、持ち主のモモンガに言わせれば「メイスとしても盾としても使える頑丈で使い勝手のいい剣。メンテフリーで便利だし」くらいなものだ。

ついでに言えば左腰に差すサイドアームズ扱いのレイピア“セイコウ”は、総合的な武器としての水準はドツコイで元ネタの伝承に肖って斬撃特化型だったりする。

武器水準の話が出たついでに言えば、同じ刀剣類ってことならブレインの持ち刀に興味と実益を兼ねてデータ・クリスタルをぶち込んで鍛えなおした“神刀・滅却”よりちよい上程度のランクではないだろうか？

いずれにせよユグドラシルにおいてなら格下相手ならともかく、中級以上のプレイヤーならとも同格や格上に使う装備じゃない。

少なくともこの^{イテン}剣でツアーあたりとタイマン張れと言われたら、モモンガは全力で拒否確定だ。

逆に言えばその程度の装備で苦も無くクリアできてしまうのが今回のクエストだった。

まあ、ビーストマン相手でも楽勝の装備なので、当たり前と言えば当たり前なのだが……

荒れ狂う斬撃の嵐の前に、残存のアンデッド達はまるで水に砂糖が溶けてゆくようになす術も無くその数を減らしていった。

ただでさえ手に負えない剣の化け物があるのに、更に上空からは小柄な吸血姫の直協航空支援じみた魔法空爆が振ってくるのだ。

“死の螺旋”で生み出されたアンデッド達に知性など望むべくもないが、むしろ恐怖を感じる知性が無いことが彼らにとっての救いであらう……

そう思えるほど二人は圧倒的であり、容赦が無かった。

☆☆☆

程なく特にこれと言った波乱も無く、共同墓地アンデッド掃討作戦は終了した。

多少の取り零しはあるし、それらは悉く門へと向かっているが、エンリとゼロが問題なく対処してくれることだろう。

というより、せっかく同行させたのだから少しは武勲を立てる機会を作るべきだとモモンガは考えている。

この程度の数と脅威が武勲と呼べるかどうかは疑問ではあるが。

そして、愛妻^{キーン}を連れ立って、おそらく儀式魔法が行われてるだろう共同墓地深部へとゆっくりと足を進める。

そこに高揚感や達成感はなく、ただただその背中には「さっさと面倒な事済ませて、酒でも傾けながらキーンとイチャイチャしたいな」と書いてあるようだったという。

第69話：『感卦と秘剣』

ダークウオリアーとイビルアイが地下墓所を訪れたときに見たのは奇妙な光景だった。

ローブを着た、いかにも全身で「私は怪しい邪教団体のメンバーです！」とシャウトしてるような面々が、一人を除いて横たわっていたのだ。

すえたような匂いが鼻をつくが、『ライフ・エッセンス／生命の精髓』で確認する限り、その一人を除けば全員事切れていた。

「き、貴様らどうやってここまで来たっ!？」

うろたえながら吼えるローブ姿の痩せた男に、

「いや、普通に強襲して中央突破したんだが?」

とやや天然気味に返すダークウオリアー。

「ば、バカな……あれだけの数のアンデッドの中を」

「あれだけ轟音立てて派手に暴れたのに気づいてなかったのか? 儀式とやらに集中しすぎて周囲の状況が見えてないなど迂闊もいとこだぞ?」

「ぐっ……」

他の『センス・エネミー／敵探知』などのサーチ系魔法で周辺を警戒してみるが、生命反応が出てるのはやはり目の前にいる宝珠オーブを持つ痩せた禿頭男だけだ。

死体はゾンビにくらいはなるかもしれないが、それとて問題にもならない。

その状況を見て、死オーバードの支配者としての直感が疼いた。

「ああ。生贄いけにえにしたのか」

「!？」

驚愕に染まる痩せぎすの男に、ダークウオリアーモモンガは淡々と、

「たしかズーラーノーンにも、結構な数の命と引き換えに使用魔法の位階を引き上げる秘術というのがあったな……」

ふとその昔、ズーラーノーン本人から勧誘を受けた際にそんなことを自慢げに語っていたことを思い出す。

おそらくエネルギー源になったのは、ここに倒れてる骸だけじゃないだろう。位階ブーラストを発動させたのならこの程度の人数じゃ足りるわけも無く、おそらくエ・ランテルやその近郊でここ数年で行方不明になった人間のかなりのパーセンテージが生贄に使われたのかもしれない。

いや、むしろ術式発動への最後の一押しに使ったのだろうか？

もしかしたら、最初からブースターとして集められたのかもしれないが。

「となると触媒となってるのは、その妙に負の力を溜め込んでる宝珠ってところか？」

「……だったら、」

禿頭の痩せた男……ズーラーノーン幹部、十二高弟の一人であるカジット・バダンテールは簡単に種明かしをされる様に冷や汗を流しながらも、

「だったらどうだと言うのだっ!! “死の宝珠”の力を見るがよいつ!!」

掲げられた“死の宝珠”が紫色に怪しく輝くと、

「いでよ”スケリトル・ドラゴン!!”」

☆☆☆

ドズン!と重い地響きを立てて姿を現す“骨の竜”。

「フハハハハハハッ!! 魔法に絶対耐性を持つこの竜の前に、惨めな屍を晒すがよいつ!!」

内心の黒々とした不安を覆い隠すように、狂気を感じる哄笑をあげるカジットであったが、

「魔法に絶対耐性”ねえ……あー、はいはい。じゃあスケリトル・ドラゴンの相手は俺がするから。イビルアイ、」

「ハゲは任せろ」

小柄なマジックキャスターはサムズアップで応える。

順当の振り分けだが、

「たった一人で……」

だが、モモンガはカジットのセリフを最後まで言わせる気は無かつた。
ダークウォリアー

「武技《加速》、武技《剛撃》、武技《斬撃》、武技《斬刃》、武技《瞬閃》、
武技《強殴》……」

次々と早口に武技を重ねがけしてゆくダークウォリアー。

読み解けば身体速度の底上げに筋力強化によるダメージ上昇、斬撃の威力上乘せに切れ味アップに剣速向上に打撃のダメージ追加というところだろうか？

基礎的な武技が多いとはいえ、普通は……いや、達人の領域にいるガゼフ・ストロノーフ級でも同時にかけられる武技は六つが限度とされている。

実際、モモンガが今かけたのも六つだ。

だが、恐ろしいことにこの男には武技に関しても、上限が事実上存在しない。

その答えはシンプルだ。

この100年の間に人として過ごす時間（あるいは前衛役として過ごす時間）も長かったモモンガに発現した新たな特殊スキル、“
《感卦変換》” というものがあるからだ。

このスキルは簡単に言えば、『保有する魔力を肉体的なエネルギーに変換できる』能力だった。

この場合で言うなら、モモンガが内包する膨大な魔力を、武技の発動に必要な“精神力（あるいは集中力）”に1対1のレートで変換できるのだ。

また、同時発動数の上限や効果時間は、どうやら総合レベルも関係していそうだが……そのあたりは定かではない。

様々な魔法ボーナスが得られたり種族特性の関係で、絶対的攻撃力や最大火力は流石にオーバーロード・モードの方に軍配が上がるが、

ダークウオリアーやアインズ・ウール・ゴウンなどのヒューマン・モード時は武技を中心に戦術を組み立てればとても燃費の良い戦いができ、受肉の時は必ず装着してる指輪の一つである“疲労無効化”との相乗効果で、非常に持久戦に向いたセッティングとなるのだ。

他にもメリットはある。お骨状態の時は一世紀を経た今でもユグドラシル・ルールに縛られているのか武技は使えないし、おそらく同じ理由で装備制限も未だ有効なので、種族特性がなくなるデメリット込みでも燃費良く装備の自由度が高い人間の姿は、一度ちゃんと鍛え上げてしまえばかなり汎用性が高い。

世界の意思という物が果たしてあるのか不明だが、モモンガは“リング・オフ・ヒューマン・ビルディング完全なる人化の指輪”の装着で種族Lvを失う……死んだわけではなくとも、改めてこの世界で死の支配者オーバーロードではなく人として生き、月日と思い出を積み重ねることにより生き直した再ビルドしたことにより、自然と『この世界の住人』と自己を認識した／世界に認識されたのかもしれない。

それはともかく……

(パチ竜を俺にけしかけてくるなっての！ なまじ形が似てる分、なんだかツアーが馬鹿にされてる気分になってくるじゃないか)

と相手にとってはかなり理不尽な怒りを腹に持っていた。

原作でさえも狂おしいほどの友情をかつてのギルメンに向けていたモモンガだ。この世界線における100年の月日が、あるいは人として過ごした時間が彼のカルマ値にすら作用し温厚にさせたかもしれないが、激情家の側面もあるその本質は変わってはいない。

なら友としてあるいは父として(もしかしたら母としても)慕うツアインドルクスⅡヴァイシオンに対する思いは、当然なのかもしれない。

もつとも、受肉時の前衛ほぼガン振りガチビルドの身体能力を考えれば、スケリトル・ドラゴン相手にここまでの強化は不要なのかもしれない。

だが、例え骨の身であろうと人の身であろうと、その慎重で(時折

うつかりをする) その本質は、繰り返すが変わらない。

だから、

「喜べっ!」 “会心の一撃” というものをくれてやるっ!!」

両手握りに大剣イテンを構えると同時に人間が知覚できる限界を
超えた速度で一気に間合いを詰め、

「ハッ!」

裂帛の呼吸と同時に、重い甲冑を纏っていることを無視するように
地に足をつけたドラゴンの頭上まで跳躍!

そして、剣の性能に発動した六つの武技を融合させた大上段からの

一太刀……

「秘剣《竜鎚断》!!」

その一太刀は、剣撃と呼ぶにはあまりにも速く、重く、威力があり
すぎた……

第70話：「それはきつと、悪くない終わりかた」

「秘劍《りゅうついでん竜鎚断》!!」

その一太刀は、劍撃と呼ぶにはあまりにも速く、重く、威力がありすぎた……

唐竹割りをどこまでも強化したようなその一閃は、まずスケリトル・ドラゴンを「縦方向に真つ二つ」に割断したっ!

だが、巨大な刃が通り過ぎるなり発生した打撃属性の衝撃が伝播し柔軟性のない骨の体を刹那で砕き、そして通り抜けた音速の劍風が跡形も無く骨の竜の残滓を吹き飛ばした!!

その威力まさに「竜が放つ断罪の鉄鎚」が如し。

げに恐ろしきはこれは基礎秘劍に過ぎず、更に上位武技を組み合わせた「奥義【りゅうおうついでん竜王鎚断】」なる技もあるという。

☆☆☆

「そ、そんな、ありえん……ワシの5年間がただの一太刀などで……」

呆然とした表情を浮かべるカジツトに対し、ささやかなキメ顔で着地し、劍を背中に収めながら『こっちは終わったぞー』とイビルアイキイに小さく手を振るダークウオリアーガ。

(モモンガ、かっこよいぞー♪ あっ、なんか濡れてきちやった)

吸血姫なのに人間、それもかなり敏感な部類のような反応を示すキーノちんである。

なんというか……実に調教済みという感じである。

じくじくと疼く股の感触……キーノはこの素直な反応を示すようになった肢体を100年前よりずっと気に入っていた。

人間も吸血姫も素直が一番だ。

それにこの見かけは幼い肢からだ体なら、

(人間では耐えられないプレイも可能だし)

一体どんなプレイをしてるんだか。二人の性生活は謎に包まれている……としておこう。深淵を覗く者は、また深淵からと覗かれていると賢者も言っていた。

ただ、キーノは某鳥頭のギルメンに、神に対するが如き感謝を捧げている。主に色々バリエーション的な意味で。

などとピンク色の思想で脳の大部分を支配させながらも、切り離された戦闘用の思考は最適解を導き出していた。

仮に原作ならば“死の宝珠”の残存エネルギー全てを使い二匹目のスケリトル・ドラゴンを召喚するところだろうが、それを許す感覚を彼女は待っていない。

「武技《流水加速》」

実はイビルアイが、この思考／神経／筋肉全てに加速効果が高い武技を使うのはかなり反則だ。

かなり異常な方法で人間から吸血鬼に変化したので他に類を見ないほど変り種だが、それでも彼女はアンデッドだ。故にすっかりその種族特性も生きていて、《流水加速》で発生するデメリット、極度の脳性疲労を完全に無効化できる。

そして、気がつかれぬ間にカジットの至近距離に入り込み、

「《ダイヤモンド・カランビット／金剛石の嘴爪短剣》」

完成したエレメンタルマスター(アース)のスキルを見せ付けるように水晶ではなく、より硬度の高い(そして大地への干渉力が必要な)ダイヤモンドで、その名の通り猛禽の嘴や爪を思わせる刃の短剣を瞬時練成する。

どこことなく某バードマンへのリスペクトが感じられる意匠ではある。

どうでもいいが、“魔法のカランビット”と書くとき、魔法少女の特殊部隊物何やら別の作品が思い浮かんでしまうが……多分、それは気のせいだ。

イビルアイは、逆手に握ったカランビットの大きな湾曲刃を躊躇無く振り、

“ヒユバツ!”

「ぐはっ!」

握った宝珠ごと、カジットの右手首をいとも容易く斬り飛ばす！
そして間髪いれず、

“どごっ!”

「ぶっ!」

跳び回し蹴り一発でカジットを昏倒させた。

《スリープ／睡眠》の魔法でも良いような気もしたが、相手は暗黒面に落ちてるとはいえ魔法詠唱者。抵抗レジストされたら面倒だと思つた瞬間には脚が動いていたようだ。

小柄な魔法詠唱者という格闘戦にはとことん不向きなビルドだが、吸血鬼という身体能力に優れた種族特性のせいかわ女の近接戦スキルは実は見た目以上に高い。

流星に原作シャルティアには遠く及ばないだろうが、総合Lvの高さ(どんなに少なく見積もつてもLv90以上)も相まって、並みの戦士職より近接でも遥かに強い。

未だ新婚気分が抜ける気配モメンガすらない旦那と、日々格闘戦の訓練に励んでいるのだろう。ベッドの上での寝技やらマウント技やら。何もベッドの上とは限らないが。

「まあ、死んでないなら問題ないだろう」

どくどくと切断された手首から血は流れ続けているが、カルネ村名物“バレアレ商会のポジション”を振りかけたので、命に別状はないだろう。

流星に失なわれた血液が戻ったり、手首から先が生えてきたりはしないだろうが。

そしてイビルアイはきらきらと月光を乱反射させるカランビットを消し、

「これが今回のキー・アイテムだな。多分」

“死の宝珠”を拾い上げた。

その瞬間、

『おお！ 我が支配できぬいと高貴なる闇の御方よ』

「はっ?」

『我が名は〃死の宝珠〃と申します。この世に死を振りまくために生み出されし魔道具』

「はた迷惑な魔道具もあつたものだな。お前がこの男を支配し、操っていたのか?」

ちよつとこのまま握りつぶしてやろうかとも思ったが、

『いいえ。我は〃死の螺旋〃成就のため、ズーラーノーンがこの男に預けられたもの。我が支配する必要もなく、この男に力を貸していただけにすぎませぬ』

「ふーん」

真偽のほどは判らないが、自分を支配する力がないことは彼女にもわかつた。

『されど貴女様に触れていただき、我が如何に矮小か思い至りました。貴女様の偉大なる負の力の前に、我は無き頭をたれる所存でございます』

「いや、別にいいが」

(命乞いか? 私程度で偉大なるとか言っていたら、真なるモモンガ^{死の支配者}が触れたら壊れるんじゃないか?)

最低でも機能不全くらいは起こしそうだなと思っていると、

「イビルアイ、その宝珠と話しているのか?」

「ああ」

彼女は頷き、

「〃死の宝珠〃というらしい。世にも珍しいインテリジェンス・アイテム^{知性あるアイテム}だ」

するとダークウオリアーは少し考えてから、

「……レアだな。少なくとも〃あちら側^{ユクドラシル}〃には無かつたアイテムだ」

夫の表情から内心を察した彼女は、

「持つて帰るか?」

「危険は?」

「少なくとも私が持つ限りはないな。微弱な支配力もあるようだが、どうやら人間用のそれらしい。機能的にはネガティブ・エナジーの

とも無かった。

クレマンティーヌは未だカルネ村に囚われたままだし、カジツトは昏倒したまま警備兵に引き渡された。

前者には何やら別エピソードが待っているのさうだが、後者は目を覚まし次第厳しい取調べが待っているのだろう。

また、“死の宝珠”はハムスケの頬袋にINではなく、イビルアイ^キの所有物になるようである。

インベントリにそのまま収納されるのではなく、何やら普段使いきるアクセサリか何かに加工されそうだが……どんな未来が待ち受けているにせよ、彼的には大出世だろう。

少なくとも鄙^{ひな}びたオッサンや巨大ジャンガリアンの涎まみれになるよりは、随分とマシな未来のはずだ。

さて、では最後に最も運命が変わったかもしれない面々の様子を探ってみよう。

「うー、流石に死ぬかと思っただぜえ〜！」

とは一連の事件の活躍で、金級への昇格試験が受けられるようになった銀級冒険者チーム“漆黒の剣”、チームのムードメーカーでもあるレンジャーの“ルクルット・ボルブ”がいつもの軽い調子でお疲れアピールをすると、

「それほど限界のような戦いであつたであるか？」

と返すのは森司祭^{ドレイド}の“ダイン・ウッドワンダー”だった。

共同墓地内部での戦いは、夜半には既にダークウォリアーとイビルアイが決着を付けていたらしく、“漆黒の剣”が参戦していたのはエンリとゼロが陣取っていた墓地門前の戦いだ。

とは言つても、戦い自体は、

「実際、ほとんどエンリさんとゼロさんが斃しちやつたしな」

と苦笑するのは、リーダーで戦士のペテル・モーク。この中で唯一^{ダークウォリアー}モモンガと会話した人物だった。

彼の言うとおりの苦戦とは程遠い状況だったが、門以外の……例えば

壁の気づかないような小さな隙間から出たアンデッドがいなくても言い切れないので、少なくとも一両日中は警戒態勢は継続するのとこと。

パトロールに加われればボーナスを付けるといふ冒険者組合からのお達しが出ており、“漆黒の剣”に限らず有志一同はこの警戒任務に眠たい目を擦りながら参加。

他のチームとローテーションを組んで巡回、現在は活気を取り戻しつつある街のカフェで小休止中だった。

仮眠が取れるのはもう少し後だ。

「エンリさん、素敵でしたよねえ……」

とうつとりした表情で、ゴツイワンドでアンデッドをまとめてタコ殴りにしていた女神官の勇姿を思い出していたのは、性別不明のタレント持ちな魔法詠唱者、“ニニヤ・ザ・スペルキャスター”だった。ちなみに“ザ・スペルキャスター”という二つ名は本人未公認だったりする。

「エンリさん、確かに綺麗だったよなく。それにあのエロい神官服がたまらん！」

するとニニヤはジト目で、

「ルクルット、ワンドで殴られても知りませんよ？」

「神罰観面であるな！」

「なんでそうなんだよっ!?!」

なんとか今回の事件も全員無事に潜り抜けられた“漆黒の剣”……賑やかな仲間を見ながら、ふとペテルの脳裏に重厚な漆黒の甲冑が過ぎった。

「ダークウォリアー卿、噂どおりカルネ村に住んでるのかな？」

そんな呟きが、活気を取り戻した町の雑踏の中に消えていった。

原作という世界線に比べれば、この事件における出血量はずっと少

なかつたのかもしれない。

きつとそれは喜ぶべきことなのだろう。

だが、その結果が後にどのようなバタフライ・エフェクトを生み出すのか……それはまだ、誰にもわからない。

幕間（仮称）：とりあえずカルネ村へ戻るの巻
第71話：“ロフール商会”

さて、邪教団体ズーラーノーンが主犯となりエ・ランテルで引き起こした騒乱、後で言う“アンデッド・ナイト事件”は、その出現したアンデッドの数から考えれば驚くほどの人的被害も物的被害も少なく終息した。

宵の口と呼ぶには少々遅い時間から始まったアンデッドの大量発生は夜半には事件は解決され、首謀者であるズーラーノーン十二高弟のカジットは意識が戻らないまま当局に引き渡された。

意識が戻り次第、尋問が開始されるはずだった。

その後、夜明け前にはダークウオリアー一行は、24時間体制で待機していた冒険者組合にて簡易的な口頭報告を行った。

そのまま夜明けと同時にカルネ村へ帰ろうとも思ったが、冒険者組合の前で待ち構えていたのは見覚えのある豪華な馬車。

その車体の横には堂々と“ロフール商会”の屋号と紋章が刻まれていた。

（ああ。ダークウオリアーとの“昵懇な関係”をアピールしたいってわけね）

☆☆☆

商会長であるバルド・ロフールはエ・ランテルきつての名士で王国でも指折りの大店の主として有名だ。

そしてカルネ村にとっても重要なビジネス・パートナーだった。

何しろ事実上、カルネ村の物産をほぼ寡占状態で取り仕切ってるのがロフール商会だ。

他にも取引がある独立系商人もいるが、それらも「食料をメインで

扱うロフール商会の取り扱い品目に入っていない」からで、これらの商人もロフール自身からの紹介で取引を始めたのだ。

また、ロフール商会の旨味は何も他の地域では手に入らない、ないし入手しづらいレアや高品質などの高付加価値な商材が取り扱えるだけじゃない。

例えば、指名依頼という形を取ることで、カルネ村の自警団を兼ねた白金級冒険者チーム“カルネ村修道会”を優先的に雇えるというのも大きい。

ロフール商会は原作よりも輪をかけて大店であり、それ故に大規模な通商隊を組んだり、あるいは高価値商品や貴金属を輸送する場合も多い。

また大店である故に、「表沙汰にできないような手段」で商売の妨害を仕掛けてくるものも少なくない。

そういう場合において、商品が盗まれたり買収されて裏切られたりしない誠実さを持ち、大抵のモンスターや盗賊を返り討ちに出来る実力を持ち、割安で任務を引き受けてくれる“カルネ村修道会”は非常に助かる存在なのだ。

とにかく『いつでも白金級冒険者チームを護衛に雇える』というだけでも安全保障上は大きい。

“カルネ村修道会”の設立は、そもそも徴兵回避対策の方便であり冒険者としての資格を剥奪されない程度の実績を上げ続けられればいい。

極端に言ってしまうえば、冒険者として儲ける必要はないのだが……だが、物事には相場というものがある。

あまりにも安い値段で請け負っては、同じ階級の……ひいては冒険者全体の依頼料全体の価格破壊に繋がり、食い扶持を奪ってしまうことになりかねない。

だが、何事も例外というものがあり、この場合は指名依頼がそれにあたる。

指名依頼は「双方の合意によって報酬が決まる」というワーカー寄りの契約であり、違うのは指名者から提示された報酬の幾分かが組合

の取り分になるということだ。

なのでロフール商会から提示される報酬が、白金級の相場よりも割安でもよいと暗黙の了解ができていた。

普通に考えれば、『カルネ村修道会』は登録人数3桁に達する世界最大規模の冒険者チームで、ただでさえ安い依頼料を普通の冒険者チームのように人頭割したらたちまち子供の小遣いのような金額になってしまう。

だが、何度も似たようなことを書いているが、カルネ村の収入を支えているのは売り先であるロフール商会であることは間違いなく、商會が没落すれば村もまたただでは済まないため、そこらへんの事情も考慮されているのだろう。

繰り返すが、『カルネ村修道会』は特に冒険者として名声をあげる必要も利益をあげる必要もないのだ。利益はそれこそ他で出せばいい。それが出来る強固な関係を築いているのが、カルネ村とロフール商会だった。

まるで経済学的マッチポンプのようだが、王国有数の大店や王女の領地である村というのは、市長も組合長もそれなりにではあるが、考慮せねばならない物のようだ。

加えてロフールは、一般的には実存が確定していない都市伝説として語られていたダークウォリアーとその妻イビルアイが10年前からカルネ村に在住していることを普通に知っていた。

それはそうだ。領主であるラナー王女の名代という肩書きであるダークウォリアーとは額の大きな商取引やら新商材の打ち合わせなどで何度も会っているのだ。

だが、少なくとも『公的には』王国で表立って活動していないこの二人にはなんらかの理由があると考えていたし、対面するのが常にカルネ村でも不平はなかった。むしろ行きたびに新しい発見と新たな商材の発掘＝ビジネス・チャンスが得られるカルネ村への小旅行は楽しみですらあった。

また、砦のような外壁に囲まれ、用の無い外部者は基本立ち入りを

許さない不文律があるカルネ村（王国では異端である死の神を信仰してる村だからとされている）へのいつでもフリーパスで来訪できるという立ち位置は、何気に彼の自尊心や特権意識を満足させているのも事実だった。

故にダークウオリアーもイビルアイもカルネ村に実存してることは公に言うことはなかった。

いや、プライベートで聞かれても、腹芸を駆使しあえてはぐらかしてきた。

だが、止むに止まれぬ非常事態だったとしても、こうしてついに表立って姿を現した二人を放っておくほど、バルド・フローレは無能ではない。

チームではなく個人として、おそらくは周辺国最強と噂される冒険者と懇ろねんじというのは、彼個人にとっても商会にとっても大きなメリットとなる。

具体的に、広告塔効果だけを考えても絶大だった。

☆☆☆

そんな事情をなんとなく察したモモンガは、妻のイビルアイキーンやエンリとゼロを連れ立って案内されるままにロフローレ商会の馬車へ乗り込み、一路彼の屋敷へと向かった。

ダークウオリアーが仰々しい歓待を好かない事を知っていたバルド・ロフローレは簡単な歓迎と労い、そして街をひいては商会を救ってくれたことに感謝の意を述べ、礼として風呂と仮眠を取るためのベッドルームの提供を申し出た。

この時代、番台ばんたい席娘せきつこ付きの公衆浴場（源泉掛け流しの温泉）があるカルネ村が例外中の例外で、衛生概念が希薄なこの頃の王国では中世期の欧州よろしく風呂はさほど重要視されておらず、貴族や富豪の屋敷でも満足な入浴施設がないことも珍しくはなかった。

その中でも例外的に、贅沢にも湯浴み場がゲストルームに隣接してるのがロフローレ邸であり、一般的な来客からは富と権勢を見せ付ける

ためと思われていたが、実際にはカルネ村の影響だった。

湯浴みと仮眠、そして食事と一息ついた一同。

エンリとゼロは、現在組合に提出する本式の報告書の作成を行っている最中である。どうやらせっかくなのでカルネ村に帰る前に済ませてしまいたいらしい。

そしてダークウオリアーというところ……

「うくむ……となると今年の小麦相場は益々上がりそうだな」

「ええ。徐々にはありますが、王国の食糧事情は年々確実に悪化しています。それに今年は天候がやや安定しませんし」

茶飲み話のはずが、何時の間にもやら現状報告会と大雑把な商談になっていた。

この世界に来て既に一世紀だが、来た当初の人間性が失われておらず、むしろ人間としての円熟味を増したモモンガは、こう商人相手だとかつて生業にしていた営業職としての血が騒いでしかたないのだろう。

昔取った杵柄とでも言うべきか？

またロフーレ自身も『世を動かすのはいつの時代も商人だ』と言って憚らないダークウオリアーの開明的な在り様をひどく気に入っていた。

前近代的な思考が色濃く残る王国では、社会的な実力や実権はあっても商人は「下賤な者」とされ、特に貴族からは地位低き者とみなされていた。

モモンガにとってはお笑い草で、『商人がいなければパン一つ満足に買えない連中が何を言ってることやら』というところだ。

「なら、来年の作付面積を増やすか？ いや、開墾自体は可能だけど労働力がなあ」

どうやら高村加価値で取引されるカルネ村特産農作物の今年の生育具合の話をしながら、こういう話に発展したらしい。

蛇足ながら、少なくともカルネ村の近辺は天候に関する影響は他の地区に比べれば低く、特に干ばつや逆に大雨などには強いとされている。

る。

無論、どこかの死の神が、インベントリから引つ張り出した“最古図書館”由来の農業指導書に書かれていた『現状の技術で実現可能な多分野にわたる先進的農業知識』のせいもある。

更に、いざとなったら切り札で第4位階魔法の《コントロール・クラウド／雲操作》や更に上位で使える者がこの世界では数えるほどしかいない第6位階魔法の一つ《コントロール・ウェザー／天候操作》を平然と発動させるのだから。

「村人を増やす御予定は？」

モモンガの言うとおり、現在壁の外側への拡張工事をやってる最中だが、作付面積の拡大自体は可能だ。

現在、設営中の外堀の外側だったらまだまだ耕作地を広げられる。もともと新たに川の水を引き込み作る堀は、農業用水にも流用する予定だ。

元々辺境の開拓村だったカルネ村の周辺はまだまだ未開拓な土地が多く、ある意味灌漑はやりたい放題だ。

天候だって魔法でどうにかなる。

それどころか必要なら超位魔法《ザ・クリエーション／天地改変》で、任意の土地を土壤その物から地下水脈に至るまで、劇的に変化／改善すらできる。実は村の公衆浴場に沸いている温泉も、この超位魔法の賜物である。

だが、肝心の労働力が常に不足気味なのがカルネ村だった。

「最近、どうにも周囲がキナ臭くてね。どこの“草”が入り込んでくるか判らない現状、安易なことできないのさ。村民を増やしたいのは山々なんだが」

ロフーレは「なるほどなるほど」と頷き、

「ならばいつそ奴隷に手を出してみるの？」

「労働奴隷は、給与が足りない代わりに購買力が無いし長期的に見れば経済的にマイナスなんだが……それに王国では奴隷制度は廃止されたろ？ 少なくとも建前的には」

「というかそれは教え子であるラナーの成果であり、功績だ。」

「仮にも領主様の顔を潰すというのも」

するとロフラーは意味ありげに笑い、

「いえいえ。何も王国で買う必要もありますまい。それに、そのまま奴隸として使役なさらずとも良いではありませんか」

「とうとう?」

「亜人歓迎のカルネ村なら、国外で買い付け小作人に使うということも可能なのでは?」

それは商人らしい笑みだったという。

「無ければあるところから持つてくればいいのですよ。それが商人というものですから」

第72話：「成したい事は多々あれど、現実には中々手
厳しい」

「将来的には養蜂とか養蚕にも手を出してみたいんだよな。治水事業とかも本格的にやりたいし……どう思う？」

水源地としてはひょうたん湖が有名だが、モモンガ的にはせつかく水資源が豊富なアゼルリシア山脈やトブの大森林があるのだから、飲料や農業用にダム湖でも作りたいようだ。

（人造湖ができたらリザードマンやドワーフに管理委託してもいいけど……）

カルネ村への帰り道、またしてもアイアンホース・ゴーレムを出して家路を急ぐ四人だが、モモンガは前に乗せたキノノについて将来の展望を語ってしまう。

「まずは人だろ？ カルネ村の産業はぎりぎり維持できてるのが現状だ。金や土地はともかく、人的には新規事業を立ち上げる余力は無いぞ？」

「ごもつともである。実は労働力的には二つの種族もやや不足気味である。」

使い勝手のいい弓騎兵隊の設立を乙女の夢としてるエンリ・エモツトとは対照的に、モモンガが夢の一つはカルネ村を一大農業生産地として安定化させることだった。

これは今でも手元に引き出せるこの100年で読み漁ったかつてのギルメンが遺した蔵書、特に死獣天朱雀やブルー・プラネットが持ち込んだ文化人類学や自然科学、人類史や農業史の本が大きく影響を与えているだろう。

『モモンガ君、古今東西を問わず為政者はどうやって国民を食べさせるかを一番に考えなければならんだよ。むしろ食べさせられる国民の数が、為政者のステータスと言っている。そういう意味では農

政は国家の基本であり、農政の失敗は国家凋落の原因になる。今を見ていればわかるだろう？』

これは在りし日の死獣天朱雀の言葉だったか？

実はモモンガ、元々潜在的に農業に強い憧れがあった。

彼がリアル世界で人間として過ごした西暦2138年において、人間が長きに渡る英知をつぎ込み食料生産を支えてきた農業は完膚無きまでに叩き潰されていた。

農業にとって最も重要な大気も水も大地も、悉く……人の存在を許さぬほど汚染されていたのだ。

100年前まで、街のどこでも売っていた生鮮食品は、今やアーコロジーの一部で細々と水耕栽培で工業的に生産されるもののそれは一握りの富裕層の為の物であり、庶民の口に入るのは栄養学的には生きる事が可能な合成食料ばかりだった。

モモンガの深層心理を探れば、もしかしたら彼がキャラメイクでユグドラシルでは主流だった人間種ではなく骸骨を選んだのは、人間という種に対する諦めがあつたのかもしれない。

種族特性の飲食不要……というより不可は、鈴木悟という人物の現実に対するささやかな反抗心なのかもしれない。

その憧れが潜在から顕在に切り替わったのは、おそらくはこの転移してきた世界で種族属性を失うほど完全な人化が可能となる“リング・オブ・ヒューマンビレイニング”の恩恵で、人として生きれるようになってからだろう。

人の姿を取るなら飲食不要のアイテムでも身に着けない限り飢えろし放置すれば餓死する。つまり必然だ。

そして栄養を摂取するなら食事が合理的で、食事するならどうせなら美味しい物の方がいい。

そして漂着した新しい世界は、水も空気も大地も汚染されていないのだ！

それでも世界各地を時には傭兵や冒険者、時には評議国特使やエージェントとして転々としてるうちはよかった。

いや、その時でもその土地土地の野菜や果物の種子をこっそり買い集めてアイテム同様に、血が騒いでコレクションしていたようだが……

その憧憬が欲求となり爆発したのが、カルネ村に定住を決めた10年前。

ただ、いかんせん放浪生活(?)の90年の間、純銀たっちの聖騎士ちみへの憧れからか数々のクエストの結果、前衛スキルばかりが上昇(アイテムをやたらいじってたせいかクラフトマン・スキルもとれたが)、気がつけば農業系スキルが入り込む余地の無いビルドに仕上がっていたのだ。

このうっかりさも実にモモンガ様らしいが……そこで生来の実験好きも手伝って、本から拾った様々な農業知識を集めた数々の膨大な種子や便利そうなアイテムやゴレムと共に与え、時には単純農作業用のアンデッドまで召喚して農業の育成に勤しんだのだ。

トブの大森林で出会ったドライアードのピニスン・ポール・ペルリアを熱心にスカウトしたのも、この為である。

こんなことばかりし、村の食糧事情や財政が劇的に改善されればそりゃあ神様扱いもされるだろう。

人の姿の時も骨の時もとんでもない戦闘力を誇り、見かけも迫力あるが(特にお骨の時)、その内面は存外に平和主義なのかもしれない。

まあ、確実に平和主義一辺倒ではないだろうが。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆

「お帰りなさい！ お館様!! 奥方様!!」

にこやかに迎えてくれたのは、本日の門番担当の二人だった。

装備の質が何気にエ・ランテルの衛兵より数段上なのは御愛嬌。

途中、午後の定期巡回パトロールに出ているゴブリン・ライダー隊とエンカウ
ントしたから、既に一団が帰路にあるという情報は村に届いているだ
ろう。

エ・ランテルへの半ば出陣じみた小遠征ならともかく、元来モモン
ガもキーノも農作業の手を止めて総出で迎えるような出迎えは好ま
ないのは、村人なら誰でも知っていることだ。

『村人が村を出入りするたび総出で送り迎えはしないだろう？ 私と
て村の一員なのだ。自然でいい』

とは本人の弁。それでも手が空いた者がいれば自然と集まってし
まうのだが。

特に維持する必要もないので、アイアンホース・ゴーレムをもとの
土塊に還元し、四人が村の中央広場へと向かうと……

「ん？ 何やら騒がしいな？」

時間はちょうど午後の休憩時。

手が空いてる村人たちが集まっている。いや、より正確に言うなら
人垣を作って何かを取り囲んでいるようだ。

良く見ればそこにでかくてやたらとモフモフな図体……ハムスケ
も混じって声援を飛ばしていた。

すると……

“バキヤツ!!”

激しい打撃音が響くと同時に人垣が綺麗に割れ、

「わきゃっ!?!」

「おっと」

何やらカタパルトで弾かれたように飛んできたそれを、モモンガはダークウオリアー
慌てた様子も無くワンハンド・キヤツチ。

腕に引つかかるように静止しているのは、「カルネ村修道会」公式のトレーニングウェア姿の……

「あんのクソガキ！ 可愛い見た目のくせして滅茶苦茶反則じゃないのさっ!!」

「何をやってるんだ？ クレマンティヌ 疾風走破」

「んげっ!? ダークウオリアー……」

予想の斜め上に行く風変わりな出迎えに、顔に？マークを浮かべるモモンガなのであった。

第73話：「一応、手加減はしてるつもりだよお♪」

「お帰りなさい！ お館様♪」

満面の笑顔で、手と一緒に訓練用に刃を落とした柳葉刀のような幅広い湾曲した刀身を持つ片刃の剣を小枝のようにビュンビュン振るのは、「カルネ村のちっこい呂奉先^{ベルセルク}」ことネム・エモットだ。

「ちよつとネム！ 捕虜虐待したら駄目じゃないっ！」

「ほりよ……ぎやくたい……？ えっ？ アタシが虐待される側ってこと……？」

何やらエンリの言葉に、主に精神的にダメージを受ける古^{昭和}の時代の文化遺産、体操服+ブルマ（濃紺）姿のクレマンティーヌであった。ただし、未だにモモンガ^{ダークウオリアー}の腕に引っかけたままであるが。

ちなみにこのブルマこそ、頑丈で動きやすい事がとりえのカルネ村修道会公認トレーニング・ウェア（未婚女性用）の正体であるが、元デザインが某バードマンがゲーム内嫁用に収集したコレクションの一つであることは言うまでもない。

またカラーバリーションもあり、例えばエモット姉妹は何故かトレーニングウェアは揃って赤を好むようだ。

「弱いものイジメしちゃ、メッ！でしょ？」

「だ、誰が弱い者だっつーのっ!!」

「みよん」という感じで仔猫のように吊り下げられていた腕から反動つけて抜け出る、憤慨気味のクレマンティーヌ。

ネムに怒ってるようで実はエンリ、的確にクレマンティーヌの精神にダメージ与えにいつてるんじゃないだろうか？

「アタシは断じて弱くなんてないっ!!」

なんかさつき「わきやつ!」とか愉快な叫び声をあげながら吹っ飛んできたような気もするが……その元凶たる幼女^{ネム}は、

「そーだそーだ！ ネム、弱いものイジメなんてしてないもん！ た

だクレマンおねーちゃんが超ひまそーにしてたから、ちよつと稽古^{あそ}つけてもらっただけだもん♪ ねー?」

「そ、そうだぞ! アタシの武技が見たいっていうからちよつと胸を貸してやっただけだっ!!」

……六色聖典が一つ漆黒聖典の“疾風走破”といえ、名うての凄腕戦士のはずなのだが、どうもそうは見えない。

何故だかその姿は、ムキになって反論している子供のような?

どうかぶつちやけ、精神年齢はネムとどっこいに見えてくるから不思議だ。

☆☆☆

モモンガは眉間を揉みながら、

「大体状況は把握した」

(まあ、ネムも本気で潰しに行ってるわけじゃなさそうだしな……)

衣装こそ、いつものバフがかかりまくってるお気に入りの黒のレザービスチエ・アーマー“幼き守護者”だが、戦場なら華奢で幼い肢を左右から守る“自立防衛型浮遊十文字機動盾”を装備している。

何より、持っているのは職業スキル“ハルバーディア”で強力な補正が入るハルバードやバルディッシュのような重量級のポールウエポンではなく、右手に先ほどの片刃長剣／左手に直径30cmちよつと程度の円小盾という組み合わせだった。

武器から言うなら、原作でフォーサイトと対峙したときのモモンガの装備に近い。

ネムは、職業スキルで“ウエポン・マスター”が発現してるため武器と名がつくならその全てに適性が付き、初見でも扱うことができるが、かといって全ての武器が得意となるというわけではない。

盾と剣という前衛の基本装備と言っている組み合わせは、ネムには『好きでも嫌いでもなく、得意でも不得意でもない』ちよつと中庸の装備だったはずだ。

ネムはその持ち前の怪力に反して小柄なので、重く長間合いの武器を好む。

前出の通り、最も好むのは硬い柄を持つ斧鑕／鉾槍系のポールウエポン（全金属製でしならない柄の物が特に好み）で、次は弓や投槍等の射撃／投擲武器^具、その次がウォーハンマーのような長柄の鈍器や薙刀やグレイブのような長柄の刃物という長間合いの重量級武器へと続く。

盾や剣を使うにせよ、ネムの体格離れた膂力を考えれば、もつと大柄な武器の方が彼女の利点を生かせるだろう。

どこぞの“銃使いの少女達”^{GUNSLINGER GIRL}ではないが、『ちっこい体に大きな武器』がネムのトレードマークで、ナイフをグレートソードに持ち替えても、バツクラーをタワーシールドに持ち替えても、同じようにぶん回せるだけのパワーがネムにはあった。

更によく観察すれば、なんとなく見覚えがある……ラナーが日常的に愛用している犬の首輪を思わせるチョーカー、データクリスタルで外装を変えた「ステータスを落とす代わりに獲得経験値を上げる首輪」を装着してではないか。

何気にハンデをつけていたネムだが、普通に考えるとちよつとおかしい。

第22話によればネムの総合Lvは29、対するクレマンティーンは45話によるとLv33。

確かにトレーニング・ウェアと訓練用に先端が丸められたステイレットというクレマンティーンには装備ハンデがあるが、それでもカウンター気味に決まったノックバック効果のある武技《盾強打》によるシールドバツシュで、一方的に弾き飛ばされるほどの差はつかないだろう。

まあ、実は答えは簡単でクレマンティーンは一度ブレインに切り殺され、エンリの《リザレクション／蘇生》で復活したためにレベルダウンが起きていたのだ。

無論、「鉄級以下は蘇生しても灰になる」とされるどこぞの青薔薇リーダーやローブル聖王国の腹黒妹が使う《レイズデッド／死者復

活』よりはダウン率が低いが、それでも総合Lvはネムと同等になつてしまっていた。

セリフどおりに大体の事情を察したモモンガはネムの頭を撫でて、「ネム、私にも模擬戦を見せてくれるかい?」

「もっちろんだよお♪」

としつかり抱きついて、いつものように自慢の平たい胸……抜群の扁平率で先端のポツチしか凸部がない胸部をアピールするネムたちである。

少なくともネムは、『モモンガ様は背丈もおっぱいも小さければ小さいほどいい』と認識している。勿論、実際の年齢はどうでもいいが、見かけが幼く可愛いことは絶対条件だ。

ネムの見立てによれば、モモンガは美人より可愛いほうを好む傾向がある。

ところでカルネ村は人間だけで785名も住んでる村なので、実はネムより幼い女の子もいるにはいるが、どの幼女も“村の幼子A”程度の総合Lvしかなく、とても“死の神様への貢物”には選ばれそうも無いのでネムとしては一安心だ。

考えてもみて欲しいのだが、一般村人からしてみれば総合Lvが軽々と90を上回ってるイビルアイキィが正妻で、側近というより側室がエンリ&ネムのエモット姉妹なのだ。つまりエモット姉妹が奉納当落線と村人に誤認されていた。

どんなに信仰心が篤くとも……否。信仰心が篤ければ篤いほど、只人たる娘を奉納することなど恐れ多くてできないのだろう。

ただ、誤解のないように言っておくが……

別にモモンガはきよぬーが嫌いではない。ただ『ちっぱいがもつと好き』なだけだ。

まだそういうキャラは登場してないし登場予定は無いが、某バードマンによれば、

『モモンガさん！ ロリ巨乳は邪道に非ずです！ あれもまた一つの正道なり！』

彼の業値はどこまでも深い……

蛇足ながら……先ほどちらりと話題に出たが、名高い聖王国の天才姉妹と比べても、実はエモット姉妹は姉妹合わせた総合Lvなら現時点でさえ勝るとも劣らない。

無論、まだ十代のエンリやまだ齡一桁のネムは、まだまだこの先も成長するだろう。また、ネムが単独でなくハムスケに跨った人馬一体モードで互いがガチ戦フル装備なら、今でも頭が残念な姉の方に確実に勝てそうだ。

そう言えば、この二つの姉妹は戦士と神官が互いに姉と妹でひっくり返ってるのが面白い。そしてエモット姉妹は軍事的才能に限ってみても、姉妹で分かれている。一騎当千の妹に、一将万率なのが姉の方だ。

村人の中から新たな奉納幼女みつぎものが選出される可能性はかなり低そうだ。

「クレマンティーヌもまだいけるか?」

むしろ気遣うような口調に逆に刺激されたのか、

「当ったり前だろ! このクレマンティーヌ様がガキんちよに跳ね飛ばされたまんま引き下がれっかよっ!!」

どうやら戦意が衰えた様子はない。

エンリが溜息を突きながらこっそり《ライト・ヒーリング／軽傷治癒》をかけていたが、クレマンティーヌは気づかないふりをしたし、モンガも見なかったことにした。

「では両者……いざ尋常に、」

モンガが右手を上げると同時に二人は再び対峙し、互いの武器を構え……

「はじめっー!」

第74話：〃 PVPイベント：ネム VS クレマン
ティーヌ〃

「《能力向上》《能力超向上》《超回避》《疾風走破》……!!」

自分の漆黒聖典第九席次としてのコードネームの由来ともなった、切り札ともいえるオリジナル武技を含んだ武技を次々に重ねがけしてゆくクレマンティーヌ。

いかにモモンガの眼前とはいえ、ただの模擬戦なのになんか大人気ない……というかガチ過ぎだった。

先ほど、加減した状態でガキネムに吹き飛ばされたのがよほど腹に据えかねたのだろうか？

というか、ここだけの話……

端的に言えばクレマンティーヌは、手合わせをネムに誘われたことをいいことに、ネムを人質にとつてどう考えても勝ち目のないダークウォリアーやイビルアイが帰ってくる前に村から脱出するつもりだったようだ。

村に残ってる強者は、彼女の見立てだと自分を斬り捨てたクソツタレの人斬りブレインと、訳のわからぬ魔獣ハムスケだけ。

実戦装備を没収され、おそらく蘇生によるレベルダウンをしてる現状では、正面から挑んでも敵わない。

なら、搦手をつかうだけだ。

ブレインは腹芸や交渉ができるタイプに見えないし、ハムスケはどうやらネムの使役魔獣くさい（そして彼女はダイバーノックにエンカウトしてない。無論、万が一に備えて意図的に会わせていない）。

『このガキさえ抑えてしまえば……』とクレマンティーヌが思うのは無理なかった。

だが、賢明な読者諸兄は既にお気づきだろう。

『見通しがどうしようもなく甘すぎる』と。

そう、腕試しを挑む段階でネムには、クレマンティーンが思うだろうありがちな『小者の発想』など、とつくにお見通しだった。

いやむしろ、勝てると思わせるためにわざわざ弱体デバフがかかる「ステータスを落とす代わりに獲得経験値を上げる首輪」を装着して誘導したのだ。

しかも計画が上手くいけば、獲得経験値が上昇するのだから正しく一石二鳥だった。

ブレインに斬られたところで、デスペナのレベルダウンを起こしたところで、クレマンティーンの心は折れてはいない。

実にネム好みの“イキの良い獲物”であった。

本来ならハムスケが戦場いくさばで強敵に会った時のように、

『命の奪い合いだよ♪』

と洒落こみたい所だが、流石にそんなことを言えばブレインあたりに止められてしまう。

あのサムライ・ソルジャーは、飄々としているようでいて変なところで真面目なのだ。

だからこそ、こうして本性を隠すように経験値上昇の代わりにデバフが掛かる首輪をつけて、ウエポン・マスターの職業スキルのため扱えることは扱えるが、バフが掛かるわけでも得意なわけでも好きなわけでもない片手剣と円小楯という組み合わせを選んだ。

訓練用の武器を互いに使うのだから、ネム的には自分も訓練着ブルマでよかったのだが、エンリもゼロも不在のときはスライドで“カルネ村修道会”トップとなるブレインから案の定不許可にされてしまった。

ちなみにデ이버ノックは、アンデッドという種族性質のためいざ急な来客があった際の対人交渉や対外折衝に向かない為、戦闘時以外は割と表に出ない。というか根が研究者気質の本人もそういう立ち位置は好きではないようだ。

この幼女、DSというよりむしろ生粋のバトル・マニアのような血腥い匂いがプンプンする。

『返り血を浴びれば浴びるほどテンションが上がり、比例してバフが

掛かる』職業スキル“狂戦士”^{ベルセルク}を、しかもジーニアスで発現させてるんだから中身も相応に見合ったものになってるんだろう。

☆☆☆

「死にさらせつ！」

「やーだよっ♪ 《のーりよくこーじよー》 《そくおーはんしゃ》
《ふらくよーさい》 《りよーいき》！」

“死の神”^{モモンガ}を奉じ、『死は生の一部である』という教えが浸透しているカルネ村の住人にとって、死は別段恐れるものではない。ネムあたりにとっては『死なんてただの状態だよ♪』と言い出しかねない。

ただ、デスペナでのレベルダウンが勿体無いので嫌なだけだ。

獲物を狙い伏する獣のように身を低くし、石弓で弾かれたような加速で突っ込んでくるクレマンティーヌに、ネムは4つのバフをかけて迎撃に備え、

「《たてきよーだ》」

カウンター気味にシールドバツシュを放つ！

「何度も同じ手を食うかよっ！ 《流水加速》！」

事前にかけていた《超回避》との相乗効果でそれを跳躍にてかわし、逆に頭上からカウンターをしかけようとするが、

「避けてくれるって信じてたよー！」

“ヒュン”

それを読んでいたネムは自力と武技を重ねた怪力で、《盾強打》を強制解除し肘から先のスナップだけで左手に握る円小盾^{バックラー}を真上に投擲！

「チッー」

“キーンー！”

《領域》の知覚補正で視線を向けずとも投げられたバックラーと攻撃から防御の構えに変えたステイレットが衝突し、クレマンティーヌは弾き逸らすか……それはあくまでフェイント、

（《しゅんせん》 《ざんじん》！）

クレマンティーンが着地する直前に体勢を立て直したネムは、まだギリギリ効果が持続している《領域》にもう二つの武技を融合させ、「秘剣《もがりぶえ・ねむ》!!」

それは同じ七星剣の一太刀ブレイン・アングラウスがかつてガゼフ・ストロノーフに対抗するために編み出した複合武技、最初期“秘剣”、そのネムなりのアレンジであった!

「なめるなあーっ!! 《不落要塞》!!」

“グワギイイイーーン!!!”

本家本元のブレインに鋭さと速さで劣るとはいえ十分に人理を逸脱した重さの一太刀を、かつて英雄の領域に踏み込んでいたクレマンティーンは交叉させたステイレットで火花を散らしながら受け止める!!

「へー♪」

しっかりと会心の一太刀を耐え切った打ち合いにネムは満足げな笑みを浮かべ、仕切りなおしとばかりにバックステップで距離をとった。

(クツソ! あのガキ、なんて一撃入れてきやがる!?)

腕に鈍い痺れが広がるが、そんなモノを表情に出すような真似はしない。

「やるじゃん、クレマンおねーちゃん♪ 流石にさつきみたいに簡単にはいかなかったか」

可愛くむしろ無垢ではあるのだが、同時に挑発を隠そうともしない笑顔に、

「クソガキ、今のがお前の奥の手かよ? 大したことあなかったな」

あえて乗り挑発を返すクレマンティーン。

「ふくん……じゃあ、ネムはもうちょっとだけ本気出していいってことだよな?」

一連の打ち合いで武技の効果が切れていたネムは投げ当てたバツクラを拾いながらニンマリ笑うと、

「確かこうだったかな?」

《のーりよくこーじよー》

《のーりよくちよーこーじよー》《ちよーかいひ》《しつぷーそーは》
「んなっ!？」

そのあんまりな事実には、今度こそクレマンティーヌは心底驚愕する。

「ガキ……テメエ、まさかアタシの技を盗んだのか？ たった一回見ただけで……?」

「ついでに《りよーいき》と……さあ？ もしかしたらただのハツタリかもよ?」

「ふっざけんじゃねえっ!!」

「さあ、クレマンお姉ちゃん……」

犬歯を剥き出しにして唸るクレマンティーヌにネムは再び剣と盾を構えながらにこやかに、

「再開だよっ♪」

第75話：…ぶぎ!!」

「確 かこ う だつ た か な？ 《のーりよ^能く^力こーじよ^上》
《のーりよ^能く^力こーじよ^上》 《ちよーかい^回ひ^避》 《しつ^疾ぷーそー^走は^破》
「ついでに《りよ^領いき^域》つと」

「さあ、クレマンお姉ちゃん…再開だよっ♪」

「《能力向上》《能力超向上》《超回避》《疾風走破》!! クソガキ、クレマンティーヌ様をあんまナメンじゃねえよっ!!」

たった1回見ただけで自分の二つ名コードネームの由来、上位加速系オリジナル武技である“疾風走破”を盗まれたクレマンティーヌは咆哮する。

いや、叫びだけじゃない。最大の加速を得られるようにクラウチング・スタートというよりむしろネコ科の肉食獣が藪に潜んでる姿を髣髴させるように、低く低く身を伏せていた。

対するネムは剣と盾という装備もあり、そう低い姿勢を取ってるわけじゃない。確かにグツと腰を低く落としているが左手に持つ盾の前に、右手に握る剣を後に下げる構えだ。

(あのクソガキ、勘が良くてカウンターが上手い…しかも盾を単純な守りだけじゃなくて攻勢に使うケがありやがる…)

武技を制限して戦った一度目は《盾強打》で吹っ飛ばされた。

二度目のカウンターの《盾強打》は《流水加速》で上に避けるついでにカウンター返してステイレットを脳天に差し込もうとしたが、円形小盾バックラーをショットレンジで投擲されタイミングをずらされた。

(それにしても、妙に戦い慣れしてやがる…不自然なほどに。なんでだ?)

☆☆☆

見た目どおりの年齢というのなら、空恐ろしい話だ。少なくとも自

分はこの歳でここまでの戦闘力はとてもなかった。

クレマンティーンは知らない。いや、法国の誰もが知らないだろう。

ネムが既に「人外領域の戦い」に慣れ、適応しているということなど。

この齡二桁に届いてない幼女^{ネム}は、竜王国の毎年の風物詩……
人喰い害獣による^{ブレードター・キャラバン}肉食獣の大遠征^{ピーストハント}への対策駆除任務にハムスケ共々既に参加を許されているのだ。

並みの人間の10倍の戦闘力を持つとされ、人を殺すためではなく『喰うため』に襲ってくるピーストマンは正しく人外であり、その人外相手にネムは初陣で自分の年齢より多く屠ってみせたのだ。

毎年のピーストハントの参加メンバーは、モモンガは特に報告していないし、竜王国女王^{ドラウデイロン}も必要ないとしている。

その時期が近づくともモンガは転移魔法を用いて頻繁に竜王国を訪れ、頃合を見計らって『選抜メンバーを戦場に直接投入』しているのだ。

転移魔法で瞬間移動できるせいもあるのだが……参加メンバーを隠匿することでの防諜という理由ではなく、どうやら七星剣は式典とかそういう堅苦しい席はあまり好まないようだ。竜王国とて国民が食われないようピーストマンたちが間引きできればそれでよいわけで特にそれに対する異論は出ない。

それに、ドラウデイロン本人としては毎年の戦勝記念式典^{パーティー}には、律儀にモモンガは出てくれるので式典として格好はつくし、個人的にもモモンガさえいてくれれば滞在中は好きなかだけ膝の上でもベッドの中でも幼児退行できるので文句はない。

法国は当然竜王国にもいる間者や内通者から毎年、ピーストマンの間引きに『ダークウオリアー一行が来ている』ことは知っていたが、誰が参加しているのかまでは把握していない（そして前線に密かに送り込んだ観測者はいずれも未帰還）。

“カルネ村の七星剣”の話は聞いているし、実存も確認している。だが、その実力の程は『単純戦闘能力ならアダマンタイト級に届く可

能性はあるが、漆黒聖典には劣る』というあやふやな評価に過ぎない。諜報力不足というより、ダークウォリアーとイビルアイ二人の戦力が余りに高すぎるため、もしかしたらその幻惑効果があるのかもしれない。

そして常識にも囚われている。普通、『齡二桁に届かぬ幼女が、単独で二桁のビーストマンを屠る』こともありえなければ、ましてやハムスケに跨り奇襲だったとはいえ『陽光聖典の隊長ニゲンを一太刀で討ち取り、部隊を半壊させる』なんてことはあるわけないのだ。

さてクレマンティーンがネムの実力を知らないのはそんな背景があるが……ネムにとっても大きな意義をクレマンティーン戦に見出しているのは、身体能力にかまけて技術もへったくれもないビーストマンに対し、『ビーストマンに匹敵する身体能力を誇り、洗練された高度な武技や戦闘技術を持ち、尚且つ』自分を本気で狙ってくる相手』など希少もいとこだからだ。

確かに人外の領域の身体能力を持ち、自分より優れた武技や戦闘術の使い手は村にも、外にも何人もいる。種族的に人外なデーバーノックやハムスケ、グは置いておくとしてもモモンガダークウォリアーやイビルアイキーは言うに及ばず、姉は少しタイプが違うが……ゼロやブレインは、二つの条件を満たす。

だが、ネムは良くも悪くも村のアイドルでマスコットだ。

ゼロもブレインも稽古をつけてくれるかもしれないが、擬似的な殺気は出しても毛穴が開き肌が粟立つような“本物の殺気”を期待するほうが無理というものだろう。モモンガとキーノに至っては何をいわん況や、である。

無条件の愛されキャラというのもこういうときには困りものだ。

村の外の強者にはそもそも繋がりもコネもない。

例えば、ネムが見たことのある外部のツワモノの代表格は、毎年恒例のカツツエ平野での王国と帝国の小競り合いで見学するガゼフ・ストロノーフや帝国四騎士だろう。

ラナー？ ツアー？ あれは身内も身内だ。

竜王国のドラウ某はジャンルが違おうし、そのアダマンタイト級
セラフプレート
ロリコンとは、同じビーストマン駆除に従事してるとはいえ会った事
がない（というかモモンガ達が会わせしてくれない）。

ネムとしても股を開きたいのはモモンガだけなので、会ってみたい
とも特に思わないが。

ネムに限った話じゃないが聖王国に至っては、そもそも行ったこと
すらない（ネムに限れば竜王国が始めての外国で、帝国にも行ったこ
とがない）。

そんな中、今の自分の実力を計り試すのに都合のいいクレマン
ティーンヌが現れたことは、ネムにとっては望外の幸運と言えた。

（なら、その幸運を目一杯楽しまないとね♪）

☆☆☆

（おそらく、クソガキは剣より鈍器の扱いの方が慣れてやがる……）

盾を防御武器として使わず、殴打や投擲に使ってきた。

（確かにきつスキの斬撃は驚いたが……）

間合いを見計らい、クレマンティーンヌは思考を加速させつつ最良の
戦術を練ってゆく。

「剣の扱いはさほど上手いって訳じゃねえか……」

一太刀は確かに見事だったが、追の太刀はなかった。

それどころか、斬撃を受け止めたら自分から間合いをとった。

となれば剣技だけじゃない。もしかすると、

（むしろ盾を防御に使うことは慣れてない？）

ならば話は簡単だ。

盾を鈍器として使いあくまで攻撃にこだわるなら、防御を取らせれ
ばいい。

経験則から考えれば、極端に攻撃にパラメータやリソースを振った
者は防御に関しては脆い側面がある。

なら、そこを崩して突いてやればいい。

なんのことはない。いつもやってることではないか。

(クソガキも同じ手は使わないだろうが……)

だが、読めないわけじゃない。

ネムが地面を蹴った。

駆け出す小さな体の突進速度は、能力超向上の効果か？なるほど確かにさつきよりも早い。

そしてその速度を触媒に、

「**武技**《たてとつげき》！」

これまでにない……カウンターでなく正面からのアタックとしての盾打撃を放ってきた！

誤解のないように言うが、漆黒聖典第九席次“疾風走破”ことクレマンティーヌ・メルヴィン・クインティアは優れた戦士だ。

これまで盾によるカウンター技を基点に戦術を組み立ててきたが、ここぞという時は積極的な攻勢に出てくると思っていた。

ネムの動きはまさにクレマンティーヌの読み通りで、

「《流水加速》！ 《縮地》！」

“ヒュッ！”

それは今まで見せてない隠し玉の武技。

足を動かさず、故に足捌きを読まれずに前方へ素早く体をスライドさせる歩法の武技であった。

クレマンティーヌは、高速で擦れ違うようにネムの盾を持つ左側を擦り抜け、後方へと回りこむ！

(殺ったっ!!)

躊躇いなく突き出されるステイレット！

もし先端が丸められた訓練用武器でなく、彼女が日常的に使うそれであれば、ネムは脳を串刺しにされていたか、あるいは背中から心臓を一突きにされていた……のか？

否。断じて否！

「《しんそく》」

切っ先がネムに届く刹那、その幼き肢体は視界から消え、

「なっ!?!」

気がつけばわずか1m先にその姿はあった。

ネムが振り向くまでの時間は、クレマンティーンには何故かひどくゆっくりに感じた。

視界に映ったのは三日月のように開く口元……

「ふ、《不落よ》」

「《よんこーれんざん》!!」

かつてネムが戦場で見た「一呼吸で四太刀浴びせる」とされる周辺国最強と謳われた漢の技が、クレマンティーンの細い肢体に吸い込まれた……

第76話：「戦闘力5のスカウター」

「《よん^四こーれん^光ざん^連》!!」

「クソツタレエー……ッ!!」

武技《不落要塞》の発動に失敗したクレマンティーンの視界一杯に広がる都合四太刀の剣閃。

「キーン!」

一の太刀、右手に握るステイレットで弾き流す。だが、腕にかすかな痺れが残る。

「グイン!」

二の太刀、左手のステイレットで弾こうとするも僅かに振り遅れた上に利き手じゃないために力負けし失敗^{フアンブル}。ステイレットを弾き飛ばされる。

「ギツ!!」

三の太刀、右手のステイレットで押さえようとすることも痺れの残る手では押さえきれず、ステイレットを取り落とす。

「ボギツ!」

四の太刀、左手の裏拳を当てて抑える。骨折こそするものの、刃を落とした練習用の剣だった為に斬り飛ばされることはなかった。

必殺の……勝負を決めるつもりで放った四連撃を見事防がれたためにネムの大きなドングリ眼が信じられない物を見たように大きく見開かれた。

戦士として、時には暗殺者として磨かれた目がそれを見逃す筈はない。

慢心を捨て去ったクレマンティーンは裂帛の気合と同時にネムへ貫き手を繰り出す!

「ゴギン……」

これまでと違う酷く鈍い音だった。

そう、この戦いが始まって以来、ネムは初めて『円形小盾を防御に^{バックラー}』

使った』……いや、その表現は正確ではない。その殺気に反応し、ネムはクレマンティーンに盾を『使わされた』のだった。

☆☆☆

「それまで！」

そのタイミングでモモンガの声ダークウオリアーが飛んだ。

「クレマンティーンよ。よくぞ四連撃を防ぎきった。まこと見事であつたぞ」

「わきやつ!!？」

実に武人らしくも優しげな笑みを浮かべ、クレマンティーンの頭をちよつと乱暴な手つきでわしやわしやと撫でるダークウオリアーの姿があつた。

「エンリ、癒してやれ」

「はいっー」

と元氣良く返事してすかさず《ミドル・キュアウーンズ／中傷治癒》をかけるエンリである。

「さて……ネム」

ピクツとバツクラをじつと見ていたネムは小さく体を揺らした。

「ふむ。少々詰めが甘かつたかな？ 流星に片手での《四光連斬》は無茶だつたぞ」

そう、ネムは《盾突撃》の後に《神速》でクレマンティーンの攻撃を回避し、直後に左手に盾を握った状態で《四光連斬》を放っていたのだ。

何やら気まずいのか、いつもはまっすぐ向けてくる視線を今はモモンガに向けようとはしない。

それを察したモモンガはネムの前に跪き、視線を合わせるようにして、

「《領域》で精度上げは行っていたし、初めて使った《能力超向上》でのブーストと、《疾風走破》で上乘せしたスピードならいけると思ったのか？」

“こくん”

かすかに頷くネムに、

『《四光連斬》は本家本元のガゼフ・ストロノーフが両手でしつかり剣を保持してさえ、ブレインに『攻撃がばらける命中率に難がある剣閃』と評される技だ。それを《領域》で補おうとしたのだろうが……結果、『一呼吸で四閃放つ斬撃』が率直に言って『斬撃を素早く四回繰り返し返す技』になってしまっていたよ」

クレマンティーヌがああも見事にネムの《四光連斬》を防ぎきったのは、武技その物が甚だ未完成だったからだともモンガは見ていた。「初めての使う技、それも相手の技をいきなり実戦使用するのは、確かに動揺は誘えるし初見殺しにもなるが……勝手がわからない以上、使いこなせるかどうかは博打になりやすい」

ここはユグドラシル時代まで含め数多のPVPをこなした歴戦の勇者、当時は現在と違いロマンビルドだったその身で勝率40%超えを誇ったモモンガ様。一家言も含蓄深い。

「まあでも……」

と笑顔で頭を撫でながら、

「“分の悪い賭けは嫌いじゃない”のも”一か八かは承知の上”なものも、きつとネムの長所であり美点なのだろう」

『それは俺には無い思い切りの良さ』だという言葉を、かつてのギルメんに「石橋を叩いて僅かな不具合でも見つければ、自分で新たに石橋を架ける慎重さ」と評されたモモンガはあえて飲み込む。

この百年の経験で慎重すぎるのも時と場合によりにけりということを学んだが、それでも……

「まあ私としては程ほどにしてほしいところだが。可愛いネムが心配でしょうがない」

そこは仲間思いで心優しいお骨様は本質的には換わらない。

“だきつ”

感極まったのかネムが首に抱きついてきて、

“Chu CHU chu”

キスの雨を硬質でシャープな印象を持たれ易いが、端整と評してい

「ダークウォリアー」
いモモンガの顔に降らした。

“ぬちや”

と最後は舌をからめてくるが、ネムのそれを舌を絡める事で受け入れる。

ある意味、師匠でもある某^{ペロロンチーノ}バードマンが、『俺も混ぜてくださいよ！』と今にも次元隔壁を蹴破って出てきそうな案件だが、誰も特に着目はしていない。

カルネ村においてはありきたりな光景であり、ネム・エモットは遙か昔に姉と同じく『神へ奉納された娘』なのだから。

“ちゅぱ”

っと舌が離れ、ネムは潤んだ瞳でじつとモモンガを見つめる。

何が言いたいのか察したモモンガは、

「^{たか}昂ぶりが抜けないのかい？」

“こくん”

一説によれば殺人と麻薬とセックスは、快楽の種類としては同じだという。

生粋の戦闘者であり、純粹人間種に限定すれば明らかに強者側の上位に組み込まれる実力があるにも関わらず、幼い心と体に不完全燃焼のまま溜め込まれた熱は、少々辛い。

なまじ彼女が聴く、脳が快楽を快楽として識別／認識してる分。

「火照りが抜けないのか……困った娘だ」

「ネムはずっと^ここども^だだもん。お館様がそうあれと望む限り」

それは即ち業^{カルマ}と呼べる物。骨の身であろうと肉の身であろうと、やはりこの男の業は深いのかもしれない。

「わかった」

一際優しく撫で、

「後で来なさい」

「うん♪」

どうやら反省会はここで終了らしい。

それはそれとして……

(ちよつと気にかかるな……)

モモンガはインベントリに手を突っ込み、妙にメカメカしい単眼式のゴーグルのような物を取り出し装着する。

世界観ぶち壊しなことこの上ない代物だが……

ユグドラシルの超大型アップデート“ヴァルキユリアの失墜”で追加されたこのアイテム、その名を“戦闘力5のスカウター”という。

もう名称からして元ネタがモロバレであるが、実に恐ろしきは……これ、第27話においてサービスが最終日の街でモモンガが買い漁り、三つ新たに手に入れた“世界級アイテム”の一つだった。

これを装着すると戦闘系パラメータが一律5上昇する……というものは洒落としか思えない能力は、無論このアイテムの本懐でも本質でもない。

この“戦闘力5のスカウター”は、ざっくり言えば由来不明の未知の技術がふんだんに使われているという設定で、『相手の戦闘力全てを看破する』のだ。

そう、Lvや習得職業クラスに始まり各種パラメータ、習得種族に習得スキル、習得魔法や装備、またかけられた状態異常に至るまで全て丸見えて、一切の隠蔽や欺瞞が問答無用にキャンセルされて通じない。

その適応範囲は広く、PCにNPC、登場モンスターやレイドボスに至るまで、対峙した者を情報学的な丸裸にしてしまう世界級らしいぶっ壊れ性能を誇るのだ。

しかも、転移後のこの世界で試しに使ってみたところ、習得武技までモーションデータと解説付きで再現された。

全く穴がないかと言えばそうではなく、施設その物の詳細スペックや罠のようなオブジェクトを見抜く力はないようだし、また同じ世界級の探知阻害系アイテムがあれば、おそらくは防げるだろう。

それでも例えばPvPのようなシチュエーションでは圧倒的なアドヴァンテージを握れることになる。

ロマンビルドの割には勝率は悪くなかったモモンガだが、それでも特性的に不利や苦戦が少なくなかった現役プレイヤー時代、喉から触

手が出るほど欲しかったアイテムであり、それを最終日に手に入れたのは実に皮肉な運命を感じる。

そんな“戦闘力5のスカウター”を装着して改めて、ふにやふにやに蕩けた顔をしているネムを見れば……

(なるほど……)

そして確認の為、デスペナによるレベルダウンを起こしているだろうクレマンティーンを見れば、

(そういうことか)

詰めを誤ったとはいえ、どうして『現在のクレマンティーンと総合レベル的にはドツコイ』のネムがあれだけ優位に勝負が出来たのか、ようやく合点がいったお骨であった。

第77話：“ふへんもの　　The memor
y of たつち・みー　”

モモンガは疑問だった。

別の言い方をすれば、100年以上前に日本の飛騨高山地方に実在したという都市伝説がある“聞きたがりの智天使・チタンダエル”が『私、気になります！』と時間と空間を越えて降臨しそうな程度には気になっていた。

それは、

“デスペナで同じぐらいのLVに落ちたクレマンティヌと、なぜネムがああも有利に戦えたのか？”
だった。

参考までに書いておくと、第45話によるとブレインに斬られる前のクレマンティヌの総合Lvは33。

そして第53話でエンリの《マキシマイズマジック／魔法最強化》をかけた第7位階魔法《リザレクション／蘇生》で復活するが、デスペナの関係で現在はLv29に低下。

どうでもいいが使える位階にブレストが掛かる“蓮の杖”^{ロータス・ワンド}の力があつたとはいえ、蒼薔薇の頭や聖王国の妹の方が使える《死者復活／レイズデッド》より2位階も上の信仰系魔法を使えるエンリはやはり只者ではない。

強力な女神官（信仰系マジックキャスター）であり、同時に將軍職が取れるほど高い指揮能力を持ち、おまけに前衛でタンク役を引き受けられるほどの頑強さまで兼ね備えている。

モモンガやキーノに比べるなら確かに全体的に低いLvだが、それでこれだけ多芸なのだから恐れ入る。

だが、姉妹でありながら全く別の、ある意味正反対の戦闘特化型ビルドを行っているのがネムだ。

ネムの職業Lvは22話時点で……

- ・ファイター：Lv5
- ・ウエポンマスター（ジーニアス）：Lv3
- ・ハルバーディア（ジーニアス）：Lv5
- ・ライダー：Lv5
- ・アーチャー：Lv3
- ・サージェント：Lv1
- ・コマンドー：Lv1
- ・テイマー：Lv2
- ・ベルセルク（ジーニアス）：Lv4

○総合Lv29

もう、某純銀の聖騎士もビックリな戦闘系一本槍のガチビルドだった。

だが、その生一本のビルドだからこそ付くボーナスというのも確かにある。

（なるほどな……）

転移前のサービス最終日に入手した感知系としてはおそらくユグドラシル最上級の世界級アイテム“戦闘力5のスカウター”をかけてネムを見れば、前に確認した時とは明確な際が出現していた。

それは、

・シールド（盾使い）：Lv1 ↑ New!

おそらく一連の戦いの最中、目出度く総合Lv30に到達していたのだ！

だが、それだけじゃない。

注意

- ・総合Lv30に到達／非魔法系職業スキルが合計25Lvに到達
- ・職業Lvにおいて魔法職が未習得
- ・前衛戦闘職、後衛戦闘職、防御戦闘職、騎乗戦闘職を全て1つ以上習得

以上の条件をクリアしましたので、特殊スキル“武辺者”を習得しました。

☆☆☆

(武刃者……” ふへんもの”ね)

武刃者とは直接的な意味は物の本によれば『勇敢な武士。武事にすぐれた人。 武道に関係する人。また、武勇のある人』とあり、本来なら”ぶへんもの”とか”ぶへんしゃ”と読むのが正しい。

それをわざわざ”ふへんもの”としてるあたり、ユグドラシル運営サイドが何を言いたかったのか見え隠れしている。

スカウターといい”ふへんもの”といい、運営サイドのお偉いさんには一世紀以上前の某週間少年漫画雑誌ジャンプの熱烈なファンでもいるのだろうか？

そのうち〇〇級アイテム『洞爺湖と掘られた木刀』とか出てきそうで怖い。

そのあたりの透けて見える意図は特殊スキル”武刃者”にも生きていて、その中身は……

『PVP時に”先読み”が自動発動。また1対多数の場合は人数差に応じてバフがかかる』

と中々に強烈だ。

”先読み”とは単純に言えば、行動予測のことだが、これにネムの固有異能タレントがからむとかなり厄介な代物に化ける。

ネムのタレントは、

・Lvとは無関係にあらゆる武技をマスターでき、また同時発動可能な精神力上限が無くなる。

である。

モモンガはネムへのナデナデを続行しながら、

(道理でおかしいと思っただよ。俺の知ってる限り、ネムは《能力超向上》も《疾風走破》も今日初めて見たはずだし。ネムがいくら”武の天才”でも、不完全だったとはいえ一目見ただけで武技をコピーするなんて異常すぎる)

ネムのタレントは確かに強烈を通り越してむしろ凶悪まであるが、

でも完璧というわけじゃない。

確かにLvとは無関係に武技をマスターできるが、普通の人間がそうであるように自分より下のLvの者が使う武技の方がやはりマスターしやすい。

加えて武技その物はマスターできたとしても、パラメータ身体能力的にそれまでどこまで再現できるかはまた別問題だ。

今回のクレマンティヌとの模擬戦は、割とそれが如実に出ていた。もし、《能力超向上》あるいは《疾風走破》がオリジナルの使い手同様の効力を発揮していたら、結果は全く別になっていただろう。

例えば使っていた他の武技、《能力向上》やブレイン直伝の《領域》などと比べ、モモンガから見れば明確な精度や再現率に差があったのは、練度の差……つまり、ぶっつけ本番で使ったか、あるいは普段から使って慣れてるかの差だろう。

《四光連斬》に関しては、本来両手で使う武技を、無理矢理片手で使えばああもなるというものだ。

いや、むしろ一応とはいえそれなりに形になっていたネムの天武の才を褒めるべきだろうか？

(だが、それにしても驚いたなあ。特殊スキルとタレントの相乗効果で初見再現なんて……でも、)

「ネムはもしかしたら、特殊スキルの発現を無意識に気づいていたのかな？」

「モ、じゃなかったお館様？」

きよとんとするネムに微笑みかけ、

「なんでもないさ」

モモンガがお骨でも受肉時でも縁が無さそうな特殊スキルに妙に詳しいのは、相応の理由があった。

(たっちさんが持っていたスキルか……)

そう、ワールドチャンピオンまで駆け上った、未だ色褪せぬ憧れの存在……純銀たっちの聖騎士ちみが保有し、その強さの根源の一つが、この“武刃者”であった。

彼は結局、その上位互換スキルである〝大武刃者だいふへんもの〞までマスターしたのだが、

(でも、ただの〝武刃者〞って言うより、むしろ……)

脳裏に浮かんだのは、モモンガが知る限り習得したのはたっち・みー只一人の限りなくユニークスキルに近いそれ……『パラメータが追いついていれば魔法以外の全ての戦闘スキルを一目見ただけで再現する』とまで謳われた、ユグドラシルに数多あった戦闘系特殊スキルの中でも頂点にして到達点である能力の一つ、

「ネムはそのうち、本当に〝見稽古みげいこ〞をマスターできるかもね」

「ほえ？ 〝みげいこ？ ？」

モモンガはひどく優しげな、そして懐かしむような目で、

「ああ。私が尊敬する正義の味方……最強の武人が持っていた特別なチカラスキルだよ」

第78話：「クレマンさん待遇改善計画」

「クレマンティーン、大儀であった」

立ち上がると同時にひよいとネムを抱き上げ、

「村の外へと勝手に出てもらっては困るが……だが、これより先は村に害をなさない限りはクレマンティーン・メルヴィン・クインティアを客人待遇とする！」

高らかに宣言するモモンガ。ダークウオリアー

「「「ハイッ！ お館様!!」」」

周囲の見学あるいは見物していた村人達は一糸乱れぬ様子で了解の声をあげる。

エンリの治癒魔法で瞬時に治った手の具合を確かめていたクレマンティーンは思わずきよとんした表情で、

「へっ?」

「村の中を歩き回るのは自由だ。いい機会だ。村の内部を気が済むまで視察し、漆黒聖典の一員としての役割を果たすといい」

「えええ……そういうのは風花とかの仕事だし」

ダークウオリアーはニヤリと笑い、

「偵察任務は漆黒聖典特殊部隊の仕事でない?　ズーラーノーンに潜入してたくせに?」

「いや、だからそのあたりの記憶はすっぱり抜けててさ」

ぎっくばらんな素の話し方に好印象を持つモモンガは、

「そうだったな。ああ、あと少なくともお前が潜入を命じられていたエ・ランテルに潜伏していたズーラーノーンは心配しなくていいぞ?」

「えっ?　なんで?」

するとモモンガは事も無げに、

「全滅したから」

正確には、主犯格のカジットは捕縛なのだが……結果的には変らな

いだらう。精々、肅清されるか処刑されるか、遅いか早いかの差ぐらいだ。

「はあっ!？」

「言い方が悪かったか？ 共同墓地で悪さしてたからまとめて駆除した」

「いや、まとめて駆除って……下水道にたむろってるネズミとかじゃないんだからさ」

「似たようなもんだろ。どっちも人目のつかない暗がりでもソコソコ動いて害をばらまく」

実際、モモンガに言わせればカジツトもネズミも強さ込みで大差ない。片方はアンデッドばらまいたし、片方は病原菌をばらまく。モモンガ的にはむしろ目に見えない分、ペストとかの方が厄介だと思っていた。

もつともこの世界は薬草を由来とする生薬を中心とする薬学や治療魔法、間接的に人の健康を保つ清潔を保つ魔法なども発展していて、インフラを見ても都市部なら下水道なんかもわりと整備されており、公衆衛生概念は少なくともよく似た文化形式の中世の欧州よりはよっぽど発達しているので不衛生や不潔を原因とした疫病の大流行は起こりにくいだろう。

まあ、こういう21世紀の日本と比べるべくもないがささやかながらも広範囲な公衆衛生概念の浸透や生活環境の改善は、実は八欲王の隠れた功績だったりもするのだが……

「お前が戻らなくとも、詳細と顛末は既に法国には伝わっているだろう。風花や法国と繋がってる神殿の連中は普通に生き残ってたし。連中、時折こつちが呆れるぐらいしぶとかったりするし」

大体、エ・ランテルと王都に潜伏してる法国勢力は把握しているモモンガであった。

割と好き勝手に過ごしているように見えるモモンガであるが、そこはツアー直々指名で手塩かけて育てた100年物のエージェント。やるべきことはやってるし、潜り込ませるべきところには潜り込ませている。

召喚したシャドウデーモンも使うが、長期的あるいは恒常的に観測が必要な場所には、きつちりアンダーカバーを差し込んである。具体的に言うなら王都の目はランナーだけではなく、某巨大犯罪組織の警備部門にも手駒はいるのだ。

そのせいもあり、モモンガは驚くほどの精度で王都の現状を把握している。

「という訳でクレマンティーン、お前の任務は無事終了した。何しろ潜入工作するべき場所が無くなってしまったんだからな。任務達成、おめでとう」

「えっと……ありがとう?」

「取り立てて急ぐ案件も無い様だし、しばらく村で羽根を伸ばしておけ」

いけしゃあしゃあと言い放つモモンガに、ダイクウオリアー

「結局、村の外には出さないってことじゃん」

「まあ、そうなるな。出てもいいが命の保障はないぞ?」

「……了解」

流石のクレマンティーンも骨身に染みていた。

彼女だって実のある努力ならしたいとこだが、どう考えても無駄にしかならない努力はしたくないのだ。

「さっきも言ったがせっかくの客人待遇、謎と神秘のベールに包まれた“異端異教の村”の現状でも視察したらどうだ? 少なくとも暇つぶしくらいにはなるぞ」

「ああ、そういえばここって王国じゃ珍しく“スルシャーナ様”を崇めてるんだっけ?」

その瞬間、周囲からかすかな殺気が立ち昇り、クレマンティーンはそれに当てられたのかビクツと体を震わせ反射的にファイティングポーズをとってしまうが、

「厳密には少々異なる。カルネ村で信仰されてる“死の神”で、スルシャーナとは限定されていないのさ」

と苦笑するモモンガ。さりげに手を上げる仕草が『殺気を収めよ』

という命令であることを村人達は理解していた。

「そうなんだ……」

「勉強になるだろう？」

「まあ、少しは……って、スルシャーナ様以外に死を司る神様っていったっけ？」

「いるんだ。これがな」

（まあ、俺のことなんだが）

「クレマンティーヌ、お前が思ってる以上に世の中は広いぞ？」

などと流石転移してから100年間、そのかなりの時間を愛妻との二人旅に費やした死の神様は含蓄を垂れる。

「それに実際、お前の身柄をどうするかって話も法国とつけねばならん」

『うげえ〜』と言いたげに、露骨に嫌な顔をするクレマンティーヌ。

「なんだ？ 国に帰りたくないのか？」

「そ、そういうわけじゃないけど……絶対に叱責されるだろうし」

正確には、『国に帰りたいというよりはお兄ちゃんに会いたい』ところだろう。

お忘れかもしれないが、この世界線のクレマンティーヌかなりのブラコン……というか露骨なまでに兄に恋愛感情を持っているのだ。

“倫理観？ 道徳心？ なにそれ美味しいの？”ってなものである。

「なぜ？ 潜入先が綺麗サツパリ無くなった以上、任務失敗にはならんだろう？」

「でも、成功とも言えないじゃん」

「なるほどな……」

モモンガは軽く腕を組み、

「なら、どこまで援護になるかは知らんが……法国との交渉の際、少しは口添えしてやろう」

「い、いいの？」

原作での邂逅を考えれば、正反対のありえないほどの温情だった。だが、ここでクレマンティーヌは気づいてしまう。

「ちよつと待つて……ダークウオリアー、法国と直接やりあうの？
王国にアタシを引き渡すとかじゃなくて」

すると今度はモモンガが意外そうな顔で、

「なんでわざわざアテにならない王国に仲介を任せなければならん？

これはカルネ村の問題だぞ？」

おかしい。なんだこの違和感は……そうクレマンティーヌは疑問を感じたが、

「心配しなくとも法国へのツテ、ああ、交渉の窓口くらいはあるさ」

(ツアーに頼めば一発だろうし)

いざとなつたら自分が評議国特使、“アインズ・ウール・ゴウン”
として堂々と乗り込めばいいときえ思っていた。

幸い竜王国での活躍は、それを鉄板ネタにしてる舞台や吟遊詩人達
の抒情詩によつて、『ダークウオリアーとアインズは竹馬の友である』
という認識は、割と広がっている。

『ダークウオリアーに頼まれ交渉役を買って出た』と言つてもさほど
不自然ではないだろう。

実際には同一人物なのは御承知の通りなのだが。

「そ、そうなんだ……」

だが、クレマンティーヌは知らない。

自分が今想像してるよりずっと長い間、この死の神を奉じる村に留
まることになることを。

第79話：“うくん……リスクペクトの差？”

唐突だがお骨様は、悩んでらっしゃる。

骨の身では脳味噌無いはずなのに一体どの部位で悩んでいるのか……という根源的な疑問はさておき、とりあえず頭を悩ませる機会は存外多い。

個の力がどれほど強かろうと、面倒事というのは中々にままならない。

まずは漆黒聖典第九席次“疾風走破”ことクレマンティーン・メルヴィン・クインティアの処遇である。

(とりあえず、どうすべきか……)

帝国兵に偽装し王国の村々を襲撃していた法国部隊“チーム・チンピラ”は、ガゼフに丸投げしたロンデス・デイ・クランプ一人を残して『元帝国兵が野盗化した集団』という妥当な名目で問答無用に処分した。

基本、遺体はカルネ村に住む食人系種族の御馳走になったが、装備は二束三文で売りに出され、例え売れ残りやら店側から買い取り拒否されたとしても遺品として法国に戻ることはないだろう。

モモンガが気づかり知らぬところではあるが……ロンデスは王都につき投獄されたが、予想通り本格的な尋問が行われる前に謎の失踪を遂げている。以後の消息は不明だ。

ついでに法国ではとある金持ちの家が普通の意味でも物理的にも取り潰されたようだ。噂では、その家にはペリユースという名のあまり評判のよくない息子がいたらしい。

陽光聖典は、全滅こそしたが少なくとも遺体は王国側に渡されることもなくツアーを通じて全て法国に戻された。

ネムに馬ごと縦軸で真つ二つにされたニグンを代表例として、遺体の損傷はそれなりに激しいので一般に唯一の蘇生魔法として認識されることが多い(人類が使える魔法は、普通第6位階までというのが

この世界の常識) 第5位階の《死者復活/レイズデッド》では少々蘇生は厳しいかもしれない。

だが、法国には《オーバーマジック/魔法上昇》という使用可能な魔法位階を引き上げる儀式魔法があるので、本当にニグン達が必要なら復活させるだろう。

ただ、この2グループは扱いの差こそあれ『カルネ村に害をなす可能性の高い襲撃者の集団』だったことには変わりはない。

対してクレマンティーンは、個人だった上にただ村の外側の草むらに潜んで様子を伺っていただけだ。

しかも一度、比喻ではなく死んだ身……これ以上、懲罰を課す意味はない。

交渉がまとまり次第、法国に返却するのが順当ではあるのだが……(ちよつと返すの惜しいなあ)

ネムとの一戦を見て素直にそう思ってしまったのだ。

“戦闘力5のスカウター”で確認したところ、アサシン暗殺者寄りのフェンサー軽戦士。

正直、村では育ちにくいし育てにくいクラス職業Lvの持ち主だ。

現状、総合Lv29まで落ちてしまったが逆にまだまだ伸びしろはある。

装備を整え、竜王国でビーストマンあたりと戦わせれば、かなり面白い育ち方をしそうだ。

モモンガのコレクター魂が微妙に刺激される。

(いつそ懐柔の方向で動いてみるかな?)

☆☆☆

「モモンガ、どうした? 深く考え込んで?」

言い忘れていたが、今は我が家。広場に面した村で一番大きな山荘風のログハウスの中だ。

実は見かけ以上に中が広い……まあ、実を言えばユグドラシルの拠点用アイテム“グリーンシークレットハウス”にデータ・クリスタル

をぶちこみ、快適な夫婦生活を送るために趣味にかまけて内装と外装を弄りたおしたものだ。

モモンガという男は決して自己顕示欲や承認欲求が低いわけじゃない（高いとも言えないが）。

だが、尊敬されるのは全然いいのだが、“死を司る神”^{オーバード}として過度に崇め奉られるのは好んではないようだ。

現在の住居もなるほど確かに僻地の開拓村にある住居としては立派だが屋敷や館と呼ぶほどではなく、ましてや誰がどう見ても神殿や寺院、霊廟の類には見えない。

自分を“死の神”として信仰するのは許すが、『大袈裟にやって悪目立ちするのは村のためにならない』として住居以外に神殿を立てることを良しとはしなかったのだ。

その謙虚な姿に村人は酷く心打たれて感銘と尊敬を集めたが、かといってモニュメント、あるいはシンボルとして何も無いのは寂しいという思いはあった。

なので村が豊かになるにつれ、それなり潤沢な公費も用意できたことだし奮発して建てられたのが、村の広場にある噴水の中央に鎮座する村在住ドワーフ衆（ルーン技工士集団）渾身の1/1スケール“死の神”像というわけである。

劣化防止などの複数のルーンが刻まれた黒く輝くオニキス製のボディに、目には大粒のルビーをあしらわれモモンガ玉はガーネットの宝珠で再現された中々の逸品である。

因みにこの像を盗もうとしたり悪さしようとしたりすると、ゴツツイ呪いがかかるといふ噂がある。例えば、『影に潜んでる悪魔に食べられる』、『ある日突然、アンデッドになる』とかなんとか。

もつとも死の神像は噴水に限らず村のそこかしこにあり、また多くの家で小さな神棚が置かれて祭られているのであるが。

共通項は黒色を基調とすることだが、中には稀に見受けられる『淡い緑色の優しい後光』を現したのか、ヒスイやカンラン石で再現したものもあるようだ。

将来、万が一にもカルネ村が観光開発を進める日が来たら、良い土

産物になりそうではある。

「うん？ ああ、クレマンティーナをどう扱おうかと思つてね」

部屋着であるチャコールブラウンの上質なローブに身を包み、ロッキングチェアに揺られながら何故だか酷く久しぶりに骨の体を堪能してる気がするモモンガは、定位置の膝の上に座る仮面を外した愛妻（キーノ）の髪を軽く撫でた。

「もしかして欲しくなったのか？」

モモンガはあえて直接的には答えず、

「悪くない才能だとは思ふよ」

現在、総合Lv29のクレマンティーナのデータはこんな感じだ。

クレマンティーナ・メルヴィン・クインティア

種族：人間

職業Lv

アサシン（ジーニアス）：Lv5 ↑（2減少）

マスターアサシン：Lv3

ファイター：Lv5 ↑（2減少）

ナイキ・マスター：Lv3

軽戦士（フェンサー）：Lv3

ローグ：Lv3

シカケニン：Lv3

ウィザード：Lv2

ドクター：Lv2

総合Lv29

おそらくデスペナによるレベルダウンは、最も高い数値から優先的に起きたのだろう。

「一番高いのがアサシン系技能で、オマケに盗賊職の《ローグ》まで持つてるからな。例えば、これで斥候系（スカウト）の《ストーカー》とか取るだけでもかなり化けると思うぞ？」

するとキーノはフフツと笑い、

「随分とご執心じゃないか？」

「才能ある者を見ると、つい伸ばしたくなるだけさ。これもコレクターのカルマとかサガつてもものかもね」

「見た感じも中々可愛らしいしな。山猫っぽいというか野良猫っぽいというか」

苦笑するキーンに、『まあ、確かに猫っぽい……というか動きもネコ科の肉食獣っぽいし、〃くれにやんていーぬ〃というのもアリと言えばアリか？ 実際、本人同意ならワーキャットとかにもできなくはないんだが。敏捷上がるし』とか内心で思いながら、

「同意できなくはないな。とはいえ、この際容姿は割とどうでもいいんだ」

人のままであろうとネコ耳生やそうと、いずれにせよクレマンティーヌはモモンガの好みからは少々外れるようだ。主にサイズのな意味で。

誤解のないように言っておくが、別にモモンガは人並みの審美眼がないわけじゃない。例えば、ラキュースを見れば綺麗だとも思うし、美人だとも思うだろう。

だが、彼はやはり綺麗より可愛いほうを好むし、グラマーな美人とちみつこいぺったん娘なら、後者をお持ち帰りする。

膝の上で現在進行形でスリスリ身をよせ甘えまくってる妻が妻なのだから、当然ともいえた。

モモンガの女性の基準は全てキーンなのだから仕方ない。

あと、その紳士としての土台を全力で作り上げた某ありんすちゃんの子の親もほぼほ悪い。

蛇足だが……なんとなくだが、そのとぼちりで明らかかなグラマーで美人系で声だけはロリな〃とある肉棒娘〃は、本人すら気づかぬ間に婚期を逃したっぽい。誰とは言わないが。

「モモンガは優しいな」

キーンはどこかうっとりした顔で呟いた。

「？ どうしてそうなるっ？」

「わからないなら、それでいいよ」

(きつとモモンガは、自分が誰かを救おうなんて考えたことはないだろうから)

「ワタシもモモンガに救われたから」

するとモモンガは一掃優しく骨の指で柔らかな金髪を撫で、

「俺はそんな大それたことは出来ないさ。困ってる者は手が届く範囲で助けたいと思うけど、救うなんてことはできやしない」

“きゅっ”

モモンガはキーノを抱きしめ、そつと耳元で囁く。

「どんな存在であれ、救うなんてできないのさ。己を救えるのは自身だけだ」

「そっか……」

すつかり体を弛緩させたキーノは、

「ところでモモンガ……大切な事を忘れてやしないか？」

「？」

「ビキニアーマー」

“ぎゅっ”

「ネムは大人しく留守番もしていたし、おまけに“れべるあつぷ”まで果たしたんだ。褒美は与えてやらんとな」

「うっ……」

「約束は守るものだろ？」

『はあく』とモモンガは久しぶりに淡く翡翠色に光りながら深い溜息を突いて、

「おっしやるとおりで」

「ふふっ。なんだつたら選ぶの手伝ってやるぞ？　ワタシはペロロン

チーノ殿が残したコレクションは詳しいんだ」

「毎度思うが……キーノさんは、なんで俺よりペロロンチーノさんの遺物に詳しいんでせうかね？　直接会った事無いのに」

「うくん……リスペクトの差？」

愛する妻は、未だにとても不思議がいっぱいだった。

第80話：性遺物と書いてビキニアーマーと読む！

〃

「うむむ……」

お骨様は悩んでた。

なんだか前回と同じような書き出しの気がしないでもないが、そこは気にしない方針で。

というか前回に比べて絵面がシユールすぎる。

グリーンシークレットハウスを世界観と趣味に合わせて劇的ビフォア&アフターの改築をした我が家ロウハウスの中で、愛妻キーンを膝に乗っけるといふシチュエーションは変らない。

だが、周囲にふよふよと何着も浮遊しているのは、“ビキニアーマー”である。

大事な事なので某タブラさん風に繰り返すが、「ちなみにビキニアーマーである」。

この業カルマの深さ、紛れも無く奴のさく♪ 当然、蛇コブラの方ではなく鳥ペロロンチーノの方の遺した代物だ。

聖遺物……いや、正しく性遺物と言える。

「せめてもの抵抗の証に大人しめのデザインを……」

「そして徐々にキワどいデザインにしていくのだな？ よくわかるぞ」

何故かそこには夫を精神的に追い詰める吸血姫キーンがいた。

いくらなんでも某バードマンにリスペクト過多だと思われる。例えば彼女の愛読書が、運営と肉棒姉の目を擦り抜けて最古図書館アッシュールパニバルにいつの間にか運び込まれていた。巧妙に偽装された趣味全開のロリペド系ウス異本だとしてもだ。

「いや、できればエスカレートしないで欲しいなあ」と。骨オレ的には「するとキーン、鼻で笑いながら……」

「相手は幼痴女だぞ？ 無理に決まってるだろう。それにペロロンチーノ殿のコレクションは、同じジャンルの服なら布地面積に反比例して性能が高くなる傾向があるから別に悪い話じゃないし」

全く否定できない……というか妙に納得してしまったお骨であった。

「それにモモンガとて、好みの小さくて平たい娘にエロい格好させるのは嫌いじゃないだろ？」

「そりゃ嫌いじゃないけど。というかむしろ大好物だけだよ」

そこで肯定したら駄目だと思うぞ、お骨様。

まあ、心を許した相手にはとことん素直に、そしてダダ甘になるのがモモンガの長所であり欠点でもある。

「ふふっ。旦那様あ」

不意に甘ったるい声を出した愛妻は、宙に浮かぶビキニアーマー……:よりによつて“BIKINI WARRIORS”という、ある意味中身がタイトルまんまな作品に登場する“死霊使い”のそれに酷似した衣装を手に取った。

作品タイトルどおり、出てくる女性キャラはビキニアーマー装着で、ネクロマンサーも例外じゃない……:マントこそ装備してるが、本体はぶつちやけ桜色のマイクロビキニだ。それは作中ビキニアーマーの中でも屈指の布地の薄さと面積の小ささを誇り、また着てるネクロマンサー娘も登場キャラの中で最小サイズの乳を誇るツインテ娘ときてる。

「んしょ」

そしてお骨の眼前で生着替えを始めてしまう妻がいた。

「どうだ？ 似合うか？」

これはいけない。相手は“死の支配者”、要するにアンデッドだ。ネクロマンサーの衣装では特効がかかる。つまり、こうかはばつぐんだ！

アンデッドの精神作用無効？ そんな物、愛妻+マイクロビキニの前には無駄無駄無駄アツ！つてなもんである。

案の定、瞬時にモモンガは受肉していた。

お骨の時だつて性欲は薄くなるだけで無くなるわけじゃない。ついでに言えば、故に受肉したときは反動が強くなる。

骨に肉がつくと蘇生するモモンガ様のモモンガ様が起つきして、リミッター解除して本来のサイズを取り戻した（つまりラナーやエンリとか純粹人間種相手の時はダウンサイジングしてる）巨砲と評してよい砲身をスタンドアップさせて準備万端である。

「キーノ、俺をからかいすぎだ」

“ひよい”

そのまま軽々とお姫様抱っこで抱き上げ、ベッドルームへ消えていった。

夫の腕の中で、『計算どおり……！』とどこぞの新世界の救世主ばりに愉悦に嗤う妻がいたとかいなかったとか……

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆

きんぐ・くりくむぞん☆（キラッ

残念だったな。それは私のおいNa……もとい。残念ながらこのシリーズはR-18ではない。真に残念ながら、だ。

ただ、紳士諸兄の想像力を期待し、音声や効果音を一部だけ公開しよう。

「ひggつやあー！ もつろお、もつろきーののこといりめれえ……おひり、えぐつれえええ」

“ちよろ……ちよろちよろ……じよろろろ”

「おもらひひひやったあ……きーの250さいらのに……れもきもひいいよお、おひつことまりやらいよお」

上手くイメージしていただけただろうか？

結果的に言うなら、『檻樓切れを纏ってるような惨めさを誘う半脱ぎ状態で後ろ手に縛られ、目から光が消失したキーノが、緩んで開きっぱなしになってしまった上の口からも下の口からも後からも前の小さな穴からも色々垂れ流して、白濁や黄色や茶色の混じった水溜りを生み出していた』という状況だ。

まあ、種族的に『垂れ流せるのか？』という疑問は尽きないが、ピルドの関係やら何やらで子供を作ることはできないようだが食べた量だけ飲んだりすることは出来る（基本、不要なだけで不可能という訳じゃない）ので出すことも出来るということなのだろう。

とりあえずシャルティアの生みの親たる某バードマンの性的な方面の弟子で、中身が「カルマ値―500は伊達じゃない！」なお骨様の面目躍如というところか？

まあだが、孕ポコではなくサイズの問題で内側から腹ポコになってはいたようだが、二人にとってはそこまでハードという訳ではないようだ。

もともと心臓は止まっているからショックで心臓麻痺ということもないだろうし、ある意味これ以上死にようが無いわけだし。ピンク色が正気を消し飛ばした意識も、現在耽溺しまくってる快樂の余韻が過ぎればそのうち戻ってくるだろう。多分。

少なくとも現状でキーノにデスペナ&Lvダウンが発生してないのだから問題はない。

「ひゃへ……ひゃひゅ……」

モモンガはまだ瞳孔と口をだらしなく開いたまま、白濁に塗られてひくっひくっからだと小さな肢体を痙攣させてる妻の髪を優しく撫でながら、

「第2R、開始……かな？」

カルマ値―500は伊達じゃないのだ（二度目

☆☆☆

まったくの余談ながら……翌日、ようやく正気がアップを始めたキーンは味をしめたらしく、このビキニアーマーを自分の新正規コスチュームにすると頑迷に強請ねだったのだが、

「俺が他のことに手がつかなくなるので勘弁してください」

と同じく正気に戻った（沈静化したとも言おう）お骨が泣き土下座で対抗。

まあ、カルネ村……いや、この世界最高峰の戦力たる二人が揃って性的な意味で引きこもりとかは、流石にマズイと思ったのだろう。

しかも夫婦揃ってアンデッド、時間感覚の緩さは人間の比ではなく、気がつけば年単位で引きこもっても不思議じゃない……キーンにはそれだけの魅力があるとモモンガは真剣に危惧していた。

結果、ネクロマンサーのビキニアーマー（今更だが……アーマーなのか？）は、無事に暫定的封印指定となり、キーンは代案として旦那モモンガのインベントリから同じくペロロンチーノの遺したコスの一つをせしめることに成功する。

ちなみにそのブラツクレザー風のビスチエとチエツク柄のミニスカを組み合わせた伝説級衣装、名を“リベリオン・ユーミル”という。

察しの良い方は気づいたかもしれないが……某“Queen's Blade Rebellion”の鉄血ドワーフ娘（身長120cmの方）のそれに酷似した衣装だったりする。

普段使いできるラインというのがキーンの主張であるようだ。モモンガ的には保障の限りではない。だって前の衣装に比べても無駄に可愛いし。

とどのつまり、夫は妻に勝てないという自然の摂理が今日も無事に証明されたようである。

第81話：“その名は、《ユグドラシル・ヒーローズ・ビキニ》!!”

何やら昨日、ビキニアーマー絡みで何かあったような気もするが……モモンガは黙して語らず、キーノは妙に艶々していた。

さて、ではその一件の最大の被害者と言えば……

「モモンガ様ひーどーいー!」

まあ、言うまでもなく『後で来なさい』と言われていたので、喜び勇んでログハウスに行ってみたら門前払いどころか入ることすら叶わなかったネムである。おかげで昨晩は一人寂しく自分で慰めるしかなかったのだ。

どうも昨日のモモンガ、色々振り切れていたようで無意識／無自覚に怪しい結界を発動していたようだ。

「ごめんよ、ネム」

今日という今日こそログハウスへ乗り込んできて、キーノ以外がないことをいいことに寝転がるという暴挙でお骨モードオーバーロードの膝上を占領するネムであった。

「むー」

無論、それを見て『まあ、無理もないか。ワタシが逆の立場だったら結界貫いて、そのまま混ざる』と苦笑しているのはキーノである。

まさか秘蔵のコレクションを媒介して某バードマンの侵食やら精神汚染やらがあるわけじゃないだろうが……なんだか思考パターンが“元祖変態吸血姫シヤルティア”に似てきているのは気のせいか？

とりあえず、昨日の英雄を飛び越え人の領域から大いに外れた痴態を微塵も感じさせないのは流石と言っておこう。

旦那も旦那なら、嫁も嫁……どっちも正体がアンデッドでキーノでさえ軽くLv90越え、モモンガに至ってはお骨でカンスト／生肉モードでもLv99だ。どこをとつても立派な人外、お似合いと言え

ばお似合いの夫婦だろう。

「待ちぼうけさせてしまったお詫びと言つてはなんだが……ネム、これをお前にやろう」

そう手渡したのは……

「あはっ♪」

手に取った瞬間、ネムはにつこにこしてやんよ♪な一気呵成な上機嫌状態であった。

言うまでもなく手にあつたのは、言うまでもなくモモンガが途中に主に性的な意味での突発イベントを挟みながらも頭を悩ませつつ選んだ“ビキニアーマー”である。

散々引つ張ってきたネタだが……幼女^{ネム}の過激な露出を期待していた紳士諸兄には申し訳ないが、モモンガの意向どおりデザインは存外に大人しい。

デザインから言うなら、名作ゲーム“世界樹の迷宫”シリーズのXから追加された新職業“HERO^{ヒーロー}”、その中でも“HERO（緑の髪の少女）”に設定されたビキニアーマーが原型だ。

厳密にはこのビキニアーマーも実は2種類あり、一つは下半身が短パン仕様の物、もう一つは下もビキニ仕様な物だ。

当然、モモンガが選んだのはビキニアーマーとしては正統派の後者ではなく、数あるビキニアーマーの中でも比較的露出面積が少ない前者の方だ。

ビジュアル的には某大手通販サイト“密林”限定「DLCD追加イラスト：ヒーロー（緑髪の少女）ビキニアーマーver.」で確認できる。

ちなみにこの装備の名称は“ユグドラシル・ヒーローズ・ビキニ”、一見すると「Yggdrasil」というゲームコンテンツ名をつけたビキニアーマー”っぽい”が、ユグドラシルとは別の言い方をすれば“世界樹”であり、加えてわざわざヒーローと入れてる辺り、完全に確信犯だ。

きつと頭のおかしさに定評のあるクソ運営の中、それもかなりのお偉いさんに『21世紀こそ人類が行き着いた文化の到達点！ 特に萌

え文化は21世紀前半に頂点を極め、残る時間は衰退期に過ぎぬわあっ!!』と咆哮する人物がいるのかもしれない。

ただ、全く同じデザインかという点と必ずしもそういう訳でもなく、当たり前だがネムの本来の武装は盾や剣ではないし、例えばマントは装着できるがオプシオン扱い（そして凝り性なモモンガは、外装統一できるマントも別口にチョイスしてセット済み）で、ガントレットやレガースの細部も微妙に違う。

性能的には幼女向け特効のかかった性異物……もとい。“聖遺物^{レリック}級”上位の装備と言ったところか？

だがしかし……重要なのはそこではない。そのビキニアーマーを、同じゲームに登場するヒーローちゃんこと“HERO（ツインテ幼女）”に限りなく近い魅惑のぼでいらいんの持ち主、ちみっ娘ぺったんのネムが装着することに意義があるのだ！

『モモンガさん……誤魔化しようのないほど平たい胸をビキニで更に薄さを強調するところにこそ、尊さがあるんじゃないかっ!!（ドヤア）』
イメージの中で、某バードマンがえっらいイイ笑顔でサムズアップしていた。

想像してみないか？ 世界樹の迷宮XのHERO（緑の髪の少女）のビキニアーマーを、HERO（ツインテ幼女）が纏う姿を……きつと貴方は、純銀^{たつちぎん}の聖騎士^{せんきし}を召喚したくなっただろう。

至高の名言である『貧乳はステータスだ！希少価値だ！』を真理だとしてとらえるモモンガも、性癖的な意味での師匠に大いに同意できるところであるが、素直に頷くのは微妙に悔しい。

それはともかく、ネムはモモンガの膝から降りるとポポイと今着てるビスチエを除装、膨らんでる場所がないので虫刺されのようなポツチだけが生意気にも僅かに起立し自己主張してる胸とか、くぱあと広げてみると中は存外に複雑な形をしているかすかに潤いを帯びたスジとかを惜しげもなく見せびらかすように生着替えを開始するネムだった。

「モモンガ様、どうかな？ 似合ってるかな？」

「おおっ！ 可愛いぞ。よく似合ってる」

と御満悦なお骨がそこに居た。

ただし、精神耐性もなんのそので貫通し、バフだかデバフだかをかけて瞬時かつ問答無用に『オーバーロードをオーバーブースト状態』にした愛妻(キル)の時より反応は遥かに穏やかだ。

少なくともカルマ値―500が炸裂、あるいは仕事してるようには見えない。

衣装の差というよりキャラの差、あるいはモモンガの執着心の差なのかもしれないが……きやつきやと素直にはしゃぐネムであるが、それを額面通りにとるべきかは悩むところだ。

語弊を含み言い方ではあるが、エモット姉妹の血は呪われているのだから。死を司る神に深く深く魅入られているのだから、それは呪いと称して然るべきものだろう。

「ネム、そう言えば伝え忘れていたことがもう一つあった」

「なあに？」

「レベルアップ、おめでとう。ネムはこれで総合Lv30、難度で言えば90に達したよ」

「えへへっ♪ ありがとお、モモンガ様♪」

再び膝に飛び乗りながら、今度は対面で座り抱きつきスリスリと頬ずりを開始。

勿論、賜ったビキニアーマーの利点を早速生かし、厚みの関係で柔らかさに欠ける平たい部分や薄布の下の幼器をマーキングするよう
にグリグリ押し付けるのも忘れない。

「ねえ、モモンガ様……」

「ん？」

「ネム、お願いがあるんだけどお」

「なんだい？ 全てが叶えられるとは約束できないが、せつかくのLvアップのお祝いだ。可能な限り聞いてあげよう」

すると幼女^{ネム}は不意に真剣な表情で、

「えつとね……ネム、キーノ様みたいにモモンガ様と同じ時間を生きたいの」

その瞬間、むしろ二人の様子を微笑ましげに見ていたキーノの目がスツと細くなった。

「ネム……言ってる意味はわかってるのかい？」

一応という枕詞は着いてしまうが……ネムも人の身である以上、決して立ち入ってはならない領域というものは確かに存在する。

「ネム、これでもいいっばいっつばい考えたんだよ？　でも、いくら考えても答えは同じなんだ」

ネムはまっすぐにモモンガを見て、

「モモンガ様、ラナーちゃんと同じようにどうかネムの時間も止めてください」

第82話：「時を統べる王たる死の支配者」

「えつとね……ネム、キーノ様みたいにモモンガ様と同じ時間ときを生きたいの」

「モモンガ様、ラナーちゃんと同じようにどうかネムの時間も止めてください！」

確かにネムの言うとおり、「この世界線におけるラナー」は、見かけに限定すれば12歳から全く成長していない。

元々、王族としては少々痩せ気味のラナーではあったが、身長や体重だけでなく膨らみの足りない胸も無毛の秘所クレバスもここ数年全く変化がない。

だが時間を止める……それもPVP時のような僅かな時間ではなく、少なくとも年単位。いや、ネムの言い方を考えれば、おそらく半永久的にも可能となってる可能性すらある。

最早そこまでいくと時間停止というより時間操作、それすら飛び越えて《時間支配》の領域になりそうなのだが……

モモンガにそんなことが可能なのだろうか？
端的に言ってしまうえば“可能”である。

それも一応とか、とりあえずなどという修飾がつかずに、だ。

☆☆☆

原作だろうがこの世界線だろうが、モモンガの種族と言え、言わずと知れた“死の支配者”オーバーロードだ。

実際、100年前にこの世界に落下し、ツアーと出会ったばかりのモモンガは、種族Lvも職業Lvも原作となんら変らなかつた。

いや、今でも人の姿を得る代わりに種族Lvを失う受肉時の総合Lvこそ99だが、オーバーロード時は相変わらずLv100。カンス

トプレイヤーなのだからデスペナでも起きない限り変りようがない。
では、100年という時間はオーバーロードとしての彼にはなんら
変化を及ぼさなかったのか？

否。断じて否である。

時はやはり無慈悲にして巨大な力であり、良かれ悪かれに関わらず
不変のはずのアンデッドにすら変化を強要する。

唐突ではあるが……モモンガの代名詞である種族、アンデッドの頂
点の一角でありスケルトン系の頂点であるオーバーロードにも種類
があることを皆様は御存知だろうか？

そう、《^{オーバーロード・ジュネラル}将星の器たる死の支配者》、《^{オーバーロード・ワイズマン}正しき賢者たる死の支配者》、そ
して《^{オーバーロード・クノマスター}時を統べる王たる死の支配者》の三つだ。

お察しいただけた方もいるのではないだろうか？

そう、この100年の間に“オーバーロードたるモモンガの身に起
きた変化”とは、即ち種族Lvの変質なのだ。

先に結論を言えば、モモンガ自身カンストプレイヤーである以上、
骨の身である状態で総合Lv100は変わらないし、種族Lvが合計4
0であることも同じだ。

だが、その40Lvの種族の割り振りが、この世界に漂着したとき
と大きく異なっているのだ。

現在のモモンガの種族Lv振り分け

- オーバーロード：Lv15
 - エルダーリッチ：Lv10
 - スケルトン・メイジ：Lv5
 - オーバーロード・ワイズマン：Lv5
 - オーバーロード・クロノマスター：Lv5
- 合計種族Lv40

まず特徴的なのは、転移したばかりのときと《^{スケルトン・メイジ}骸骨の魔法使い》と
《^{オーバーロード}死の支配者》の種族Lv数値が入れ替わっていることだ。転移直後は、
前者がLv15で後者がLv5だった。

これを読み解くと、異世界転移によるルール変更と、本人の経験……特に骨の身として行動するとき、『一体、自分が何者なのか?』と認識して行動した結果だと推察できる。

やや哲学的な解釈になつてしまふが……つまり、モモンガがモモンガとして行動するとき、意識無意識に関わらず『自分がオーバーロードである』と認識していた故の変化なのだろう。

今にして思えばユグドラシルで過ごした時間は12年、対しこの世界で過ごした時間は100年だ。受肉した人の身で過ごした時間を差し引いても、この世界で生きた時間の方が遥かに長い。

そう考えれば、12年の月日で出来上がった転移直後の体が、100年の時間の中で再構築されても不思議ではない。

そして、主たる種族がオーバーロードに切り替わり、そしてそれが単一種族Lvの上限たるLv15に至ったことで、更なる変化が起きた。

オーバーロードとして生きた経験、その行動如何により種族Lvの一部が“今のモモンガ”に合わせて書き換えられ、オーバーロードを極めたために派生する上位の種族Lvに置換されたのだ。

今のモモンガ……そう、即ち『オーバーロードとしてこの世界をどう生きたか?』の具現こそ、種族“オーバーロード・ワイズマン”と種族“オーバーロード・クロノマスター”なのである。

オーバーロード・ワイズマンはこの100年、最古図書館の蔵書をどれだけ愛読して叡智を蓄え、そしてカルネ村を代表格にそれを生かしてきたか、他者に分け与えてきたかを考えれば簡単だろう。その行動は紛れも無く“正しき賢者”の姿なのだから。

オーバーロード・クロノマスターに関しては少々特殊だ。

元は骨の身、死んでる身とはいえ、白金の竜王ことツアインドルクスIIヴァイシオンより賜った神話級アイテム“人間の証明たる指輪リング・オブ・ヒューマンビーイング”により受肉、以後人と骨を切り替えること数多に渡り、それは擬似的に生まれ変わりを……輪廻転生を繰り返したとも言える。

加えて、人の身であれば、やはり骨の身以上に顕著に時間変化を受

ける成長や老化と呼ばれるものだ。

鈴木悟という今は捨てた名で生きていたリアルでは、その生活パターンや食生活から老齢と呼ばれる年齢まで生きられないことを薄々自覚していた（故にゲームでは不死の者を分身とした）彼は、一度老いというものを感じてみたかったのだ。

故に愛妻キーンと出会い、恋に落ち共に旅立った最初の数十年、彼は一度もリング・オブ・ヒューマンビーイングを外さなかった。

無論、毎年受肉した状態を指輪にセーブしていたし、指輪の機能は実は装着した状態でもON/OFFできたし、指輪を外せば強制的に受肉状態が解除されてしまうので、そうしていただけなのだが……

そんな状態を知る本人は、むしろ暢気に老いるという状態を楽しんでいたのが……気がつけば古い衰えている愛する者を、不死者ゆえに刻一刻と近づく別離の瞬間を今を一所懸命に生きる夫に悟られぬよう哀しみ怯えていたキーンの心情は、察して余りある。

もうお気づきだろうが、モモンガは時折発揮する『うっかり』を発動させ、自分もまた不死者であることを伝え忘れていたのだ。

『まっ、もうここまで老いを経験できれば十分かな？』

確かそんな事を言いながら、妻の前で初めて指輪を外した時の出来事をモモンガは生涯忘れることはないだろう。

詳細は割愛させていただくが、その時のキーンのリアクションたるや……

長々と過去を話してしまっただが、モモンガは人と骨の間を行き来することで生死の境界を、また人の身として古い、またセーブした肉体データをロードし、あるいはそれを外観データとして捉え弄ることで若返り……肉体的には不可逆であるはずの時間を擬似的さかのぼに逆行してみせた。

故に得た“時クロノマスタを統べる王”なのだ。

☆☆☆

もし、モモンガが今まで経験してこなかった生者死者を問わず大軍

を指揮するような機会が重なれば、もしかしたらもしかしたら《スケルトン・メイジ》が変化して《オーバーロード・ジエネラル》になる日が来るかもしれないが、今のところその兆候も予定もない。

大軍を指揮するなら、愛らしくも将の才に満ちたエンリがいるのだから。

そしてその妹である真新しいビキニアーマーを纏った愛^ネし子^ムは、骨の身であればこそ宿る力……自分の時を統べる力を欲していた。

なら、それを叶えてやりたいと思う。

だが、なればこそ伝えておかなければならないことがあるのだ。

「ネム、聞きなさい」

時を統べる力を得たモモンガと言えど、只人を終わり無き存在にするというのは、簡単に考えていい話ではなかった。

第83話：“Time is not irreversible
r s i b l e c u r r e n t b u t o b s e
r v e r ’ s s u b j e c t i v i t y”

時は無常にして無慈悲なものだ。

良かれ悪かれ、刻が止まったはずの不死者にすら変化を強要する。

それはモモンガすらも例外ではない。

アンデッドとして一つの頂点である“オーバーロード死の支配者”であつてもやはり変化したのだ。

相対的に見れば、新たな力を得た以上は良き変化と言えるだろう。

だが得てして、力を得るといふのはそれに付随する力ある故の苦惱も一緒に背負うという事になる。

「ネム、聞きなさい」

様々な思考を巡らせながら、モモンガ死を司る神は徐に口を開いた。

「確かに私の“オーバーロード・クロノマスター時を統べる王たる死の支配者”の力を使えば、望むとおりネムの時間を止め、永遠にして悠久の存在にすることも可能だ」
「うん♪」

「だが、それは同時にネム自身が大きなリスクを背負うことにもなる。それをきちんと理解しているか？」

モモンガの言うリスクとはなんだろうか？

それは順を追つて説明すべきだろう。

モモンガがこの世界に漂着して100年、その間に死にスキルならぬ“死に職業”となった職業Lvがいくつもあり、またその多くが習得種族と同様に変化していた。

その職業の一つが、“クロノ・トリガー”である。

直訳すれば、“時間の引き金”となるこの職業、オーバーロード・クロノマスターを習得し、なおかつ時間系魔法職ビルドをしてないと習得できないレアクラスである（そもそもオーバーロード・クロノマ

スター自体の習得条件が、オーバード習得済みであることなどを始め非常に難しい)。

実際、ユグドラシル現役プレイヤー時代、モモンガは二者択一に頭を悩ませた結果、死霊系魔法特化でなければ習得できないスキル“エクリプス”を選び、“クロノ・トリガー”を諦めた経緯がある。

このレア職業、習得条件が厳しいだけあり、名前の通り各時間系魔法の発動時間短縮や強化、加えて魔法によつては防御無効や効果時間延長がされたりとかなり凶悪なそれだが、真骨頂はそこではない。

“エクリプス”を持つていなければ発動できない特殊職業スキル、クラス“あらゆる生ある者の目指すところは死である”

“があるように、“クロノ・トリガー”にもまた特殊職業スキルがあるのだ。

その名も、

Time is not an irreversible current but an observer's subjectivity
観測者の主観である”

このスキル、フレーバーテキストによれば『対象を観測者の主観に応じた時間軸に巻き戻せる』という中々の強烈なもので、具体的に言えば『対象をスキル発動者の任意の状態に戻せる』というものだ。

例えば、レイドボス戦など致死性の高い戦いに参加、途中で仲間が倒れたとしても『損傷を受ける前の状態に戻せる』……つまりデスペナ無しで即時復活でき、またアイテムや装備のロストも発生しないというかなりトンデモな状態となる。

無論、死亡だけではなく各状態異常となつても、そうなる前に戻すという使い方もでき、ある意味究極のヒーラーと言えるかもしれない。

まさに破格なスキルではあるのだが、当然のように制限が存在する。

まずこのスキルを発動させる対象を、“被観測者(観測対象者)”として登録する必要がある。そして登録できるのは100時間に1人で、最大登録数はLvに比例しカンストのモモンガなら100人までだ。

また登録できる制限もあり、原則“非敵対者のプレイヤーキャラ”のみでNPCは不可、ゲーム中はほぼギルメンやフレンド限定の能力という扱いだっただ。

細かいシステムを言うならゲームでならオートレコード／オートセーブであり、先ほどのレイドボス戦を例えに出すなら対象者は戦闘直前の状態をオートセーブされ、死んだ場合はそのオートセーブされた地点の状態に“巻き戻り”、復活する。

しかし、それはゲームの話だ。

この転移してきた世界……現実でこのスキルを使うと微妙に仕様が異なる。

特に厄介なのはオートレコード／オートセーブの類であり、これはゲームシステムのないこの世界では『モモンガの記憶に依存する』のだ。

各種パラメータとか習得職業とかは問題はない。元々モモンガ……いや鈴木悟がゲーム脳だったせいかわからないが、登録さえしてしまえば、スペックは成長に従い自動更新され、また副次効果としてモモンガ自身も“Lv5のスカウター”を使わなくとも観測対象者の状態をいつでも確認できるようになる。

ただ、どうにもならないのが外装データ……つまり容姿だ。

そう、中身は更新できても外見は登録した状態で固定となる。これはもう、ユグドラシル由来の能力故の弊害だろう。

ゲームではキャラの外装データの変化や変更はできても、成長や老化はない。

一部の選択可能種族に子供時代が設定されており、成長により変化すると書かれていたが、それは断じて「年齢を重ねたことによる成長」ではなく、「Lvが規定の数値に達したことによる外観データの変化」だ。生物学的なそれとは全く異なる。

如何にモモンガであっても、『ネムの成長した未来の姿』を記憶したり記録したりは不可能なのである。

☆☆☆

とまあ、ここまででも強力だが大分厄介なスキルだということは御理解いただけたと思うが……モモンガに言わせれば、輪をかけた懸念材料があるのだ。

この世界には、ユグドラシル方式の『新規クランないしギルドの結成』システムもなければ、『フレンド登録システム』もない。

にも関わらず、Time is not an irreversible current 時間は不可逆の潮流ではなく but an observer's subjectivity 観測者の主観である”は存在している。

そして、結果として生まれたのが、観測者登録の際に脳裏に浮かぶ不穏な内容のメッセージだ。

“観測対象者として眷属登録しますか？ Y/N”

この“眷属”とは何を指し示すのか？

今のモモンガには、何もわからなかった。

「ネム、確かに私は、私自身が滅ばぬ限りお前を今の姿のまま生き続けさせることはできる……」

モモンガは骨の指でそつとネムの頭を撫で、

「だがそれは、“私の眷属になる”という意味でもあるんだ。そして私は見ての通り、その本質において人間ではない」

受肉し人としての姿をとれるとはいえ、それは根本的に“リング・オブ・ヒューマンビリーニング人間の証明たる指輪”の力であり、本来の姿は骨の身アンデッドなのである。

「姿かたちは変らなくとも中身は変化を続ける……人ではない私の眷属となるのなら、見た目は幼い人のままでもいつまで人でいられるかわからぬぞ？」

ユグドラシルにおいて、見かけがどれほど可愛らしくとも中身が化け物なんて当たり前であった。

そして、自分の時を操る力は人理を外れた先にある物……人という種であり続けることは、無理があるとモモンガは考える。

人とは短命で脆弱なものであり、無限でも永遠でもないのだから。

「モモンガ様」

ネムは年齢からは考えられぬほど怪しく妖艶に微笑み、

「ネム、別に人間でいる気なんてないよ？ だってモモンガ様とずつ

と一緒にいらればそれでいいんだから♪」

その瞳から光は消え去り、わだかまった底の見えぬ闇だけがモモンガを吸い込みたそうに佇んでいた……